

畝田遺跡

1991年

石川県立埋蔵文化財センター

畝田遺跡

1991年

石川県立埋蔵文化財センター



第3次調査区全景



畝田遺跡周辺遠景



第3次調査区SD05断面



木杖



弧文板

畝田遺跡の三点セット（序に代えて）

金沢市畝田遺跡は、犀川と旧大野川（現金沢港）とのほぼ中間に位置し、現海岸線から約1.5キロ隔てた沖積地に立地する。弥生・古墳時代と奈良・平安時代にわたる複合集落遺跡であるが、その中心となるのは、弥生時代末期から古墳時代初期にかけての画期を含む重要な時期（月影～高島式期）であった。遺構としては大溝跡（河川跡？）があり、ある時期には環濠を伴う集落（環濠集落）だった可能性も高いと考えている。沖積低地に掘られた大溝遺構の内部土壌は、常に高湿度が保たれており、有機質遺物の保存には好適な環境が維持されてきた。多量の土器資料とともに多種多様な木器類の出土は、当遺跡の特筆すべき特色だといえよう。木器類には鍬・鋤・エブリ・木包丁・田下駄・堅杵など農具に類するものが多く、^{かい}權・タモ柄・弓など狩猟や漁撈に関するものも見られた（この時期、弓は武器と考えることもできる）。また火鑊^{まろ}臼・木錘・横槌・杓子・槽（容器）・案（テーブル）など各種の生活用具もあり、織機部品や建築部材なども出土している。

畝田遺跡の発掘といえば、私にとって特に印象深く脳裏に焼き付けられているのは、やはり玉杖形木製品・弧文板の二点の木器と卜骨の出土であった。だから拙著『ドライブ紀行 いしかわ遺跡めぐり（金沢編）』（北国新聞社）でも「畝田遺跡の三点セット」として約4頁にわたって紹介したのである。木製儀杖の頭部を飾ったいわゆる玉杖形木製品とは、86年（昭61）6月20日に志賀町堀松遺跡や鹿西町谷内ブンガヤチ遺跡を巡回しての後、畝田のプレハブの中で始めて対面している。この時はまだ儀杖の頭部装飾だとは気づかず、黒漆が塗られた精巧な作りの不明木製品として、当日の個人日記に図解入りで記されている。この遺物が玉杖つまり琴柱^{びんすゐ}形石製品と同じ性質のものだと指摘されたのは、同年9月に研修会講師として来所された白石太一郎氏（国立歴史民俗博物館）であった。

卜骨の出土は87年（昭62）のことであったが、物事に格別慎重な発掘担当者から「こんな物が畝田から出ています」と現物を示されたのは、翌年の7月3日のことであり、その遺存度の良さと共に私の情報収集力の足りなさに、しばし絶句したものであった。大学での先輩に、卜骨の研究者として知られた神沢勇一氏（神奈川県）があった。畝田遺跡からの卜骨出土のニュースは、数か月後に私から神沢氏へ伝える機会があり、当時体調を崩しておられたにもかかわらず、新資料としてぜひとも実見したいと希望され、11月17日に来所されたのであった。氏からは卜骨に関する基礎的な知識、畝田出土品の特徴や年代観、さらに卜骨の実測図作成についての注意事項などにわたって懇切な教示を頂いている。畝田卜骨は、弥生から古墳時代への過渡期の特徴を示すとの指摘は、出土状態や伴出土器などと矛盾するものでなかった。

儀杖・弧文板・卜骨の三点は、いずれも生産活動や日常生活に直接的に関わる道具ではない。首長を中心とする集団が行った農耕祭祀や卜占行為に関わる特殊遺物なのであり、儀杖や弧文で飾られた什器は、首長の権威を現すシンボリックな道具でもあった。弥生時代末から古墳時代初頭、つまり金沢平野やその周辺部に最初の古墳が出現する時期、この畝田の集落において、そうした祭祀や卜占を主宰する有力首長が存在したことを示しており、また、この集落自体が周辺地域にかなりの影響力を及ぼすほどの中核的集落だったことを物語ると考える。また、畝田の司祭者でもある首長は、おそらく古式古墳の被葬者だとも考えている。旧大野川河畔に所在する戸水古墳群（戸水C遺跡で発見された前方後方墳・方墳群）は、畝田遺跡の北東方1.5～2キロにあり、現時点では畝田集落と戸水古墳群の形成は深い関係にあると推定しているが、将来的には、畝田集落の周辺部から前期的古墳群の発見もあり得ると思っている。

例 言

- 1 本書は金沢市畝田西4丁目地内に所在する畝田遺跡^{うねだ}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は県営共同住宅建設事業にともなう事前調査である。
- 3 現地調査は昭和60年度、61年度、62年度と平成元年度におこなった。それぞれ第1次調査等とする。発掘調査は、土地開発公社の依頼をうけて石川県立埋蔵文化財センターが実施した。担当と期間は、次のとおりである。

第1次調査	福島正実	昭和60(1985)年5月7日～同年10月21日
第2次調査	福島正実	昭和61(1986)年5月12日～同年10月14日
第3次調査	福島正実・伊藤雅文	昭和62(1987)年4月30日～同年9月19日
第4次調査	栃木英道	平成元(1990)年8月7日～同年8月9日
- 4 現地調査には中島俊一、芝田悟、本田秀生、田島明人、砂上正夫、宮下栄仁、大藤雅男、田畑弘、山本泰幹の補助をうけた。
- 5 基本的な遺物整理は昭和63年度と平成元年度にわたっておこない、伊藤雅文が土器・木器・金属器を、福島正実が木器を担当した。
- 6 出土遺物の多くの整理作業は社団法人埋蔵文化財保存協会(元の社団法人埋蔵文化財整理協会)に委託した。担当は正木直子、横山そのみ、尾崎昌美、小屋玲子、小谷紀美子、浅野豊子、村井由紀子、荒木(渡辺)洋子、戸瀬かがり、前田すみ子、小間博文、勝島栄蔵である。
- 7 本書の作成は主に伊藤があたり、編集も担当した。その他、調査参加者を中心に執筆を分担し目次に記した。なお、資料整理等に前野里美子・中馬由輔・近藤顕子・清水信文・吉田麗子・長谷川啓子・藤田美和子・前田雪恵の協力を得た。
- 8 木器の樹種同定を、金沢大学教養部助教授鈴木三男先生・農林省森林総合研究所 能城修一先生に、石器の石質鑑定を金沢大学教育学部教授藤則雄先生にお願いし、玉稿を賜わった。深く感謝致します。また、孤文板文様に関し、宇佐晋一・斉藤和夫両先生に懇切な御教示を頂いた。また、北陸学院短期大学助教授小林正史先生には、土器容量の計測をして頂いた。感謝致します。
- 9 現地調査・資料調査ならびに、本書作成にあたり、以下の方々に御教示を頂いた。感謝致します。

清水真一・亀井照人・工楽善通・宇佐晋一・斉藤和夫・萩原儀征・北野博司
小嶋芳孝・河村好光・前田清彦・神沢勇一・石野博信・久田正弘・松山和彦
蒲原宏行・楠 正勝・平口哲夫・川畑 誠・浜崎悟司・吉岡康暢・白石太一郎
小林正史

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過・整理作業	
第1節 調査の契機 …………… (福島正実) ……………	1
第2節 畝田遺跡の遺物整理を通して …………… (浅野豊子) ……………	4
第3節 発掘調査日誌 …………… (伊藤雅文) ……………	7
第2章 位置と環境	
第1節 位置と地理的環境 …………… (栃木英道) ……………	11
第2節 歴史的環境 …………… (栃木) ……………	13
第3章 遺 構	
第1節 第1次調査 …………… (伊藤) ……………	15
第2節 第2次調査 …………… (伊藤) ……………	20
第3節 第3次調査 …………… (伊藤) ……………	23
第4節 第4次調査 …………… (栃木) ……………	61
第5節 各調査年次で共通する河道等 …………… (伊藤) ……………	62
第4章 遺 物	
第1節 土器	
a) 弥生中期以前 …………… (安英樹) ……………	65
b) 弥生後期から古式土師器 …………… (伊藤) ……………	67
c) 古代以降 …………… (富田和気夫) ……………	113
第2節 木製品 …………… (伊藤) ……………	121
第3節 その他の遺物 …………… (伊藤) ……………	155
第5章 金沢市畝田遺跡出土石器の石質………… (藤則雄) ……………	159
第6章 金沢市畝田遺跡から出土した木製品の樹種…(鈴木三男・能城修一)……	165
第7章 若干の考察	
第1節 弥生中期前後の畝田遺跡 …………… (安) ……………	190
第2節 石川の初期木製農具をめぐって …………… (伊藤) ……………	194
第8章 総 括	
第1節 畝田遺跡の古墳時代への夜明け …………… (伊藤) ……………	202
第2節 古代「畝田村」の世界 …………… (伊藤) ……………	208

第1章 調査に至る経緯と経過・整理作業

第1節 調査の契機

調査の依頼

本発掘調査は、石川県土木部建築住宅課が行う県営畝田共同住宅建設工事に先立ち実施された。同住宅は、金沢市街地西方の大徳地区の共同住宅として、鉄筋コンクリート造り4階ないし5階建てが6棟の計約150戸の規模で計画された。同工事に係る用地の取得、整備は石川県土地開発公社が担当し、同公社は用地取得および埋蔵文化財発掘調査の終了後、取得地を県に売却することとされていた。したがって、本発掘調査は県営畝田共同住宅建設用地整備事業に係るものとして、県土地開発公社理事長と石川県知事との業務委託契約に基づき、石川県立埋蔵文化財センターが担当して実施した。ただし、平成2年度に実施した出土品整理および調査報告書作成に関する費用については、すでに同公社が用地の売却を完了し用地整備事業が完了したため、県土木部建築住宅課が負担した。

分布調査を除く現地調査は、昭和60年度から平成元年度にかけて4次にわたり実施され、調査面積は建物および地下管路等を対象として延6,300㎡に及んだ。なお、建物の配置は一部設計変更され、最終的にFig. 1に示された配置となっており、計画頭初の建物番号も変更されたため、本節では最終的な施工番号（A～F等）で記述した。

昭和59（1984）年度の調査

昭和59年8月、県土地開発公社は前記用地整備に係り、金沢市畝田西4丁目66番地に所在する金沢木材協同組合資材置き場約20,000㎡の取得に先立ち、敷地内に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である畝田遺跡の分布調査を石川県立埋蔵文化財センターに依頼した。これをうけて、同年9月17日付で畝田遺跡埋蔵文化財分布調査の委託契約を締結し、同年9月20日に実施した。

バックホーを用いた試掘の結果、弥生時代後期、平安時代、および中世の複合集落遺跡と推定される埋蔵文化財包蔵地が事業予定地のほぼ全域に広がっていることを確認した。また、遺構および遺物は約80cmの盛土下より検出され、西寄りの部分では分布密度が濃い、東端については遺跡の範囲内に含ま

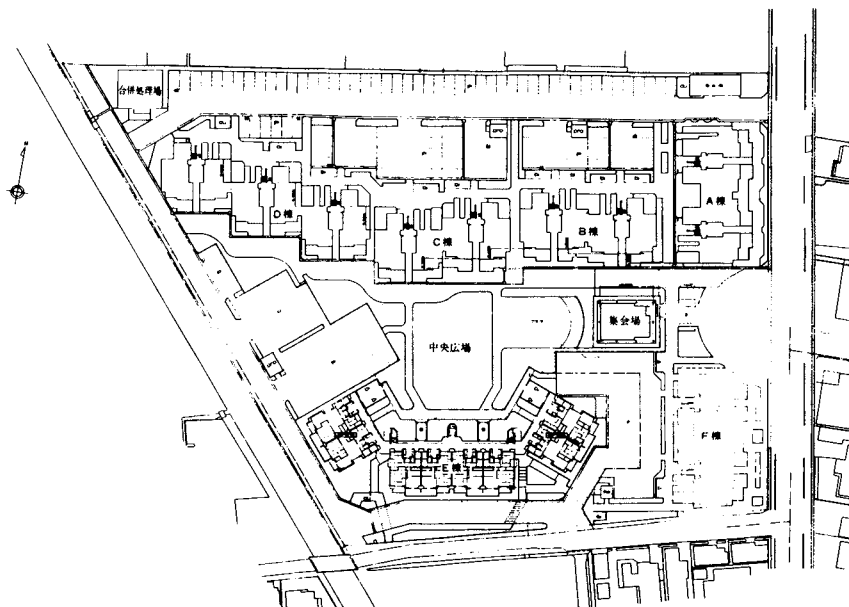


Fig. 1 畝田県営住宅設計図

れると判断したものの、性格不明の溝状遺構や平安時代および中世の遺物を断片的に検出したにとどまり、遺跡のありかたを把握するためのより詳細な分布調査を必要とする、等の所見を得たうえで、同年10月11日付けで調査結果の回答がなされた。

本県では、国・県の実施する公共事業に係る埋蔵文化財の取扱については、事業担当部局との間で埋蔵文化財の取扱協議会を開催し、前年度末までに対応方法を協議しており、本件についても事前の発掘調査が必要な旨を確認し、また、建設の年次計画との調整を図りつつ昭和60年度より発掘調査を実施することとなった。

昭和60（1985）年度の調査（第1次調査）

用地内での埋蔵文化財の詳細な分布状況把握のためのトレンチ調査（約500㎡）、および用地北東部のA・B棟および合併処理槽予定地約2,000㎡を対象とした発掘調査を実施する計画で、昭和60年5月1日付けで県土地開発公社と委託契約を締結し、同年5月17日より調査を開始した。

当初に行ったトレンチ調査の結果、A棟北端の一部は発掘調査区域から除外することとなった。一方、建設工事計画との関係から、昭和61年度建設予定地の一部（C棟）について発掘調査を繰上げて実施する必要が生じた。さらに合併処理槽が設計変更により建設地が用地西北端に変更されたため、次年度に発掘調査を実施することとなった。したがって、昭和60年度の調査はA棟の一部およびB・C棟を対象とした約1,900㎡と、用地内の試掘調査約500㎡、計約2,400㎡の発掘調査を実施することとなり、昭和60年10月21日に現地調査を終了した。なお、発掘調査区域の設定にあたっては、建物基礎工事ともなう掘削の関係から、躯体の外側3mまでを発掘調査区域として設定している。

昭和61（1986）年度の調査（第2次調査）

昭和61年5月6日付けで県土地開発公社と委託契約を締結し、用地北西部のD棟、合併処理槽、排水管路（A・B棟と合併処理槽管）、および集会場建設予定地を対象として約2,100㎡の発掘調査を実施した。現地調査は同年5月7日に開始し10月14日に終了した。

昭和62（1987）年度の調査（第3次調査）

昭和62年4月30日付けで県土地開発公社と委託契約を締結し、用地南部のE1・E2・E3棟予定地を対象に約1,700㎡の発掘調査を実施した。現地調査は同年4月30日に開始し9月19日に終了した。

なお、本調査区の弥生時代後期から古墳時代前期の河道跡（SD05）から出土した弧文板と前年度調査区から出土した玉杖形木製品について、昭和63年1月12日に報道機関に対する発表をおこなった。

昭和63（1988）年度の調査

新規建設工事がなないために現地調査は実施されなかったが、調査報告書刊行に備えるために、本年度から本格的な整理作業を開始することとなった。このため昭和63年8月27日付けで県土地開発公社と委託契約を締結し、昭和62年度出土遺物の洗浄作業を主とし、一部の遺物の記名・分類・接合作業および木製品の一部の実測も含めた出土品整理作業を実施した。

平成元年度（第4次調査）

平成元年6月30日付けで県土地開発公社と委託契約し、建設用地南東部のF棟建設予定地約600㎡を対象とした発掘調査、および出土品等整理作業を実施した。本年度調査対象区域は、昭和59年度の分布調査において既設建物が占地していたために試掘坑を設定できなかった部分であり、さらに隣接する調査区域の状況からみて遺構密度が低いこともありえるため、部分的なトレンチ調査をおこなったのち調査方法を決定する計画で調査が進められた。

現地調査は平成元年8月7日に開始したが、近代以降旧河道以外に明瞭な遺構が確認されなかったために、トレンチ調査による記録をおこなって調査を終了した。また、本調査をもって県営畝田共同住宅

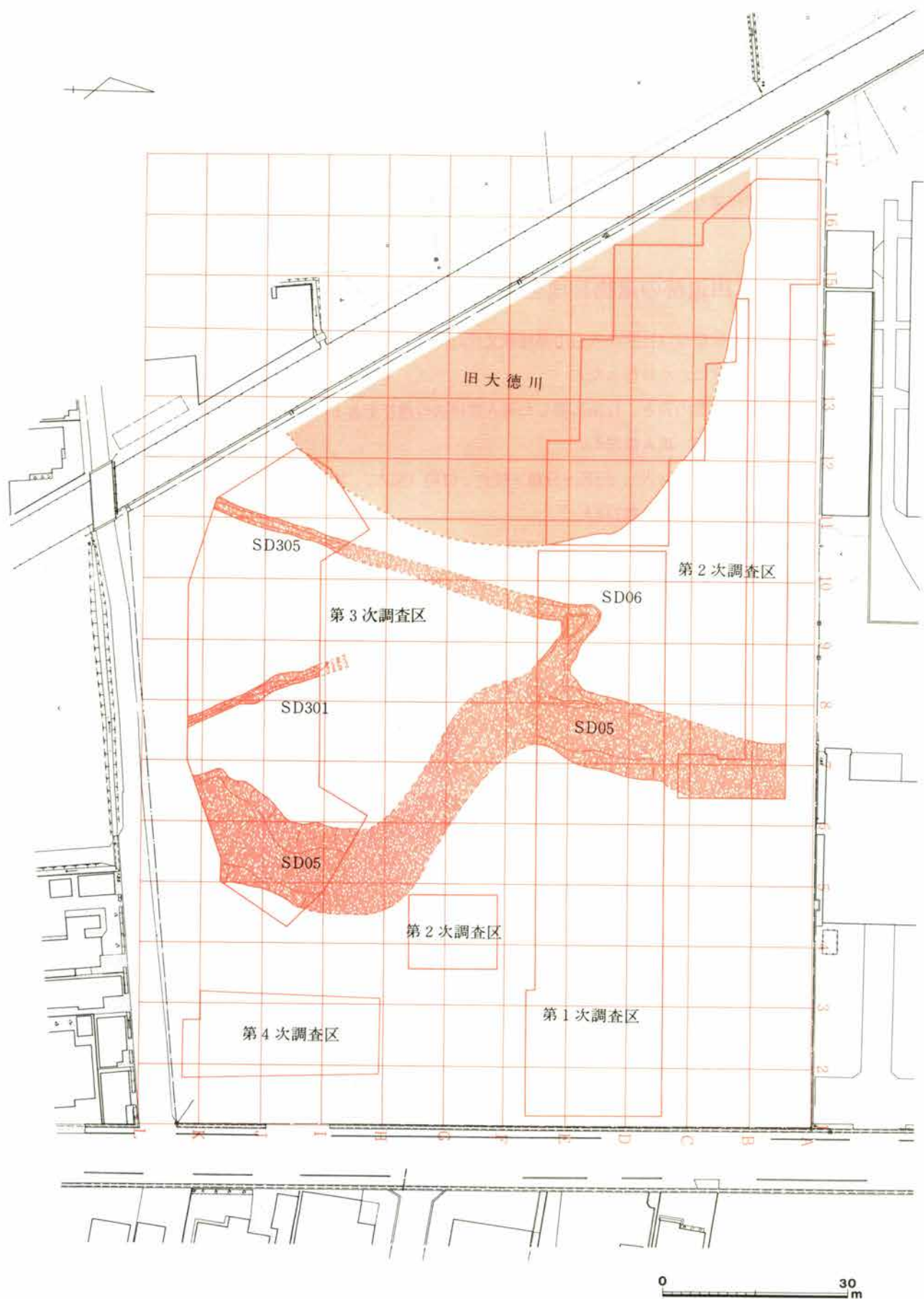


Fig. 2 畝田遺跡全体図・グリッド配置図

用地整備事業に係る発掘調査の内、現地調査を完了した。一方、出土品整理作業については前年度からの記名・分類・接合作業等を継続するとともに、新たに復元・実測・トレース作業等が進められた。

平成2年度

平成元年度をもって県土地開発公社のおこなう県営畷田共同住宅用地整備事業が完了したため、前年度までの関係部局との協議に基づき、県土木部建設住宅課が費用を負担し、出土品の鑑定・遺物写真の撮影等の整理作業と報告書作成作業が実施された。

第2節 畷田遺跡の遺物整理を通して

畷田遺跡の遺物整理は社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が、石川県の委託事業として、昭和63年と平成元年の2年度にわたり行った。

各年度の整理作業内容と、作業に要した延人数は次の通りである。

昭和63年度（1988）延人数288人

土器洗浄：146箱（184人）、記名・分類・接合：61箱（52人）、木器の実測：100点（52人）

平成元年度（1989）延人数744人

記名・分類・接合：163箱（262人）、復元：40点（34人）、土器実測：566点（256人）、土器実測図トレース：566点（65人）、木器実測：70点（53人）、木器実測図トレース170点（42人）、遺溝図トレース：B4版 100枚（32人）

総延人数1032人

次に、私が担当した平成元年度の整理作業について簡単にまとめたい。

（記名（ネーミング）・分類・接合）（復元）

記名は遺物、特に土器の量の膨大さもあって、出来る限り簡略化した。遺跡名は「ウネダ」とし、層位が（青灰色粘砂層）の場合は「SHNS」と記号化した。取り上げ年月日は省略し、グリッドと遺構名を記入し、実測土器については前記の記名の付近に実測番号を記入した。木器は水中保存のものは水系でラベルをつけた。タッパ容器保存のものも同様であるが、最近ではラッピング保存法がとられている。

記名用具として、面相筆、ポスターカラーのホワイト・イエロー（イエローは実測番号。記名事項と区別しやすく、ホワイトと同じくらい読みやすい。他の遺跡、遺物により色を変えることもある。）コーティングにはアクリル樹脂パラロイドB72（5%アセトン溶液）を使用した。この溶液はもろい土器や木器の補強にも使用できるし、接合断面の強化にも使用している。即乾性なので、バインダーより扱いやすく、最近ではもっぱらこれ



Fig.3 整理作業風景

ばかり使用している。

分類については遺構ごとに、甕、壺、高坏・器台、その他とに大きく分け、甕と壺については判別可能な限り、口縁部と底部、胴部片に分けた。整理箱はパンケースと、これに入る特別注文の大・中・小のダンボール箱、それ以下の小箱はコピーなどのホゴ紙で4サイズくらいの箱を折って使用した。1つのパンケースにこれら様々な箱で遺物を区分した。

接合は弥生時代後期～古墳時代の土器というのに、とても指先が荒れ、傷ついたのを覚えている。特にSD05中、FR、出土土器の破断面の鋭利さはまさに陶磁器をさえ思わせた。記名分類・接合作業を終えた段階でのパンケース量は必然的に増えて、総数372箱になった。その内、SD05は202箱、約54%を占める。また収蔵庫が狭くなる。

復元は実測時に観察しやすいよう最少限の補修でとめ、実測後に完形に復元した。また、高坏・器台の柱状部や壺形土器など、特に成形過程を観察するため接合を見合わせた場合が多々あった。

接合作業と復元作業は関連作業なので、用具はまとめて記す。セメダインC、せんたくばさみ（プラスチック製のエビス印とアルミニウム製のものが使い易い）、当て紙（セメダインCの空箱やお菓子のパッケージ等をたん柵状に切って作る）石コウ・モデライト（これらに伴う彫刻美術用具一式）回転台等。

（実測）（トレース）

土器実測は566点という制限があり、大量の土器群から、選び出す作業を伊藤氏が行なった。私達でも実測してあげたい土器がまだまだあったのに、伊藤氏の思いはなおさらだろうと思われた。実測法は一般的な方法で行なった。用具はコンパス、ディバイダー、マーコ（竹製、木製、縫針製）、キャリパーetc.。

トレースは実測図の $\frac{1}{2}$ コピーをとり、それをトレースした。これまで、原寸トレースしかやったことがないので、 $\frac{1}{2}$ になった内外面の調整や、せっかく肉眼で観察した切り合いや端部が見にくく、とまどったが、大きさが $\frac{1}{4}$ になっている分、作業は効率良く進むし、コンパクトになった分、整理も扱いも楽であった。ただし、大事なポイント、（2次調整の切合い、方向等）を $\frac{1}{2}$ コピーで間引きトレースする作業は苦勞した。用具はロットリングペン、丸ペン（ゼブラ、日光）、トレーシングフィルム#200、コーティングスプレーを使用。

木器実測について苦勞したのはこわれた木器の実測である。数人でささえたり、いろんなものをつめたりたてかけたりして実測した。トレースは土器と同じく $\frac{1}{2}$ コピーをトレースした。用紙はトレーシングペーパー（50g/m²）を使用。

遺構図トレースに関しては機構上、発掘現場を知らないメンバーがトレースするので必然的に問題が多い作業であった。

以上の作業は平成元年7月より4人構成の1班で着手したが、3月までの契約制限のため、途中、1ヶ月間、別の1班の応援を受けて、無事完了することが出来た。

幸運なことに、この畝田遺跡の遺物整理期間中に石川県立埋蔵文化財センターの所長を訪ねられた神奈川県立博物館の神沢勇一先生より、ト骨についてご教示を受けることが出来た。私のつたない実測図の添削もしていただき、先生のおだやかなお話しぶりと、適切なご指導、そして、研究に対する意欲的なご姿勢には身のひきしまる思いがした。

せっかくご指示のあったニホンジカの肩胛骨^{けんかく}の推定線は私の不勉強と努力不足のため、正確には入れられなかった。反省……。

私はこれまでに県内・県外各地の整理室を見学する機会に何度か恵まれた。

先日^{うかが}伺ったある整理室の女性は夏は扇風機だけ……（以外と多い。）なので、西日を防ぐため、布地だけ買ってもらって自分達でカーテンを縫ったとおっしゃっていた。異常に高い天井からかわいい柄のカーテンが下がっていた。あの天井では冬も暖まらないことだろう。ある整理室では図が飛ぶので扇風機も回せないとかまた、別の整理室ではたった一人で整理しているので、「このままでは報告書は十年後になります。」と苦笑いをする人もいた。

予算の都合等で必要な用具も買えなくて廃物利用でがんばっているという話もよく聞かし、整理作業台が狭かったり照明が暗いなど決して完備されているとは云えない整理室が以外と多いのである。しかしながら、そんな環境の中での作業から生まれた復元土器や実測図を見て、その成果品のすばらしさには目を見はるばかりであった。訪れた日は休日の日ばかりなので、その作業を担当した人に直接会えない場合が多く、壁にはってあった擬凹線の実測の図化表記分類表、石コウの表面の処理法、教わりたいたことが山ほどあったのに、とても残念な思いをした。

遺物整理作業において、発掘調査員の方々や、報告書執筆担当の方々との縦の連絡、協力が不可欠であるが、整理作業室間における横の情報交換もこれから大切なのではないかと痛感せずにはいられない。

つぶやき

最後になりましたが、このような機会を与えて下さったダジャレの上手な伊藤氏に感謝します。行政発掘に伴う遺物整理という状況の中で、日々遺物達と向き合っています。時々、目の前の土器のつぶやきが聞えるような……。『もっともっと眠っていたかったのに……。』

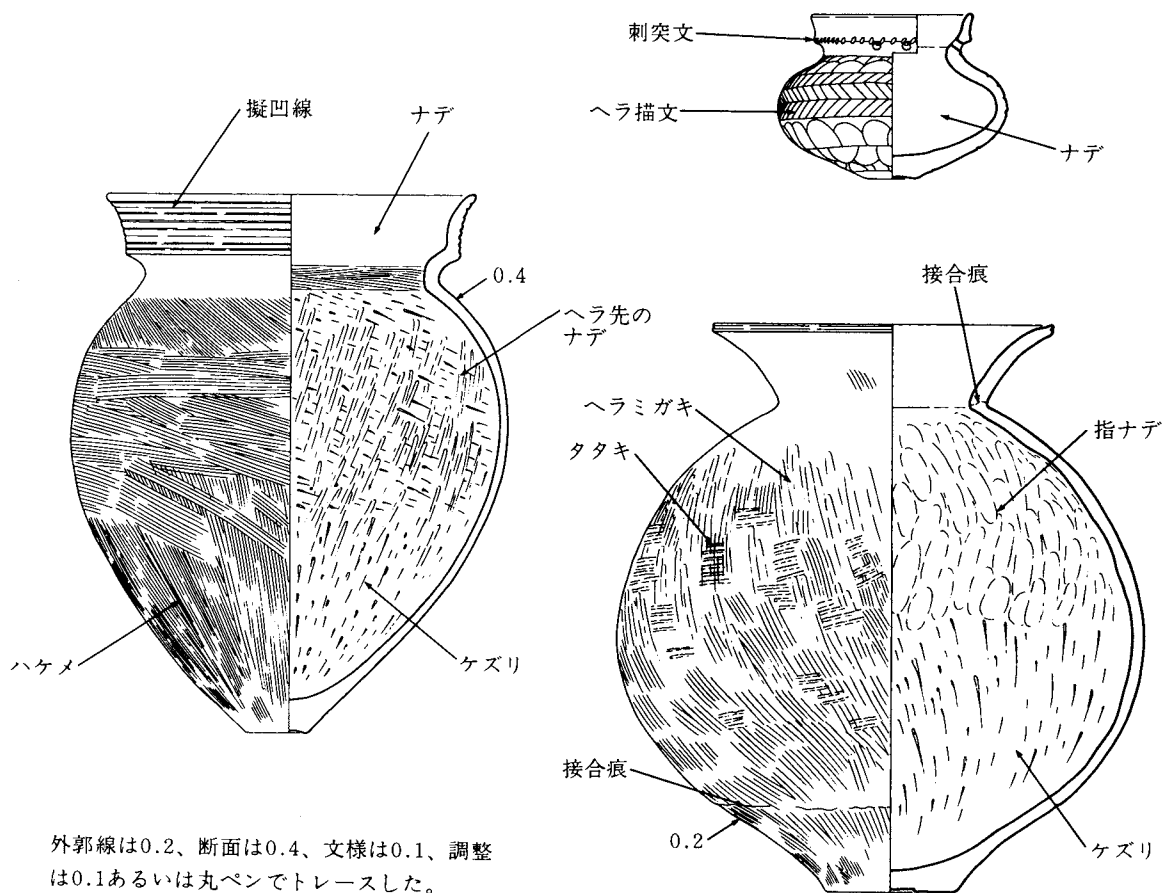


Fig. 4 土器表現方法と墨線の太さ

第3節 調査日誌

第1次調査（昭和60年）

- 5月15日
現場トレンチ設定。調査前現地写真撮影。
- 5月16日
トレンチの重機掘削。プレハブ設置。
- 5月17日
発掘器材搬入。
- 5月23・24日
分布調査トレンチ。
- 5月27日
8、9、10トレンチ遺構検出。
- 5月28日
8、9、10トレンチ遺構検出。同トレンチ断面図作成。
- 5月29日
7トレンチ遺構検出。8、9トレンチ写真撮影。断面図、レベル記入。
- 5月30日
調査区盛土除去。調査区法面の出水を土囊によって止水。
- 5月31日～6月5日
盛土除去。
- 6月6・7日
盛土除去。遺構検出。
- 6月10日
5C、5D、5E区旧床土掘削。
- 6月11日
5C、5D、5E区旧床土掘削。汚水処理槽調査区杭打ち。
- 6月12日
4E、5E区掘削。
- 6月13日
3D区掘削。
- 6月14日
3D・E区掘削。
- 6月17日
3C・3D区遺構検出。排土整理。
- 6月18日
1C・1E区遺構検出。コンベヤ移動。
- 6月20日
1C・1D区遺構検出。
- 6月21日
2C・2E区遺構検出。
- 6月27日
5C・5E区遺構検出。
- 6月29日
排水作業。4C・4E、5E区遺構検出。
- 7月9日
4C区掘削。
- 7月12日
3C、3E区掘削。
- 7月16日
2C、2E区大溝の掘削。試掘溝埋め戻し。
- 7月17～22日
2D区旧河道掘削。
- 7月23日
2D区SD05掘削。写真撮影準備。
- 7月24日
2号溝を中心とした調査区東半分の全体写真撮影。4、5区各遺構掘削。
- 7月25・26日
4、5区各遺構掘削。SD02断面図作成。
- 7月29・30日
6区、SD05掘削。
- 8月1日
調査区域拡張のため盛土除去開始。
- 8月2日
拡張区域盛土除去。
- 8月3・5日
盛土除去。
- 8月6日
7C～E区遺構検出。
- 8月7～10日
7～9区遺構検出。
- 8月12日
7D区SD05掘削。2・3D区SD02杭取り上げ。
- 8月13～23日
7D区SD05掘削。
- 8月24日
1～4区平面図作成。
- 8月26～30日
SD05掘削。
- 8月31日
平面図作成。（1D・E、2E区）



Fig.5 第1次調査作業風景

9月2日
9D区遺構検出。

9月3日
9C～E、10C～E各区SD07、08、09掘削。

9月4～7日
SD06掘削。

9月9日
SK2・5号、SD10掘削。

9月10日
1～6各区平面図レベル記入。

9月13～17日
SD05・06掘削。

9月20～26日
SD05掘削。

9月27日
SD05掘削8～10区ピット検出。

9月28日
ピット群及びSD05掘削。

9月30日
SD05掘削。

10月1日
6～10区遺構平面図作製。雨のため排水作業。
県土地公社と工事開始等にかかる打ち合せ。

10月2日
SD05掘削。6～10区遺構平面図作製。

10月3日
SD05掘削。SK06（井戸）掘削。6～10区平面図及び断面図作成。

10月4・5日
SD05掘削。6～10区平面図作成。

10月8日
完掘写真撮影準備。

10月9日
完掘写真撮影。

10月12日
6～10区平面図作成。

10月14日
8～10区平面図作成。SD05等埋め戻し。

10月15日
8～10区平面図作成。SD05等埋め戻し。

10月16日
平面図レベル記入。次年度調査区域杭打ち。

10月19日
発掘器材最終撤去。木器等現地残存資料、遺物最終搬出。

第2次調査（昭和61年）

5月16日
発掘器材を現場に搬入。

5月19日
発掘区域内残土除去及び場内清掃。重機により

合併処理槽及び処理配水管敷設区域の荒掘り開始。ベルコン、発電機等搬入。

5月20日
発掘区域杭打ち。

5月21・22日
合併処理槽と排水管敷設区の盛土及び旧耕土除去。

5月23日
排水管敷設区の盛土及び旧耕土除去。

5月24日
排水管調査区の旧耕土除去。

5月26日
合併処理槽調査区盛土、旧耕土除去。法面保護。

5月27日
合併処理槽調査区盛土除去完了。

5月28・29日
合併処理槽調査区遺構検出。

5月31日～6月4日
排水路調査区遺構検出。

6月5日
SD05発掘。

6月6日
SD05溝発掘。C棟調査予定地地張り。

6月7日
SD05法面崩壊復旧。

6月9～12日
C棟調査区盛土除去。

6月13日
C棟調査区盛土除去。SD05発掘区域法面補強。

6月16日
C棟調査区排水用溝掘削。旧耕土、床土除去。

6月18日
前日夜の降雨のためSD05等水没。排水及び掘削法面復旧作業。C棟区遺構検出。

6月19日
C棟区遺構検出。

6月20日
C棟区遺構検出。同区10メートルの杭打ち。

6月21日
C棟区遺構検出。

6月23日
排水管敷設調査区SD05掘削。

6月24日
SD05掘削。

6月25～7月2日
SD05掘削。排水管敷設調査区遺構検出。

7月3日
SD05掘削。10A～11A区遺構検出。

7月4・5日
S D05掘削。11A～12A区。遺構検出。

7月8・9日
S D05掘削。12A～13A区。遺構検出。

7月11日
S D05掘削。11A～13A区。遺構検出。

7月12日
合併処理槽調査区遺構検出。S D05掘削。大徳川護岸及び土地公社コンクリート壁がやや内傾していることを確認し現地で協議する。

7月14日
合併処理槽調査区遺構掘削。S D05掘削。前日からの降雨による法面崩壊箇所復旧。建築住宅課と土地公社が現地確認。

7月17日
法面崩壊復旧。合併処理槽調査区遺構掘削。

7月18・21日
合併処理槽調査区及び排水管路調査区掘削。

7月24・25日
合併処理槽調査区遺構掘削及び平面図作成。

7月26～31日
合併処理槽調査区遺構掘削。

8月1～6日
排水管路調査区平面図作成。S D208掘削。

8月7日
排水管路調査区平面図作成。208号溝掘削。本日で合併処理槽調査区及び排水管敷設区調査終了。

8月8日
C棟調査区14ライントレンチ掘削。

8月11日
16ライントレンチ設定。

8月12日
14ライントレンチ設定。

8月13日
C棟調査区遺構検出。

8月18日
C棟調査区12ライントレンチ設定。同トレンチ断面図作成。

8月19日
C棟調査区11BG、旧河道北東隅遺構検出。

15、14、13、12ライン各トレンチ旧河道の溝底まで一部掘り抜く。

8月20日
C棟調査区作業通路下部分調査準備。

8月21日
C棟調査区平面図作成。発掘排土場外搬出。C棟調査区作業通路下盛土除去。

8月22日
C棟調査区平面図作成。発掘排土場外搬出。C棟調査区作業通路下遺構検出。



Fig. 6 第2次調査SE202

8月23・26日
C棟調査区遺構検出。

8月27日
C棟調査区写真撮影。同区平面図作成。

8月28・29日
C棟調査区平面図作成。

9月2日
S E203掘削。C棟調査区調査掘削。法面保護シート撤去。本日もってC棟区調査完了。土地公社へ引渡す。

9月12日
集会場建設予定地発掘準備。

9月16・17日
集会場調査区盛土除去。

9月19日
集会場調査区遺構検出。

9月22・24日
集会場調査区遺構検出。

9月25日
集会場調査区杭打ち。同区遺構検出。

9月26日
集会場調査区遺構検出。

9月29日
集会場調査区遺構検出。

10月4日
集会場排水、清掃。遺構検出終了。

10月6日
集会場調査区全体写真撮影。平面図作成開始。

10月7日
集会場調査区平面図作成、レベル記入。器材撤収。

10月8日
集会場調査区調査終了。法面保護シート、バリケード撤去。器材の後片付け。

10月9日
器材、センター搬入整理。

第3次調査（昭和62年）

- 4月30日
重機による掘削開始。5月21日までかかる。
- 5月22日
25日まで包含層の掘削。
- 5月26日
7月30日まで遺構検出および遺構掘削。
- 7月31日
5・6 J区のSD05の掘削を開始する（最上部）。
- 8月3日
調査区域の拡張。
- 8月4日
前日に同じ。
- 8月5日
SD05最上部掘削。
- 8月6日
SD05上層掘削。
- 8月7日
SD05上層掘削、遺構検出と掘削の補足。
- 8月10日
SD05上層掘削。12日まで継続。
- 8月17・19日
SD05上層と中層の掘削。SD305掘削。
- 8月20日
SD05中層掘削。柱穴の半截。29日まで継続。
SD05は28日より下層の掘削に入る。
- 8月31日
SD05下層掘削。
- 9月1日
SD05掘削。航空測量のための清掃。
- 9月2日
清掃。
- 9月3日
航空測量。
- 9月4日
5・6 I区のSD05掘削（中層）。土払、溝、掘立柱建物の完掘写真撮影。



Fig. 8 第3次調査SD05断面実測風景

- 9月7日
SD05掘削。
- 9月9日
SD05掘削（中層）。土払、溝、掘立柱建物の断面および完掘写真撮影。
- 9月10日
前日に同じ。
- 9月11日
SD05断面実測。
- 9月12日
掘立柱建物断面図作成。
- 9月14日
SD05のアゼ除去。柱穴断ち割り。
- 9月16日
14日に同じ。
- 9月17日
SD05実測。
- 9月18日
器材の後片付け。
- 9月19日
器材の搬出。現地調査を終了する。

第4次調査（平成元年）

- 8月7日
現地確認。住宅供給公社との打ち合せ。
- 8月8日
重機によるトレンチ調査。
- 8月9日
平板測量。本日で現地調査を終了する。



Fig. 7 第3次調査SD05掘削風景

第2章 位置と環境

第1節 位置と地理的環境

畝田遺跡は、石川県金沢市畝田西4丁目地内に所在する。石川県は、日本海中央部に突出した能登半島と、その南西に広がる加賀地域とからなり、南西、南東、東側は、それぞれ福井、岐阜、富山県に接している。

地形的には、宝達山（標高637.4m）に源を発し、県中央部を北西に流れる大海川を境にして、北部の能登地区と南西部の加賀地区に二分され、このうち加賀地区は、北西地域の単調な日本海沿岸、それに平行して広がる金沢平野、その背後の丘陵（津幡・森本丘陵、能美・江沼丘陵）、山地（加越山地）よりなり、県都金沢はその北東部を占める。

人口43万人（県人口は116万人）を擁する金沢市は、北陸有数の都市である。面積467.77km²（県面積は4,184.42km²）を測り、北は河北郡内灘町、津幡町、南は石川郡吉野谷村、河内村、鶴来町、野々市町、松任市、東は富山県小矢部市、西砺波郡福光町、東砺波郡上平村の2市5町3村に接しているほか、西は日本海に面している。

市内の地形は、金沢平野の一部をなす北西部の河北低地、北東部の津幡・森本丘陵、加越山地の一部をなす南東部の医王山地、富樫山地などからなり、それらの山地に源を発する大小河川が市内を北西流し日本海へ注いでいる。南西部を貫流する犀川と、北東部を河北潟に注ぐ浅野川の二河川は、その代表的なものである。なお河北潟は、縄文海進によって形成された入江が、その後の海退と内灘砂丘の形成によって潟湖となったもので、東西約4km、南北約8kmを測り、金沢市（北部）のほか、河北郡内灘町、津幡町、宇ノ気町にまたがっている。河北低地は、河北潟周辺の低湿地で、潟湖が河川による埋積作用などをうけ低地化したものである。

本遺跡が所在する畝田町は、畝田村（～明治22年）、大野村大字畝田（～昭和18年）を経て金沢市に編入されたもので、河北低地の南西部、犀川右岸（約1.3km）に位置し、現海岸線までの距離は約2.2kmを測る。近年まで周辺は、南西約300mを南東から北西方向に走り、市内中心部と金石港を結ぶ主要地方道金沢港線（金石街道）沿道に、普正寺町、寺中町、観音堂町、松村町、藤江町、二ツ屋町、北町などの集落が散在するほかは、本調査区を含め一面の水田地帯であった。しかしながら、上記金石街道を往来した北陸鉄道金石線の廃止（昭和46年（1971年））に前後して、南東約1.4kmを北東から南西方向に走る金沢バイパス・北陸自動車道建設事業が進行し、さらに昭和50年代半ば（1980年前後）以降の金沢駅西部地区の土地区画整理事業の進展などともない、周辺は急速に宅地化しつつある。本調査もまた、県施工共同住宅建設に起因するものであった。

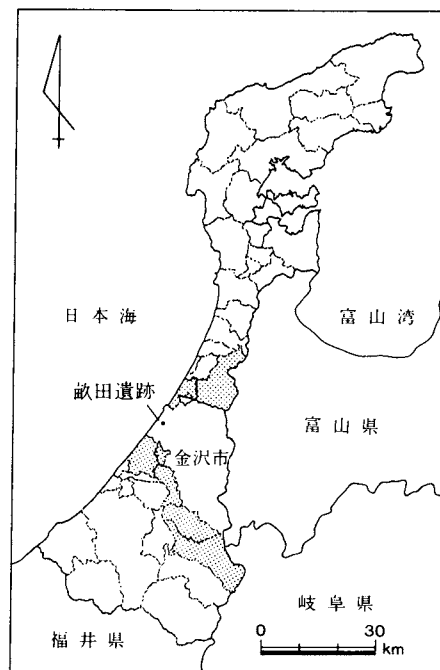
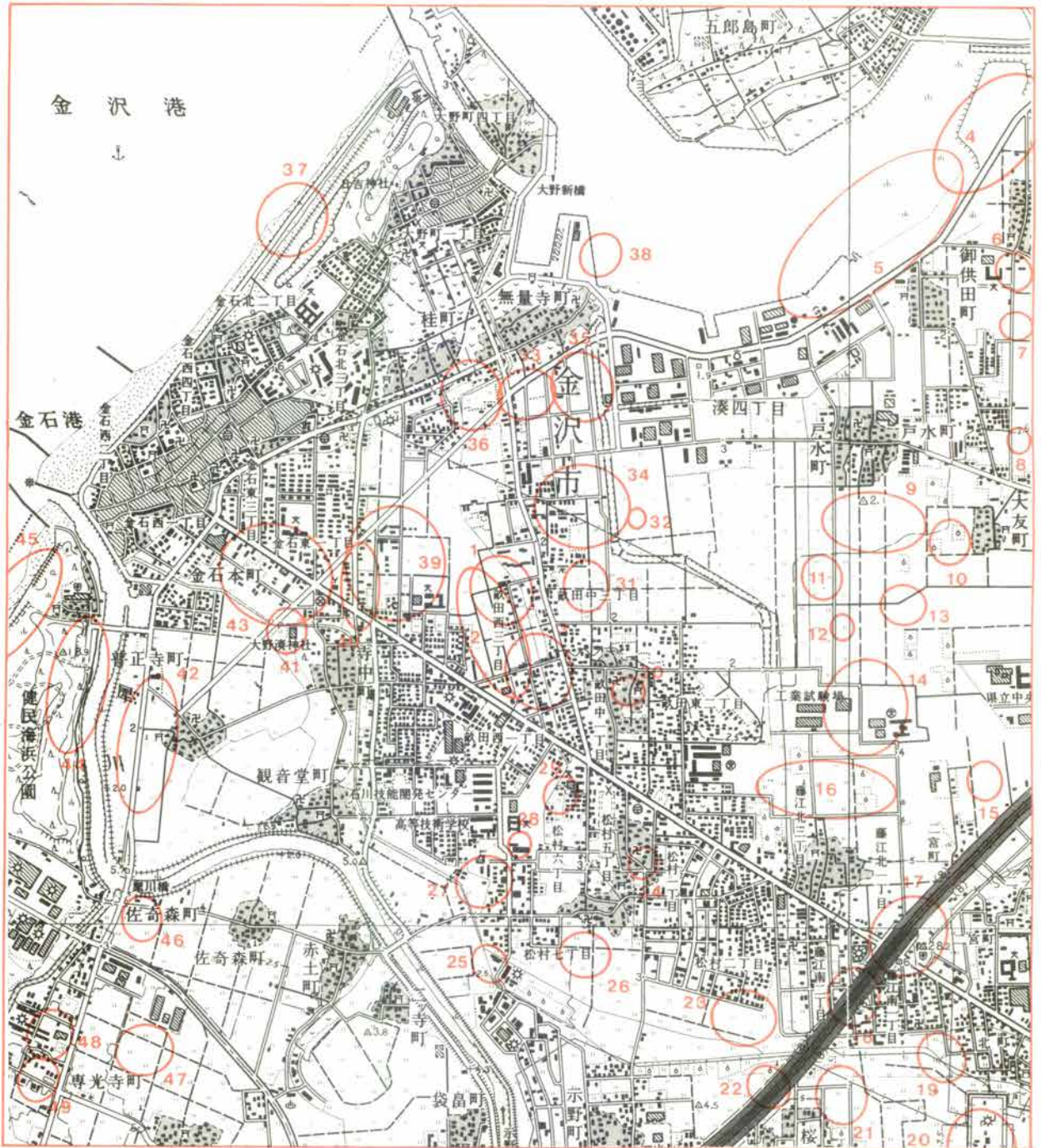


Fig. 9 畝田遺跡の位置
(S=1/2,000,000)



- | | | |
|----------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 畝田遺跡(縄文～近代) | 2. 畝田・寺中遺跡(古墳～中世) | 3. 畝田・大徳川遺跡(奈良・平安) |
| 4. 近岡遺跡(縄文～中世) | 5. 戸水C遺跡(弥生～中世) | 6. 近岡ナカシマ遺跡(弥生～平安) |
| 7. 近岡カントンボ遺跡(弥生、奈良) | 8. 大友遺跡(平安) | 9. 戸水オモチ遺跡(弥生～中世) |
| 10. 名称未定(奈良・平安) | 11. 名称未定(奈良・平安) | 12. 名称未定(奈良・平安) |
| 13. 名称未定(中世～近世) | 14. 戸水B遺跡(弥生、平安) | 15. ニツ屋町遺跡(弥生、奈良・平安) |
| 16. 藤江C遺跡(弥生～中世) | 17. 藤江B遺跡(弥生～平安) | 18. 藤江A遺跡(平安) |
| 19. 北町遺跡(縄文) | 20. 薬師堂遺跡(古墳) | 21. 出雲いさまた遺跡(平安) |
| 22. 桜田・示野中遺跡(弥生、平安) | 23. 松村高見遺跡(弥生) | 24. 松村寺の前遺跡(中世) |
| 25. 松村どのまえ遺跡(弥生) | 26. 松村B遺跡(縄文、弥生、近世) | 27. 松村A遺跡(縄文、古墳、中世) |
| 28. 松村平田遺跡(弥生) | 29. 松村西の城遺跡(古墳、平安) | 30. 畝田御台場遺跡(近世) |
| 31. 畝田B遺跡(弥生～平安) | 32. 畝田C遺跡(弥生～平安) | 33. 無量寺B遺跡(弥生、古墳) |
| 34. 畝田・無量寺遺跡(弥生～平安) | 35. 無量寺遺跡(弥生、古墳、中・近世) | 36. 桂遺跡(弥生～中世) |
| 37. 金石北遺跡(時代不詳) | 38. 無量寺金沢港遺跡(縄文～古墳) | 39. 寺中B遺跡(縄文～古墳、平安) |
| 40. 寺中遺跡(弥生、古墳) | 41. 寺中御台場遺跡(近世) | 42. 普正寺高畠遺跡(古墳～近世) |
| 43. 金石本町遺跡(弥生、奈良・平安) | 44. 普正寺遺跡(中世) | 45. 普正寺番屋砂丘遺跡(縄文) |
| 46. 佐奇森A・B遺跡(弥生、古墳) | 47. 佐奇森遺跡(奈良・平安) | 48. 専光寺養魚場遺跡(古墳～平安) |
| 49. 専光寺養魚場遺跡(古墳～平安) | | |

Fig. 10 畝田遺跡と周辺の遺跡(S=1/25,000)

第2節 歴史的環境

本遺跡は、縄文時代から近代にいたる集落遺跡である。本遺跡をふくめ、かつて周辺がほぼ一面の水田地帯であったことは前節でふれた通りであるが、そうした景観が原始以来の一貫した姿とは必ずしもいえない。大小河川が北西流し日本海へ注いでいく本遺跡周辺の低地では、その両岸に集落立地に適した帯状の微高地が多く形成されていたと考えられる。そうした微高地が削平され、他方ではいたるところにみられた沼地が埋められ、現在の低平な水田地帯が出現したのはそれほど古いことではない。したがって、歴史的な環境を復元的に考察するにあたっては、それら消滅した微高地や沼地（河川）の存在を十分に考慮しなければならないだろう。本節ではそうした詳細な検討はできないが、この点をふまえ、以下周辺の遺跡を概観していく。

縄文時代の遺跡は、近岡遺跡（4、Fig.9の遺跡番号、以下同様）、北町遺跡（19）、松村B遺跡（26）、松村A遺跡（27）、無量寺金沢港遺跡（38）、寺中B遺跡（39）、普正寺番屋砂丘遺跡（45）があげられるが、時期的には後・晩期を中心とするものが圧倒的に多く、その大半は弥生時代以降との複合遺跡である。このうち、河北潟南西縁辺部に位置する近岡遺跡では、縄文時代晩期の遺物包含層からイネの花粉が検出され注目された⁽¹⁾。同遺跡の遺溝面は海拔1mを下まわっており、南西側に隣接する戸水C遺跡（5）とともに、河北潟縁辺部の遺跡のなかでは最も低地に立地するが、遺跡周辺が部分的に沈降している可能性があり、また有史以前から繰り返されている海進・海退と地下水位の変動を考慮すれば、中期以前は希薄であるという出現期をめぐる問題は別として、低地の遺跡として格別奇異な印象はうけない。このことは、他の周辺遺跡にもあてはまることである。

弥生時代の遺跡は、戸水オモテ遺跡（9）、二ツ屋町遺跡（15）、松村高見遺跡（23）、松村どのまえ遺跡（25）、松村平田遺跡（28）、畝田B遺跡（31）、佐奇森A・B遺跡（46）など26遺跡を数える。前期（柴山出村式）～中期中葉（小松式）では、遠賀川系甕が出土した戸水C遺跡（5）や、中期中葉を中心とする土壌（墓）群を検出した寺中遺跡（40）がよく知られるところであるが、能登地域における吉崎・次場遺跡のような中核集落の存在は未だ詳らかではない。中期後葉（磯部式）～後期前半（猫橋式）では、無量寺B遺跡（33）のほか、中期末葉（戸水B式）の標式遺跡である戸水B遺跡（14）が注目される。同遺跡からは凹線文系土器が多量に出土し、存続期間が比較的短い点でやや特異である。なお、後期後半（法仏式）～終末（月影式）にかかる遺跡の数は多く、近岡カンタンボ遺跡（7）、桜田・示野中遺跡（22）など、大部分の弥生時代遺跡から同期の遺溝・遺物が検出されている。同時代における遺跡数の増加期として評価されるところである。

古墳時代の遺跡も、近岡ナカシマ遺跡（6）、薬師堂遺跡（20）、松村西の城遺跡（29）、専光寺染色団地遺跡（48）、専光寺養魚場遺跡（49）など24遺跡を数えるが、上記弥生時代の遺跡と複合するものが多く、大半は前半期の遺跡である。このうち、墳丘はすでに失っているものの、戸水C遺跡（5）、藤江C遺跡（16）では、前方後方墳が検出されている。これらの古墳は大型のものではないが、その存在意義は決して小さくはない。なお、後半期に属する遺跡は無量寺遺跡（35）など相対的に少なく、以後、奈良時代までそうした状況が続いていく。

奈良・平安時代では、畝田・大徳川遺跡（3）、名称未定の3遺跡（10～12）、藤江C遺跡（16）、藤江B遺跡（17）、藤江A遺跡（18）、出雲じいさま遺跡（21）、畝田C遺跡（32）、金石本町遺跡（43）、佐奇森遺跡（47）など30遺跡を数え、ふたたび遺跡数は増加に転ずる。奈良時代末から平安時代前期にかけての遺跡が多いのであるが、このうち藤江B遺跡では、「石田庄」と書かれた墨書土器が出土し、文献資料には登場しない初期荘園の存在に問題を提起している。また戸水C遺跡（5）を中心に、

「依」と書かれた墨書土器が、大友遺跡（8）など周辺の複数の遺跡から出土しており、その性格が注目される場所である。遺溝では、戸水C遺跡、畝田・無量寺遺跡（34）などで大型建物や井戸が検出されているが、特に戸水C遺跡は、遺溝・遺物ともに質的にも量的にも他の遺跡を凌駕しており、河北低地における第一級の古代遺跡のひとつといえる。

ちなみに、「畝田村」の地名が文献に登場するのは、「日本霊異記」下巻16における宝亀元年（770年）12月、「越前国加賀郡大野郷畝田村」の記載が初出である。遡って養老2年（718年）には、当時の越前国北端部の羽咋、能登、鳳至、珠洲の4郡を割いて能登国が設置されている。能登国は、天平13年（741年）に廃止され越中国に属することとなったが、天平宝字元年（757年）、越中国より分離し再び立国している。この間加賀地域は弘仁14年（823年）の加賀立国まで、越前国にあって南西部の江沼、北東部の加賀の2郡よりなっていたが、立国後は、江沼郡の北半を割いて能美郡、加賀郡の南半を割いて石川郡が置かれ、加賀4郡が確定している。

中世の畝田村は、初め加賀郡にあってのち石川郡に属した大野荘にふくまれ、明応4年（1495年）、臨川寺領大野荘年貢算用状に「字瀨田村」として現れる。なお、近世以降では、明治22年まで石川郡畝田村、のち大野村（～昭和18年）に属している。

中世の遺跡は、畝田・寺中遺跡（2）、松村寺の前遺跡（24）、無量寺遺跡（35）、桂遺跡（36）、普正寺高島遺跡（42）、普正寺遺跡（44）など13遺跡を数える。このうち、犀川河口左岸に位置する普正寺遺跡は、周辺地域のみならず、北東日本海域全体の商品流通を支えた中核的な港湾集落としてつとに著名である。

近世の遺跡では、松村B遺跡（26）、畝田御台場遺跡（30）、無量寺遺跡（35）、寺中御台場遺跡（41）など7遺跡が知られているが、調査例に乏しく、その動態の考古学的な解明はむしろ今後の課題といえる。

以上、県内有数の遺跡密集地域であり、かつ調査例も多い本遺跡周辺を時代別に概観してきた。本来ならば、隣接遺跡（群）相互の関連性や遺跡（群）内の時期的変遷などの詳細な検討を通して、地域の歴史を語らなければならないところであるが、果たすことができなかった。今後に期すこととしたい。

注

1) 藤 則雄・四柳嘉章「金沢の縄文晩期近岡遺跡からの稲の発見」『考古学研究』第17巻第3号 考古学研究会 1970年 岡山。

参考文献

浅香年木・田川捷一・他『角川日本地名大辞典』 17 石川県 角川書店 1981年 東京。
石川県立埋蔵文化財センター編『石川県遺跡地図』 石川県教育委員会 1980年 金沢。

第3章 遺構

第1節 第1次調査

1 土壇・井戸

土壇状の落込みを6基確認した。第2次調査区に連続する近世の大徳川右岸近くに集中している。但しSK03は現代のものである。

SK02

直径1m強を測る円筒状の土壇である。壁面はほぼ垂直に落ち底は平らである。遺物の出土がないので、時期は不明である。土壇の形状から井戸と思われるが、井戸枠材は残されていない。

SK04・05

SD08の西端に位置し、それを切っている。SK04は1m×1.4mの長方形を呈し、深さ約60cmを測る。壁は垂直に落込み、底面がほぼ水平である。SK05の西の辺を少し切るようにSK04と重複している。歪な円形を呈し、底面のある摺り鉢状をなしている。出土遺物が少ないので時期はよくわからないが、埋土の状況から中世の遺構と推定できる。性格はよくわからないものの、井戸のような機能があったのではないかと考えられる。

2 溝

SD01～03

近世の溝である。SD02はSD05の40mほど南にある。東に流れて調査区北端でちょうど方向を変えている。その変換点からSD01が分流している。溝幅5～6m、深さ約1.3mを測る。全掘していないものの、壁面はなだらかに落ちて底も平坦であるので、人為的な溝と考えられる。上層は攪乱土のような埋立土で、おそらく耕地整理時にSD01・03と共に一気に埋められたものではないかと考えられる。下層は粘質土なので活発な水流があった

とは考えられないが、用水の機能があったと予想される。なお、SD01を延長したところに、流れに平行するようにしがらみ状の木組みを検出した。しがらみ状の木組みは、溝がある程度埋まった段階に打ち込まれており、その上半部は埋立土に覆われている。性格は不明。SD01は浅く深さ50cm前後である。接続部分は狭く1mに満たない幅しかないが、それから溝幅を次第に広げて2.5m前後を測る。また接続部分から5m西でSD03が南方に分流している。

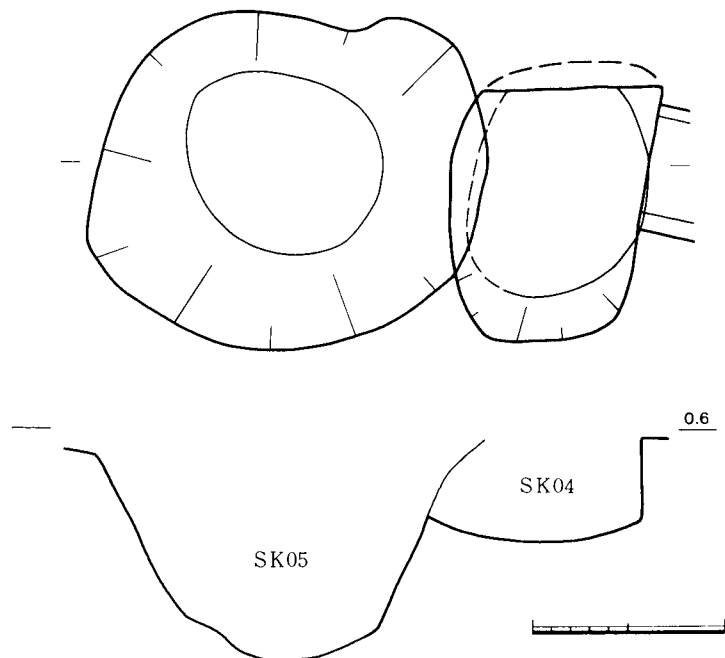


Fig. 11 SK04、05 実測図



Fig. 12 第1、2次調査区(1)

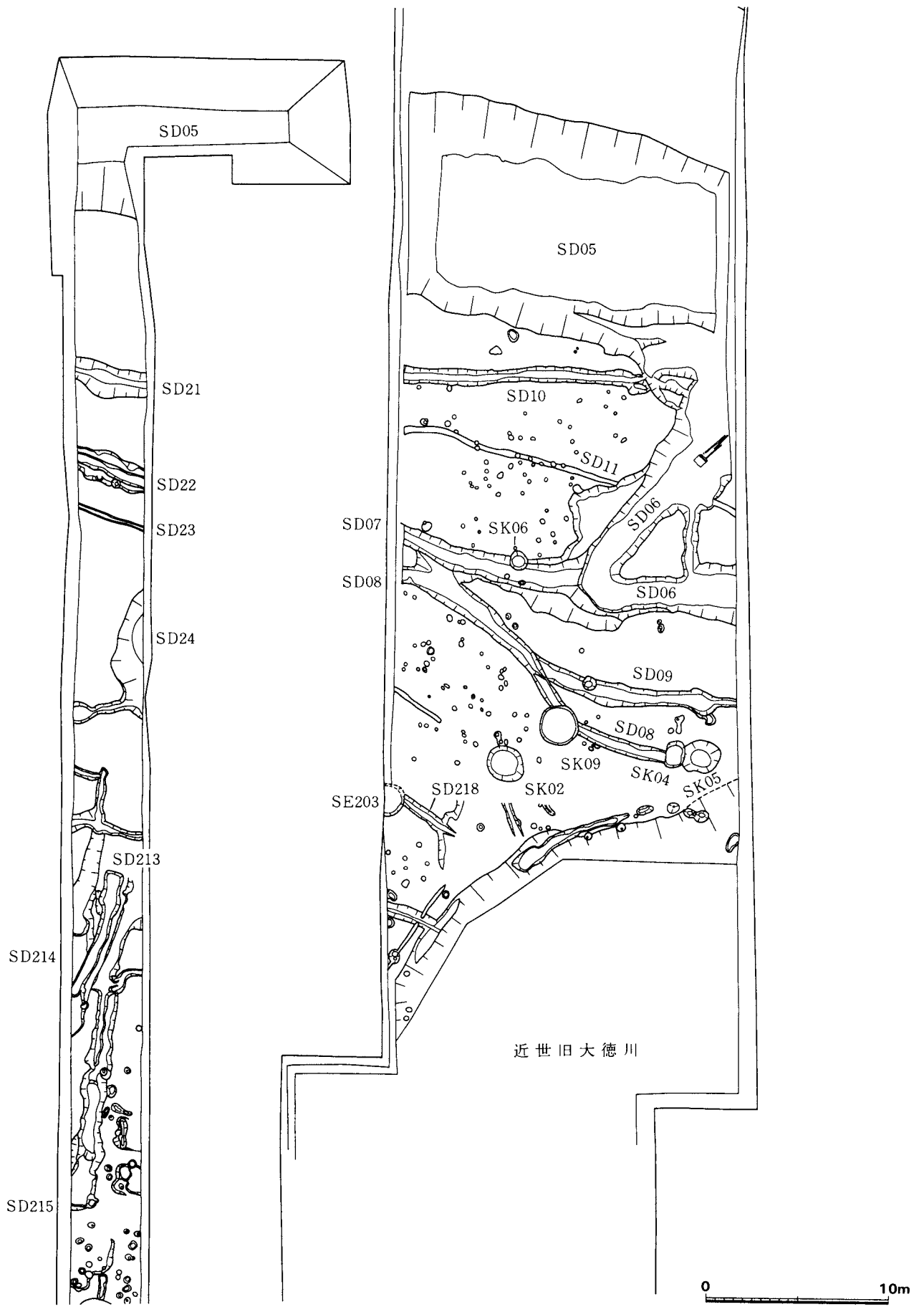
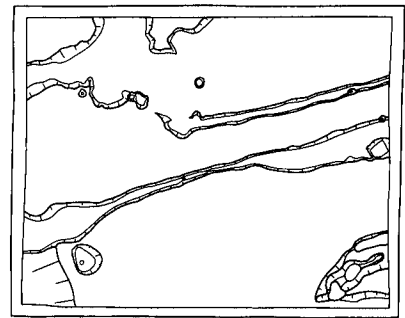
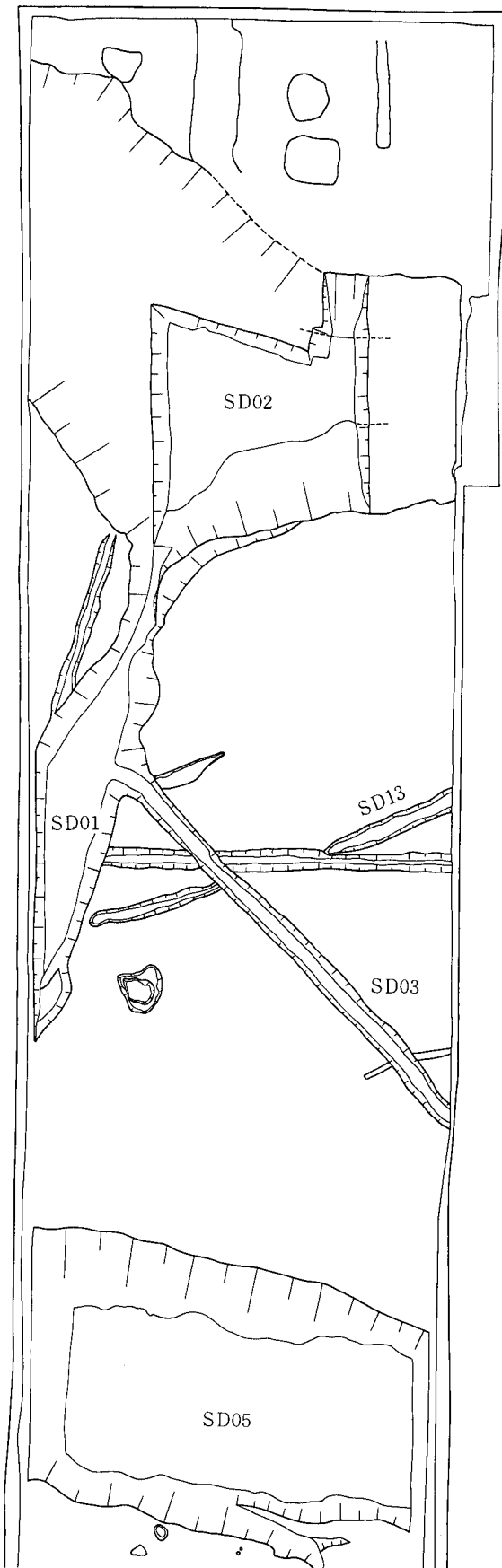


Fig. 13 第1、2次調査区(2)



集会場調査区

0 10m

Fig. 14 第1、2次調査区(3)

SD02が埋められた時、これらも一緒に埋没している。SD03はSD02から各田に水を引き込む機能が考えられる。全体的に汚れた埋土で濁った青灰色粘質土を中心とし、部分的に黄褐色土あるいは暗褐色土のような埋立土が上面にみられる。

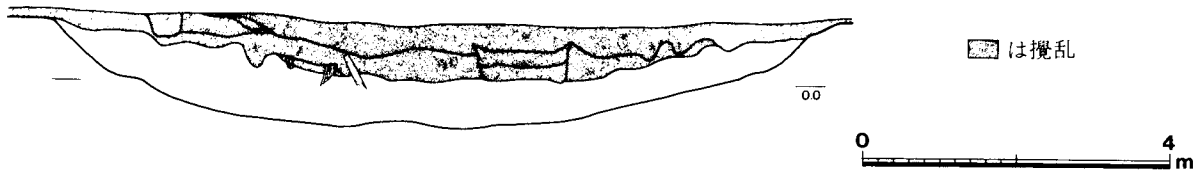


Fig. 15 SD02 断面図

SD05・06

本章第5節で記述。

SD07~10

SD05・06とはほぼ同時期の溝群と考えられる。

SD07はSD06が大きく曲る部分から東に流れる溝である。幅50~70cmを測る。SD06と接続する部分は溝幅が広くなり段掘り状になっている。上面に黄灰色粘土がみられ、整地土と考えられる（SD01等で見られた埋立土とは異なる）。これはSD08にも見られ、これらより、調査区の東端で繋がることも合せて、両者の同時期性を確認できよう。しかし、SD08は深さ10cmほどしかなく、SD09に合流しているので、自然にできた浅い溝状の落込みとも考えられる。SD07は上層より暗灰色粘土・暗灰色粘質土・

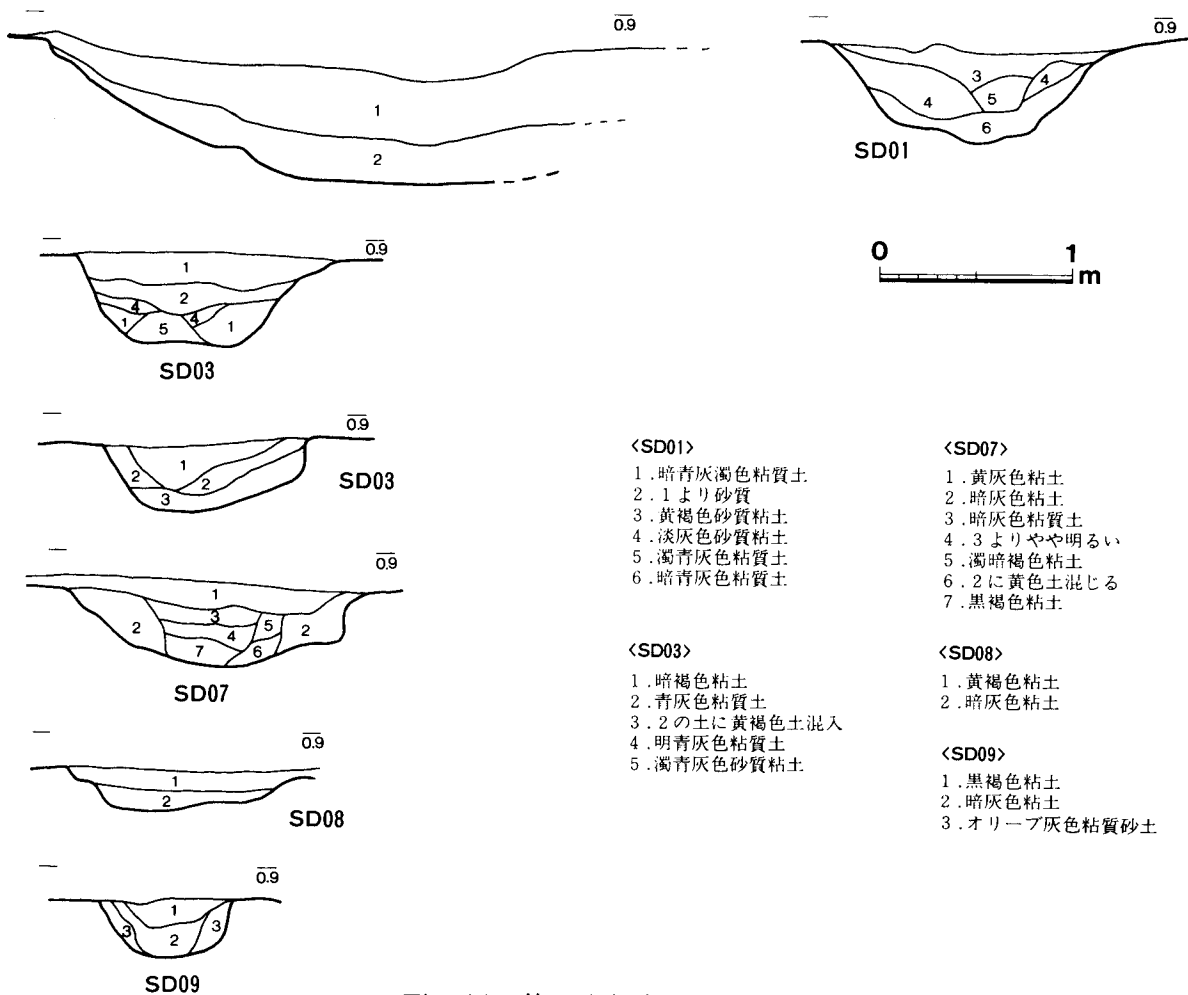


Fig. 16 第1次調査検出溝断面図

濁暗褐色粘土・黒褐色粘土であり、08は同じく暗灰色粘土である。いずれも南から北にながれるものと推定できる。SD09は深さ30cm強を測りしっかりした壁面をもってレンズ状に堆積している。上面に黒褐色粘土が堆積しているが、その土の性格は不明。

なおSD07はSD22につながると考えられ、これら一連の溝群は概ねSD05に並行しながら流れている。

第2節 第2次調査

C棟建設予定地部分のほとんどが近世の旧大徳川の流路の中で、多くの遺構はC棟東端から排水路埋設管部分の2mトレンチ部分にある。

1 掘立柱建物

SB201

調査区西側で3間×2間以上を確認した。どの辺が桁・梁かわからないが、1間が1.25~1.35m前後と狭く、ベタ柱の構造となっている。ピットは不整形なものが多く、検出できた柱根の直径も約10cmと小さい。出土遺物が皆無なので時期を特定することは困難だが、ベタ柱であることを重視すると中世に属すると考えられ、包含層出土遺物から見れば、14世紀頃と推測できよう。

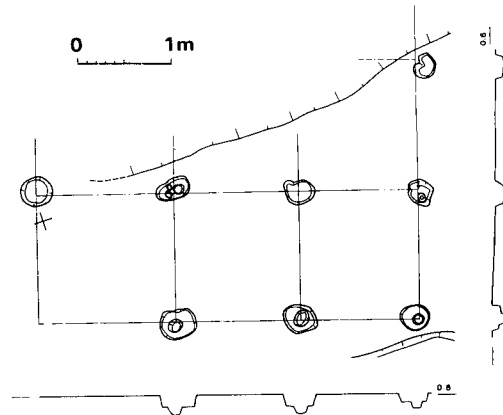


Fig. 17 SB201 実測図

2 土壇・井戸

近現代に属するものを除いたうち、8基の土壇中、井戸と思われるものは3基である。

SK23

不整形の土壇で1.9×1.65mを測る。底には凹凸が見られ、0.6~0.7mの深さがあり、壁面はなだらかに立ち上がる。底に密着して自然石が2個出土している。土壇が埋没する過程で流入した遺物がほとんどで、わずかに珠洲焼の摺り鉢片を図示し得るにすぎない。中世の遺構と考えられるが、具体的な時期を特定することはできない。

SK24

SD208と重複し、それよりも新しい遺構である。上面で直径約50cmの歪な円形を呈しているが、下に行くにしたがって正円に近くなっていく。井戸の可能性が高い。

SE201

調査区北側で検出した。すぐ隣にSE202がある。直径約1.6mの円形の掘り形に、1辺65cmの方形の井戸枠をもつ。湧水が激しく完掘していない。SE202と同じ木組みであるが横棧の間隔は広い。

SE202

1辺65cmの方形の井戸枠を取り囲むように掘り形がある。現状で深さ1.7mまで確認したが、まだ続くようである。井戸枠は、幅10cm程の縦板を2重の2段に組み、横棧を差し渡している。さらに細かく見てみる。縦板は継ぎ目をふさぐように2重にし、外側の板の四隅は斜に板をわたしている (Fig18-SE202-a 参照)。また縦板の長さは現状で1m強をはかり上の板が下の板の外側におかれている。横棧は角棒の両端が互い違いになるように切込みを入れ、それぞれの角棒を組合わせている (Fig18-

SE202-b参照)。縦板の段の継ぎ目はスパンを短くした横棧をわたしている。時期は中世と思われ、SE201と相前後して作られたと考えられる。

3 溝

遺構番号を付けたもので16本の溝を検出した。そのうち、第1次調査時で検出した溝との関係で、SD21がSD10に、SD22がSD07につながるものと思われる。SD05は調査区東端で片岸のみ検出した。

SD205・210・211

SD210と211は併行しつつ一部分合流しているの、一体の遺構として考えることができる。そしてSD210からSD205が分岐し、さらにSD205 Bが直角に分岐している。SD205と205 Bは一体となって方形にめぐっており、何らかの区画溝と思われるが、何の遺構であるのか明確にできない。埋土は上層に暗灰褐色粘質土、下層に灰色粘質土がある。調査面積の関係で何の遺構かわからない。時期は明確にしないが、奈良時代から平安時代にかけての遺構であるSD208などよりも上の面にあるので、中世以降の遺構と推測できる。

SD206・209

SD206は、SD208と重複し幅1.5m前後を測る。これとほぼ平行するようにSD209がある。SD206は東端でSD208の落込みと一体となっており、溝の境界が不明確になっていく。溝底の埋土は共通し、暗灰色粘質土である。それより上位の土は人為的に埋められたものではないかと推定される。古代の土器が出土している。

SD208

調査区西にあり旧大徳川と一部分重複している。溝というよりも落込みである。その重複する部分にしがらみと思われる木組みを検出した。木材はすべて長

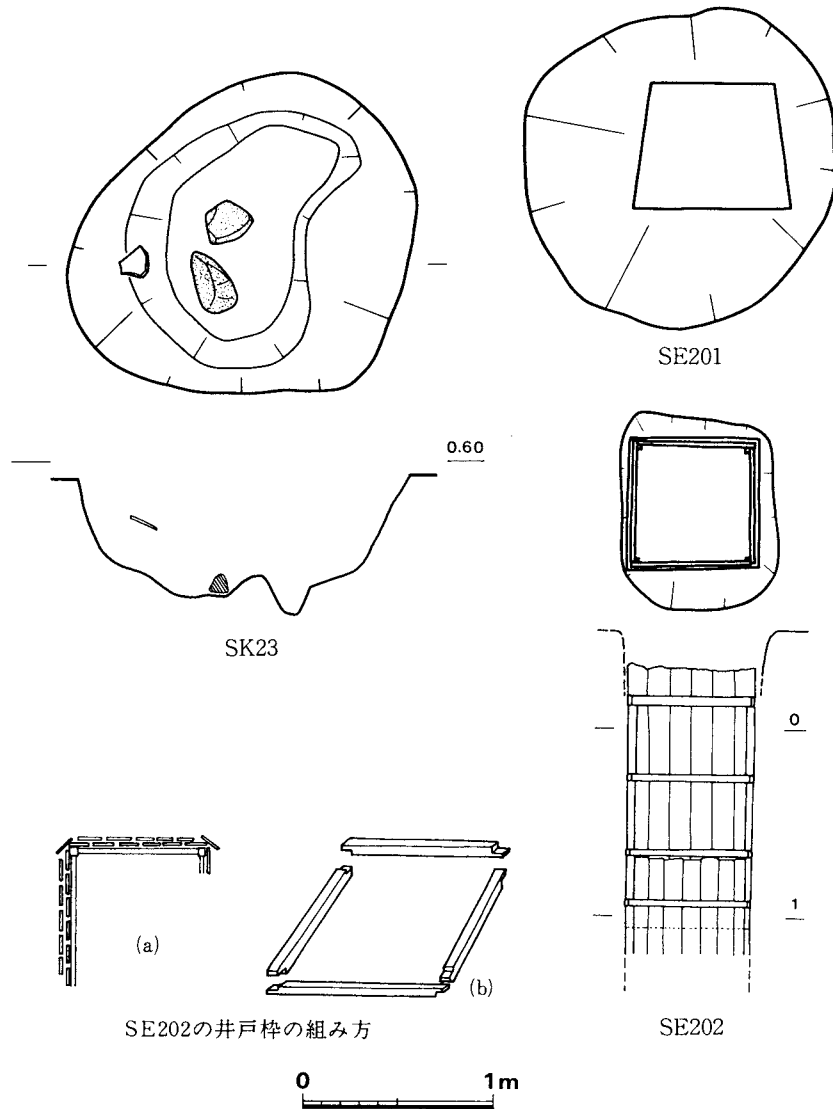


Fig. 18 第2次調査検出土坑・井戸

さ2 m強の割り材を用い、まず縦方向に約20~30cm間隔に打込んだ後、同じような部材で横に掛け渡ししているものの、単に重ね合わせるのみで頑丈に組合わせてない。おそらく縄などで緊縛していたと考えられるが、その痕跡は見出せなかった。本報告では一応しがらみとしておくが、よく見られるものとは異なる。土器量は比較的多く出土している。8世紀後半から9世紀後半にかかる土器だが、8世紀代の土器を中心とするようである。

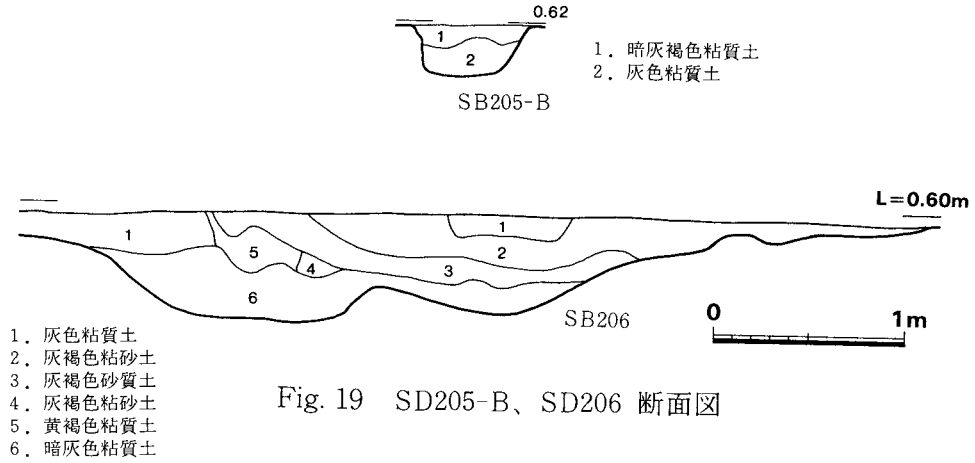


Fig. 19 SD205-B、SD206 断面図

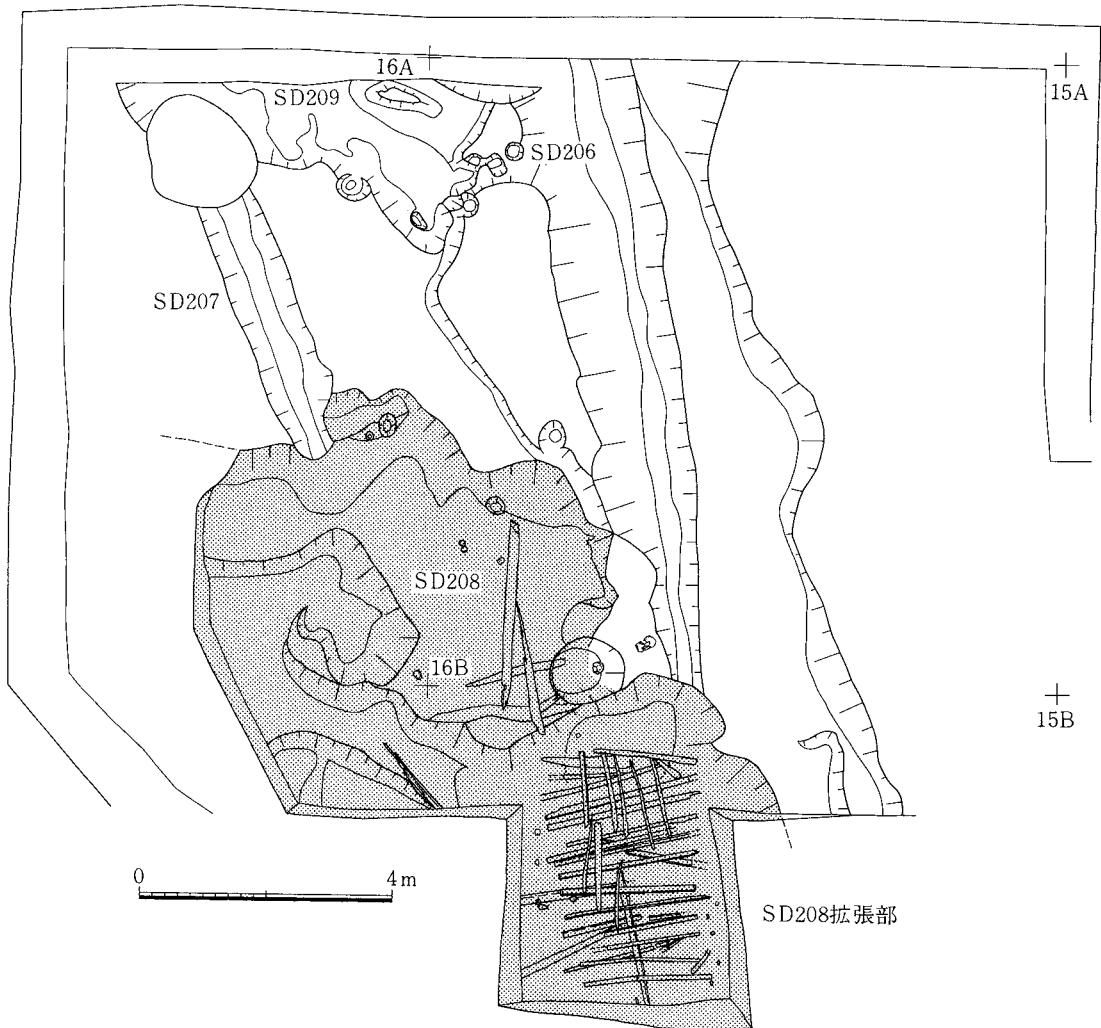


Fig. 20 SD208 実測図

第3節 第3次調査

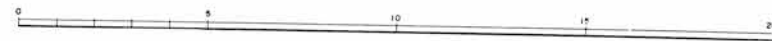


Fig. 21 第3次調査平面図(1/200)

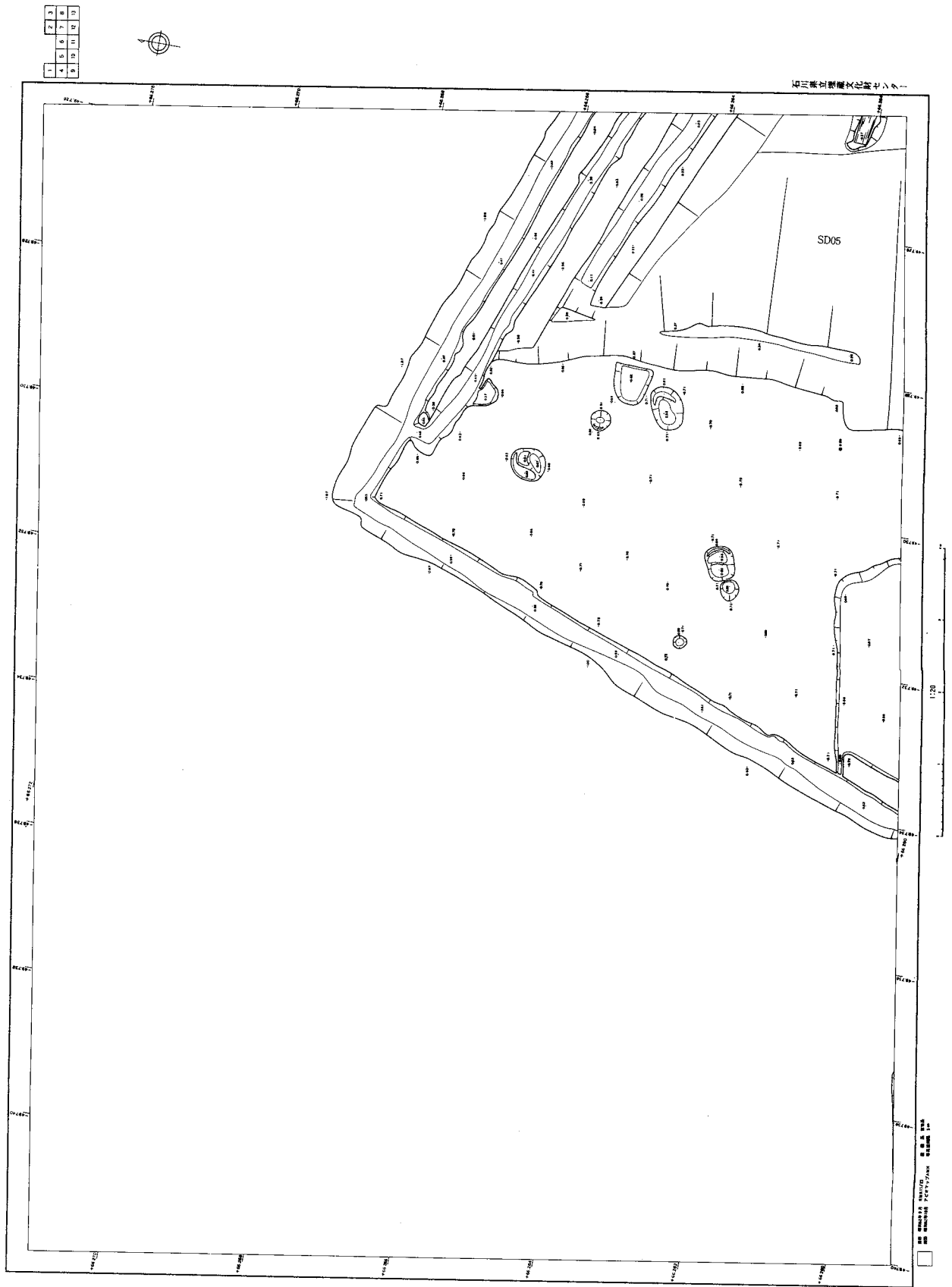


Fig. 23 第3次調査平面図(その2)

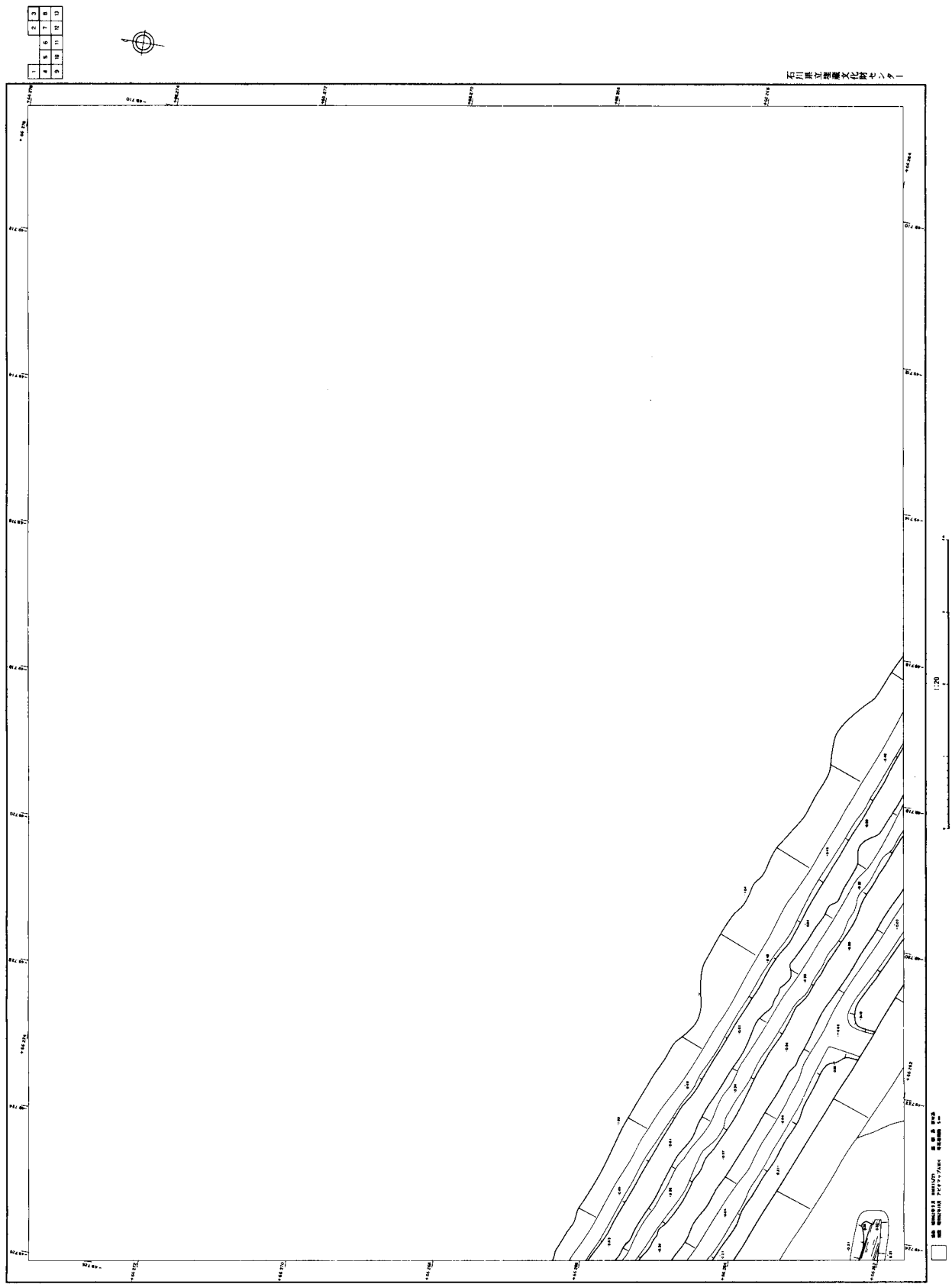


Fig. 24 第3次調査平面図(その3)



Fig. 25 第3次調査平面図(その4)

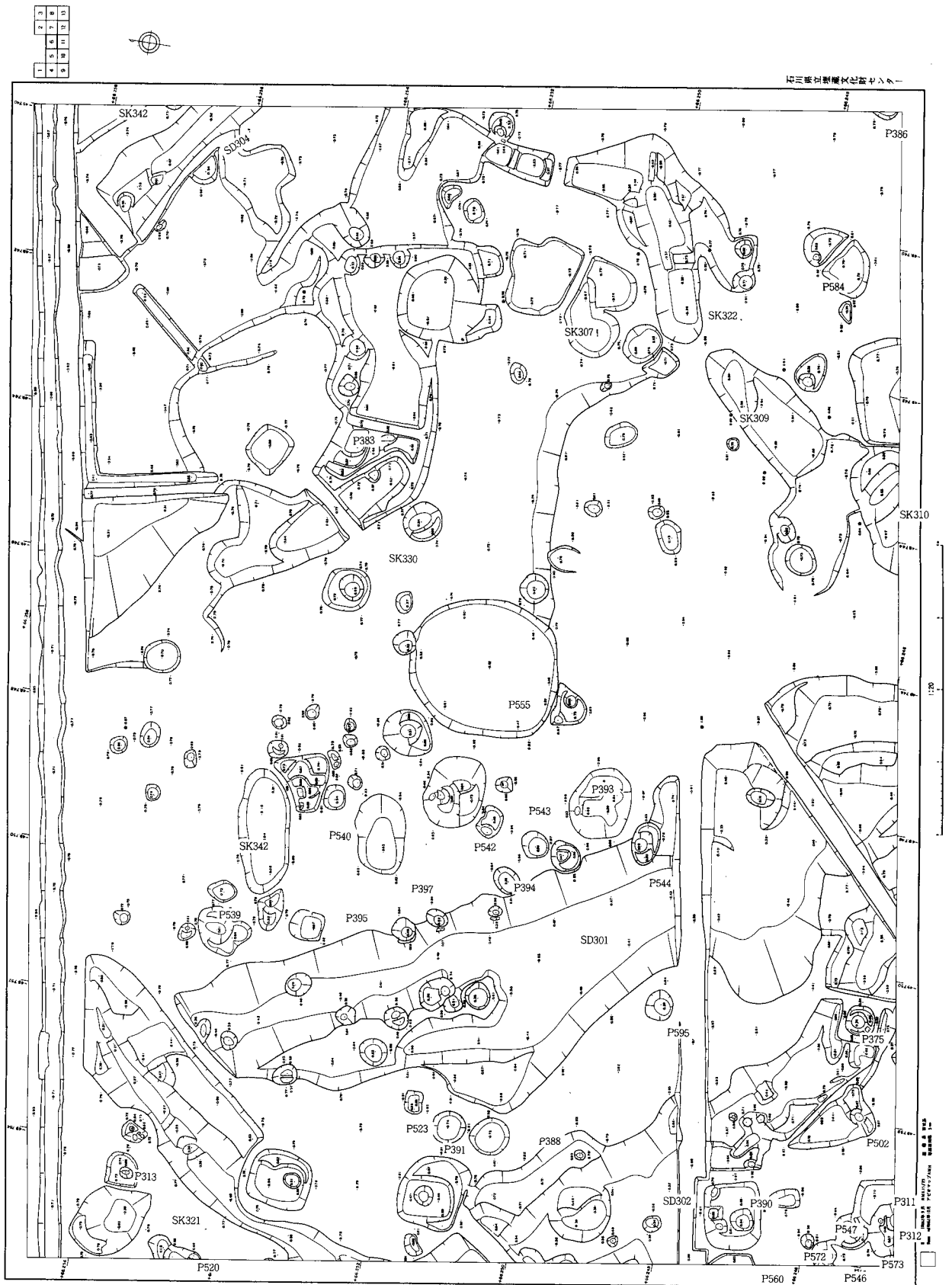


Fig. 27 第3次調査平面図(その6)



Fig. 28 第3次調査平面図(その7)

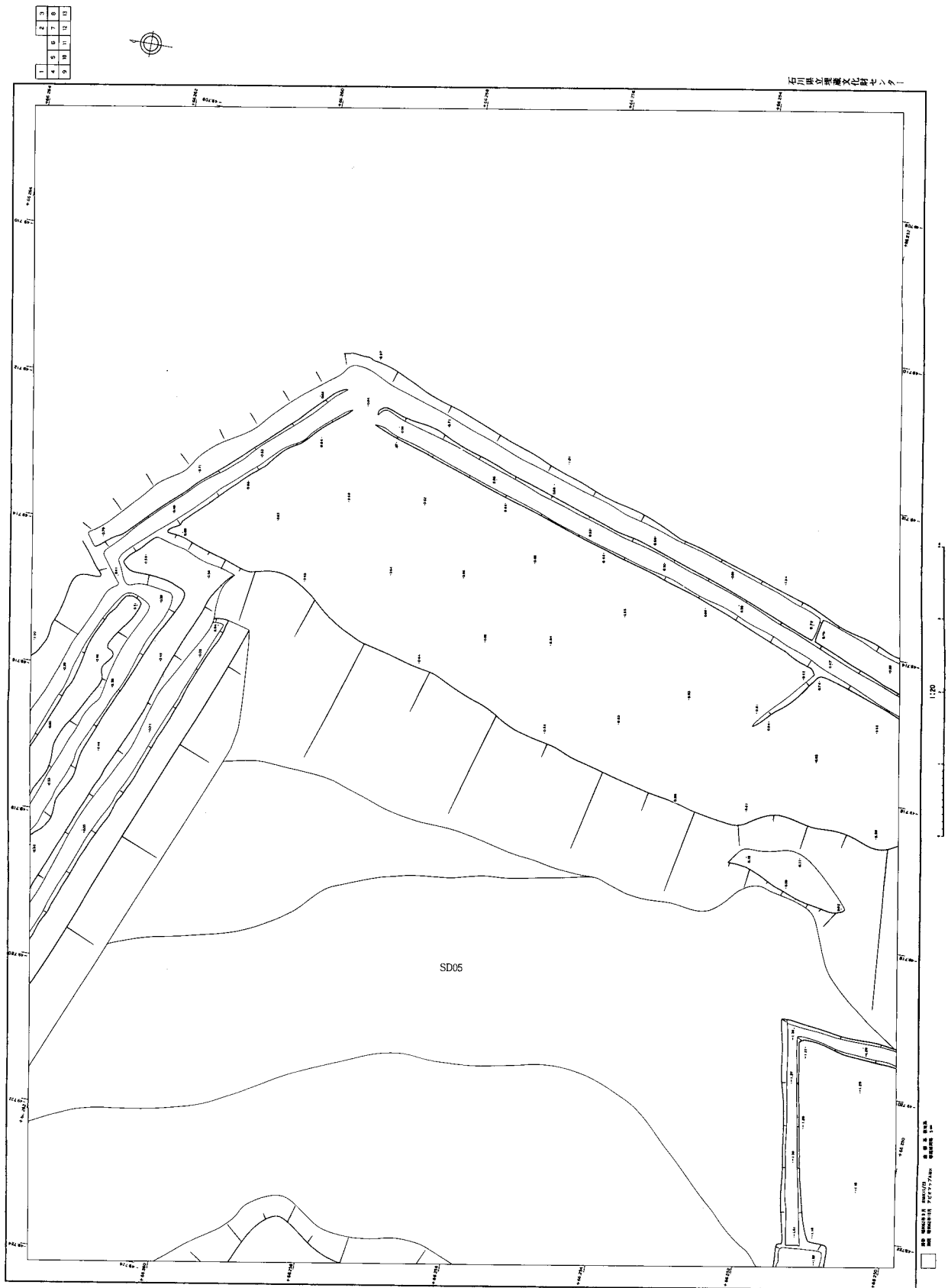


Fig. 29 第3次調査平面図(その8)

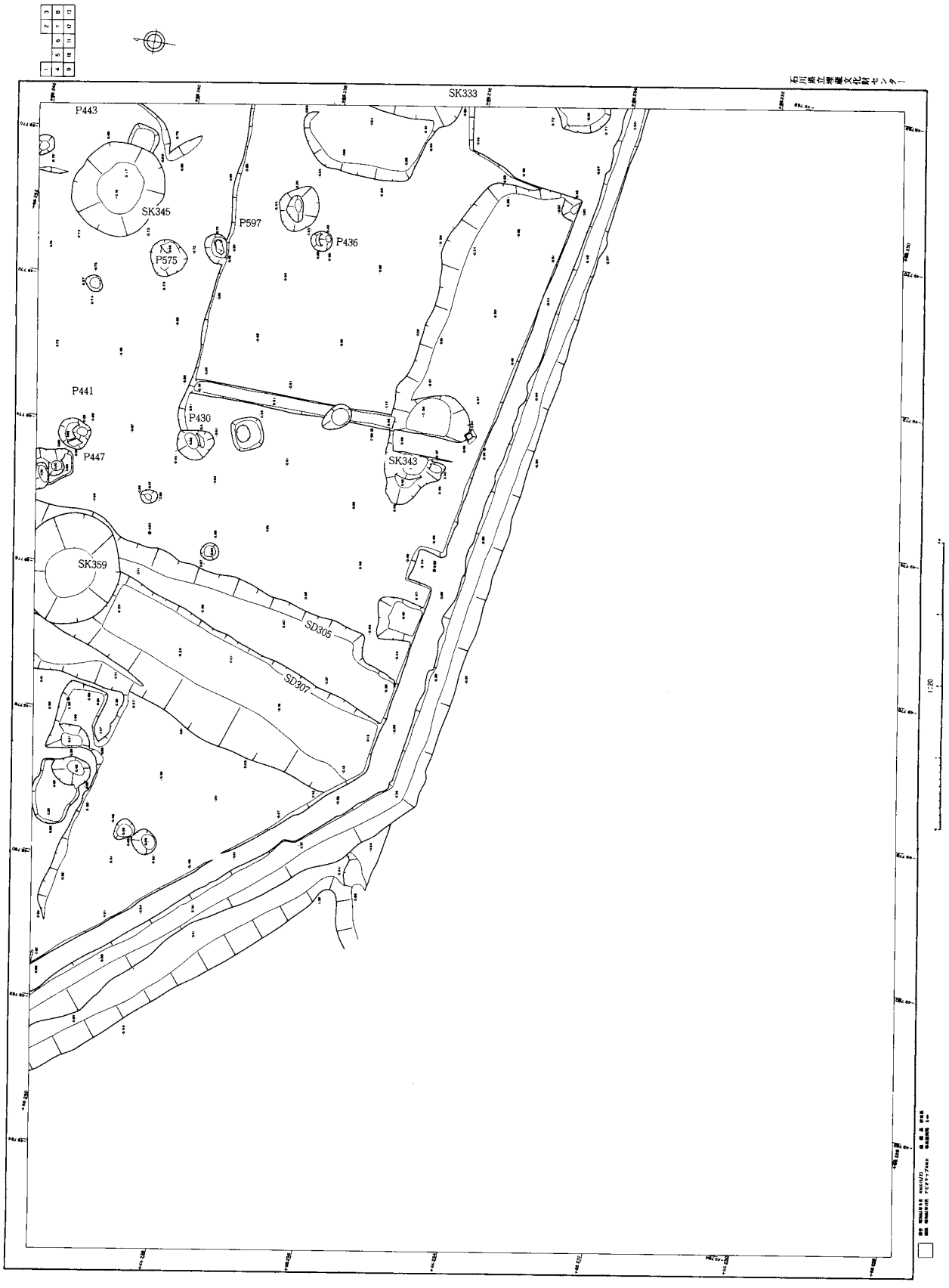


Fig. 30 第3次調査平面図(その9)

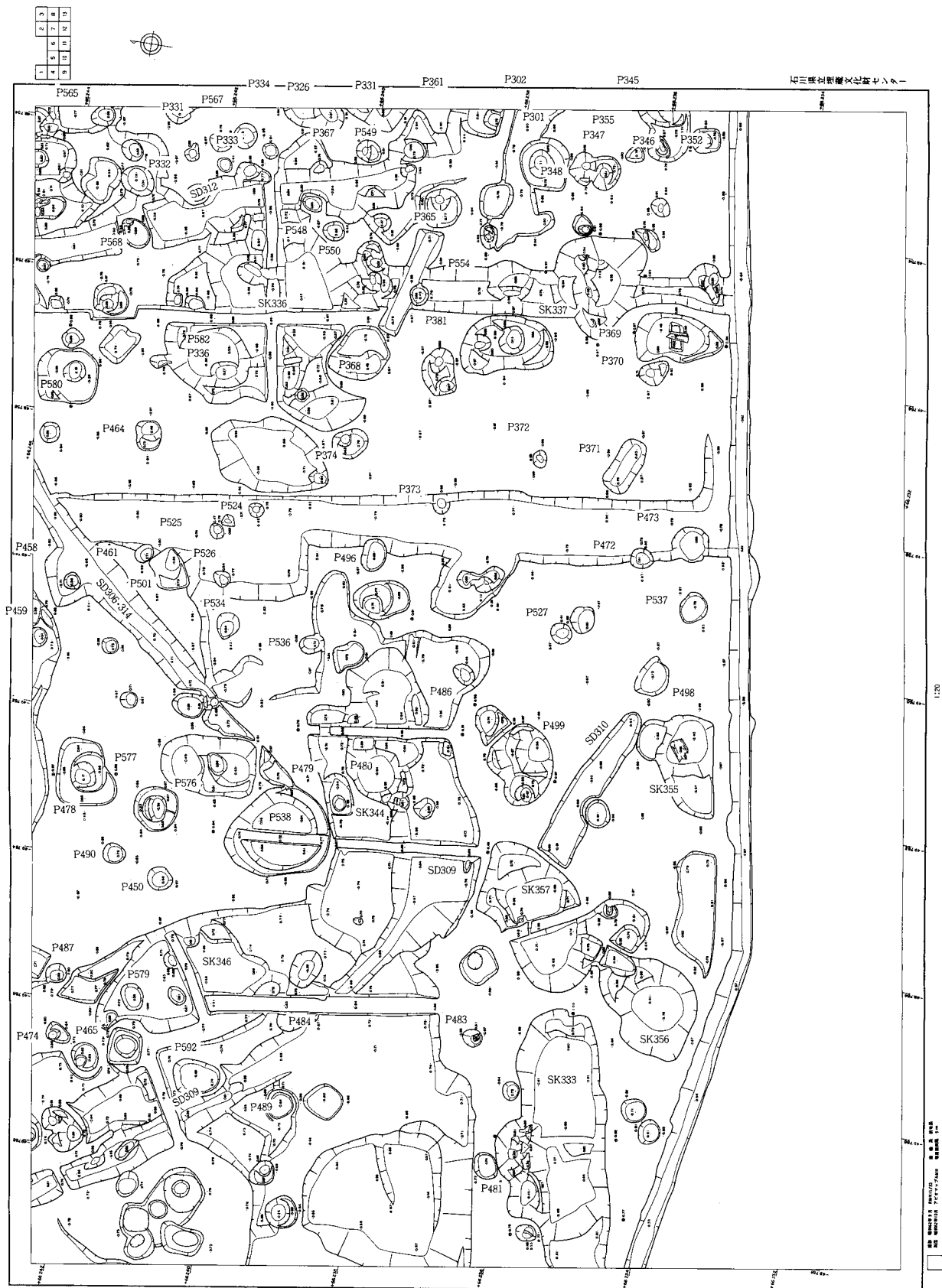


Fig. 31 第3次調査平面図(その10)

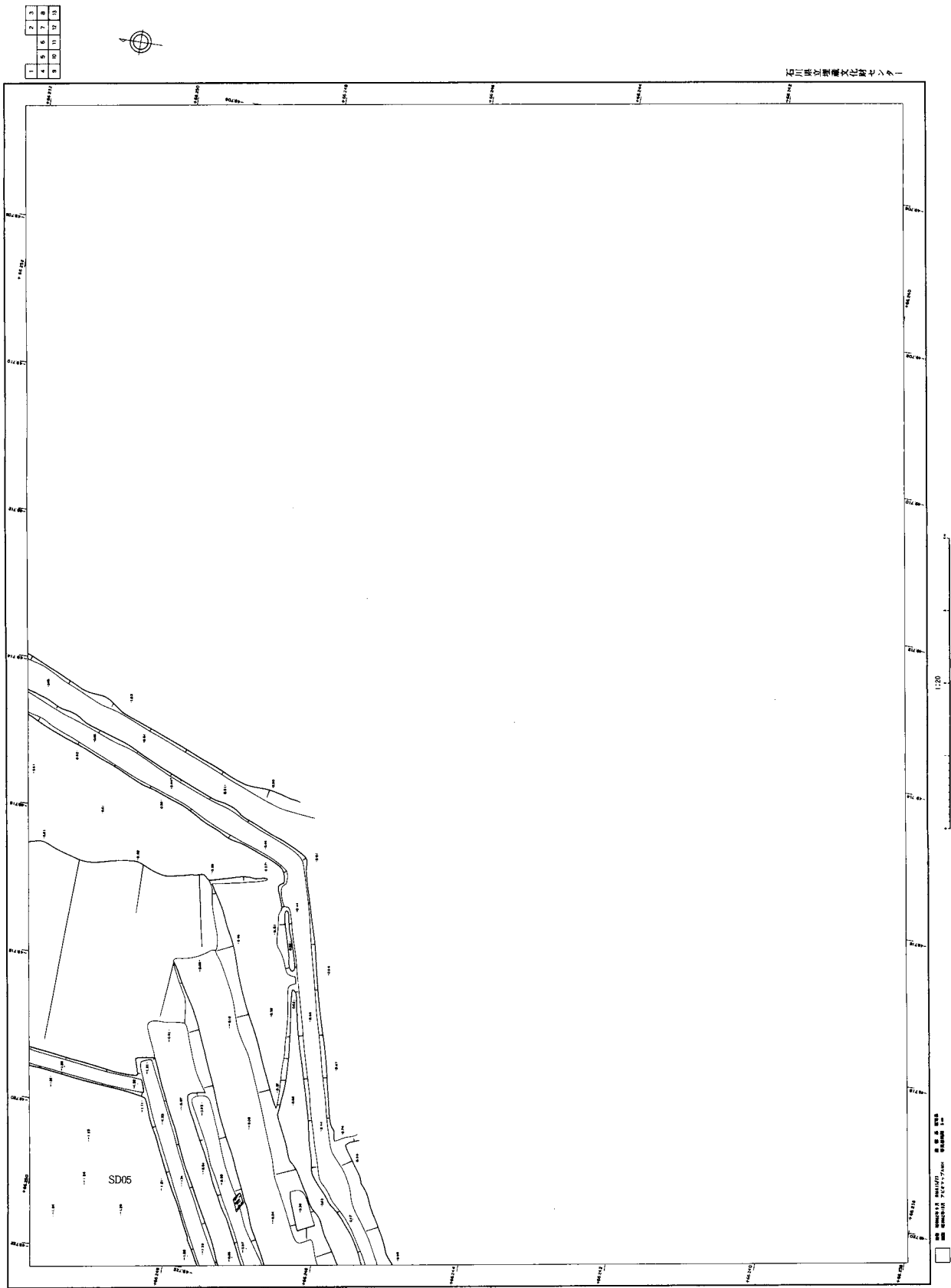


Fig. 34 第3次調査平面図(その13)

1 掘立柱建物・柵列

今回の調査では、弥生時代後期末葉のものと、8世紀後半のものとの二時期の掘立柱建物を検出した。

SB301

8 I～8 J区にかけてある桁行6間、梁行2間の掘立柱建物である。建物の主軸は真北より $N-5^{\circ}-W$ でほぼ磁北方向に建っている。各東西辺長 $5.4 \cdot 5.5$ m、各南北辺長 $13.2 \cdot 13.3$ mを測る。SD301と重複する部分に柱穴が残されていたはずだが、当初の発掘ミスで確認できなかった。掘り方はいずれも大きく、概ね一辺 0.9 m前後を測り方形を呈する。基本的に柱痕を残している。部分的に確認できなかったものもあるが、柱がそのまま遺存していたものもあった(ピット315)。柱痕の底のレベルは浅いもので標高 0.8 m、深いもので標高 0.65 mと多少の差はあるが、ほぼ標高 0.7 m強に集中するようである。柱間はTab. 1に示すとおりである。北端の桁の1間の長さが 1.8 mと狭くなっており、廂の可能性もあろうか。柱痕は直径 $20 \sim 30$ cmでピット315では木柱の径 20 cmであった。西側の辺の北から3つめのピット390で須恵器坏蓋が掘り方内で外から内の斜めに裏向きで出土した。ちょうど柱列の中央にあたり、地鎮的なものと考えられる。この須恵器の年代は、8世紀後半で、SB01の建築年代を示す。

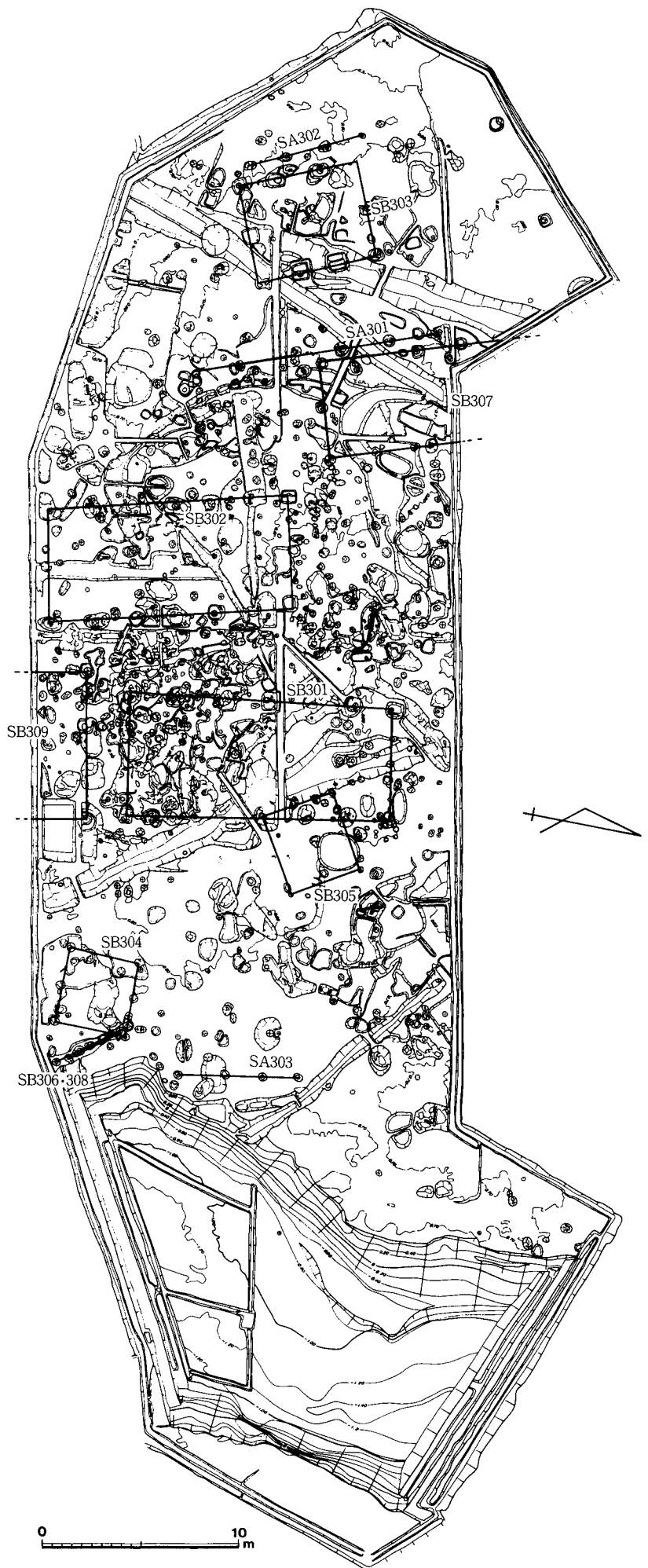


Fig. 35 第3次調査掘立柱建物配置図

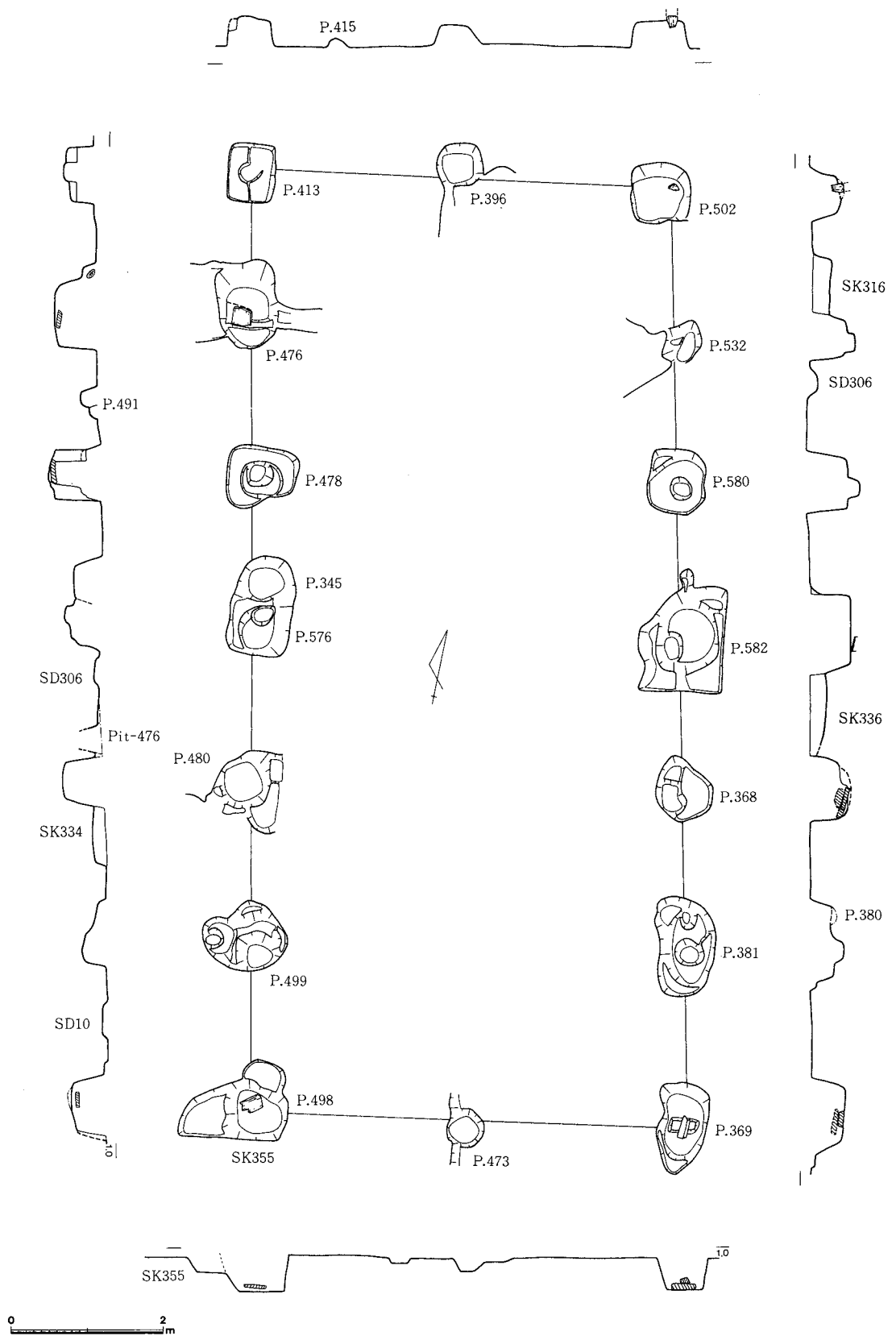


Fig. 37 掘立柱建物(SB302)実測図(2)

SB302

9 I 区南端～9 K 区北端にかけてある桁行 6 間、梁行 2 間の掘立柱建物である。建物の主軸は N-11°-W である。各東西辺長 5.4・5.6m、各南北辺長 12.5・12.3m を測り、SB301 に匹敵する大型掘立柱建物である。この建物の柱の掘り方も大きく一辺 0.9m 近くある方形を呈するものの、梁行の中心柱の掘り方は一回り小さい。この建物は、礎板の使用が顕著である。妻側には礎板がなく、西側の桁でピット 368、369、582、東側でピット 476、478、498 に礎板が置かれており、全てのピットにあるわけではない。また、その設置に規則性をもっているわけでもない。つまり、本来は全てに礎板があったと考えられるが、遺存環境の差で残されたものと、そうならなかったもののができたと考えたい。これは、SB304 で良好に柱材が残されていたにもかかわらず 6ヶ所の柱穴で 4 本しか柱が出土しなかったことから傍証できよう。礎板は建築部材を再利用したもので、その設置は丁寧である。ピット 368 では三つの礎板が柱の周りを根固めするように配置されていたり、ピット 369 では十字に交差させているが、多くは、底に平らに置く方法をとっている。

柱材はピット 502 で出土し直径 20cm 程度である。平面的に確認した柱痕の直径は 30cm 前後で SB301 と同じである。ピットの底は多少レベル差がみられ標高 0.2～0.4m である。しかし、桁の中心の柱底は標高 0.5m と 1 段浅くなっているため、桁側の柱の構造と同じであるか疑問視される。柱間は Tab.2 に示すとおりである。なお SB301 と同じ位置の柱穴で須恵器坏蓋が同じ埋納方法で出土している。やはり 8 世紀後半である。須恵器の年代およびこの類似点から、SB301 と 302 はそれぞれ建物の軸を多少異なるものの、同時期に建てられていたと考えられる。

梁（北）	2.65	2.75	南	2.8	2.7	
桁（西）	1.8	2.2	2.3	2.2	2.3	2.4
桁（東）	1.9	2.3	—	—	—	2.5

Tab. 1 SB301 柱間一覧表（梁の数値は西から東へ、桁は北から南へ、単位は m）

梁（北）	2.75	2.7	南	2.8	2.8	
桁（西）	1.9	2.1	2.0	2.2	2.2	2.1
桁（東）	1.9	2.0	2.1	2.0	2.1	2.2

Tab. 2 SB302 柱間一覧表（梁の数値は西から東へ、桁は北から南へ、単位は m）

SB303

11 J 杭を中心にある桁行 3 間、梁行 2 間の掘立柱建物である。建物の主軸は N-19°-W で、SD307 を切っている。南東コーナーの柱が SD307 の埋土に切りこんで作られており、また北西コーナーの柱も確認することができなかった。東西で 4.7・4.9m、南北で 6.2・6.2m を測る。建物の西 1m に小さな柵列（SA302）が附属している。掘り方は SB301 と同様方形を呈し、0.8m 前後を測る。ピット 547 で柱材がそのまま出土したが、あとは平面的に柱痕を確認した。概ね径 30cm 程度の柱が使われていた。建物の西側は地山の上に建てられているので比較的しっかりしているものの、東側は SD305 の埋土を掘り込んで柱を建てている。そのために他のピットよりも若干深めに掘り形を掘削しているが礎板等の施設はない。柱穴からの土器の出土はないが、SD307 よりも新しいことから、8 世紀後半と思われ、SB301・302 とともに建物群を構成していたと考えられる。

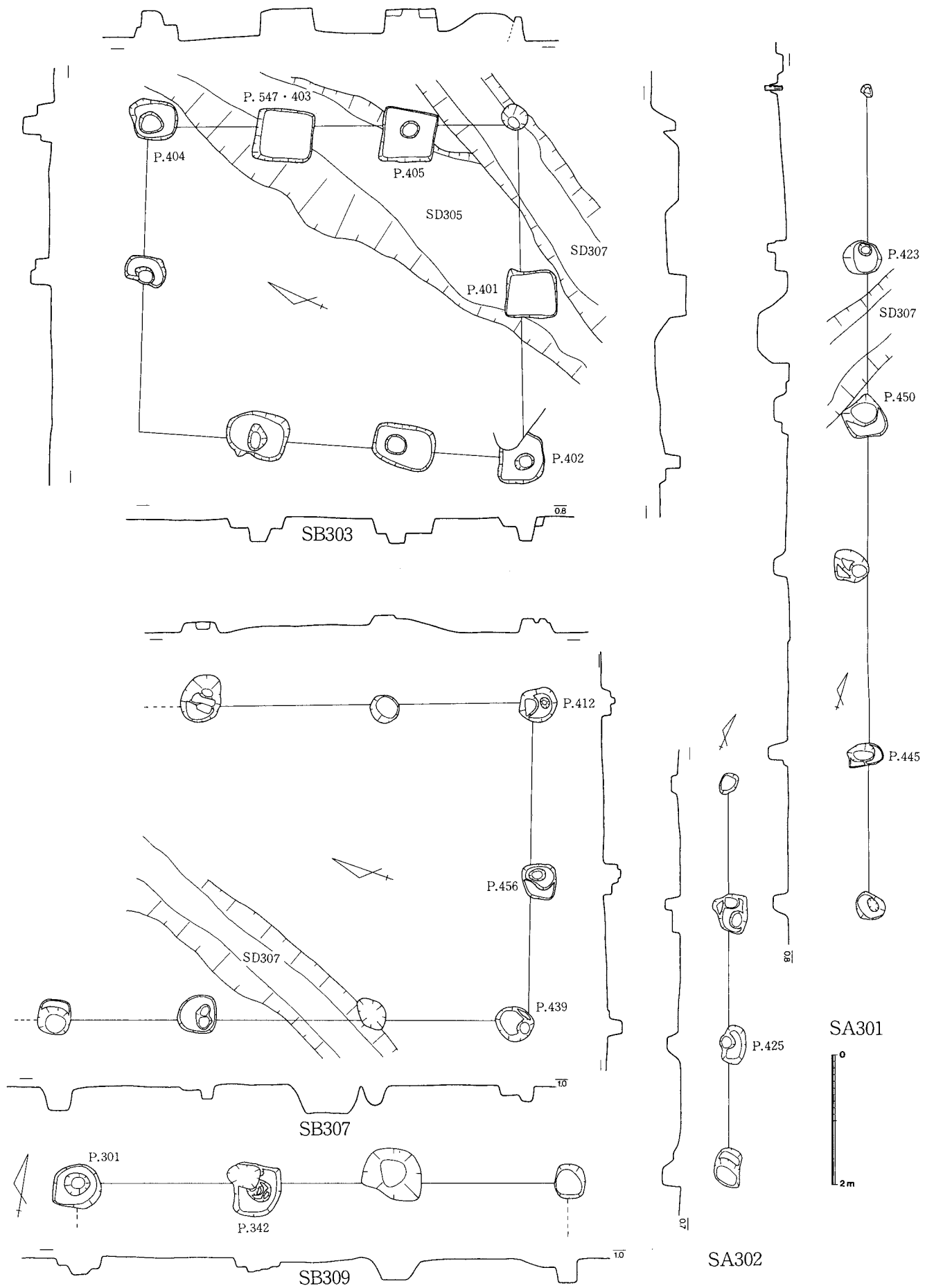


Fig. 38 掘立柱建物・柱列 実測図(3)

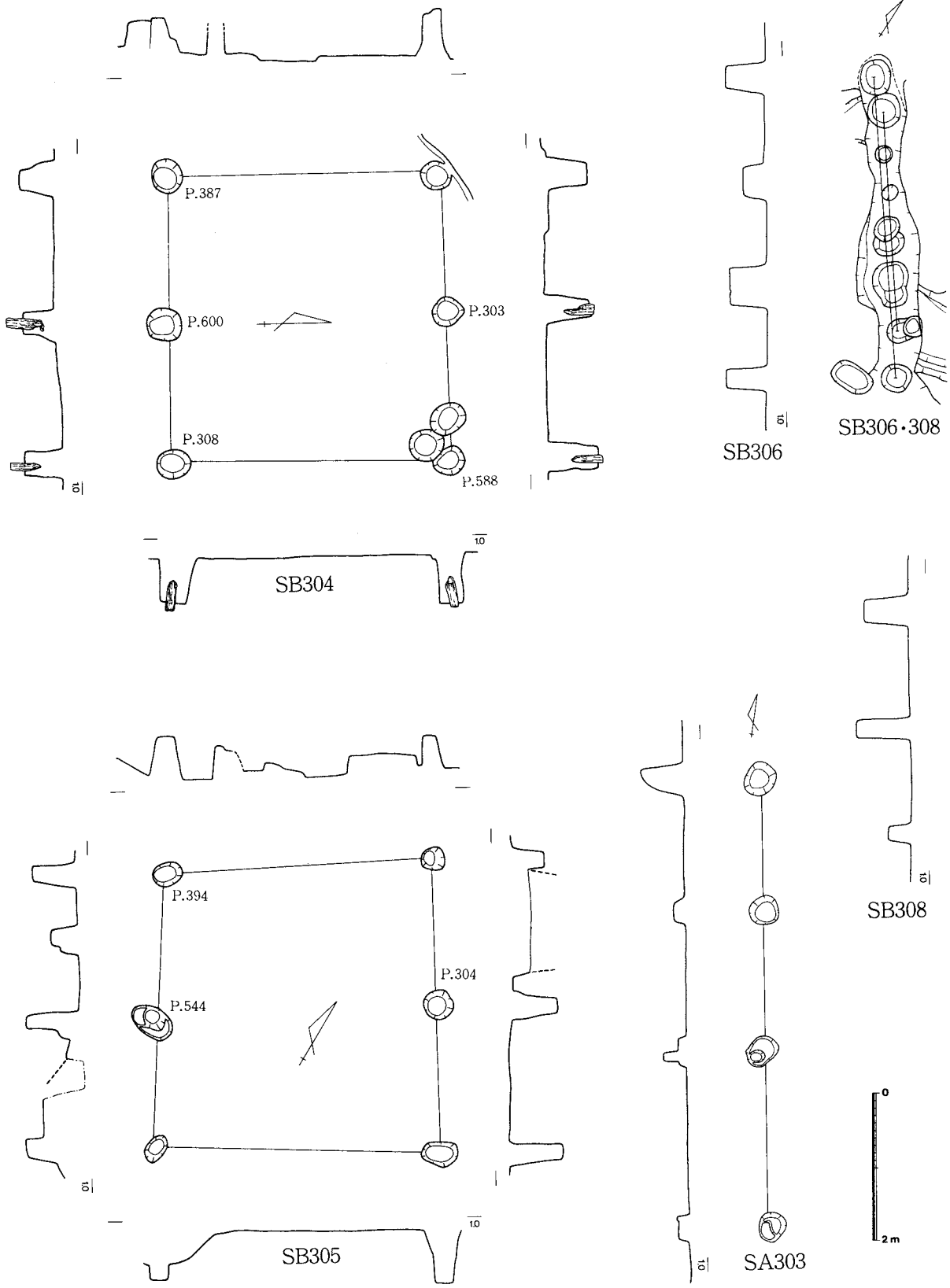


Fig. 39 掘立柱建物・柱列実測図(4)

梁（北）	(2.3)	2.4	桁（西）	(2.0)	2.2	2.0
(南)	2.5	2.4	(東)	2.1	2.0	2.1

Tab. 3 SB303柱間一覧表（梁の数値は西から東へ、桁は北から南へ、単位はm）

SB304

7 J～7 K区にかけてある桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。高床倉庫と考えられ、SB306・308と切り合っている。平面的切り合い関係を把握できなかったものの、後述するが、これらの中でSB304が最も新しいと判断した。建物の主軸は磁北にほぼ直交し、南北3.65・3.7m、東西3.95mを測る。柱材の遺存状態は非常によく6カ所のピットのうち4カ所で出土した。ピット588、303、600、308である。柱の底のレベルは標高0.5～0.6m近くで、現地表面より約40cm強マイナスとかなり深い。掘り方は不正円形を呈し、標高40cm程度まで掘削され柱材を置いている。柱材は掘り方底より下にめり込んでいる。柱材は直径20cm未満のもので、あまり加工を施していない。柱材の底は平らである。掘り方上面には地山質の土が入り、人為的に埋められた状態で、当時の生活面近くであると考えられる。建物廃棄後、柱は切られた状態ではなく、自然崩壊して柱穴の凹みを整地したものである。南側の柱列は古府クルビ期の浅い自然の落ち込みと重複しており、この堆積土を除去した時にピットを検出できたので、それ以前ということになる。なお、弥生後期から古墳前期の北陸の高床倉庫には布掘りがよく見られるものの、本例では検出されなかった。

梁（西）	3.65	桁（北）	2.0	1.95
(東)	3.7	(南)	1.90	2.05

Tab. 4 SB304柱間一覧表（桁の数値は西から東へ、単位はm）

SB305

8 J杭を中心にある桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。SB304とほぼ同規模で、高床倉庫と考えられる。SD301と切り合っているが、新旧の関係を平面的に捉えることができなかった。南北3.95・3.75m、東西3.8・3.6mを測る。掘り方は不正円形を呈しSB304と同程度の深さがある。掘り方は検出面で直径30cm強で、おそらく柱痕はSB304と同程度と考えられる。正確な時期は不明だが、SB304・306・308とおなじような時期と予想される。

梁（西）	3.8	桁（北）	2.0	1.95
(東)	3.6	(南)	2.0	1.75

Tab. 5 SB305柱間一覧表（桁の数値は西から東へ、単位はm）

SB306・308

いずれもSD05に片方の桁を流されているので、全容は不明である。布掘り内にピットを掘り込んでいるタイプである。この溝は地山質の土によって埋め戻されていたのでSB304、SK311、312掘削時に全く気が付かずにいたものが、調査最終日にだめ押ししたところ検出できたものである。したがって、同時平面的に確認したわけではないものの、SB306、308の存在がSB304精査時にわからなかったことから、SB306・308が最も古いと考えられる。

SB306は現状で柱間3間を確認できた。ピットの底のレベルは標高0.3～0.4m強で多少のばらつきが

見られるものの、SB304よりかなり深い。SB308とSB306は布掘りを共有している。SB306の現状での柱間は2間だが、布掘りが更に伸びることから、あともう1間伸びるかもしれない。柱の状態は両者ともよく似ている。時期の前後関係は切り合いがほとんど認められないのでわからない。ともにSD05の岸際に建てられていた。少なくとも、どちらかが建て替えであることは明らかである。これらの柱列に接するSD05の形状は、急角度に曲りあかとも抉られたような状況にある。SD05の下層は砂層を主とし、激しい流水状態であったと考えられ、この時に岸が崩れてSB306・308が流されたと考えられる。さらに、その建替えがSB304であろう。

以上より、月影頃の掘立柱建物と考えられる。

SB307

9～10 I 区で検出し、建物は更に北側に伸びる。N-16°-Wの主軸を持ち、現状で梁行2間、桁行3間を確認した。SD307と重複しており、それより古いようである。掘り方は歪つで小さな方形を呈し、柱痕は20cm弱である。柱穴が小さいことからSB301のような大型の建物ではないと思われる。遺物の出土がないので時期決定に明確さを欠くものの、SD307より古いことから8世紀前半頃と思われる。なお、西側50cmにはほぼ併行するように柵列SA301を確認した。

梁（南）	2.3	2.5	桁（西）	2.3	2.5	2.3
			（東）	—	2.6	2.4

Tab. 6 S B 307柱間一覧表（桁の数値は北から南へ、単位はm）

SB309

SB301南2mで検出した、桁行1間以上、梁行4間の掘立柱建物である。建物の主軸はN-9°-Wで、他の古代掘立柱建物群と若干異なり、SB301に近い主軸となっている。柱間は、西より、2.55・2.3・2.6mを測る。柱穴の掘り方は、50～70cmの歪な方形を呈している。直接的に年代を示す遺物の出土はないが、他の古代の掘立柱建物とはほぼ同時期（8世紀後半頃）のものであろう。

SA301

SB307の0.5m西側にあり、柱間5間を確認した。主軸はSB307と同じで、それに付属するものである。掘り方は不整形で、大きさもばらつきがある。北端のピットは柱材が残されており、直径10cm強ほどのものである。古代の掘立柱建物群と同じ時期である。

SA302

SB303から1m西側にある。掘り方は小さく径30cmほどの不正円形を呈する。柱間は3間で終わるようである。北から1.9、2.1、2.0mである。掘り方から小さな堀と考えられる。ただし、この遺構は調査中には気付かず、図上操作で確認した遺構である。時期ははっきりしないが、位置関係からSB303と同時期であろう。

SA303

SD05西岸にある。掘り方は40～50cmの不正円形を呈している。柱間は3間確認し、北から1.8、1.8、2.4mである。この遺構も調査中には気付かず、図上操作で確認した遺構である。時期は不明。

2 土 塚

SK301

8 K 杭を中心に検出した。南側が調査区外に伸びているので全容は分からない。現状で方形を呈し、

南北で3.4m（現存長）、東西3.2m、深さ0.42mを測る。底面は平坦で凹凸が少なく土層の堆積も単純である。底には粘性の強い灰色粘土が水平に堆積し、その上層は酸化した土層である。土壇上面には、地山粘土ブロックを含んだ淡灰色粘質土がみられ埋立土と考えられる。土器の出土はほとんど見られず、須恵器および古式土師器が遺物箱で約0.5箱出土しているのみである。須恵器は坏を中心に甕など小破片となっている。下2層は冠水した状況を示しており、上層が酸化していることから一定期間干上がり、その後人為的に埋められたことが分かる。少なくとも出土遺物から、8世紀中葉には土壇が埋められていることがわかる。

SK 302

9 I 区で検出した。南西隅がSK318に切られている。土壇北側が調査区外に伸びているので全容は分からない。南西隅は角をなし、南東側は円弧を描く。現状で南北1.2m、東西3.15mを測る。遺物は0.5箱を数え、月影形甕、布留形甕、高坏、二重口縁壺等で、古府クルビ期と考えられる。

SK 303

8 K 区でSK301に西接する。長楕円形を呈し南北1.2m、東西1.5mを測る。南壁中央に約50cmのピット状の落

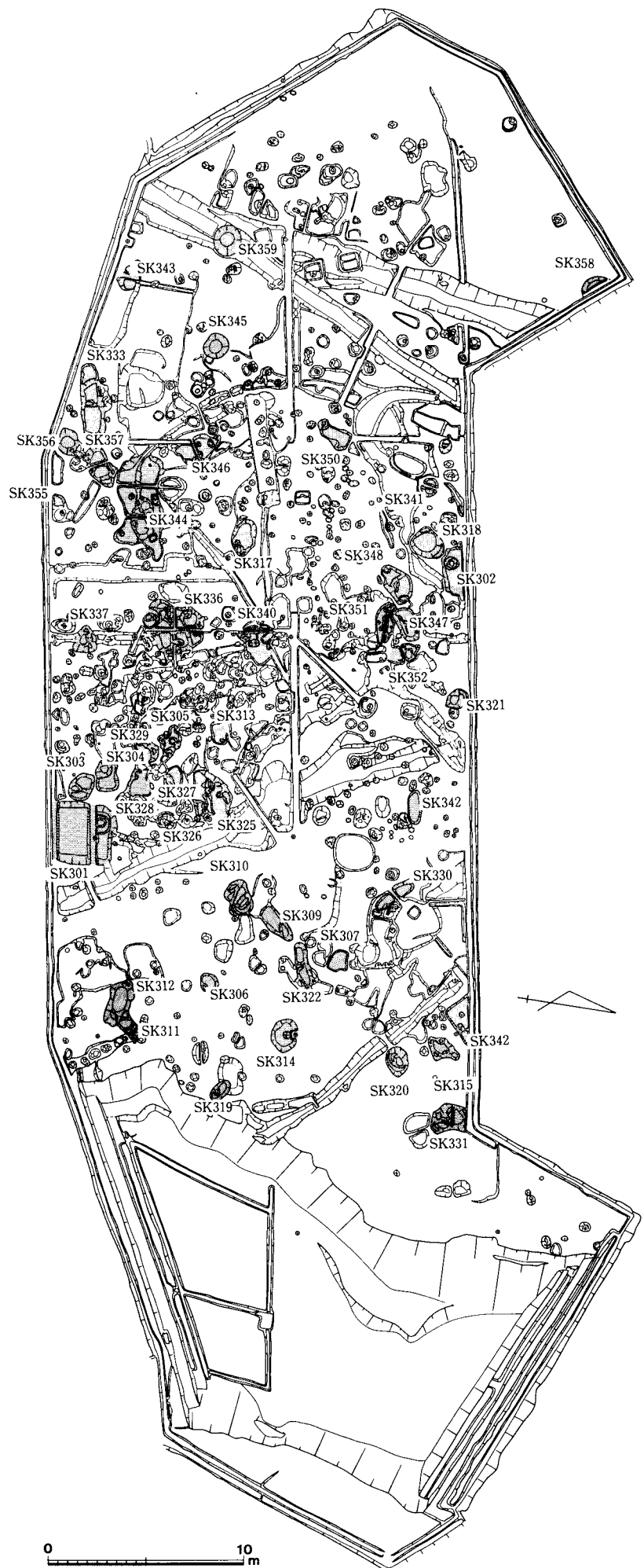
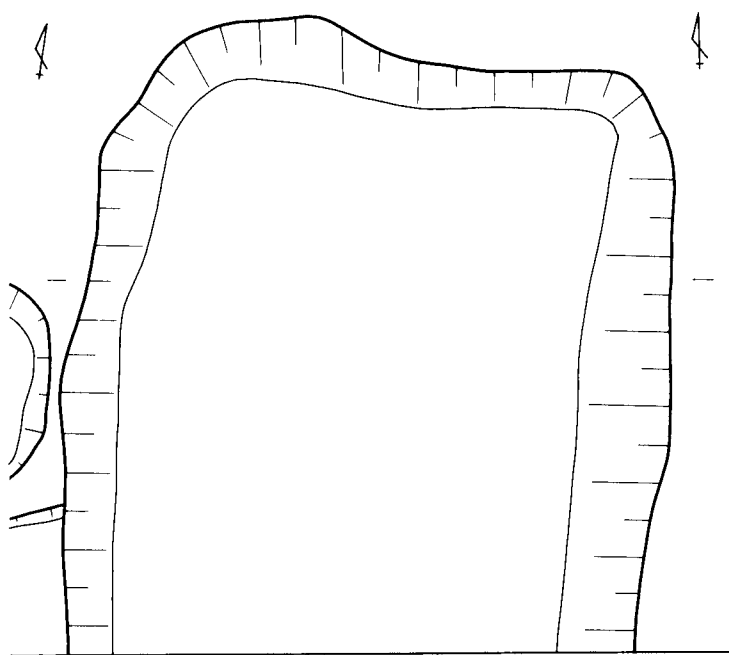
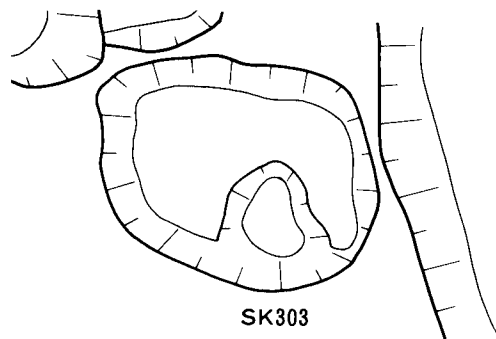


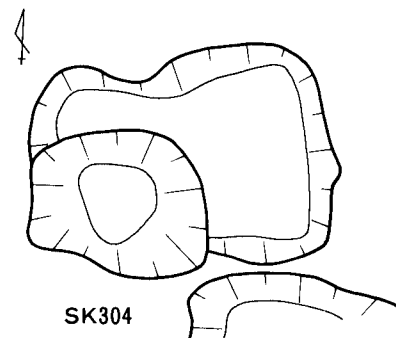
Fig. 40 第3次調査 土壇配置図



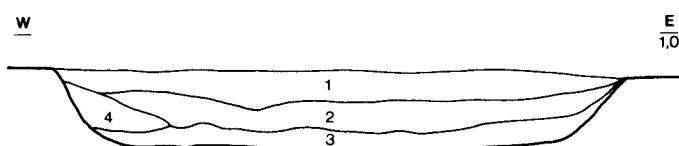
SK301



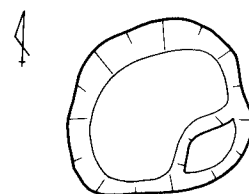
SK303



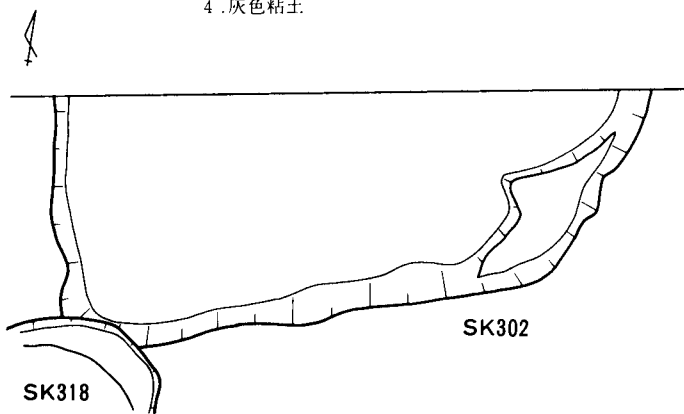
SK304



1. 淡灰色粘質土(白色粘土ブロック含む)
2. 灰色粘土(酸化著るし)
3. 2の土に地山ブロック多
4. 灰色粘土

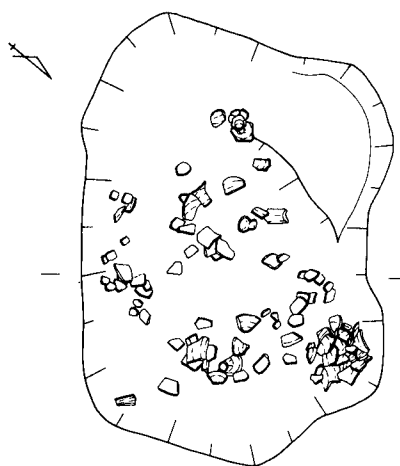


SK306



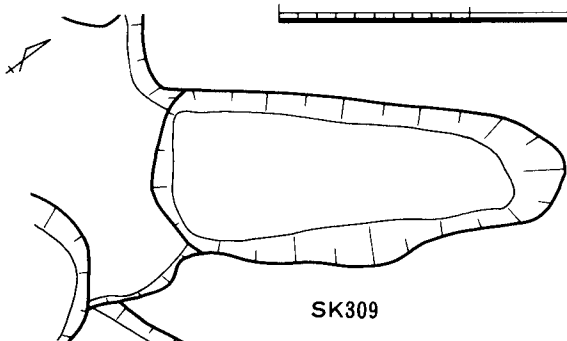
SK302

SK318



1. 暗灰色粘質土(酸化著るし)
2. 1の土で酸化していない
3. 黒灰色粘質土炭混り

SK310



SK309

Fig. 41 SK301~310 実測図

込みが見られる。遺物は土壇南側を中心に出土している。遺物は小破片となっており、甕・壺及び被熱した砥石片が遺物箱で0,2箱出土した。時期のわかる土器は少ないが、古府クルビ期を前後する時期と思われる。

SK 304

8 J区でSK303のすぐ北側に位置する。南西に歪んだ方形の柱穴（SB309の柱穴）に切られて、SK304がある。遺物はSK304からのみ出土している。埋土は暗褐色粘質土でピットは地山ブロックを含んだ淡褐色粘質土である。甕・高坏・蓋があり、蓋が完形である他は破片となっている。蓋は上面近くで仰向けの状態で、その他の土器片も土壇中心に向かって下がるように出土している。これらの遺物は遺棄されたものである。

SK 306

7 J区で検出した。直径約0,9mの不正円形で、掘り鉢状を呈する。埋土は、単一層で暗灰色粘質土である。遺物の出土は見られず、時期はわからない。

SK 309

7 J区で検出した。南北2,15m、東西0,9mを測り、隅丸の長方形を呈する。SK310に隣接し部分的に浅い落込みを共有している。すなわち、両土壇の間に浅い落込みがあり、これら三者は有機的な関連が認められる。SK309の埋土は基本的に上下2層に分れ、上層は酸化の激しい暗灰色粘質土、下層は炭混じりの黒灰色粘質土である。北側は更に暗灰色粘土が下層にある。これはレベル的にも約10cm下がっているため、本土壇の第1次堆積と思われる。他の土壇でもそうだが、炭混じりの層あるいは炭層が見られるものが多くあり、共通する堆積要因と考えられる。

土器は壺、甕、高坏、鉢で、遺物箱で1箱出土したが、完形になるものはない。いずれも上下両層から出土し破棄された状態である。土器は古府クルビから高島期の時期で、層位による土器型式の違いは認め難い。

SK 310

7 J区で検出し、SK309同様、一部分浅い落込みを共有している。歪な方形を呈し、南北2,3m、幅1,5mを測る。底には若干の凹凸が見られる。土層はSK309と同じで、上下2層に区分できる。ただし、上層の暗灰色粘質土は酸化の状態からさらに分層可能である。土器は破棄された状態で上下両層にわたって出土しているが、酸化の激しい最上層からの出土は非常に少ない。北側の一群の土器は、土壇肩上面近くから底にかけて投げ込まれたように出土し、その土器片は上の土器片が下のものに重なるようになっている。全体的な土器の出土状態も、掘り鉢状になっており、土壇掘削後、一定時間において土器が破棄された状況である。SK309と同じように層位による土器型式の違いは認め難く、高島期の時期である。なお、上面から須恵器片が出土している。

SK 311・312

7 J区で検出した。SB306とSK311が重複しているが、切りあい関係からSK311の方が新しいことがわかった。また、SK311よりSK312の方が新しい。

SK311の平面形は細長く、横断面形は掘り鉢状を呈する。埋土は暗褐色粘質土の単一層である。遺物は土壇底から少し浮いた状態で出土している。時期の判別するものは少ないが、古府クルビ期を前後するものと考えられる。

SK312は不整形な形状で、長さ2,5m、幅1m前後を測る。壁はなだらかに落ち、底にやや凹凸が見られる。北側は少し異なり、壁は直に立ち上がる。そのために第1次流入土として明黄色粘土ブロックを含んだ灰色粘土が斜めに入り込んでいる。その後、下層に灰色粘土（第1次流入土と同一で地山ブ

ロックを含まない土)で、上層に炭混じりの黒灰色粘質土がある。下層の状況は、土坑が一時期冠水していたことを示している。土器は遺物箱で1.5箱出土し、主に上層からである。いずれも破片化しており、上層堆積過程に破棄されたものである。概ね高島期の土器だが、353の壺や坏部が椀タイプの高坏の存在から古府クルビ期に遡るものもある。この土器の時期差がそのまま、上層・下層の区別とはならない。

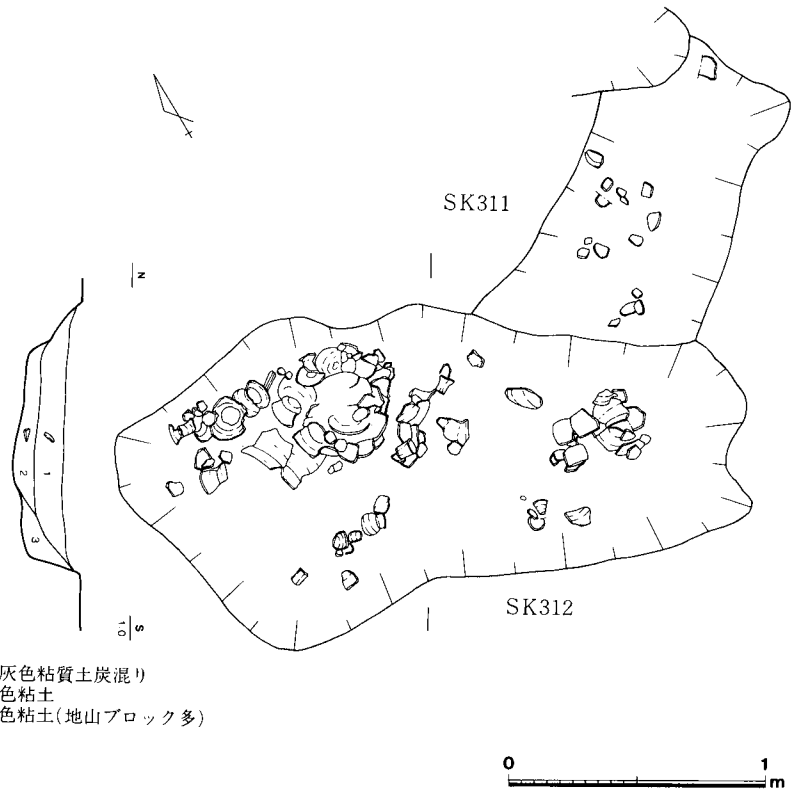


Fig. 42 SK311・312 実測図

SK313

8 J区で検出した浅い落ち込みである。方形を呈するが、明確な土坑の肩はみられず周辺の落ち込みに連続するので、人為的なものではないと考えられる。8 Jから8 I区南西にかけて、若干地山が落ち込んでいようで、自然にできたと思われる不整形な土坑、落ち込み等が多数ある。SK313もその中の一つである。土器は遺物箱で0.3箱出土し破片の大きなものあるいは完形に近い小型丸底壺があるので、まとめて捨てられたようである。概ね高島期に属する。

SK314

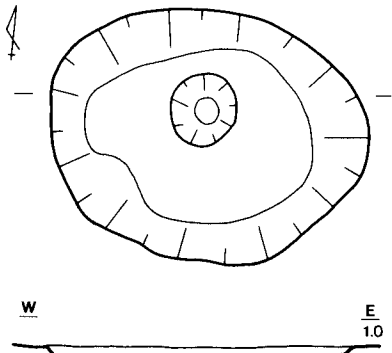
6～7 J区にある1.7m×1.3mの長円形の土坑である。中央やや北に浅いピットが見られる。土坑底に炭混じりの暗灰色粘質土や灰色粘土があり、上層に酸化の激しい暗灰色粘質土が見られる。遺物は上層から遺物箱で約0.3箱出土した。ほとんどが細片と化しているので時期の特定は困難だが、古府クルビ～高島期と思われる。

SK315

6 I区に位置する。不整形な落ち込みで底に凹凸が見られる。遺物は月影形甕の口縁と高坏それぞれ小片が1点ずつ出土しているのみである。自然の落ち込みと判断した。

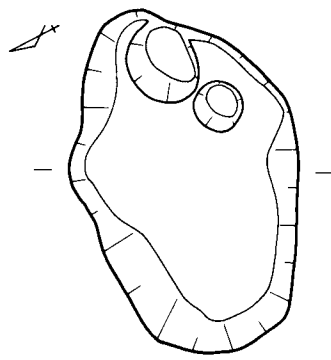
SK317

9 J区で検出し、ややいびつな楕円形を呈する。東端近くにピット状落ち込みが2つある。なだらかに壁が落ち込み、平坦な底に至る。深さも20cm程度と浅い。自然の入り込みと思われる埋土は、上下2層に区分され、下層に地山ブロックを含んだ黒褐色粘質土、上層に暗灰褐色粘質土がある。遺物は、上下両層にわたって出土し、約0.7箱出土している。土器は頸部に突帯を持つ広口壺や月影形甕あるいは椀型の高坏などで、比較的まとめており、一括して捨てられたものであろう。自然の落ち込みを廃棄場所として利用しているものである。古府クルビ期である。

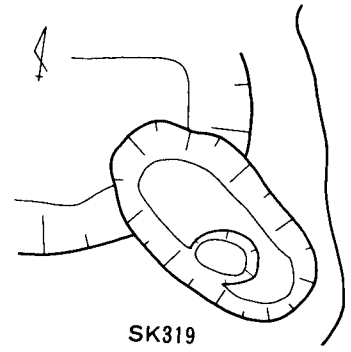


1. 暗灰色粘質土(酸化著るし)
2. 灰色粘土
3. 暗灰色粘土(炭化物多)
4. 2より粘性強

SK314

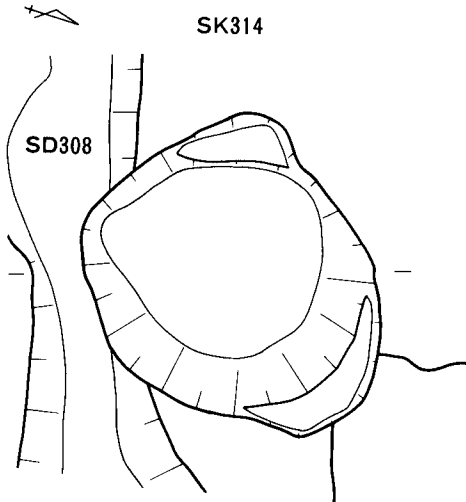


SK317

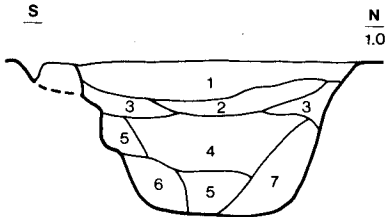


SK319

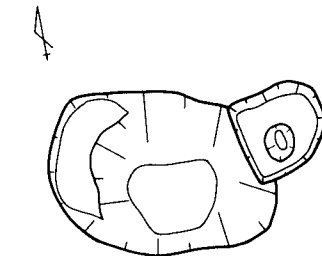
1. 暗灰褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土(地山ブロック含む)



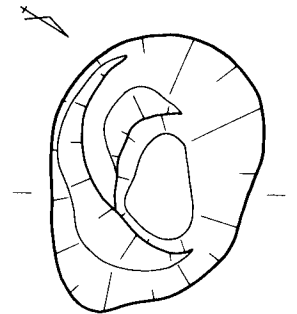
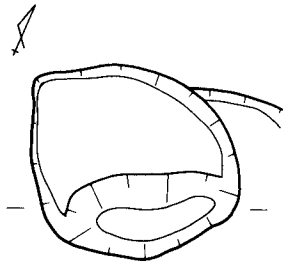
SK318



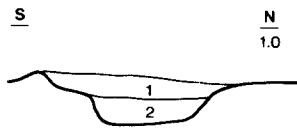
1. 淡灰褐色粘質土
2. 灰色シルト(酸化著るし)
3. 2より砂性強し
4. 灰色粘土
5. 灰色粘質土
6. 5の主に地山ブロック少含む
7. 4の上に地山ブロック多含む



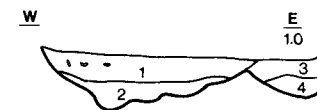
SK321



SK320

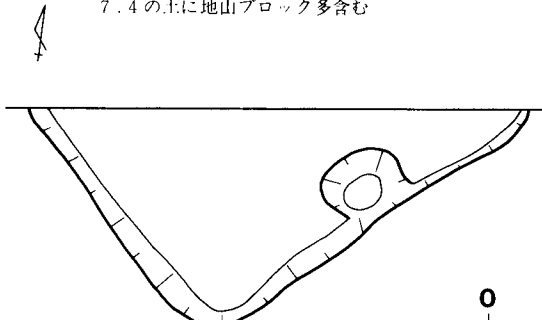


1. 灰色シルト(炭混り)
2. 灰色粘質土

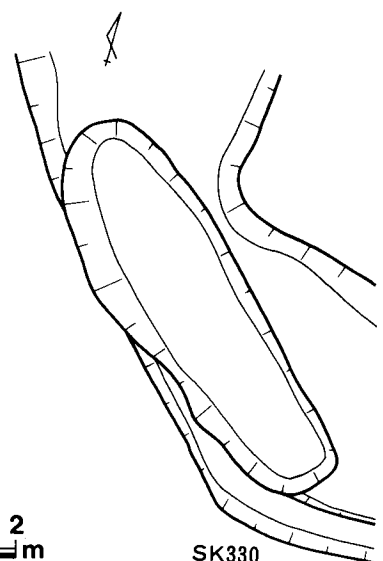


SK327

1. 濁暗灰色粘質土
2. 1の土に炭化物含む
3. 暗灰色粘質土
4. 3の土に地山ブロック含む



SK324



SK330

Fig. 43 SK314~330 実測図

SK318

9 I区で検出し、SK302とSD308を切っている。直径1.5m前後の円形を呈し、深さ0.8mを測る。大きく3層に区分できる。底から約50cmで灰色粘質土系で、中層として灰色シルトが薄くあり、淡灰褐色粘質土が上層にある。しかも、下層の第1次堆積土中に地山ブロックを含むことから、長期間帯水していたと思われる。遺物の出土はほとんど見られないが、古代の須恵器片、糸切り底の土師器碗が出土している他、数片の古式土師器が出土している。上層の土が他の古墳時代を前後する土塚の埋土と違うことや遺構の切り合い状態から、この遺構の時期は11世紀頃の可能性が高い。

SK319

6 J区にある。主軸長1.5m、幅6.5mの楕円形を呈する。遺物は上面から少数出土したのみで時期は、不明。

SK320

6 I区で検出し、SD304を僅かに切っているようである。長さ1.5m、幅1.1mを測る、平面卵型を呈し2段に落ち込んでいる。下段上面で土層が変わり、下層が灰色粘質土、上層が炭混じりの灰色シルト土である。土器の出土量は僅かで、二重口縁壺が1点出土しているのみである。古府クルビ式期であろうか。

SK321

8 I区で検出し、ピットと切り合っている。平面ほぼ長方形で西側が2段になっており、底の平らな播り鉢状を呈する。長さ1.25m、幅0.85mを測る。遺物は細片となった古式土師器のみ僅かに0.2箱出土しているのみである。時期は不明。

SK324

6～7 I区で検出し、更に北に伸びる。全容は不明。現状で三角形を呈し、少なくとも一辺が2mで、深さ約20cmを測る。底は平坦で壁から少し離れてピットがある。当初竪穴住居跡かと考えた。しかし検出したピットが支柱穴と考えられないことや、壁溝がないことから竪穴住居跡でない判断した。遺物は僅かに出土したのみで、壺及び布留型甕が出土している。高島期である。

SK325・326

8 J区で検出し、SD301に接している。これらはSK313とおなじように自然の落ち込みと考えられ、隣接し切り合いも認められないので一括して記述する。遺物量は比較的多く、双方で2箱出土した。甕、壺、高坏などで、細片となったものがほとんどである。SK313のように一段低くなっている落ち込みに、土塚のかわりとしてこの落ち込みに土器が廃棄されたものであろう。古府クルビから高島期の時期であるが、多くは高島期に属する。

SK327～329

8 J区で検出した。SK313等と同じ性格のものであり、埋土もほぼ同じで暗灰色粘質土系である。遺物量は3土塚で計約1箱で、細片となった土器が多い。壺、二重口縁壺、甕、月影形甕、高坏が出土しており、概ね古府クルビから高島期の時期である。

SK330

7 I区で検出した。7 I区は浅い落ち込みがグリッド中央に広がっている。SK330はその中にある長円形の土塚で、長さ2.25m、幅0.7mを測る。浅い落ち込みの埋土は、暗褐色粘質土でSK330も同じである。壁は斜めに落ち込んでいる。人為的な掘削物というよりも、浅い落ち込み中の一段低くなった部分と考えられる。遺物の出土は僅かで時期も不明。7 J～K区の落ち込みの状態と同じと判断し、概ね古府クルビ期と推測する。

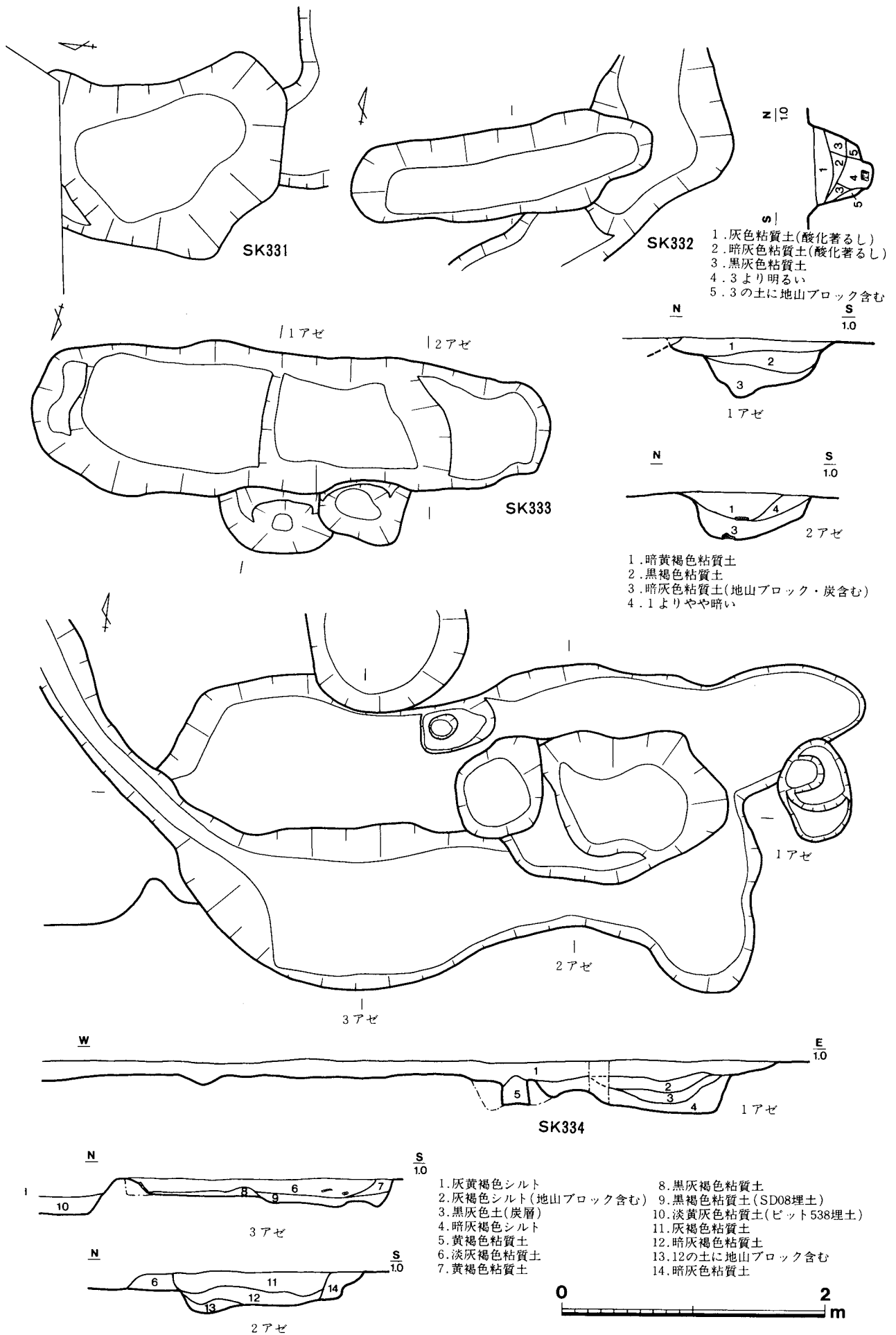


Fig. 44 SK331~334 実測図

SK331

6 I 区で検出し北側が更に伸びている。不定形な形を呈し、南の輪郭が明瞭でないこと、壁も緩やかに落ち底に凹凸が見られることから、自然の落ち込みではないかと判断した。埋土は暗褐色粘質土である。遺物はこの土中および周辺につながる落ち込み中から、遺物箱で約1箱出土した。土器は、土坑中央の底からやや浮いた状態で出土したが比較的まとまって出土している。土器の時期幅もさほど認められないので一括廃棄にともなう遺物と考えられる。甕、月影形甕、壺、高坏、器台（小型器台）、鉢である。甕は月影形が主流を占め、坏部の稜線が明瞭な高坏や小型器台の存在などがある。概ね古府クルビ期に属すると判断できる。

SK332

7 I 区で検出し長円形を呈する。長さ2.25m、幅0.8m、深さ0.5mを測る。不定形な浅い落ち込みと重なっているが、切り合いは不明である。上面には灰色粘質土が覆っており、下層には黒灰色粘質土、暗灰色粘質土がある。平面では確認できなかったが、土層断面図を検討するとピットのような状態である。そして底には木片が出土している。明瞭な柱根の輪郭が見られないことから抜取られたとも考えられる。遺物の出土は少なく遺物箱で0.1箱である。時期は不明。

SK333

10 J～K 区にある長方形を呈する土坑である。長さ4m、幅1m強を測り、中央が1段低くなっている。調査中の観察及び土層図を検討する限りにおいて、複数の遺構が切り合っている可能性はない。底には地山ブロックを含む暗灰色粘質土が厚く堆積し、上層には暗黄褐色粘質土、そして中間層（黒褐色粘質土）が1段低くなっている部分に堆積している。

これは自然堆積と考えられる第1次堆積土として1段低い部分を中心に掘り鉢状に、そして中間層がレンズ状に堆積することによって平坦になったものと考えられる。遺物は上層からの出土が多く、遺物箱で1.5箱を数える。布留形甕が若干と高坏、甕、壺の小破片である。他の土坑と同様、土坑埋没にともない土器が破棄され、ゴミ捨場として機能したものと考えられる。高皇期である。

SK334

9 J 区で検出した浅い落ち込みで、人為的な土坑ではないと考える。SD308と重複しているものの、切り合い等の状況は判然としない。平面形も不定形な横長の形状で、全体的に南側が1段下がり、SD308の続き部分となっている。また、中央東側で土坑状に1段深い落ち込みがある。土層の切り合い状態からはよく分からない。1段低い部分およびその周辺を枝番号をつけSK334-2をした。上面には灰黄褐色シルトあるいは灰褐色粘質土が覆い、土坑南側の一段低い部分はSD308と同じ埋土の黒褐色粘質土となっている。SK334-2は炭混じりの黒灰色シルトや暗灰褐色系の土となり、部分的に地山ブロックが含まれている。

土器は一段落ち込んだ部分からの出土は少なく、その周囲と土坑南側の1段下がった部分にやや浮いた状態で出土している。完形になるものはなく、ほとんどが小破片で、遺物箱で4箱出土した。土器は土坑中にある程度まとまりをもって分布している。しかし、遺物群の厚みはほとんど見られず、土器片がまとまりつつ薄く広がっている状況である。したがって、一括遺物であるか検討を要する。土器は壺、二重口縁壺、甕、退化した月影形甕、高坏、器台、鉢と多岐に及んでいる。概ね古府クルビ期である。なお上面から須恵器が出土しているので、SK334は浅いにもかかわらず、あまり削平されていないかと思う。

SK336

8～9 J 区に位置する不定形な落ち込みで、複数の遺構が切り合っているものと考えられる。東端は

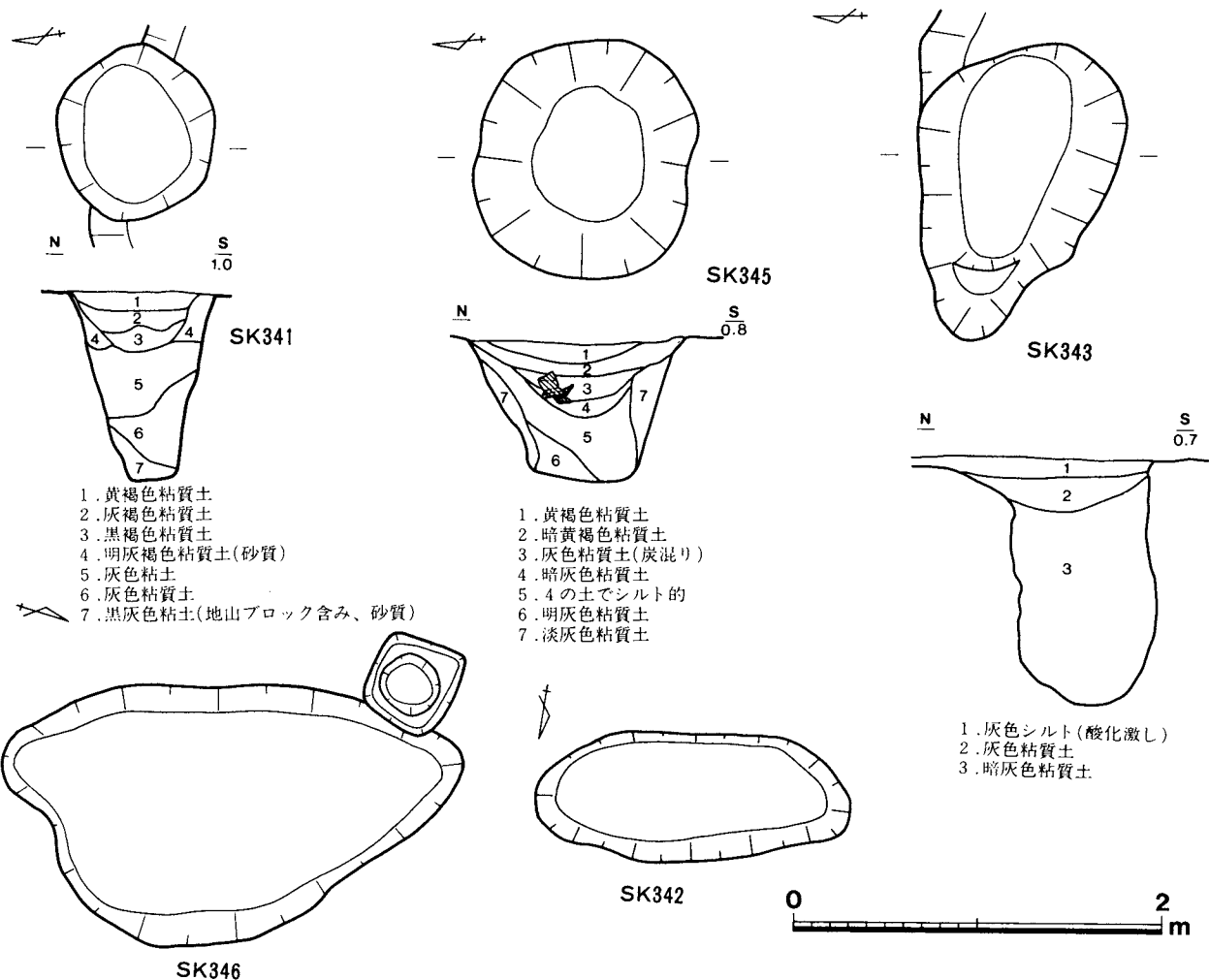
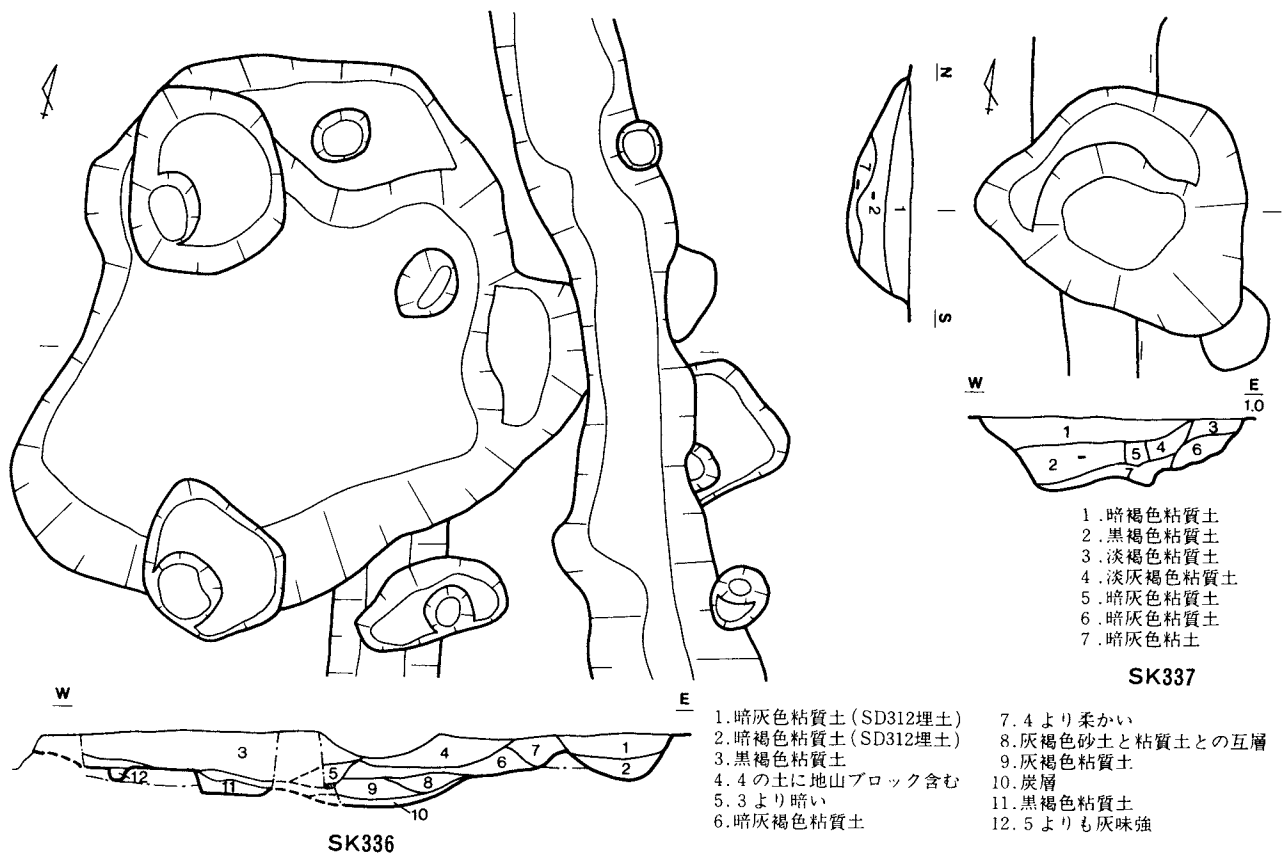


Fig. 45 SK336~346 実測図

SD312に切られている。上層の土は黒褐色粘質土で、東から西に傾斜している。その下には灰褐色系の粘質土があり、坩堝底に炭層と黒褐色粘質土が見られる。遺物は2箱出土している。上下両層にわたってその出土が見られるが、上・下層間からの出土が多い。甕・壺・高杯・器台等が出土している。概ね古府クルビ～高皇期である。

SK337

9 K 杭を中心にある。不整形な方形を呈し、北側が緩やかな段になっている。長さ1.45m、幅1.2mを測る。上面に暗褐色粘質土、その下に黒褐色粘質土があり、底には暗灰色粘土がある。一定期間水が溜まっていたために、下層の暗灰色粘土が堆積したものと判断できる。底は比較的凹凸があり、壁の傾斜も一様でない。土器は下2層を中心に約0.7箱出土した。甕等である。細片となったものばかりなので明確な時期設定は困難だが、月影～古府クルビ期と思われる。

SK340

SK336のすぐ北に位置する。これもSK336と同じように複数の遺構が切り合っているようである。また底の凹凸がはげしく形も不定形なのでSK313などと同じ自然の落ち込みがいくつか重っていると考えられる。埋土は暗灰色粘質土系である。SD306と重複しているが、切り合いは不明。土器の出土は非常に少なく、時期も不明。

SK341

9 I 区で検出した円形の土壇である。直径0.8mを測り、底は平坦で、深さ1.05mである。厚く灰色粘土あるいは黒灰色粘土が堆積しているので、ある一定期間水が溜っていたと考えられる。最下層の黒灰色粘土層には地山ブロックを含んでおり、壁面の崩落を示している。それより上には砂性の強い明灰褐色粘質土がある。その層を見かけで切るように黄褐色粘質土、灰褐色粘質土、黒褐色粘質土が見られる。これらの層は、他の遺構が重複しているために、再度掘削されて堆積したものか判然としない。細片となった土器が遺物箱0.1箱で、古式土師器および8世紀前半の須恵器が出土している。時期は不明だが、埋土が古墳時代初頭のもものと異なることから、奈良時代になる可能性が大きい。

SK342

8 I 区で検出した。長さ1.8m、幅0.7mを測る長円形の土壇である。遺物の出土はほとんど見られず、時期は不明。

SK343

10 J 区で検出した。楕円形を呈し、長さ1.3m、幅1.1m、深さ1.25mを測る。底は丸く特に平坦にはしていない。旧耕土の灰色シルト層下から掘り込まれている。土層の堆積は単純で、灰色粘質土、下層に暗灰色粘質土が厚くみられ、帯水状態であったことを示している。

遺物はほとんど見られず古式土師器の細片あるいは加賀焼片そして坩堝底近くから漆器椀が出土している。これから、中世の遺構であることが分かるものの、具体的な時期は不明である。

SK345

10 J 区で検出した円形の土壇で、直径1.3m、深さ0.75mを測る。第1次堆積土として淡灰色粘質土層が壁際から流入し、暗灰色粘質土・明灰色粘質土が中位から下位にかけて堆積している。その上には黄褐色粘質土、暗黄褐色粘質土が堆積している。これら上層と、中・下層の間に土器が集中して出土しているものの、細片がほとんどである。土器量は遺物箱で0.5箱である。椀形の高杯や月影形甕、布留形甕が出土しており、上面から須恵器片が出土している。SK345は井戸的機能が考えられるが、その埋没時期は、出土土器から古府クルビ期であることがわかる。その掘削時期はさらに遡り、月影期頃であろう。

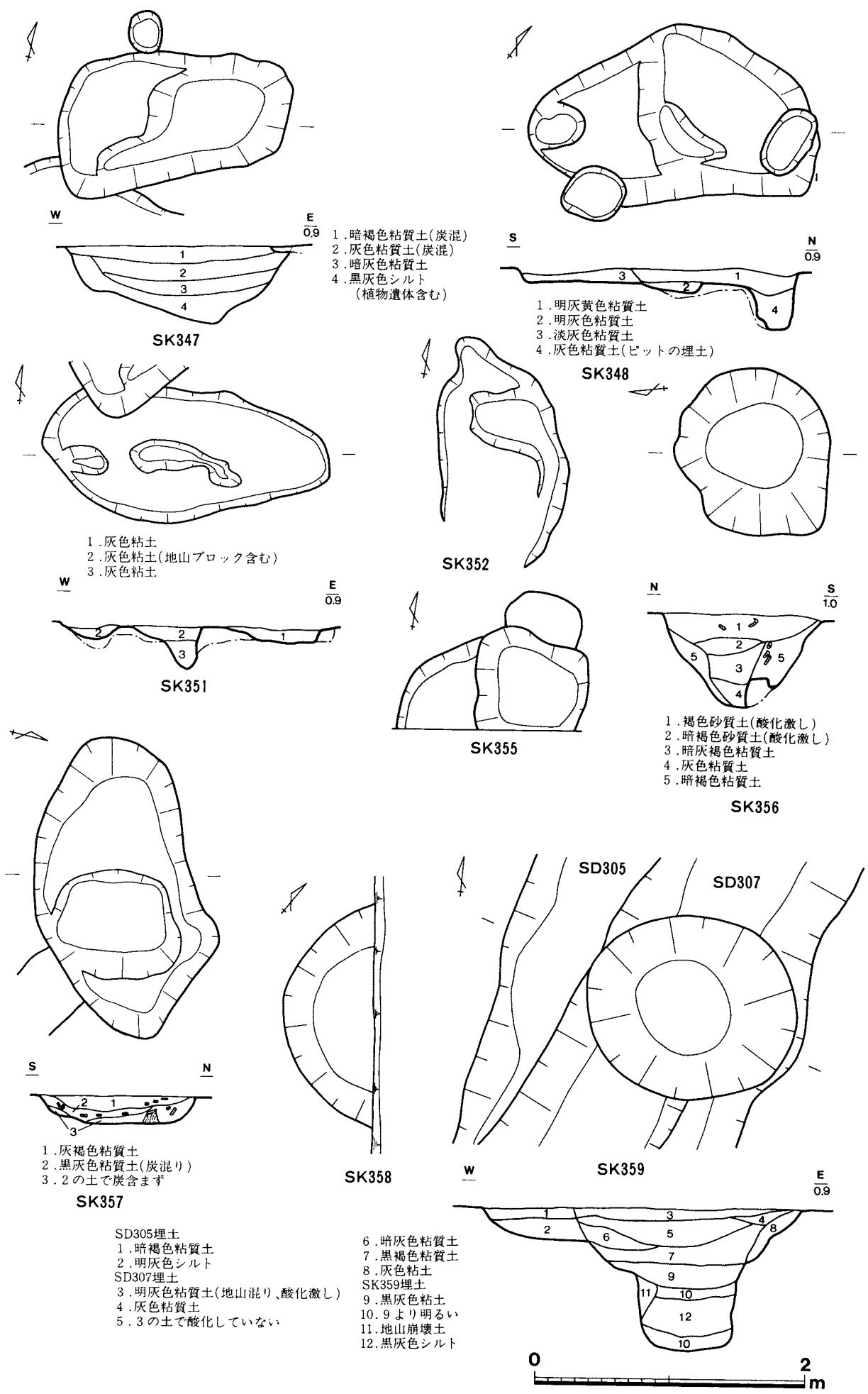


Fig. 46 SK347~359 実測図

SK346

9～10 J区で検出した不整形の土坑である。SD308からSK334にかけて溝状に落ち込んでおり、SK346はその中の浅い落ち込みの一つと考えられる。遺物は少なく0.2箱程度で、すべて細片となったものである。時期は判然としない。

SK347

9 I区で検出した長方形の土坑で、長さ1.75m、幅1m、深さ0.6mを測る。底は凹凸が見られる。西壁は二段に落ちている。西壁から底にかけて植物遺体を含む炭化物層となった黒灰色シルト層が厚くあり、暗灰色粘質土、炭を含む灰色粘質土、炭を含む暗灰色粘質土と続く。いずれの層もほぼ水平堆積を示し、自然状態の堆積過程を想定できる。遺物は上より2層目から甕、布留形甕、壺等の細片が0.5箱程度出土している。高島期であろう。当該時期の土坑には炭を含むことが多いが、この土坑はその典型的なものと理解できる。

SK348・350・351・352

SK348は9 I区で検出し、SK347・351の西に隣接する。不整形な楕円形を呈し、深さは10cm程度の浅いものなので、自然の落ち込みと考えられる。複数のピットが切り合っているようで、灰色系の粘質土が埋土となっている。遺物の出土は比較的多く、二重口縁壺、小型丸底壺、布留形甕等0.7箱程度出土している。古府クルビから高島期である。SK350～352も同じような性格のものである。いずれも浅く不整形な形を呈している。ただし遺物の出土はほとんどなく、時期も不明。

SK355

9 K区で検出した。SK355は南に更に伸び、西側はSB302のピット498に切られているので全容は不明である。埋土は上層に暗灰色粘質土で、下に炭を含んだ層となっている。底は比較的平坦で、遺物は底から浮いた状態で壁にそって落ち込むように出土した。したがって、破棄されたものである。遺物はいずれも細片で、壺・甕・高杯が出土しているものの体部片が多い。高島期である。

SK356

10K杭近くで検出した円形の土坑である。直径1.1m、深さ0.7mを測る。摺り鉢に近い形状である。上面には酸化の激しい褐色砂質土があり、下層に暗褐色砂質土、暗灰色砂質土、灰色粘質土がみられる。これらの層は、土坑中央に堆積しているようで、その周囲の壁にそって暗褐色粘質土がみられる。遺物は、各層から土器細片がみられる。埋土から古代以降の土坑と考えられる。

SK357

SK356に隣接する浅い落ち込みの土坑である。黒灰色粘質土が両側から落ち込むようにあり、上面に灰褐色粘質土が堆積している。埋土の状態から古代以降の遺構と思われる。

SK358

10H区で検出し、東に更に伸びるようである。壁は摺り鉢状に落ち込んでいる。遺物の出土はなく、時期は不明。

SK359

10～11 J区で検出し、SD305、307と重複している。土層観察の結果SD305を切っているが、SD307に切られていることがわかった。しかし、SD307にちょうど重なるようにあるので、それとの時間的な間隙は少ないものと考えられ、同時掘削、同時併存の可能性が高い。現状でのSK359の最上層は黒灰色粘土で、底に黒灰色シルトが堆積している。これらの土は一定期間帯水している状態を示しているので、SD307掘削時にはこの土坑は埋められることなく開口し、水が常に入っている状態と判断できる。土器は古式土師器が少数出土しているのみである。時期は8世紀中頃であろうか。

3 溝

SD301

7 J～8 I 区にかけて検出した。おそらく調査区端から20mほど南でSD05に合流し、北西から南東方向に流れる溝である。溝底のレベルは南で標高30cm、北で45cmを測り、SD05に流れ込んでいることが分かる。おそらく第一次調査で検出したSD06に続くものと予想される。溝幅は1.5m前後だが、調査区中央付近で幅を広げ、形も歪になっている。部分的に深い土坑状を呈するところもあり、複数の遺構が切り合っている可能性が高い。



Fig. 47 調査風景

上面には灰褐色粘質土が部分的にみられ、北側に厚いようである。調査区中央のアゼではその下に黒灰色粘質土、灰色シルトと続く。南のアゼでは黒灰色粘質土が上層となり暗灰色砂質土、淡黄灰色シルトと続く。このように、北アゼの中層が南アゼの上層になるなど、土層堆積の面からも南流していたことが分かる。

遺物は上・中層（灰褐色粘質土と黒灰色粘質土）からの出土がほとんどで、下層からの出土は少ないようである。土器は約2箱出土しているものの、上・中層の時期差はほとんどないと思われる。土器は甕・壺・高坏などで少破片が多い。一括破棄された状況での出土はない。

SD302

SD301の西に隣接する溝状の落ち込みである。8 I 区で検出した際、南に溝状に続くために溝としての遺構番号を付けたとのことである。しかし、実際に発掘調査が進むにつれ、北側の続きが不明瞭なことや、形がいびつなこと、溝底にレベル差があること等から、不定形な溝状の自然の落ち込みと判断した。上面は全体的に淡灰褐色粘質土が覆い、灰褐色粘質土あるいは灰色粘土など、暗褐色系統の土がみられ、部分的に地山ブロックを含むものが入る。調査区南端でSD301を切っていることから、SD301が埋没した後SD302が埋ったものである。遺物量は多い。箱数にして14箱を数える。常に土器が破棄されていた状況が窺え、その種類も多い。古府クルビから高島期である。おそらく、周囲に点在する土坑に土器等が破棄されるに伴って、SD302のような落ち込みも利用されたものと考えられる。

SD304

7 I～6 J 区に流れる幅1m前後の細い溝である。現状での深さは約30～40cmと比較的浅い。溝底のレベルは北側で50cm、南で20cmで、この溝もSD05に流れ込んでいる。遺物は約0.5箱出土し、小破片が多い。甕、壺（二重口緑壺もある）、高坏等がみられ、月影形甕はないようである。古府クルビ期である。

SD305

本章第5節で記述

SD307

SD305と斜交する溝で、幅1m強を測る。溝底のレベルは北で25cm、南で20cmとほとんど変わらないので北流するか南流するかの手懸りが無い。なお、前項でも述べたが、SK359と同時期の可能性が高い。上面には暗灰色粘質土がみられ、その下に北アゼでは地山崩落土としての黄色粘質土、南アゼでは上面の土に地山ブロックを含む層で、それぞれ対になる同じ層と認識でき、人為的に埋められたものと判断できる。それより下層には暗灰色粘土、淡灰色シルト等、自然堆積した層がみられる。つまり溝が大部分埋った段階で廃棄するのに埋立てられたと判断できる。その時、SB303が建てられたと考えられる。

遺物の出土は2箱程度で、SD305と切り合っているところではSD305の遺物が2次的に入り込んでおり、出土量の大部分を占める。遺物は埋立土より下の層で出土している。土器は小破片が主であるが、少なくとも8世紀中頃には溝として機能していた。

SD308・309

SD308は、北をSD307に接し、SK302にかけて円弧状にめぐる浅い落ち込み状の溝である。SD307に接するところから3m南で分岐し、SK344に向かって南に伸びる小さな浅い溝がSD309である。円弧の部分は幅広で、南に1段低くなっており、それがSK302に伸びている。上面には全体的に暗黄褐色粘質土が覆い、下に黒褐色粘質土、淡暗褐色粘質土、1段低い部分には地山ブロックを含む灰色粘土が堆積している。溝の形状が不定でもあるので、自然の落ち込みと判断した。SD309はSD308よりも1段高い。緩やかな円弧状を描きSK334に至る。埋土はSD308と同じ黒褐色粘質土で、ほぼ同時期の遺構と考えられる。溝底はかなり凹凸がみられ形も不定であることから、SD308と同じように自然の落ち込みと判断した。なお、第8章で述べるが、再検討した結果

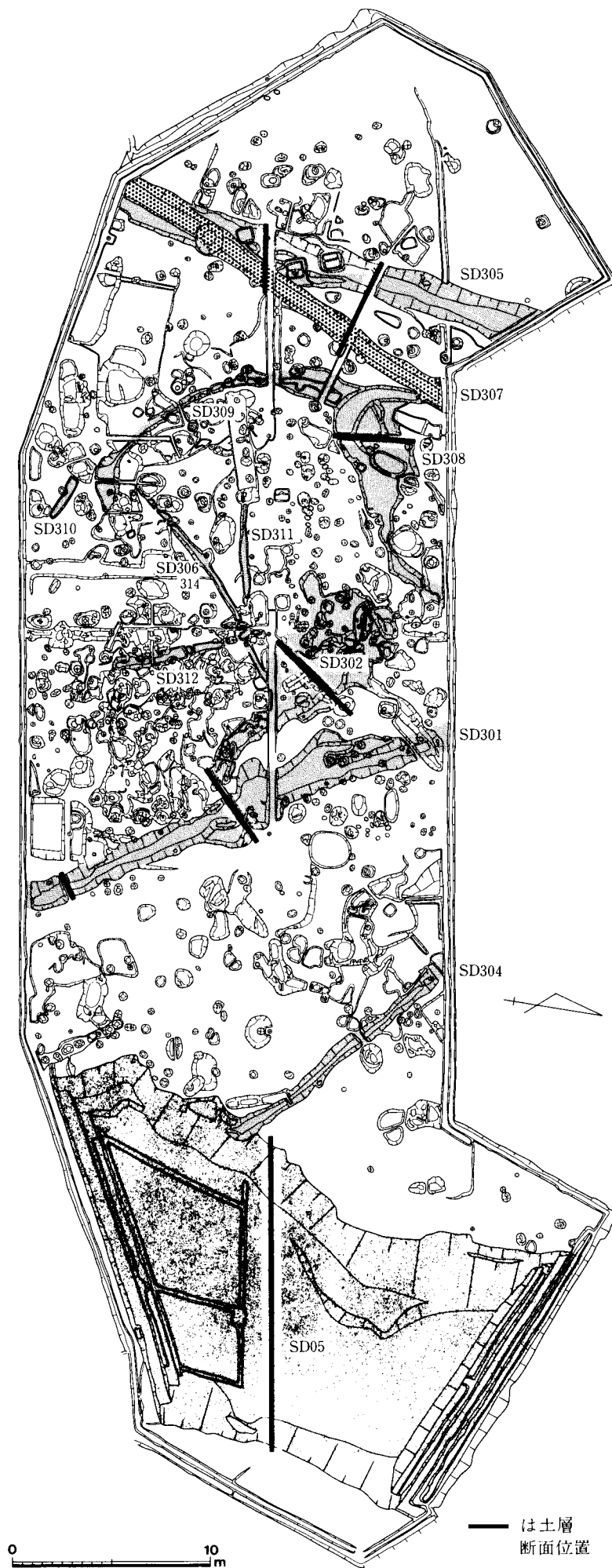


Fig. 48 第3次調査 溝配置図

「周溝を有する平地式住居」の周溝の可能性も考えられる。

土器の出土はともに少なく、時期はよく分からない。SD308はSK302とSK318に切られ、SK302が古府クルビ期であるので、それ以前ということになる。また、SD309はSK334の埋没より早いので、この所見とも矛盾しない。

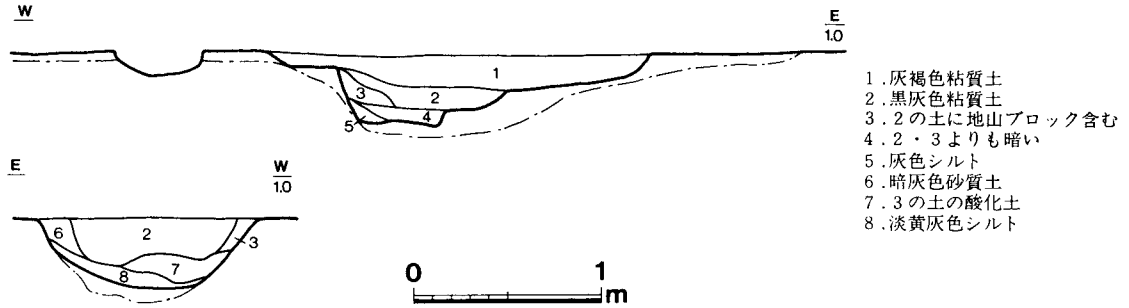


Fig. 49 SD301 断面図

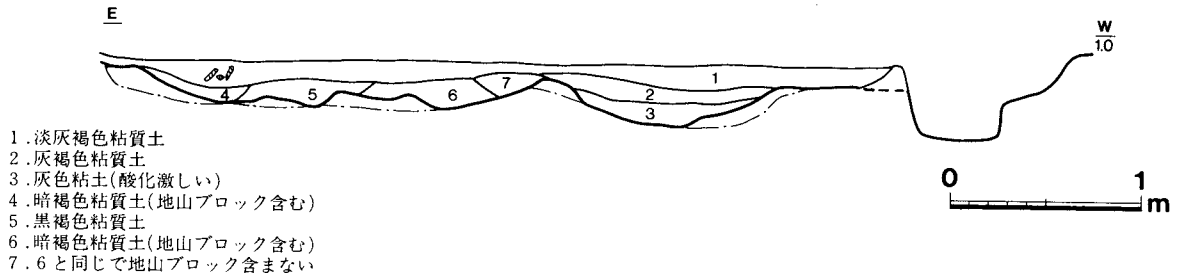


Fig. 50 SD302・302-2 断面図

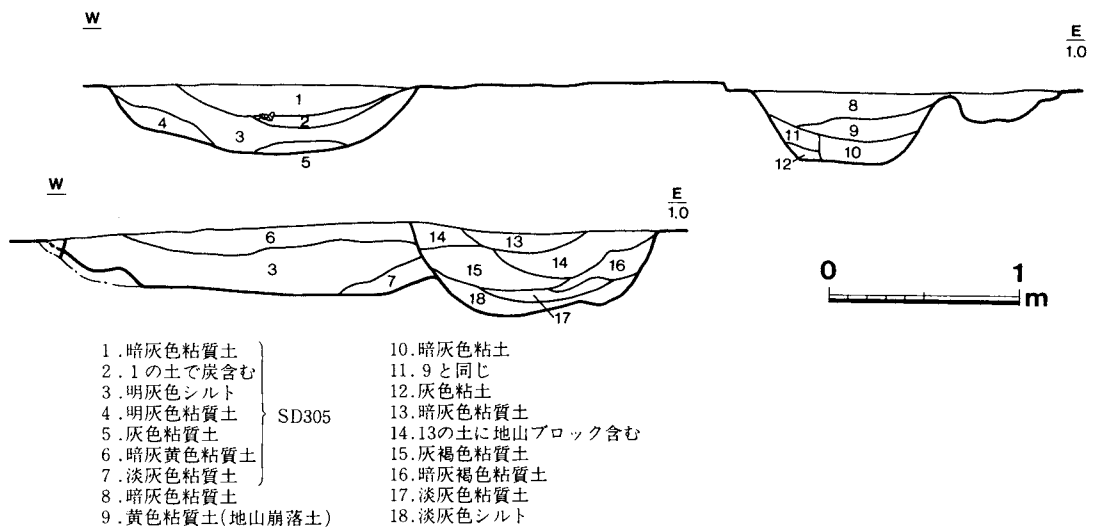


Fig. 51 SD305・307 断面図

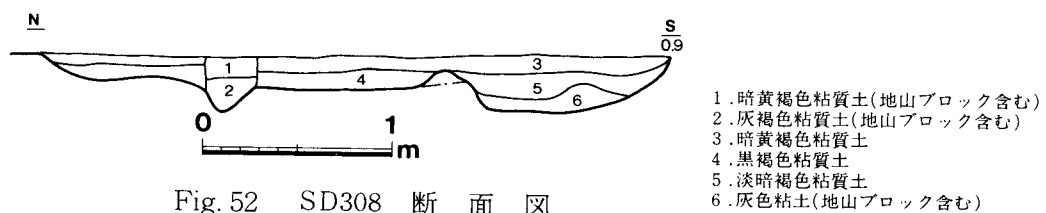


Fig. 52 SD308 断面図

第4節 第4次調査

第4次（平成元年度）調査区は、用地整備事業予定地の南東端にあたり、同予定地の東側を南北に走る一般県道畝田大野線に接している。西側には第3次調査区、北および北西側には第1次、第2次調査区（集会場予定地）が、それぞれ10～20mの距離をおいて位置する。調査対象面積は約600㎡である。

第1次～第4次発掘調査にかかる分布調査は、石川県立埋蔵文化財センターが昭和59年（1984年）9月に実施しているが、本調査区については、当時、第1次調査中（昭和60年（1985年））に移転した金沢木材協同組合の事務所が占地していたため、試掘調査が実施できず未調査区域となっていた。また一方では、第1次～第3次調査区のうち、本調査区に近い調査区域では概ね遺構密度が低いという傾向性が指摘されていたこともあって、本調査は、当初から対象区域を全面的に発掘調査するのではなく、まず、トレンチ法による調査をおこなったのち、その後の調査方法を決定することにした。

平成元年8月8～9日にかけて、トレンチ法による調査を実施したところ、対象区域を南北に縦断するかたちで、第1次調査（昭和60年度）において検出されたSD02（明治（以降）と推定される）の上流部と想定される川跡（SD401）を検出した。対象区域縁辺部では、南西側の事務所跡地で建物の基礎工事にとまなう攪乱が認められたほか、現表面下1.2m前後で当時の生活面（海拔0.6～0.7m）を確認したものの、他の遺構・遺物は検出されなかった。そのため、検出されたSD02を掘り下げ、その輪郭と複数の地点でその深さを確認し、現地調査を終了した。



Fig. 53 第4次調査調査風景

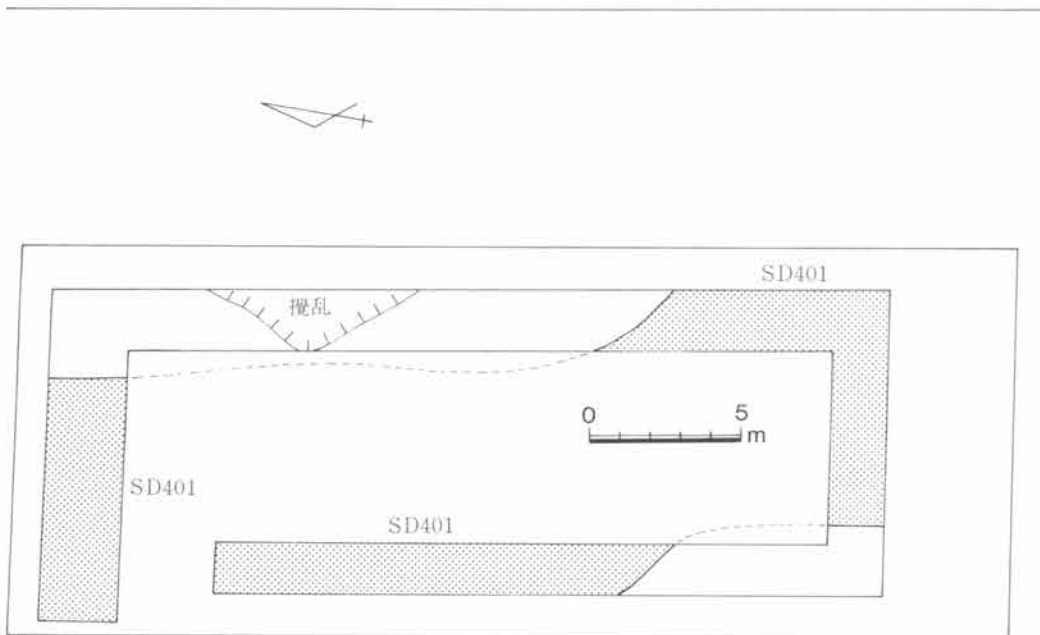


Fig. 54 第4次調査区全体図(S=1/250)

第5節 各調査年次で共通する河道等

第1～3次調査でSD05が、第1・3次調査でSD06がある。SD05は共通した遺構番号で調査した。しかし、SD06は第3次調査時にSD305と表記した。

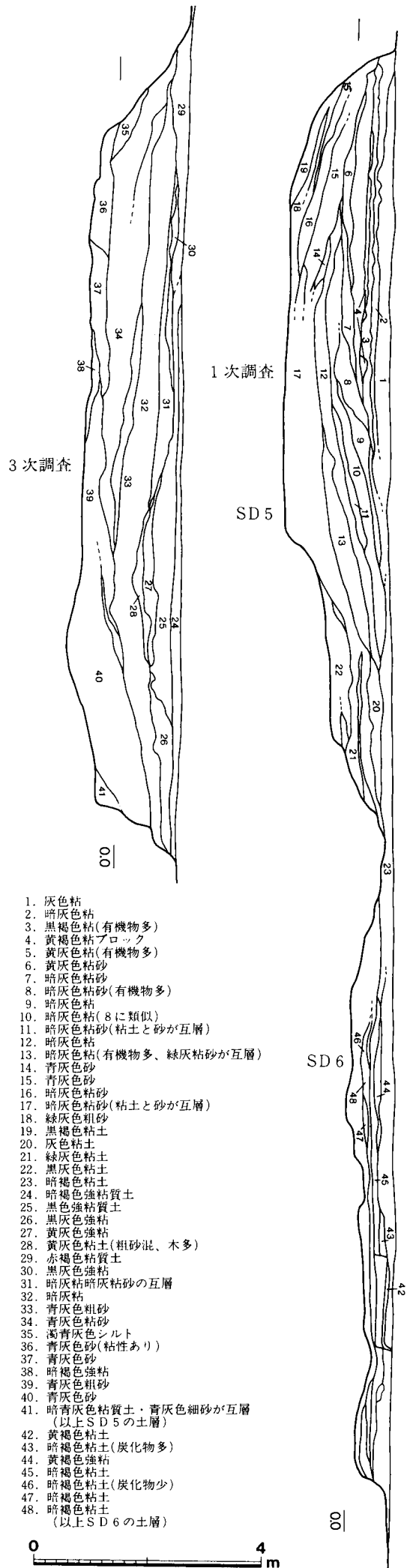
SD05

幅約12～15m、深さ約1.6～2mを測る大規模な溝で、旧河道と考えられる。またSD06(305)と第1次調査区で分流している。すなわちSD05は第3次調査区南端から10mほど北で流路を45°ほど西に向きを変え、さらに40mほどでまた東に向きを変えている。この流れの変換点でSD06(305)が分流している。溝底のレベルでは南に位置する第3次調査区が標高-0.9m、第1次調査区で-1.2mで、地形に即して北流することがわかる。

第1・3の両次の発掘調査で土層観察用アゼを実測した。しかし、第1次調査担当者の話によると、第1、2次調査時には層位の区分を明確にしていなかったとのことである。したがって、層位の説明は第3次調査の土層に依ることとする。SD05の出土遺物の7割以上が第3次調査からの出土なので、第3次調査時の分層状況から土器の変化を把握するのに十分である。おおきく上層、中層、下層に区分できる。土器の出土は中層からが50%以上を占めている。

さて、上層上面とした層がある。この層からは奈良時代の土器が若干と古墳時代前期の土器が出土している。奈良時代に再び生活域になった結果、周囲より若干窪んでいたと思われるSD05上面に堆積した層と考えられ、この河道の最終的な姿を示しているよう。

上層は、暗褐色～黒灰色の粘性の強い粘質土を主体としている。土層番号30(以下30と略)からは、炭粒や炭化物(粒)を出土しており、他の土坑群中にみられる炭化物層に対応する可能性もあろう。30は29(赤褐色粘質土)と共に、SD05を人為的に埋め立てた層と考えている。つまり、当該層位からも多量の高島期の土器が出土しているが、溝堆積という状況ではなく、岸に近い程多く、面的に出土して



1. 灰色粘
2. 暗灰色粘
3. 黒褐色粘(有機物多)
4. 黄褐色粘ブロック
5. 黄灰色粘(有機物多)
6. 黄灰色粘砂
7. 暗灰色粘砂
8. 暗灰色粘砂(有機物多)
9. 暗灰色粘
10. 暗灰色粘(8に類似)
11. 暗灰色粘砂(粘土と砂が互層)
12. 暗灰色粘
13. 暗灰色粘(有機物多、緑灰粘砂が互層)
14. 青灰色砂
15. 青灰色砂
16. 暗灰色粘砂
17. 暗灰色粘砂(粘土と砂が互層)
18. 緑灰色粗砂
19. 黒褐色粘土
20. 灰色粘土
21. 緑灰色粘土
22. 黒灰色粘土
23. 暗褐色粘土
24. 暗褐色粘粘質土
25. 黒色粘粘質土
26. 黒灰色粘粘
27. 黄灰色粘粘
28. 黄灰色粘土(粗砂混、木多)
29. 赤褐色粘粘土
30. 黒灰色粘粘
31. 暗灰粘暗灰粘砂の互層
32. 暗灰粘
33. 青灰色粗砂
34. 青灰色粘砂
35. 濁青灰色シルト
36. 青灰色砂(粘性あり)
37. 青灰色砂
38. 暗褐色粘粘
39. 青灰色粗砂
40. 青灰色砂
41. 暗青灰色粘粘土・青灰色細砂が互層(以上SD5の土層)
42. 黄褐色粘土
43. 暗褐色粘土(炭化物多)
44. 黄褐色粘粘
45. 暗褐色粘土
46. 暗褐色粘土(炭化物少)
47. 暗褐色粘土
48. 暗褐色粘土(以上SD6の土層)

Fig. 55 SD5・6断面図

いる。また、29の赤褐色粘質土は、土中の鉄分の酸化によるものであり、長期間空気にさらされていたものと考えられる。暗褐色～黒灰色粘質土（上層）からの遺物の出土はさほど多くない。以上より、高島期に浅くなったSD05の一部分を埋め立てている状況がわかる。この活動は、前項で確認した土坑中への土器廃棄の行動と相通じるものがあり、連動する活動と考えられる。

中層は、発掘調査時において中層と中層下の二層に区分した。しかし、出土遺物の様相に変化はなく、接合する遺物も多いので、同一層と考えられる。31は暗灰色粘土で暗灰色シルトが部分的に互層となっている他、32では青灰色シルトが互層となっている。さらに中層下では、青灰色シルト～砂質土となっている。中層下ではシルト～砂質土・砂土と、水流を予想させるのに対し、中層はシルト～粘土と、安定した層の堆積を推測させる。このように対照的な堆積なので同一層とは考え難いものの、出土遺物に大きな変化が認められないことから、このような判断をせざるをえない。中層はかなり粘性の強い層を中心とし、有機物を多量に含んでいる。このことから中層の堆積の安定性がわかる。

中層出土遺物を見てみたい。壺は東海系のパレススタイルの壺や、パレススタイルではないが東海系の壺、あるいは124（第4章における土器の遺物番号）のように在地では追えない器形もみられる。その一方で、129のように、弥生時代的な長頸壺も見られる。甕は、伝統的な月影タイプの有段擬凹縁あるいは有段口縁の甕や、「く」の字甕が主体を占める一方で、153の近江系の受口状口縁の甕や146の山陰系の甕、135の庄内系の甕が注意される。また138の布留系甕が、中層の年代の下限を示していよう。このように、弥生時代末～布留系甕の出現という時間幅の中に、高杯、器台、小型土器の年代幅も概ね収まるようである。186の東海系高杯にも注目できよう。そして、その中心は月影期から古府クルビ期と思われ、その頃の土器量が最も多い。

下層は青灰色砂土を中心とし、激しい流れの様子を知ることができる。一方、1次調査の時のアゼ断面には、青灰色砂土の厚い堆積は認められず、17の暗灰色粘砂（粘土と砂の互層）や緑灰色粗砂の堆積がみられる。これは、下流（北方向）で流水が緩やかになり、主に砂よりも粒子の細かい土砂の堆積がなされたと考えられる。この層からは、主に月影タイプの甕や同時期の高杯、あるいは法仏タイプによくみられる高杯・器台・壺・甕があり、年代的に、弥生時代後期後半～末頃に限定できるであろうか。

SD06 (305)

SD05が8 EG.で屈曲し、ここでSD06が分流している。まず北東方向に15m、そこで南に直角に曲っている。第3次調査区ではSD305とし、SD307とSK359と切り合っている。

SD05との合流地点の溝底に、樋と思われる木製の水利施設を検出した。水利施設はSD06中にあるが、SD06の方が浅いためにSD05との合流部分は広いテラス状になっており、このテラスに設置されている。なお、SD05とSD06の新旧は不明だが、土器から見れば、SD05の上～中層に対応するので、掘削年代もそれに対応しよう。SD06の溝底はSD305の溝底よりも低いので、溝の水はSD05と同様に北流していたと考えられる。また、北流した水が9 EGで直角に曲ってSD05と合流するが、この部分は、SD305から直線的に伸ばしたような溝（SD07）があり、おそらく、オーバーフローする水を逃がす溝と考えられる。後述するが、SD305では、ほとんど溝底のレベル差が認められないことから、流れの少ない水が滞った状態と考えられる。

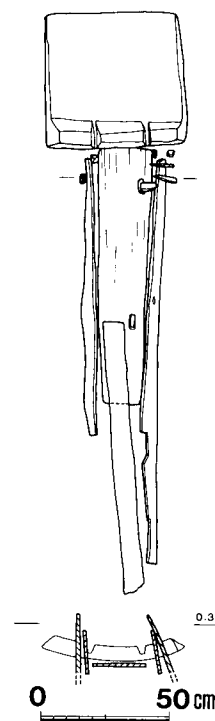


Fig. 56 SD06 木製水利施設実測図

木製水利施設は、上流側に舟底状の方形板を置き、その中心部分より1.7m南まで板で囲むことによって導水管?としている。底板の幅は1m程しかなく、下流から向って右手にある孔に杭を打ち固定している。西側板を杭によって固定しているが、底板よりも長く、左の側板は2枚組み合わせている。具体的な使用方法等は、筆者は直接発掘を担当していないので良くわからないが、SD06の水流を調整する水門の存在と考えられる。時期的には古府クルビ~高島期である。

第3次調査で確認したSD305は全体的に検出面から約30cmの深さである。溝底のレベルは標高30~40cmと南北での差がほとんどみられない。北のアゼでは上面に暗灰色粘質土がレンズ状にみられ、明灰色シルトが中層・下層として部分的に明灰色粘質土、灰色粘質土が堆積している。南のアゼの堆積状況もよくにている。上層に暗黄灰色粘質土、中層に明灰色シルト下層が部分的に淡灰色粘質土がみられる。多少の色は異なるが、基本的に同じ土層と考えられる。

遺物は上層と中層のさかいめで出土した。遺物箱で30を数える。遺物は小破片、細片ばかりである。壺、二重口縁壺、小型丸底壺、甕、布留形甕、月影形甕、高坏、器台、鉢など、多くの器種が出土した。小型丸底壺は既に体部の張った新しいタイプで布留形甕と同時性が認められる。一方、月影形甕もそれなりに数を占めており、ある程度の時間幅がみられる状況である。古府クルビから高島期と思われる、SD05中層にはほぼ相当する。

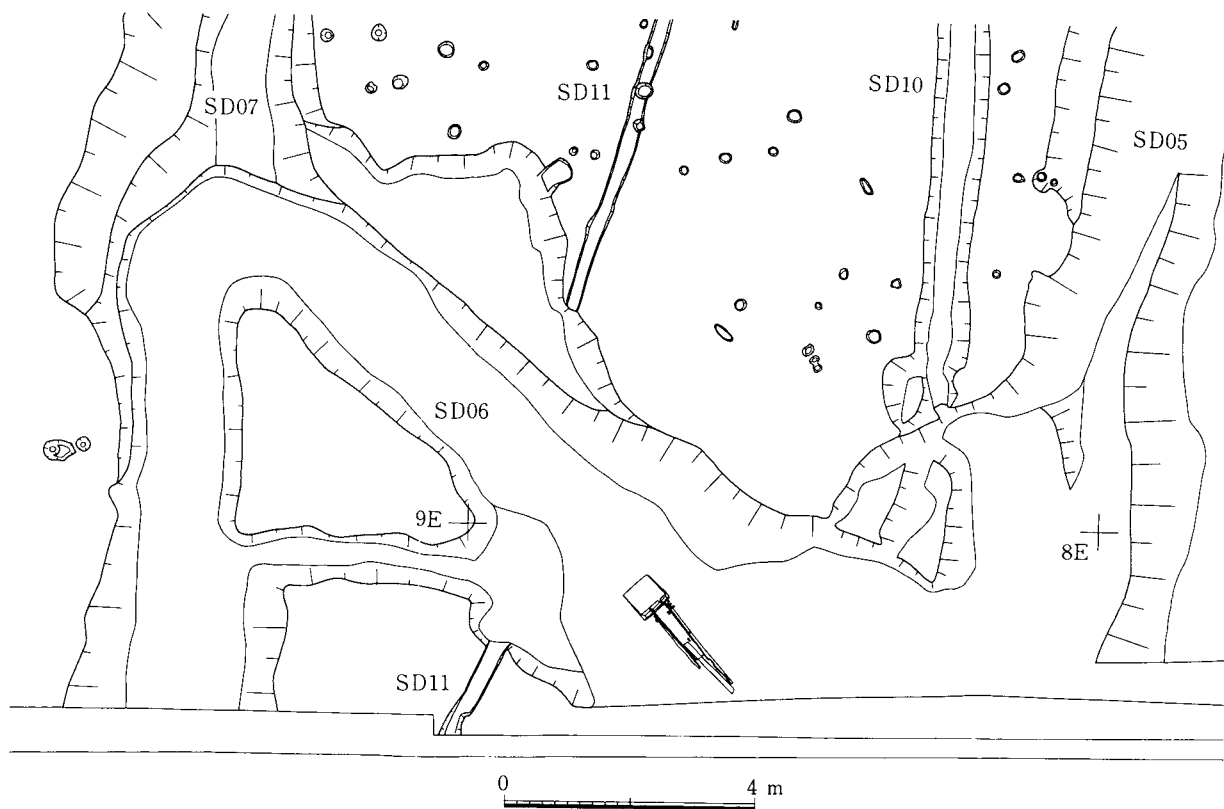


Fig. 57 SD06 実 測 図

第4章 遺物

第1節 土器

a) 弥生中期以前

第1～3次調査を通して出土しており、年次別に記述することとする。15はSD208出土、18はSD305出土、他は全てSD05出土である。出土層位は観察表を参照してほしい。

(1) 第1次調査出土土器 (Fig.58 1～14)

壺形土器 (1～6)

1・2は受け口状口縁を呈するものである。1は一度外反してまたゆるやかな段をもって短く立ち上がる器形である。2は大型壺であり、外反する口縁部の端を直上に拡張する器形である。ややそり返る口縁帯には、3本単位で1本2mm程度の太い櫛状具で波状文を1帯施す。頸部から肩部にかけては同じ工具で直線文を入れるものである。4はラップ状に大きく外反する広口壺である。口縁端部はヨコナデして面を取り、上方からハケ状具で連続して縦に刻んでいる。5はゆるく外反するものである。口縁端部は垂直に取られた面の下端を上方からハケ状具で縦に刻んでいる。6は4と同様な器形の広口壺である。面を取る口縁端部は、下端をハケ状具で下方から縦に刻む。また、口縁部内面は斜行文4帯を交互に(綾杉文と考えると2帯)口縁に沿って巡らせるが、最低1箇所以上で逆向きの斜行文を入れている。最外縁部はもっとも当たりが弱くて刺突文状を呈するが、他はハケの条と垂直に押し引いている。この綾杉文と頸部に施す3条の沈線文は同じ施文工具を用いているが、口縁端部のハケ刻みよりも条が細く、それはより細かいハケ状具か、もしくは二枚貝腹縁といった工具の可能性もあろう。

甕形土器 (7～14)

7は小型甕である。口縁部は短いが強屈曲して突き出す感じで、その端部は小波状に雑に処理される。8～12は外反する器形を呈する口縁部であるが、小破片であり、壺の可能性もある。8はわずかに外反する。ハケ状具により、先細りする端部には斜め方向の刻みを、口縁内面には綾杉文を巡らせている。胎土は礫を含まず、赤色酸化粒(焼土塊)を含んでいる。9は強く外反する器形で、面を取りヨコナデされた端部は、下端をハケ状具で斜め方向に刻む。口縁内面は斜行文を交互方向に3帯巡らせている。10は端部は外面下がりの面を取りヘラ状具で深く刻みを入れる。11は外反するが屈曲は少ない。端部には外面下がりの面を取り、その下端にヘラ状具による刻みを巡らせる。外面ほぼ前面に煤が付着するが、端部と内面には全く及んでいない。12は端部に外面下がりの面を取るが、その下端の角を潰すように密な間隔でハケ状具による刻みが巡らされる。ハケ調整は条が細く条間が広いものである。13は外反する口縁部であり、端部外面はハケ状具による刻みを巡らしている。14は屈曲が小さい器形を呈する。外反する口縁部は、端を強くヨコナデして中凹みとした後、端部上方から棒状具で押圧を加えて小波状とする。

(2) 第2次調査出土土器 (Fig.58 15～17)

15・16は壺形土器である。15は頸部から肩部であろう。細いヘラ状具で斜格子文を施している。16は外反してほぼ水平に大きく開く口縁部であり、端部は垂直に面を取る。口縁内面にはハケ状具による斜行文を交互に3帯施すが、6と同様に一箇所逆向きになる。17は甕形土器である。わずかに外反する

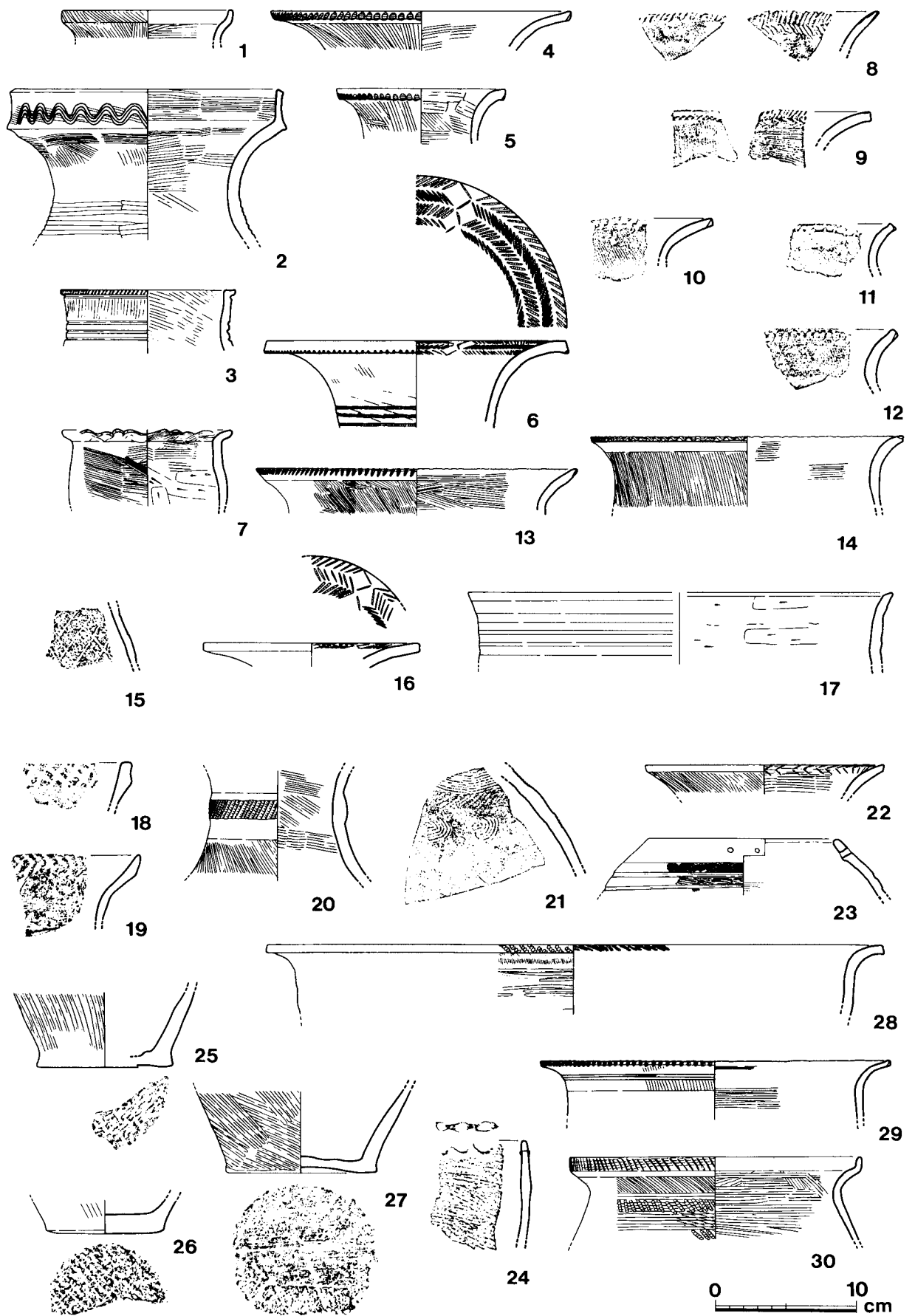


Fig. 58 弥生中期以前の土器（第1～3次）

が、全くくびれない器形を呈し、口縁端部は水平かやや内面下がりの面を取る。外面の口縁部直下には指頭ナデ文が凹線状に4～5条入る。内面は横方向の条痕を板条具でなで消したようである。部分的に成形時の継ぎ目を残している。17の胎土は他形の石英や砂礫を多く含むものである。

(3) 第3次調査出土土器 (Fig.58 18～30)

壺形土器 (18～23)

18・19は小破片だが、受け口状口縁を呈するものである。18は外面に粘土を貼り付けて口縁帯をつくったものであり、口縁端部は水平に面を取る。口縁帯にはヘラ状具による斜格子文が施される。19は一度ゆるやかに外反してから不明確な段をもってたちあがる器形を呈するもので、口縁端部は先細りである。口縁帯には綾杉文が施されている。20は頸部から肩部付近である。幅広だが薄い凸帯を持ち、ハケ状具を斜め方向に密に刻む。粒子が細かく、砂礫の含みが少ない精良な胎土である。21は肩部付近である。7本単位の櫛状具で施文が行われており、上から直線文(8条以上あるので複帯構成か)・連続斜行刻み・円弧文である。22は外反して開く口縁部であり、端部は垂直に面を取りヨコナデしている。口縁内面の綾杉文は、文様内の細かい条などから貝殻の腹縁によるものの可能性がある。23は無頸壺の口縁部であり、端部は丸くおさめている。口縁直下には、焼成前に穿った2孔1対の紐穴を有する。口縁直下には20よりもっと幅広の薄い凸帯を貼り、沈線で小凸帯状に切っている。その上半は斜位の縄文を、下半はヨコハケ状の文様を施している。胎土はきわめて緻密で砂礫の混じりが少ないものであり、他の土器と大きく異なる。

壘形土器 (24～30)

24～27は条痕調整を行うものであり、24は口縁部、25～27は底部である。24はほぼ直立する器形で、端部を指頭押圧することにより小波状口縁とする。バケツ状の器形を呈するものであろう。胎土は、大粒の砂礫と海綿骨片が器面に浮き出るほどに多く含まれるものである。25は底径10cm程度と推定され、胴部へはゆるやかに開いて行く。他形の石英が黒点状に浮き出る程に多く含まれる胎土が印象的である。26は厚手の円板状の底部であり、約半分が残存する。27は底部が全存するもので、かなり大型の土器と推定できる。外面調整は6本単位のよく揃った斜方向の条痕である。外面と底面には煤がタール状に付着している。28～30はハケ調整を行うものである。28はかなり大型の土器である。口縁部は短いものが水平方向まで大きく外反するもので、ほとんど張り出さない胴部がつくものであろう。4本単位の同一の櫛状具による加飾に富んだ土器であり、櫛1本の幅は約2mmと太い。端部は面取りし、斜めに刻む。口縁内面も端部の刻みと同じ方向に刻まれ、2回櫛をあてて8本の櫛を連ねている。さらに頸部直下には4本単位の櫛描直線文を2帯以上施している。継ぎ目の部分であるが、その処理は雑である。29は28と似た器形であるが、端部は自然な感じで丸めてヘラ状具で刻む。頸部は細いヘラ状具による沈線を2～3条施している。30は受け口状口縁を呈するもので、調整は粗いハケを多用している。口縁帯にヘラ状具による斜行文を施し、頸部直下にはハケ状具による斜行刻みを行う。煤は、外面のほぼ全面に厚く付着するが、口縁帯には全く付着していない点が、特記できよう。

b) 弥生後期から古式土師器

第1次調査から第3次調査までの当該時期の土器は、遺物箱で約350箱出土した。そのうち河道(SD05)出土の土器が240箱と7割近くを占めている。SD05出土資料には、かなり時期幅があるようである。これは、河道という遺構の性格からくるものであり、編年の考察をおこなうには無理がある。したがって、本章では土器の形態変化と製作技術の両面に注目したい。

(1) 型式分類

a 方法について

土器論をめぐる用語の概念規定は、それぞれの研究者の編年論とも絡んで多岐におよんでいる。そして、寺沢薫氏が指摘⁽¹⁾しているように安易な一括資料の羅列が混乱を起こしているようである。石川県で最近刊行された「漆町遺跡群」Iの報告書⁽²⁾において設定されている「群」の概念は、土器の器種の集合体に対して使われおり、様式とも型式とも異なる。また「〇〇式」なるものとも違うようである。しかし実際の使われ方は「5・6群土器に『型式』的評価を与えることを主目的⁽²⁾」のように、あるいは「土器群を15群に分類しそれぞれを型式ないし型式内での古・新相として⁽²⁾」のように、時間的観念を与えている。つまり型式でないようで型式であり、なぜ「群」なる意味不明の用語を用いているのであろうか。

さらに土器組成を追及するあまり、弥生から古墳時代における教科書的な器種構成の具現化を、そのために、組成の変化を進化論的に組列しようとする旨を指しているようである。つまり編年自体がその歴史的評価を優先させ、理解しづらい編年となっている。また器種組成の追及は様式理解を深めるために必要なことであるものの、その前提には個々の土器の「形」の変化をある程度理解することが必要である。ところが石川県ではそれまでの資料的制約によって前提となる土器の基礎研究が希薄であり、田嶋明人氏が示した「土器群」中の個々の土器の変化が分かりにくくなっている。

吉岡康暢氏などの編年で考えたことがある。それは、なにゆえ土器編年に歴史性・意義付けをしなければならないのであろうか。土器型式の説明のところ、例えば古墳時代的な土器様相が解体し古代的な萌芽があるとか、土器組成の胎胚期であるとか、このような意味付けを必要とするのであろうか。社会の変化と土器の変化は必ずしも一致するとは限らず、その歴史的な解釈を目的の第一にするのはどうであろうか。まずタイムスケールとして編年があり、それに歴史性が追随するものであろうし、意義付けには土器ばかりではなく他の諸条件と絡めねばならない。寺沢氏が「様式はあくまで後述する文化の低位概念であり、それを構成する一要素にすぎない」と述べているように、その限界を認識すべきであらう。⁽¹⁾

b 分類

分類には次のような手順をふみたい。

- 1) 個々の土器の形態上類似する特徴を有するもので、全体的なプロポーションが第一にあり、製作技法の異同が加味される。
- 2) 土器を各部分に分割し、その類型化をおこなう。
- 3) 土器の大きさは、その機能差に負うことが容易に推測されるものの、当初より形式として分離していたずらに型式を増やしてしまう結果になりかねないので、まず形態上の類似に重点をおいた。
- 4) 以上より個々の土器の諸属性を分割再構成してグルーピングしたものを「類」としたい。

壺

壺A 1－二重口縁壺で、装飾をもつもの。頸部に突帯をめぐらせる。装飾は、円形浮文やヘラによる刻み目がみられる。東海系の壺E 3の装飾と異なり、畿内的な装飾の系統の中で考えられるものである。体部の形状は不明。

壺A 2－二重口縁壺で口縁部が大きく開くもの。装飾はみられない。体部の形状は不明。

壺A 3－二重口縁壺である。壺A 1や壺A 2と異なり、外面の屈曲に対応する内面の段が不明瞭なものである。また段の屈曲も壺A 1やA 2に比べて不自然である。体部の形状は不明。

壺A 4－二重口縁壺で口縁部が比較的短く、頸部径が他の2例に比べて大きいもの。つまり、畿内的な二重口縁壺の頸部は、全体のプロポーションからみて締まっているが、本類型はそのようなことがな

い。体部の形状は不明。

壺B 1 - 短く直立する頸部から、短い有段状の口縁にいたる。体部は、やや潰れた球状を呈する。外面はハケ、内面はケズリである。

壺B 2 - 短い有段口縁に、長胴気味の体部をもち、丸底である。体部上半から口縁部内面にかけてミガキ、体部下半はハケ、ナデ、ケズリがみられ、体部下半のミガキが省略されていることがわかる。

壺B 3 - 短い有段口縁に、潰れた球状の体部をもち、わずかばかりの底部を有する。外面から口縁部

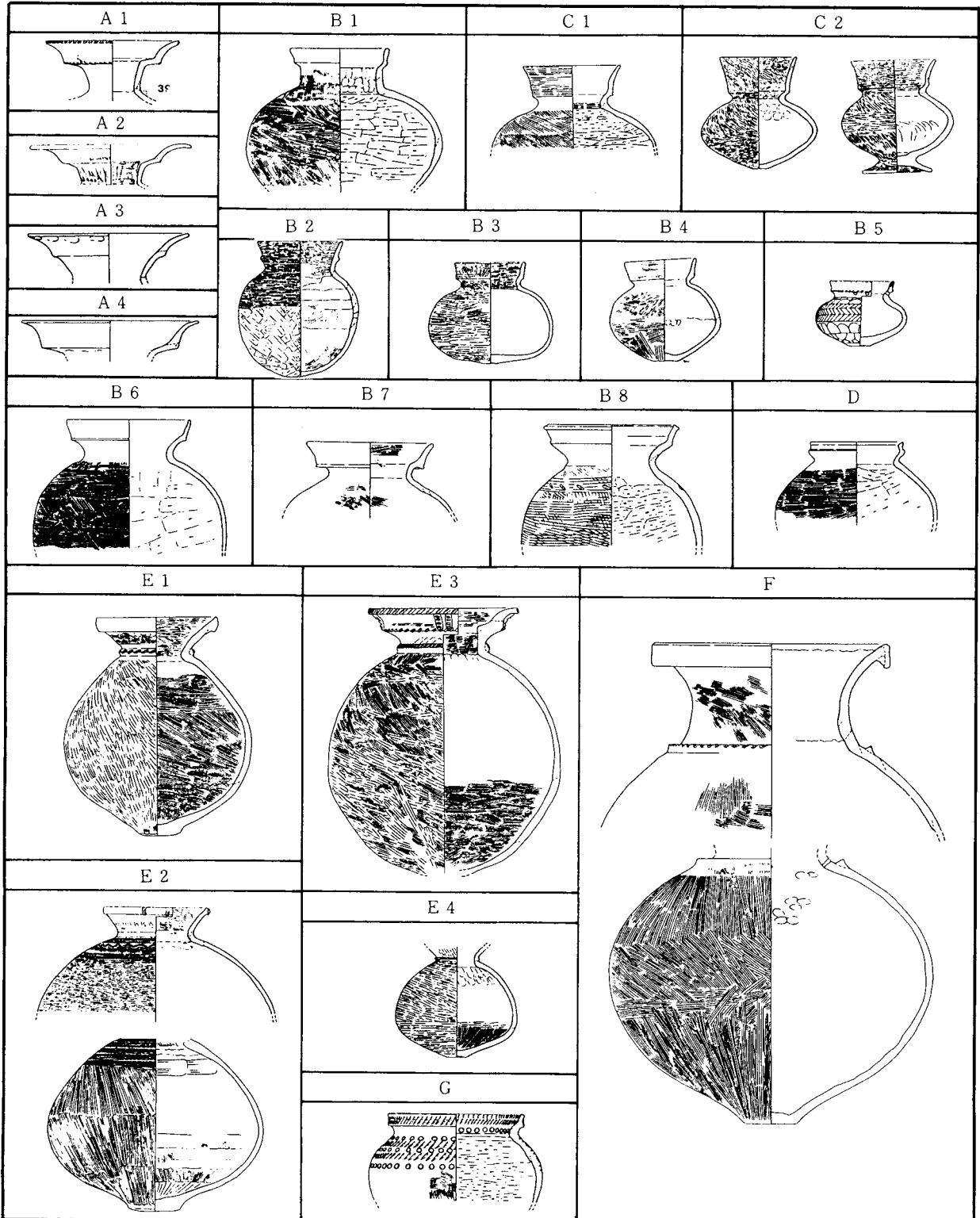


Fig. 59 壺形土器分類一覽図(その1)

内面にかけてミガキ、体部内面はナデである。壺B 2に類似する。

壺B 4 - 壺B 3と基本的に同じ類型と理解できようが、調整が全く異なる。短い有段口縁に球状の体部もち、明確な底部を有する。外面はハケ、内面はナデ。

壺B 5 - 壺B 3あるいはB 4に、文様のあるものである。蓋付きである。特殊例であろう。

このように、壺B 2～B 5は、類似する形状としてひとまとまりのものと理解できる。

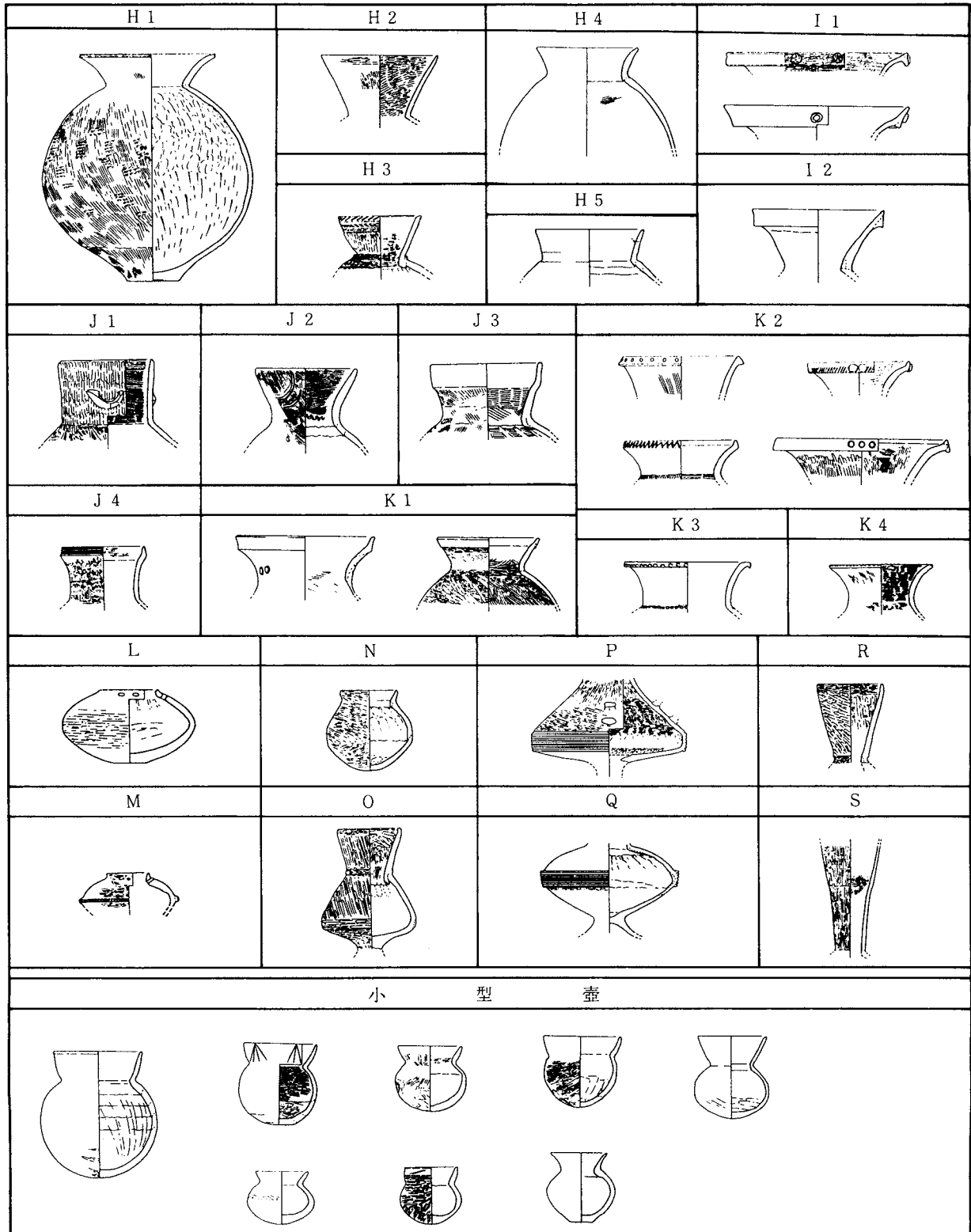


Fig. 60 壺形土器分類一覧図(その2)

壺B 6－長めの頸部から短い有段口縁をもつ。有段口縁の形態は、壺Bや壺Cと異なり壺B 8に近い。体部は長胴気味の丸底である。外面がハケ、内面がケズリで、甕と同じ調整である。しかし、丸底であるためか、底部内面に指頭圧痕を残している。

壺B 7－基本的には壺B 6と同じだと考えられるものの、口縁下端が垂下するもの。外面にミガキがみられ、特殊例かもしれない。

壺B 8－壺B 6よりも口縁部が開き、端面をもつ。肩部には装飾をもつもの（列点文）もある。調整も壺B 6と同じだが、体部下半がないので、指頭圧痕を残しているかどうか不明。甕L 4に類似し、甕と考えた方が良いかもしれない。⁽³⁾

壺C 1－有段口縁甕のような形状の口縁をもつ壺で、口縁部に擬凹線をめぐらせている。体部下半の状態は不明。内面はケズリ、外面はハケ。

壺C 2－壺C 1と同じような有段口縁だが、擬凹線をもたないもの。体部中央付近に体部最大径があり、算盤玉に近い形状をなす。Fig58に示したものはミガキを施しており、脚をもつものもある。しかし、ハケやナデによって作られているものもあり、同じ器形で精製品と粗製品の二種が認められよう。

壺D－短い有段口縁部が内傾し、端部が丸く肥厚するもの。有段口縁部外面に、強いナデをおこなったためと思われる段がある。体部径の割に頸部はかなり締っている。外面はハケ、内面はケズリで、甕と同じような調整である。

壺E 1－口縁部は帯状に面をなし、くの字に屈曲する頸部に装飾をもつ突帯をめぐらせている。口縁部の端面に装飾をもつものもある。体部最大径は体部中央よりやや下にあり、下膨れのプロポーシオンである。しっかりした底部をもつ。外面はミガキ、内面はハケ（板ナデ状のものもある）。

壺E 2－くの字の小さい口縁から下膨れの体部そして底部をもつ。口縁部は小さな面をもつ。口縁端部と肩部に装飾をもつ。肩部の装飾は、ハケ工具によるものである。外面はミガキ、内面はナデ。

壺E 3－二重口縁壺だが、壺Aと異なり装飾をもつものである。また頸部に突帯をめぐらせている。装飾は、口縁部と突帯に施している。装飾の施文具や方法は、他の壺Eと同じである。外面はハケ後ミガキだが、粗いミガキとなっている。

壺E 4－壺E 1の小型のものである。頸部の装飾がないことと底部が小さいので区分した。胎土からみると、壺E 1よりも精製品である。

壺F－大型の壺である。頸部に上を向くような三角形の突帯がある。突帯に装飾を施すもの、あるいはその装飾が突帯の上下に及んでいるもの（竹管文）など個体差がある。口縁部は面をつくり下端を垂下させている。外面はハケ・ミガキ、内面はナデ・ミガキである。

壺G－短い有段口縁をもつ壺である。口径が大きいため鉢に分類できるかもしれない。口縁部内外面から体部上半に、竹管文とヘラ先の押捺文が施されている。外面はハケ、内面はミガキ。1個体だけの出土である。

壺H 1－直口壺系で、くの字に外反する口縁と球形の体部から上げ底気味のしっかりした底部に収まる。外面はハケ後ミガキだが粗い調整でタタキ痕を残している。内面は、下半をケズリ上半をナデ。

壺H 2－壺H 2よりも口縁の外反が緩く直線的なもの。壺H 1の個体差かとも理解できるかもしれない。ともかく、調整方法の違いから口縁を意識して作り分けている可能性が大きいと判断した。内外面ともミガキ。

壺H 3－壺H 2に装飾をもつもの。頸部に突帯をもつものもある。長胴で平らな底部を持つ。装飾は、口縁部と頸部の突体と肩部にヘラ描きによるものを施している。外面から口縁部内面にかけてミガキ、内面はハケ・ナデ。

壺H4－壺H1に類似するが、それよりも短く外反する口縁をもつ。あまり肩の張らない体部のようなものである。調整は不明。

壺H5－壺H4よりも口縁の外反が緩く直線的なもの。直口壺には壺H2のように開くものが多いが、壺H5はあまり開かない。ミガキを施すものもあるようだが、調整はよくわからない。

壺I1－口縁端部は、下端を垂下させることによって面をつくっている。端面に円形浮文などの装飾を施す。内外面ミガキ。

壺I2－壺I1のように口縁部に面を作っているが、装飾のないもの。そのためか、口径もより小さく、端面以外は壺H1によく似た印象を与える。

壺J1－長頸壺系である。口縁は上方に直線的に伸びる。外面はミガキ、内面はナデ・ハケである。記号文あり。

壺J2－口縁くの字を呈する長頸壺である。口縁の長さは壺J1と同じである。外面はハケ、内面はハケ・ナデで、ミガキを施していない。記号文あり。

壺J3－口縁部は長頸壺のように直立するが、口縁の上半分が有段状になっているもの。その部分のみヨコナデなので、ヨコナデによって有段状にしたものである。内外面ハケだが、外面は部分的にナデによって消されている。

壺J4－口縁部は長頸壺のように直立するが、口縁端部が屈曲して面をなすもの。本例では擬凹線が施されている。外面はミガキ、内面はナデ。

壺K1－口縁部はくの字に屈曲し、口縁端部に面をもつ。壺J1や壺J2に類似する印象がある。外面はハケ後僅かばかりのミガキ、内面はハケ。

壺K2－口縁部はくの字に屈曲し、口縁端部に小さい面をもつが、多岐に及ぶ形状を呈する。口縁端部に竹管文やヘラ描き文などの装飾をもつ。ミガキやハケ、ナデがみられる。

壺K3－壺K2と基本的に同じだが、端部の作り方が異なるものを区分した。すなわち、壺K3の端部は横方向にひねり出している。

壺K4－緩やかに屈曲する口縁から、装飾ある端部にいたる。装飾は、弥生中期によくみられるものである。内外面ハケメ。

壺L－無頸壺である。出土量は非常に少ない。算盤玉状の体部から小さな底部にいたる。外面はミガキ、内面はナデ。

壺M－短頸壺である。出土量は非常に少ない。算盤玉状の体部中央にヘラによる刻み目の入った突帯をもつ。口縁は短く直立する。赤彩が認められ、小さいながら精製品である。

壺N－短頸壺である。壺Mと共に出土量は少ない。口縁部は僅かに屈曲し丸底である。外面はミガキ、内面はナデ。あまり類例をみない器形である。

壺O－脚付きの壺で、頸部に突帯、平面三角形に近い体部をもつ。外面から口縁部内面にかけてミガキ、体部内面はナデ。

壺P－口縁部は欠損のため不明。三角形の体部に脚をもつ。体部下端に幅の広い擬凹線を施す突帯をもつ。把手をもっているが、特殊な事例かもしれない。外面はミガキ、内面はハケ。内面の成形痕を残していない。

壺Q－口縁部は欠損のため不明。算盤玉状の体部中央に、擬凹線をもつ幅の広い突帯、脚をもつ。外面はミガキと思われ、内面はナデ。内面に輪積み痕や絞り痕などの成形痕を残す。壺Sが口縁部になる。

壺R－口縁部のみである。頸部との境に小さく段をなす。内外面ミガキ。

壺S－口縁部のみである。口縁途中に小さく段をなす。その段部分の内面にハケが施され、口縁成形時の接合部分になるのであろうか。壺Qの口縁部に相当する。

小型壺

個体差が激しいので類の細分は不可能である。ただし、「類型」として区分したいものは、小型壺の一括から区別した。さらに、小型壺としながら小型甕とした方がよいものなど存在する。全体的に装飾をもつものやミガキを施した精製品は少ない。また、小型丸底壺の口縁部の短いものに近い形態や、外面がハケ、内面がナデのものも多く認められる。このように、小型壺は器形の特徴から系統立てて考えることが難しく、その製作にあたっていくつかのモデルが存在したと考えられよう。また、小型製品の壺と甕の形態的類似性を示すものが多くみられ、その製作・あるいは使用に際して、区別しがたいものが存在したと考えられる。

甕

甕A類は「布留形の甕」である

甕A 1－口縁端部が肥厚し、球形の体部から丸底をもつ。頸部に強めのナデを施してそれを明確にしている。口縁端部の肥厚の状態は内方への傾斜が少ない。外面がハケメ、内面がケズリ、外面のハケは最初縦位の方向で施された後、体部上半のみ再度横位のハケを施す。布留形甕のオリジナルに最も近い形態・特長を有する。

甕A 2－口縁端部が肥厚し、長胴形の体部から丸底をもつ。甕A 2も頸部に強めのナデを施してそれを明確にしている。口縁の肥厚の形態も甕A 1と同じである。肩部にヘラ描きの文様をもつものもある。調整は、甕A 1と同じだが底部内面の指頭圧痕の範囲がより広がっている。これは体部が長くなったためと思われる。

甕A 3－口縁端部の肥厚の状態が、内側に小さく突出するようにある。体部はやや肩の張る球形を呈し、外面にハケ、内面にケズリを主としナデがみられる。ハケは甕A 1や甕A 2と同じ方法であるが、横方向のハケを施さないものもある。

甕A 4－口縁端部の肥厚の状態が、甕A 1などと違い内方への傾斜の強いもので、肥厚の状態も薄くなっている。外面ハケ、内面ケズリやナデと個体差がある。

甕A 5－甕A 3に類似する。口縁端部の肥厚の状態が甕A 3より下方を向く。調整は他と同じである。

甕A 6－口縁端部の肥厚の状態が形骸化し、面状あるいは外方への突出となって面を作る。調整方法は他と同じである。

甕B－いわゆる「庄内形」の甕である。口縁端部は小さく上方に摘み上げられ、球形の体部で肩が張ることはない。体部上半外面は庄内式特有の細いタタキで、後わずかにハケ。下半は斜に上げられたハケがタタキを消している。内面は、全てケズリで口縁内面にハケ。

甕C類～甕I類までは「有段擬凹線をもつ甕」である。また、甕C類は口径27cm～30cmを測る大形品である。

甕C 1－口径27cm前後を測る。口縁部はほぼ直立し端部のみやや外反する。口縁内部に指頭圧痕はない。外面はハケ、内面はケズリ。

甕C 2－口径31cm前後を測る。口縁部はほぼ直立し端部のみやや外反するものもある。口縁部内面には指頭圧痕がある。外面はハケ、内面はケズリ。ミガキがみられるものもあるが、ナデの代りにヘラ先

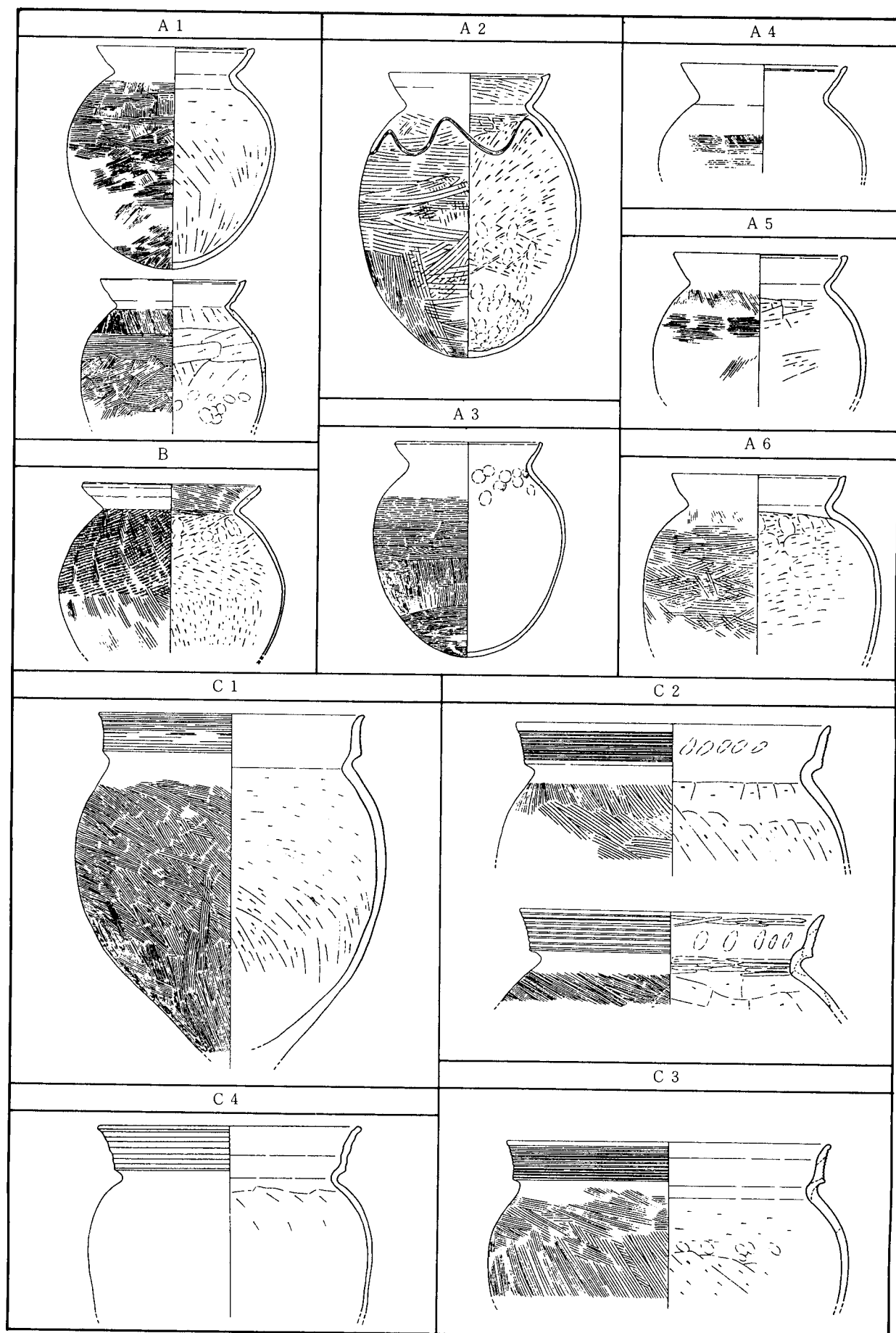


Fig. 61 甕形土器分類一覽図(その1)

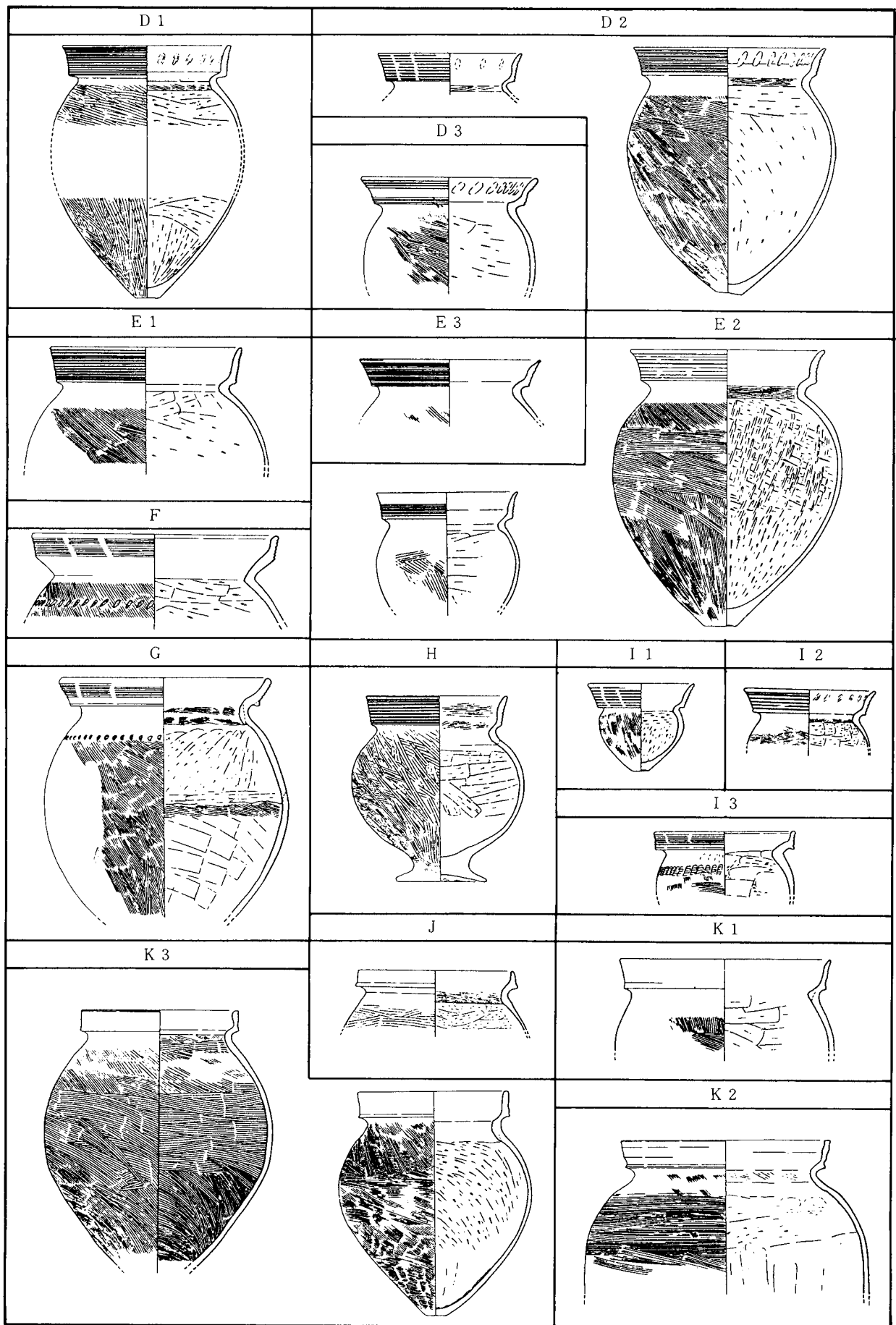


Fig. 62 甕形土器分類一覽図(その2)

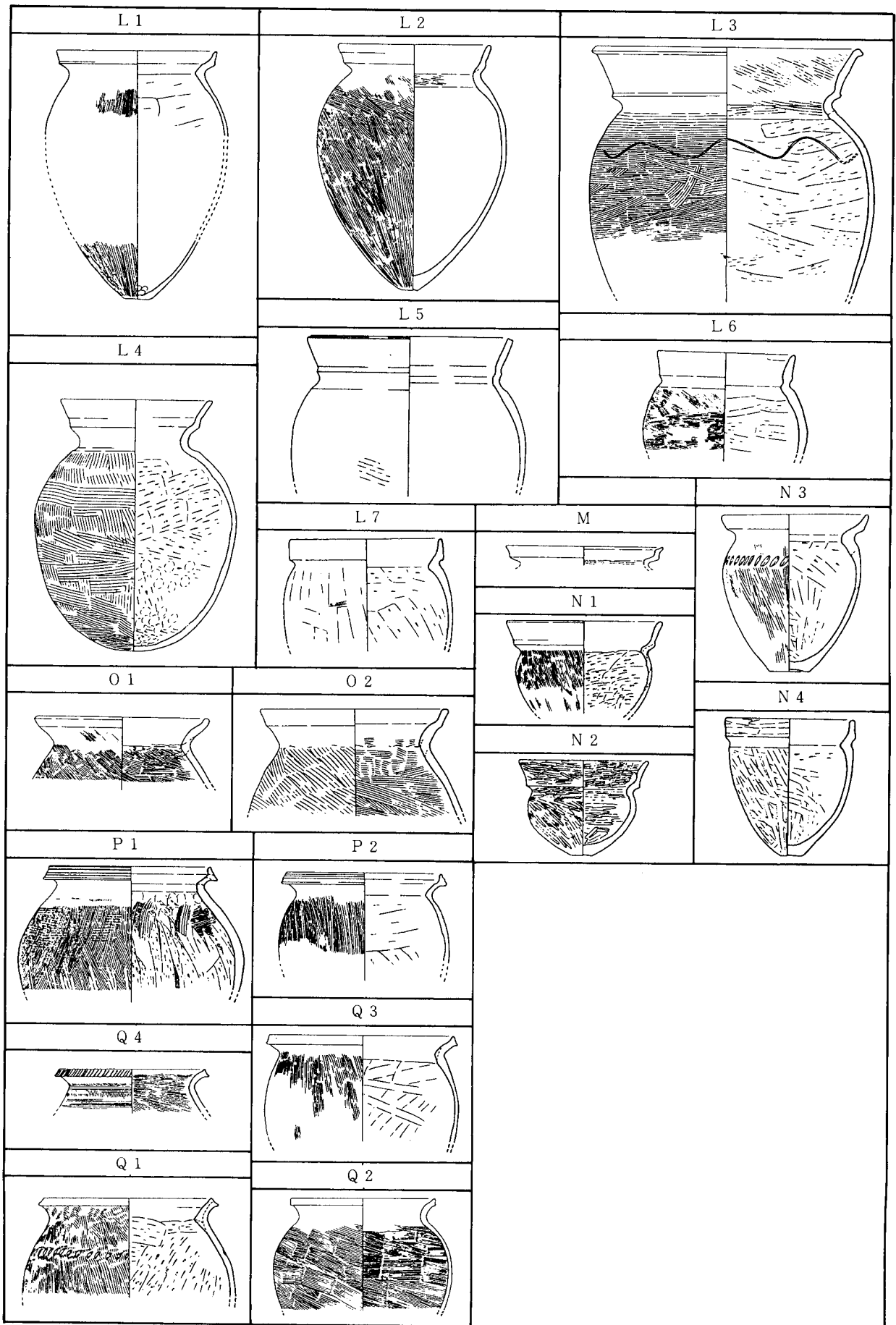


Fig. 63 甕形土器分類一覽図(その3)

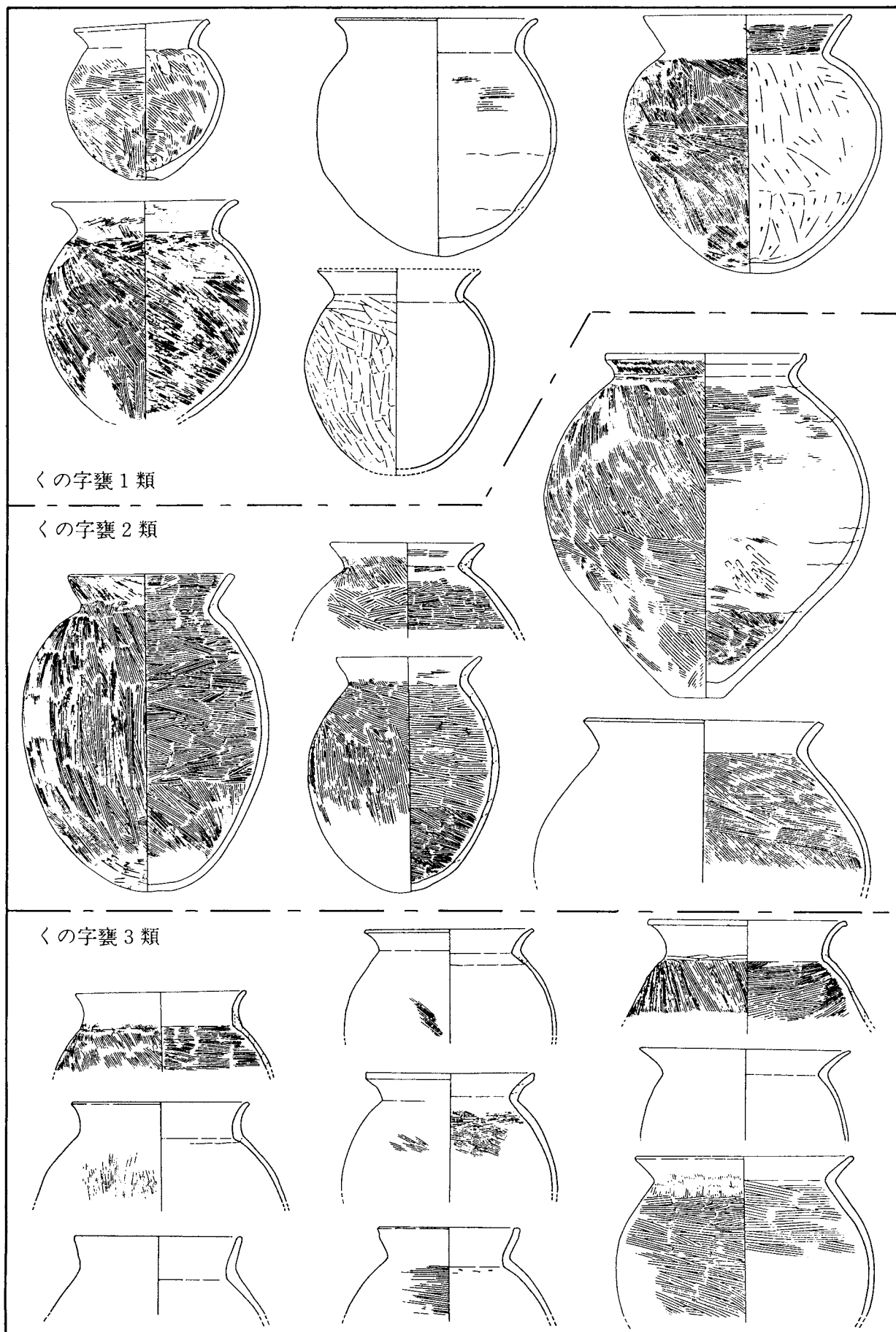


Fig. 64 襖形土器分類一覧図(その4)

によって撫でつけている特殊例もある。

甕C 3 - 口径30cm以上を測る。甕C 1 同様口縁部はほぼ直立し端部のみやや外反する。口縁部内面には指頭圧痕がない。外面はハケ、内面はケズリ。

甕C 4 - 甕C 1 と基本的に同じだが、口縁部が擬凹線ではなくて凹線状になっている。

甕D類は口縁部内面に指頭圧痕がみられる。

甕D 1 - 口径20cm前後を測るが、個体差がある。口縁は直線的に立ち上がる。口縁部内面に指頭圧痕がある。長胴の体部に小さな底部がつく。外面はハケ、内面はケズリで、頸部内面にハケを施すものが多い。

甕D 2 - 口縁は直立し端部のみやや外反する。調整等は甕D 1 と同じである。

甕D 3 - 口縁は直立せず斜めに開くもの、あるいは端部のみ大きく外反するもの。頸部内面にハケはみられないようである。

甕E類は口縁部内面に指頭圧痕がない。

甕E 1 - 口径20cm前後を測るが、個体差がある。口縁は直線的である。甕D 1 と異なり口縁部内面に指頭圧痕がない。長胴の体部に小さな底部がつく。外面はハケ、内面はケズリで、頸部内面にハケを施すものもある。

甕E 2 - 口縁は直立し端部のみやや外反する。調整等は甕E 1 と同じである。

甕E 3 - 口縁は直立せず斜めに開くもの、あるいは端部のみ大きく外反するもの。頸部内面にハケはみられない。

甕F - 頸部がくの字に屈曲し有段口縁に至る。つまり、甕DやEの口縁とは印象を異にする。外面ハケ、内面ケズリで頸部のハケはない。肩部に装飾（刺突文）あり。

甕G - 有段口縁の下端が垂下し大きく広がるもの。外面にハケ、内面下半にハケ（板ナデあり）、上半にケズリ。肩部に装飾（刺突文）あり。

甕H - 脚付きの有段擬凹線甕である。口縁は直線的。外面はハケ、内面はケズリで、口縁部内面はミガキを施す。全体的に丁寧な作りである。口縁部内面のミガキ以外は有段擬凹線の甕と同じである。甕として特殊例であろう。

甕I 1 - 小型の甕である。体部の割に口縁部が大きい。しかも口縁部は直線的だが大きく広がる形状である。外面はハケ、内面はケズリ。口縁部内面には指頭圧痕はない。

甕I 2 - 小型の甕である。口縁部は開き気味で端部に至ってさらに外反する。口縁部内面に指頭圧痕をもつ。甕D 3 の小型品である。

甕I 3 - 小型の甕である。口縁部は直立し、肩部に装飾（刺突文）を施す。

甕J類～甕N 4類まで「有段口縁をもつ甕」だが擬凹線のないもの。

甕J - 口縁部がやや内方に小さく伸び、下端が突出する。外面ハケ、内面ミガキで、頸部内面にハケが見られる。

甕K 1 - 有段擬凹線をもつ甕に類似する口縁をもつ。外面がハケ、内面にケズリである。

甕K 2 - 甕K 1 よりも頸部が締るもの。口縁部の下端が小さく突出する。外面は横位のハケ、内面はケズリ・ハケ・指ナデなど個体差が認められる。外面の横位のハケは、布留形甕と違い2次的に施されたものでない。

甕K 3 - 直線的に直立する口縁部をもつ。外面はハケ、内面はハケのものとケズリと2様が認められる。小さな底部をもつ。

甕L 1 - 短く直立する有段状の口縁部と長胴の体部から小さい底部をもつ。外面はハケ、内面はケズ

り。なかには棒の先によってこすったようなケズリがある。頸部内面にハケはない。

甕L2－甕L1よりも口縁部が長いもの。頸部内面に甕Dや甕E等のようにハケがある。つまり甕L1とL2は頸部より上の作り方が違うと考えられ、違う系譜を引く器形と捉えることができるかもしれない。

甕L3－口径25cm以上を測る大形品で、大きく発達した有段口縁をもつ。外面はハケ、内面はケズリで、頸部から口縁部にかけてハケが見られる。

甕L4－壺B8と同じである。本類型は、見方によって壺とも甕ともいえる器形を呈する。外面に煤を付着していることが多いので、甕のような使われ方をしたと思われる。

甕L5－甕L3の有段口縁が退化したかのような形状で、有段部分が痕跡程度に残っている。内外面ハケ。

甕L6－甕L5のように退化した有段口縁で、より小型品である。外面ハケ、内面ケズリ。

甕L7－甕L6に類似する。外面ハケ（板ナデ）、内面ケズリ。

甕M－いわゆる受口状口縁。体部の形状や調整等不明。

甕N1－小型の甕である。擬凹線をもつ甕I1と形態的に類似する。外面ハケ、内面ケズリ。

甕N2－形態は甕N1に類似するが、内外面全面にわたってミガキを施すもの。調整方法から、鉢と考えることもできる。

甕N3－甕L1の小型品である。調整等同じであるが、本例には肩部に装飾（刺突文）がある。

甕N4－甕L7に類似するが、体部がより細く小型化しているもの。内外面ミガキ。調整方法から鉢と理解することもできよう。

甕O1－口縁が途中緩く屈曲して有段口縁状をなすもの。強いナデを加えることによってそのように作っている。内外面ハケ。

甕O2－甕O1よりも有段口縁状の屈曲が強いもので、意識的に摘み上げているようである。内外面ハケ。

甕P1－口縁の上下両端を伸ばすことによって面を作り出し、そこに擬凹線を施す。体部は球形を呈する。外面はハケ、内面はナデやハケの後、器面調整のような軽いケズリをおこなっている。

甕P2－口縁の作りは、甕P1と違い、主に上端を伸ばしている。頸部の締め具合も甕P1ほど強くない。外面はハケ、内面はケズリである。

甕Q1－くの字に屈曲する口縁をもつが、体部に対して短いものである。口縁端部は面をもつ。体部径は、口縁径よりも少し大きい程度である。無文のものが多いが肩部に装飾（刺突文）をもつものもある。外面はハケ、内面はケズリ。

甕Q2－甕Q1と同じような形態だが、より体部が張り装飾のないもの。内外面ハケ。

甕Q3－甕Q1と同じような形態だが、より頸部が締って屈曲し、口縁端面もしっかりしているもの。外面ハケ、内面ナデだが、ハケの方がより一般的と思われる。

甕Q4－甕Q1の端部に装飾をもつもの。内外面ハケ。

本稿で言う「くの字甕」とは、単に口縁形態から区分している。くの字甕の型式設定は、「漆町遺跡」Iで設定されたような細かい分類に準拠しようと試みたものの、なかなか難しいことがわかった。これは、くの字甕の形態差、個体差が大きいことによっている。したがって本報告では、3類に分類した。

くの字甕 1類

やや外反気味のくの字と球形・丸底の体部をもつ。口縁端部は丸く収めるものが多いようである。外面はハケで内面はハケ・ケズリ・ナデが認められる。

くの字甕 2類

短かくくの字に屈曲する口縁部と、長胴の体部をもつ。丸底のものと底部のあるものの2者が認められるが、平底のものが区分できるかもしれない。内外面いずれもハケである。

くの字甕 3類

口縁部しかわからないものを一括した。その中で、口縁部の屈曲が弱く上方を向くものや、くの字甕1類のように大きく外反するが端面をもつものなど、いくつかのまとまりが見られるようであるが、どのような意味があるのかよくわからないので、ここではあえて細分しなかった。内外面ハケである。

高杯

杯部と全体的なプロポーションから16類に、脚部から10類に区分した。脚部の分類はあくまでも補助的なもので、おそらく全形のわかるものが見つくと、それで一つの型式として設定できるものと思われる。

高杯A－弥生後期的で口径が大きく屈曲する杯部である。屈曲してのち口縁端部までの上半が短いもので、外反の度合いも弱い。内外面ミガキである。

高杯B－高杯Aよりも杯部上半が発達し、屈曲の度合いも大きい。口縁端部は丸く収めるものや、端部に段をなして幅の広い面を作っているものもある。類例の増加をまって、細分すべきと考える。内外面ミガキ。

高杯C－基本的に高杯Bと同じだが、それに把手のつくものである。口縁端部は丸く収め、口縁の外反の度合いも強いようである。実質的に、把手として用をなさないが、装飾として取り付けられていると思われる。内外面ミガキ。円盤充填法。

高杯D－高杯A～Cよりも口径は小さく、杯部が深い。杯部上半はよりいっそう発達し、下半は浅い鉢状を呈し、杯部の底は平らである。杯部の上半と下半のつなぎめは擬口縁状の接合面をもつ。脚部は円筒状の脚柱部からハの字に開く裾部で、屈曲部はなだらかである（脚4類）。脚部内面以外はミガキ。円盤充填法。

高杯E－高杯Dの杯部下半が浅い鉢状をなさずに直線的になっているものである。そのために杯部の上半と下半との境には鋭い稜をもつ。脚部はおなじ4類だが、高杯Dよりも細く裾の広がり具合も少ない。脚部内面以外はミガキ。円盤充填法。

高杯F1－布留式を代表する形態をもつものを高杯Fとして、さらに細分した。杯部は途中で屈曲するが不明確で、丸みをもつ円筒状の脚柱部から強く屈曲して裾部に至る。口径と脚裾径に大きな差はない。脚柱部内面には絞り痕がみられる。脚部と杯部との接合方法ははっきりわからないが、高杯A～高杯Eとは異なり、両者を完成させて接合したものであろう（接合付加法か）。内外面ミガキで脚柱部は横方向のミガキである。

高杯F2－基本的に高杯F1とよく似ているが、杯部上半が高杯F1よりも発達し明確な稜をもつものである。脚柱部から脚裾部は鋭く屈曲する。脚柱部内面に絞り痕あり。おそらくミガキと思われる。接合付加法。高杯F1のコピーのような感じを与える。

高杯F3－脚裾部の形状は不明。杯部の稜は、高杯F1・F2よりも鋭く突出している。これは、横方向のミガキによって屈曲を強調させているようである。それ以外のミガキは縦方向である。杯部上半

はやや外反気味である。脚柱部と杯部の接合部内面には、鋸歯状に施されたハケがみられ、接合を容易にするための細工であろう。接合付加法？

高杯G－丸い椀状の杯部を呈する。横方向のミガキのみである。脚部は不明。接合方法不明。

高杯H－須恵器の杯蓋をあお向けにしたような形を呈する。すなわち、杯部上半はほぼ直線的に上がり端部に至って小さく外反する。杯部下半は浅い皿状で、外面の上半部との境に刻み目の突帯がある。内外面横方向のミガキが見られるが、比較的粗く、成形時の調整（ハケ・ナデ）が見える。

高杯I－高杯Hと同じ系列に属すると考えられる。杯部上半は直立することなく外反してより長く

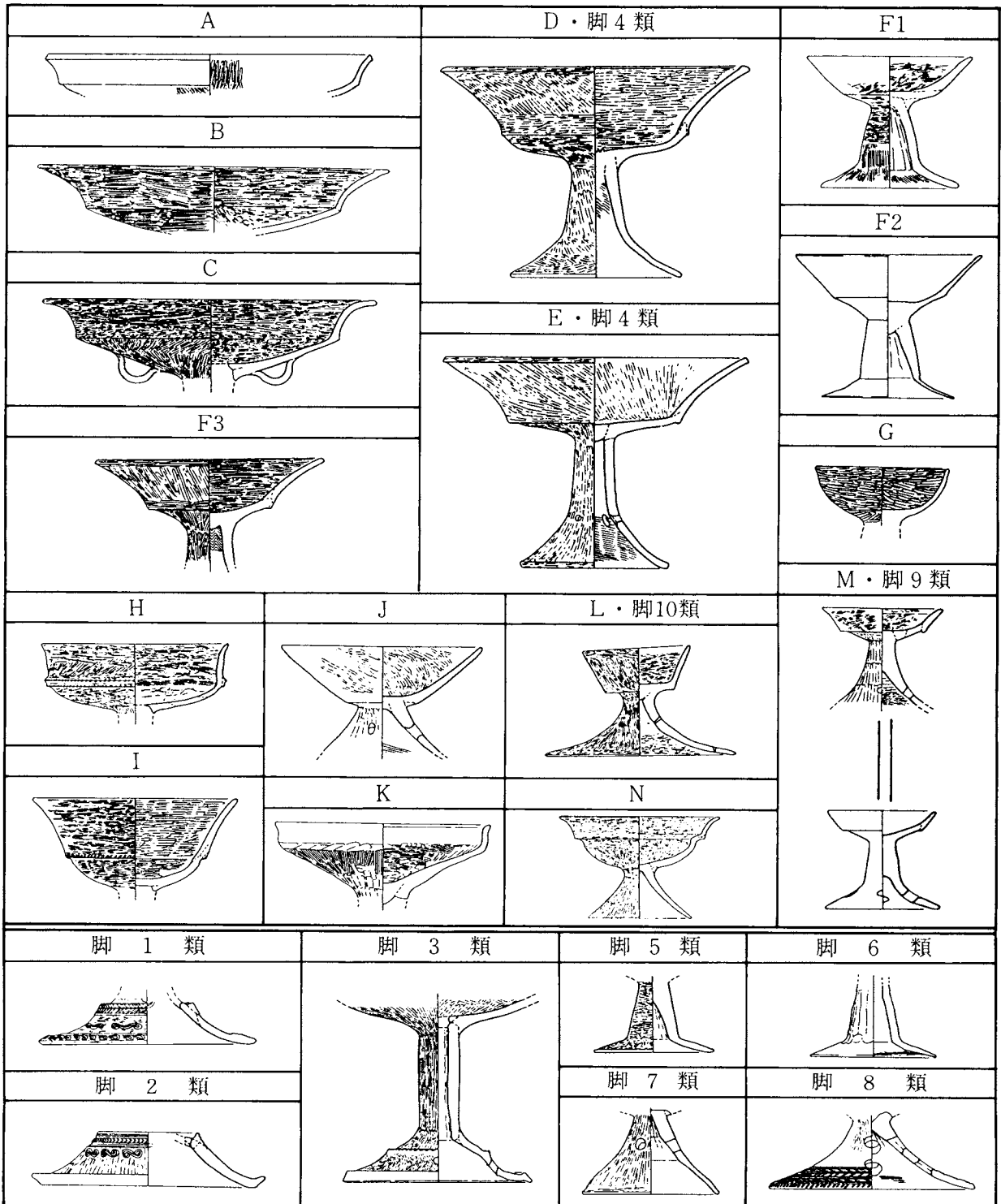


Fig. 65 高杯形土器分類一覧図

なっている。上半と下半とは有段を作ることによって区画して、刻み目を施す。ミガキは高杯Hよりも丁寧である。

高杯J－杯部上半が大きくそのほとんどを占める。すなわち、脚部より少し大きな杯部下半で上半部は直線的に伸びている。脚部は八の字上に開き、透かし（円）を持つ。脚端部は欠損しているが、脚7類のような形状となる。脚部内面がハケの他は、丁寧なミガキを施されている。脚を作ったのちに杯部を積み上げていると考えられる。

高杯K－器台のような形状である。杯部上半は受け口状で口縁端部は小さく外反する。杯部下半は直線的で逆八の字状を呈する。内外面ともハケが見られ、それ以外にも板のようなものでナデたような調整が見られる。脚部の形状は不明。円盤充填法。

高杯L－小さな杯部に大きく広がる八の字状の脚をもつ（脚8類）。杯部下半は底面となり上半に続く。脚柱部内面以外は丁寧なミガキが認められる。

高杯M－杯部を有段口縁状に作り、脚柱部が中実の大きく開く脚部となると予想される（脚9類）。脚の形状がやや異なるが、ミニチュアとなったものも存在する。全体的に丁寧なミガキである。

高杯N－有段口縁の鉢状の杯部をもち、脚7類の脚をもつ。台付鉢としなかったのは、脚の占める割合が大きいことによる。脚内面以外は全て丁寧なミガキである。

脚の形状の分類を行う。

脚1～3類は、いずれも棒状の脚柱部をもつものとまとめることができよう。その中で、脚裾部の形状は個体差があるので分類の基準になりえるか検討を要する。

脚1類－脚と脚柱部との境が段状に屈曲するもので、脚裾が帯状に肥厚するもの。しかし、本類型の特徴として、脚裾の形状は重要ではないかもしれない。段状の屈曲部は、粘土を張り付けることによって作っている。ヘラ先による刻目文やスタンプ文がある他、赤彩も施されている。

脚2類－基本的に脚1類と同じだが、屈曲部が小さく上に摘み上げられたようになっていることと、脚裾の形状が上に跳ね上げて面状をなしていることが異なる点である。刻目文やスタンプ文、赤彩も同じである。

脚3類－脚1類と同じだが、装飾が見られないこと、脚裾の形状が異なること、四方の円形の透かし孔がある。

脚4類－高杯D・Eの脚部である。脚柱部から脚裾部にかけて緩やかに屈曲して広がるもの。円形の透かし孔をもつものが一般的だが、それが無いものもある。外面は縦方向のミガキで、脚柱部内面の絞り痕はナデ等の調整によって消されたようである。

脚5類－脚4類よりも屈曲の度合いが強く、稜線の入るものもある。杯部との接合部分が中空のものの中実のものが認められる。中空のものは、高杯F1の脚部となる。本来的に、中空のものと中実のものとは、典型的に区別されるべきものであろう。外面は横方向のミガキ（脚柱部）と縦方向のミガキ（脚裾部）を併用し、内面に絞り痕を残す。

脚6類－形状は脚5類と同じだが、脚柱部外面に面取り様の調整が見られる。面取り様の調整はナデと思われる。石川の古墳時代前半期の高杯で面取り様の調整をもつものは皆無に等しいので、特殊なものと考えられる。したがって、外面ナデ調整のものとしてまとめたい。

脚7類－「ハ」の字に広がるもので、直線的なものや端部が膨らむようなものなど個体差があるようである。高杯Jの脚部である。円形の三方透かし孔がある。外面ミガキ。

脚8類－脚7類よりも大きく裾広がりのもので、円形の透かし孔をもつ。高杯Jの脚部になる可能性が大きい。個体によってはヘラによる装飾をもつ。外面ミガキ。

脚9類-大きく裾広がり脚になると予想される。脚柱部は中実である。透かし孔がある。外面はミガキ。

脚10類-大きく裾広がり脚で、脚柱部は中空である。小さな透かし孔がある。

器台

10型式に区分したが、それでも分類できないものがあった。ただし、10型式中小型器台といわれているものやそれに類似するものをC₁~C₃・D・E・Fの6型式に細分した。

器台A-受部の口縁と脚裾に幅広の面をもち、そこに擬凹線をめぐらす。大きな受部とそれに匹敵するような脚部をもち、両者をつなぐ体部は細く締まっている。外面および受部内面と脚裾内面はミガキ。ほとんど全面にわたって丁寧な調整が施されている。

器台B-器台Aの形態を引き継いでいる。口縁は幅広の端面をもち、脚部は高坏の脚4類に類似している。そのために受部の大きさに比べて脚部が小さくなり、アンバランスな感じを与える。ミガキの範囲は外面と受部内面のみで、器台Aに比べて手抜きがみられる。

器台C-小型器台である。1~3に細分した。C1からC3へという流れは、オリジナルな状態から形が崩れていく状況である。器台C1はやや内湾気味の受部に直線的に「ハ」の字に広がる脚部をもち、底径は、口径を大きく凌駕し、安定したプロポーシオンとなっている。調整は、器台Bと同じである。なお、脚のミガキは縦方向である。器台C2は器台C1と同じような形状を示すが、小さく外反気

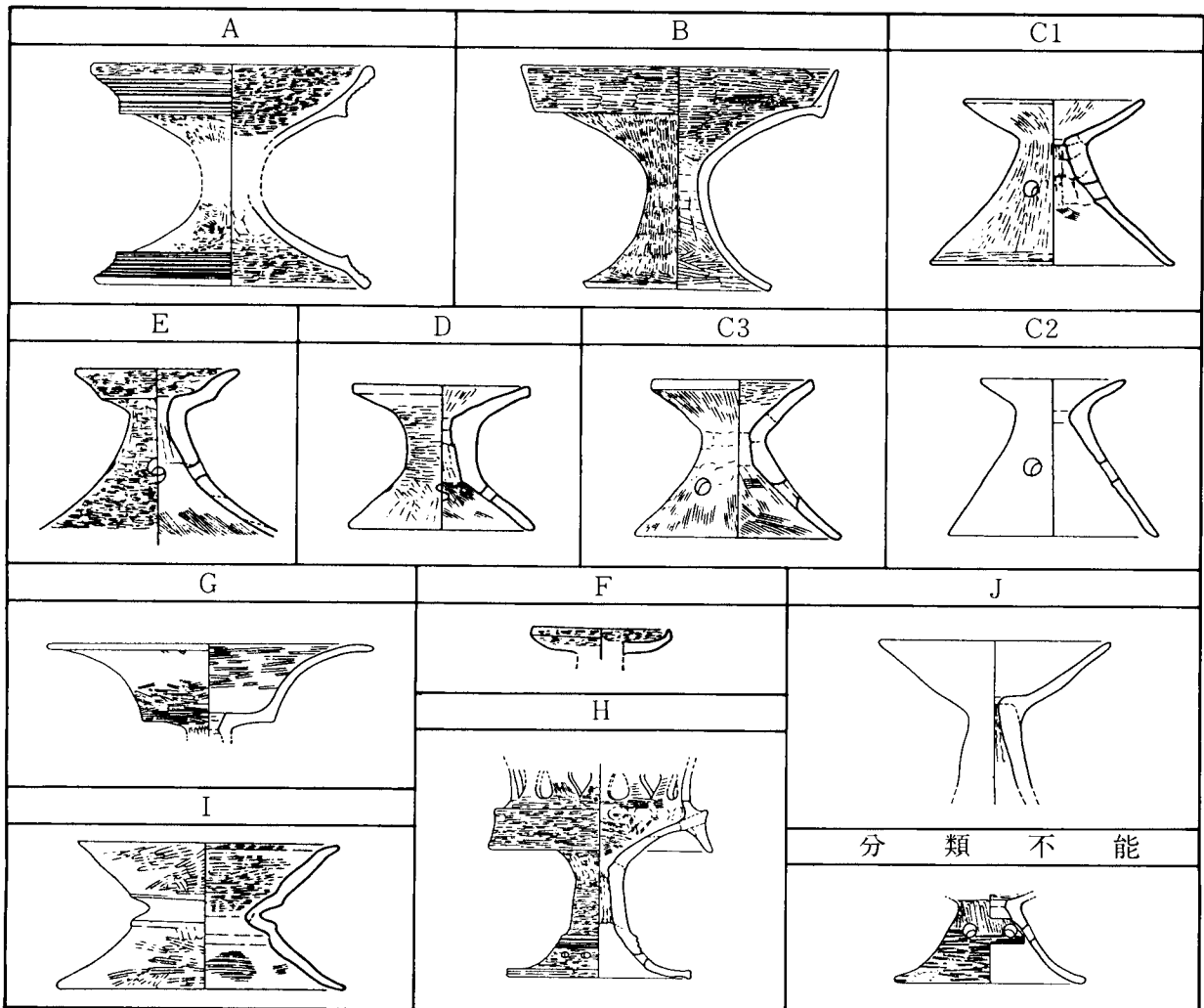


Fig. 66 器台形土器分類一覽図

味の受部で、脚の広がりも器台C1に比べて小さい。遺存状態が悪いので調整は不明だが、丁寧に作られているとは思えない。器台C3は器台C2に比べてより形が崩れて全体的に厚い作りである。受部は直線的に開き、脚部の占める割合はより小さくなっている。受部内面のみミガキで、他はハケ・ナデとかなり手抜きで作られている。しかも脚部と受部の接合部分の内側は面をなし、うまく接合できなかったことを示している。

器台D－糸巻型を呈し、受部径と底径がほとんど同じものである。受部は平たく開き明確な脚柱部から脚部に至る。調整方法は器台Cと同じで、全体的なプロポーションもそれに類似することから、同じ器形変化の中で捉えられると考えられる。

器台E－受部は脚の大きさに比べて小さく二重口縁となっている。脚は外反気味に「ハ」状に広がる。高坏Mに近い形状を呈する。

器台F－器台Eと同様に大きく開く脚部をもつと考えられる。受部は水平に平たく開き浅い身となっている。本例は赤彩品でミガキがある。

器台G－高坏Eとの坏部と同じような形状を呈しているものの、脚柱部との接合部に穴がけられていることから器台であることが分かる。受部の下半は水平に、上半は大きく外反して伸びている。内外面ともミガキ。

器台H－装飾器台である。胎土などから幾つかのタイプを確認できるようであるが、本報告では一括してあつかった。

器台I－山陰系の鼓形器台である。外面と受部内面はミガキ、脚部内面はハケ。

器台J－高杯F2に近い形状を呈するが杯の稜はみられない。特殊なものであろうか。

鉢

鉢A－よく見られるもので、底部が尖る砲弾型を呈する。底部に穴が開けられている。調整不明。

鉢B－鉢Aと同じように底部穿孔の鉢で、上げ底気味の底部である。調整不明。

鉢C1－皿状を呈する。体部は直立気味に上がり、平底になった底面との境は丸く作られている。内外面ミガキ。

鉢C2－鉢C1とほぼ同じ形状だが、把手のつくものである。取っ手は口縁より少し下がったところに、下方に向くように付けられているので、実用よりも装飾的であることがわかる。全面にわたってミガキ。

鉢C3－小さな底面と「く」の字に屈曲する体部から口縁に至る。口縁部は内傾する。口縁部・体部とも直線的である。内外面ミガキ。

鉢C4－鉢C3よりも体部の屈曲が丸く作られ、小さな上げ底気味である。しかし、基本的に鉢C3と同じ形状と理解でき、それに把手のつくもの。全面にわたってミガキ。

鉢C5－体部が屈曲し、鋭く稜をなすものである。底部の形状は不明である。内外面ミガキ。

鉢C6－体部の屈曲は痕跡程度で、いわゆる碗状を呈する。口縁端部は面をもつ。外面はハケ。

鉢C7－体部の屈曲はなく丸く作られている。口縁は、直立しつつやや内湾し小さな脚がつく。鉢C3に最も近い形態に脚がついたようである。外面はハケ、内面はミガキである。

鉢D－口縁径の $\frac{2}{3}$ をしめる底部から直線的に体部が伸びる。内面ナデ、外面ミガキだが、調整の個体差が認められる。

鉢E1－小さな底部から半截した長楕円を呈するように体部が伸びる。口縁部を内側に収めるものや、摘み上げるようにしてあるものもある。内外面ミガキ。

鉢E2－鉢E1の形状に小さな脚のつくもの。脚の形態は、鉢C7に最も近い。調整はミガキ。

鉢E 3 - 半球状を呈するもの。内外面ケズリに近いハケが施されている。この調整は、鉢の中において異質なものである。

鉢E 4 - 基本的に鉢E 2と同じ形状と考えられ、その片口の形状を呈するもの。脚は不明だが、おそらく鉢E 2と同じような形状と考えられる。外面ミガキ、内面ナデ。

鉢F - 口縁は小さく外反し、鉢Dのように底面の占める割合の大きいもの。内外面ミガキ。特に口縁部は横方向のミガキ。

鉢G - 基本的に鉢Fと同じだが、底部が鉢Fよりも小さいものを区別した。

鉢H - 半球状の体部に「く」の字の口縁と脚をもつ。口縁の屈曲の強いものやや弱いものなど見られる。また、脚の形も個体差がある。内外面ハケを中心とした粗い調整で、口縁部はナデ。

鉢I - 上げ底の小さい底部をもつ、口の広い小型の甕のような形状を呈する。全体的なイメージが甕に共通する。口縁部はナデによって仕上げられている。

鉢J - 大型品である。有段口縁状を呈するが、幅広の突帯のように見える。底部の形状は不明。内外面ミガキ。

鉢K - 「く」の字に屈曲する口縁と、潰れた球状を呈すると考えられる体部をもつ。ただし、底部は

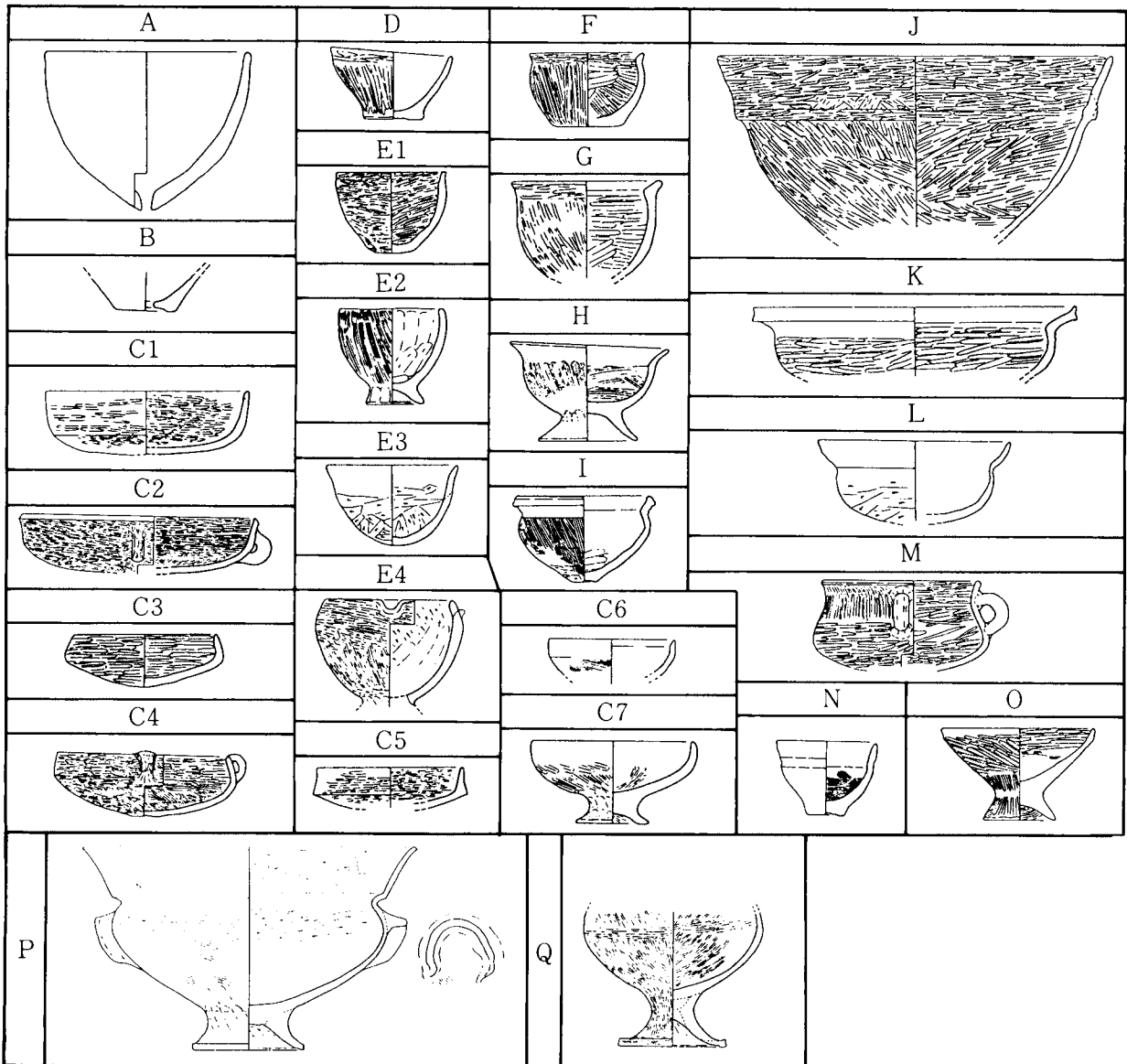


Fig. 67 鉢形土器分類一覧図

不明。口縁部はナデによって仕上げられている。体部内外面はミガキ。

鉢L－半球状の体部に「く」の字に屈曲する口縁をもつ。鉢E3と同じように粗い調整である。

鉢M－中膨れの体部から緩やかに曲って口縁部が続く。把手が頸部についている。あまりみかけない器形である。内外面ミガキ。

鉢N－鉢Jのような有段口縁を意識したものと考えられる。小さな底部をもつ。小製品である。

鉢O－さかずきような形である。直線的に開く体部と、同じく直線的な脚部をもつ。内外面ミガキ。

鉢P－有段口縁から肩の張る体部をもつ。底部に脚、両肩部に把手を付けている。有段口縁の状態は、甕と若干異なるようである。ハケ主体の調整だが、ミガキもみられ個体差としての特徴であろう。

鉢Q－脚付きの鉢で口縁の形態は不明。脚は丁寧に作られ、裾に端面を作っている。体部は半球状を呈し、内外面ミガキが施されている。

小型丸底壺系土器

小型丸底壺は、研究者によっては小型丸底鉢と呼び与えられており、壺・甕・高杯等の形式で把握されにくい器種である。本稿では、一般に「小型丸底」と呼びならわされてるものを「小型丸底系土器」とした。ただし、畝田遺跡出土品は、小型丸底壺に繋がっていきと考えられたこともあったヘルメット型の浅鉢の出土がないことや、他の小型土器と明瞭に区分できることから、そのように容易に把握できる。

小型丸底壺A－口縁部の長さが体部の長さを越えているもので、体部は浅い鉢状を呈する。古式土師器の古い段階のもので、奈良県東大寺山古墳出土石製埴に類似する。頸部は明瞭に屈曲する。内外面にわたって丁寧なミガキ。

小型丸底壺B－口縁部と体部の長さがほぼ同一のものである。口縁部はやや内湾気味。体部はやや扁平で小型丸底壺Aに近い。体部内面が指先によるナデである他は全てミガキが施されている。頸部は比較的明瞭に屈曲するが、これは指頭によるナデによるものである。

小型丸底壺C1－口縁部と体部の長さがほぼ同一のものである。小型丸底壺Bよりも頸部の締りがなく、その境目も不明瞭である。調整は不明だが、体部内面に指頭圧痕が認められる。

小型丸底壺C2－口縁部と体部の長さがほぼ同一のものである。体部はほぼ球形を呈する点に特徴が見られる。この型式ではミガキが施されず、外面にハケ、板によるナデ、体部内面に指によるナデ。

小型丸底壺C3－体部の長さが口縁部の長さを越えるものである。外面にハケ、内面に指ナデが施されている。小型土器としての壺等とあまり変わらないので「小型丸底壺系土器」の中に含めてよいもの

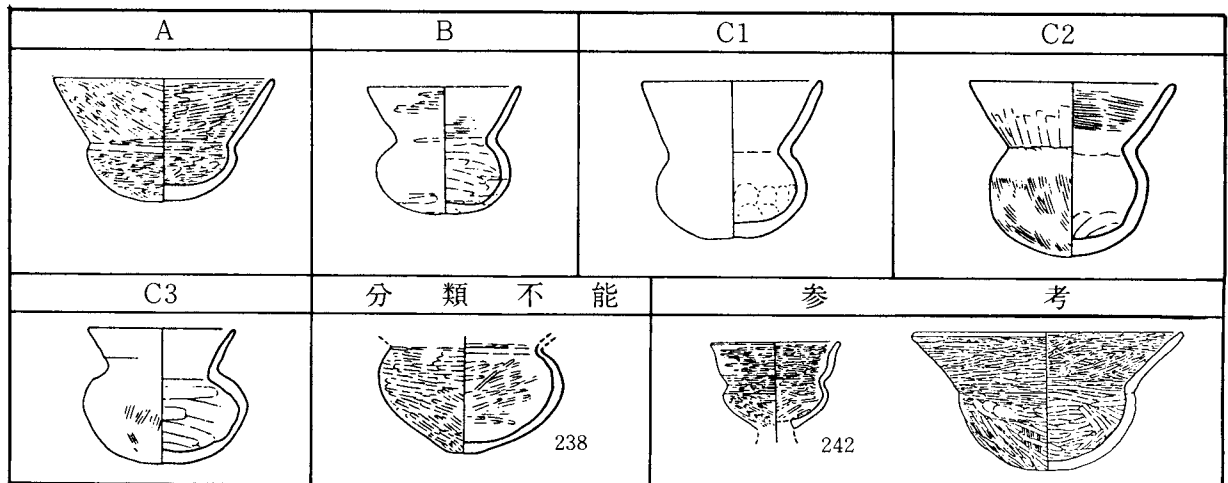


Fig. 68 小型丸底壺系土器分類一覽図

か検討を要するであろう。小型土器の壺と小型丸底壺の系譜が異なるであろう事は予想されるものの、形状にあまり違いが認められないことから一括して扱わざるをえない。ただし、内面が指ナデというのは小型丸底壺の調整方法と共通している。

分類不能としたものと、参考に留めたいものも同時に掲載した。分類不能とした238はやや肩が張るものの小さな底面を持っている。内外面ミガキが施され、小型丸底を意図したものと考えられる。また、参考にした242は有段気味の口縁に、脚のつくものである。

蓋

大きく4形式に区分できる。蓋A～Cは相対する2孔一対の紐を通す穴があげられているので、無頸壺に伴うものと考えられる。孔はいずれも笠部の中位に位置している。

蓋A - 頂部につまみ状の面を持つ突出部を持つ。笠部は底部近くで屈曲し幅広の面を持つ。調整技法は不明だがミガキと予想される。

蓋B - 頂部が面をなさずに山状に突出する他は蓋Aに類似するプロポーションを持つ。内外面の全面にわたってミガキ。

蓋C - 単純な笠状を呈する。内外面の全面にわたってミガキ。

蓋D - 2孔一対の穴がない。頂部に明確な鈕を持ち大きく「ハ」の字に開く笠部をもつ。鈕の形状から1・2の二つに区分した他、底径からさらに大・中・小の三つに区分できる可能性もある。

蓋D1は頂部のつまみが棒状に突出するもの。

蓋D2は中央が窪み左右に張り出す鈕を持つもの。

いずれもミガキを内外面にわたって施している。なお底径の違いから大、中、小としたが、その境界が不明瞭なので、この区分がどれほど妥当性のあるものかよくわからない。蓋の底径は壺甕類の頸部径に左右されるものであり、これに合せた結果とも考えられる。つまり、蓋の底径のみからの大中小の区分は無意味であるとする。

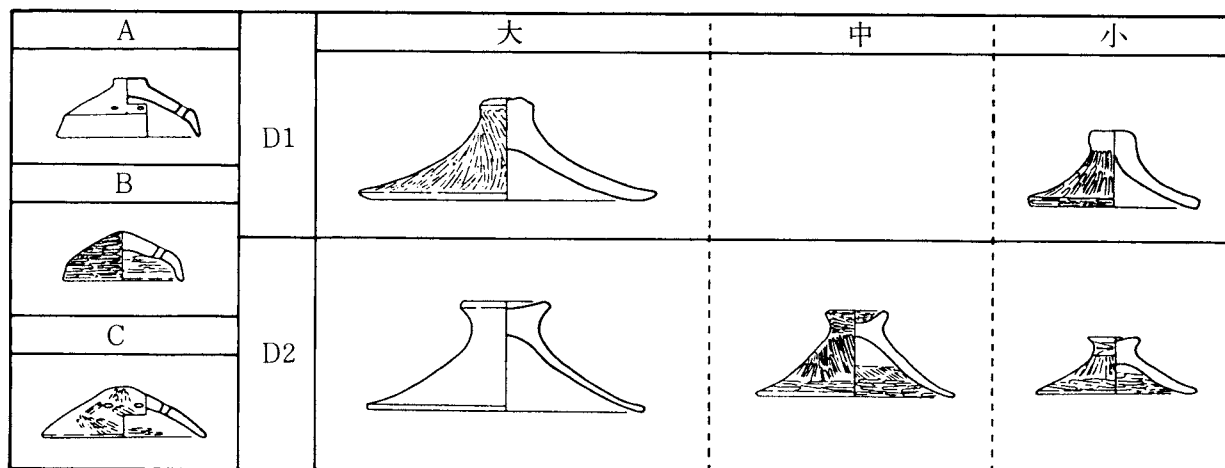


Fig. 69 蓋形土器分類一覧図

(2) 技法の観察 (P L36・37参照)

a 各種の技法

1) 成形

粘土紐を積み上げることによって成形する。月影形甕のように底部が径2cm強の小さなものは底部輪

台状に積み上げているようである。これは、中期中葉の小松式土器にみられるような粘土板から積み上げる技法とは全く異なる。また、底部輪台技法により高坏あるいは蓋を簡単に作ることができる。成形時には指頭によるナデや掌全体によるナデが多用されていると思われ、器面調整のナデとは区別される。

なお、タタキ痕のあるものが見られるが、搬入品である。本地域で生産された土器にタタキ成形がおこなわれた痕跡は、今のところ見出すことができない。

2) 器面調整

器面調整は、器壁の荒れを直すばかりではなく、粘土紐相互を密着させることや器壁を均一にしたりする目的がある。また装飾的効果もある。そのために多種多様な調整方法が認められる。

ナデ

器面を撫でる行為をさすが、不定方向の場合と、見掛けで横方向の場合とがみられる。不定方向のナデ、ヨコナデと一般的に呼ばれている。いずれもなめし皮等を使用しているようで、時代を問はず一般的な調整方法である。ヨコナデの場合回転力を利用している。

不定方向のナデは粘土紐による成形後におこなう調整で、その時は指頭や掌全体を利用している。また、器壁の表面を平滑にするために撫でることも多い。この場合は、最終調整になることが多い。これは、ハケあるいはケズリ等の調整を前提としていないことであり、これら後に不定方向のナデを施すことは少ないようである。ヨコナデは、土器製作に回転力を利用し、その際に施すものである。口縁部や頸部、脚部など、形態的にきれいに仕上げたり、器形のメリハリを付ける時につかわれる。このように、不定方向のナデとヨコナデとは、調整の目的を異にし、必然的に行われる部位も違ってくる。

ハケ

幅数cmの板材の小口面で器面を撫でることによって器壁を整える。ナデと異なりハケの撫で方はシステムティックである(PL36のD)。板材の木目が条線となって器壁に痕跡を残す。条線の幅が3mm強の粗いハケをととき見かける(PL36のE)。この場合、条線の深さは細いものに比べて深いようである。つまり、小口面に切込みをつけて意識的にハケ目を見せていると判断できる。

反対に、木目がほとんど見出すことができないものも少なからずあり、板ナデとよんだ。PL36のAは口縁部が板ナデによっているもので、PL36のFはよく見られる板ナデである。また、軽く板ナデをおこなえば器壁の砂粒はほとんど動かないが、強く施すとケズリに似た効果を発揮する。PL36のIは軽いケズリで、実際の工具の動きは、強い板ナデ行為である。月影形甕に見られるようなケズリの状態とは異なり、その作業単位の把握が難しい。そして、ケズリと大きく異なる点は、深いケズリ込みがないことである。

ケズリ

器壁を削り込むことによって、厚さを均一にしたり余分な粘土を除去している。よく見られる調整だが、ケズリをおこなう具体的な器具は不明である。おそらく、鉄製の工具と思われる。つまり、月影形甕の内面(PL36のG)を観察すると、ケズリ1単位は匙で抉られたような皿状の凹みとなっており、そのような凹みの連続となっているためにケズリが重なるところには山稜がみられる。これらより鋭利な器具によって施されていることがわかる。なお、ハケの項で述べたが、軽いケズリは、鉄製器具によるケズリと根本的に異なるものである。

ミガキ

先端が細くて平坦な工具によって器壁を撫でつける調整である。これによってハケやナデでは得られない平滑な器面を作り出すことができると同時に、器壁の目を詰めることによって保水機能を高める。

仮にへら状のものを想定すると、へらの「腹」部分で施すやり方（PL37の291）と、へらの「先」部分で施すやり方（PL37の169）の二種類を認めることができる。前者の方が主流であり、器面調整に適している。ミガキを施す器種は、壺・高杯・器台・鉢など「飾られた土器」に多用され、ミガキが施される土器の非日常性を示しているよう。つまり同一器種であってもミガキが施されるものとされないものの違いは、日常生活におけるその土器の占める位置を示しているものである。ただし、古墳時代以降ミガキが省略される傾向にあり、当時の土器作り全体の中でミガキをもつ土器を位置付ける必要がある。

b 甕形土器にみる「形」の設定

弥生後期末から古墳時代の布留式土器に至る甕形土器の変化には、目を見張るものがある。それゆえ、当該時期の土器研究は、まず甕形土器から入っているようである。田中琢氏によって庄内式が提唱され、⁽⁴⁾ 弥生土器から土師器への変化をあとづけている。一方において、弥生後期の甕の製作技術や地域性ばかりでなく、弥生後期タイプの甕が多く残存する遺跡とそうでない遺跡などが確認されるようになってきた。庄内式土器の中にも大和と河内でタタキの回転方向が違うという地域性も確認され、それぞれ「大和形庄内甕」・「河内形庄内甕」と言われている。つまり、時代あるいは時期を特徴付ける器種に「甕」が有効であることを示している。

北陸の当該時期の土器は、有段擬凹線の口縁形態に代表されている。特に擬凹線が施されるのは、弥生後期後半以降多くの器種に施されている。それが、布留式土器が入る頃になると、そのような傾向がなくなる。大雑把であるが、このような変化になるだろう。

有段擬凹線の甕をみると、思わず「法仏式・月影式」と言ってしまう。そこでは、無意識のうちに特徴付けてしまっている法仏式・月影式を、「庄内形甕」や「布留形甕」のように「形」を設定できるであろうか。吉岡康暢氏によって定義付けられた「月影式」を甕を中心に再確認したい。⁽⁵⁾

- (1) 甕形土器の大部分が先端の外反が著しく、擬凹線で埋めた幅広の有段口縁。
- (2) 法量がある程度規格化されている。重心の高い器形。
- (3) 1.5～2 cmの小さい底部。平底あるいは凹底。
- (4) 内面頸部以下のヘラケズリ。

このような特徴は、本報告における甕C2・D2・E2類になるだろう。一方、「月影式」の甕は、前段階の猫橋式（法仏式）を母体とし、技術的・形態的に連続するものである。⁽⁶⁾ 有段擬凹線を有する甕の口縁形態の変化は、谷内尾晋司氏によって手際よく整理されている。短く直立するものから口縁が長くなり外反度を強め、布留形甕が入る直前になると甕D3・E3類のように形骸化していく。そして、「有段擬凹文に代表される北陸型甕の『極致』の姿が」上記4つの特徴に集約される。

谷内尾氏は「北陸型」と呼称している。この背景には、有段擬凹線の甕の分布が北陸西部を中心としていることによっている。しかし典型的な甕の分布が北加賀に限定されるという相反する現象も指摘している。

このように、弥生後期後半から古墳時代初頭にかけて代表される有段擬凹線の甕は、月影式という名前で完成された器形を呈するようになる。有段擬凹線を有する甕は、一地域・一時期を代表する甕として認識できる。その完成される名称をもって「月影形甕」と設定してはどうであろうか。土器群は様式に整理されることによって、時間的・空間的に有効になるために、そして甕以外にも擬凹線を多用する傾向があるために、甕をもって「形」の設定をおこなっても、土器研究の進展に有効に作用しないかもしれない。しかし、汎北陸という性格、言い換えれば地域色の強い土器群の歴史性を理解するために、「形」の設定は必要なことと考える。

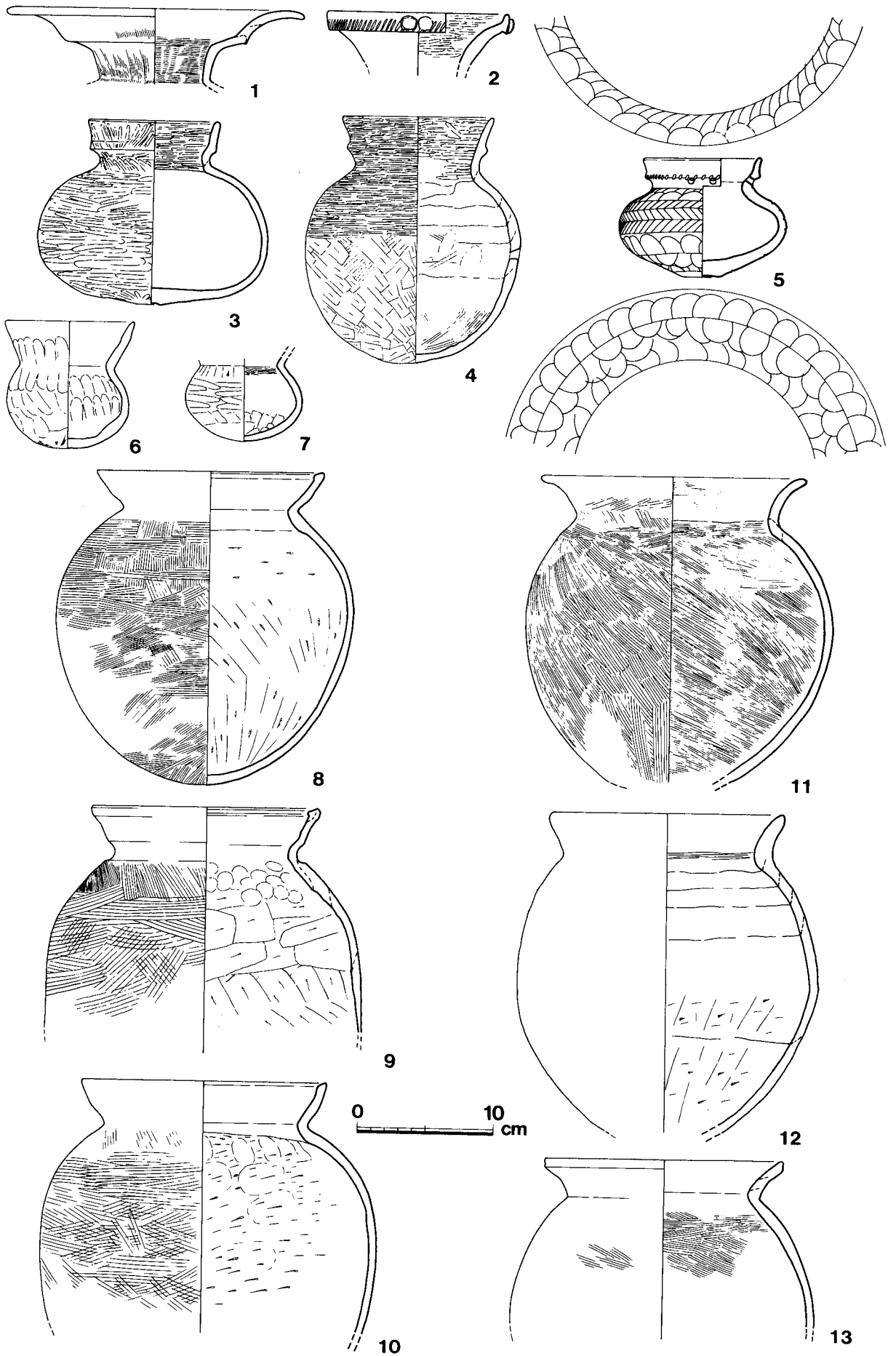


Fig. 70 SD05 出土土器 (第1次)

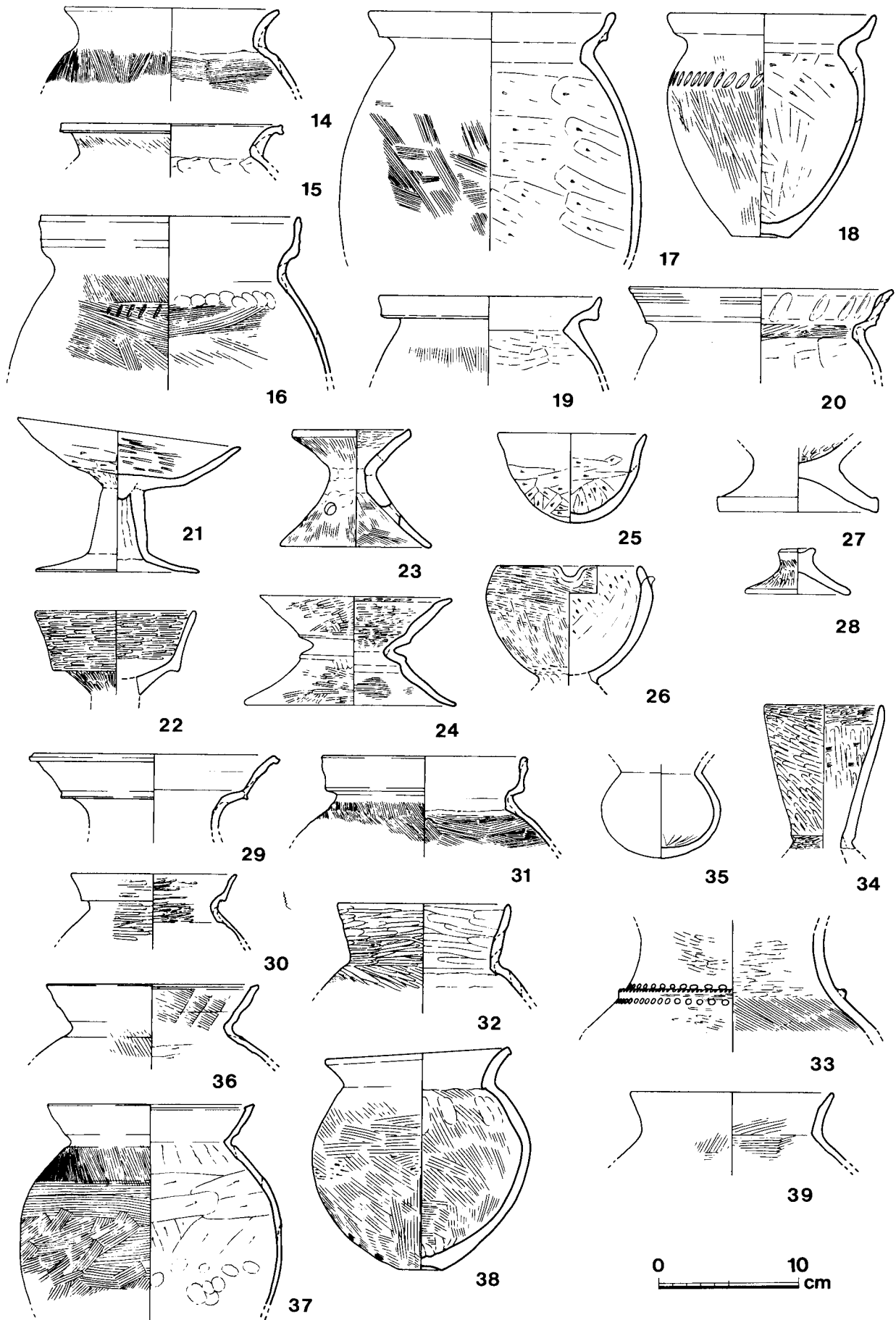


Fig. 71 SD05 出土土器 (第1次)

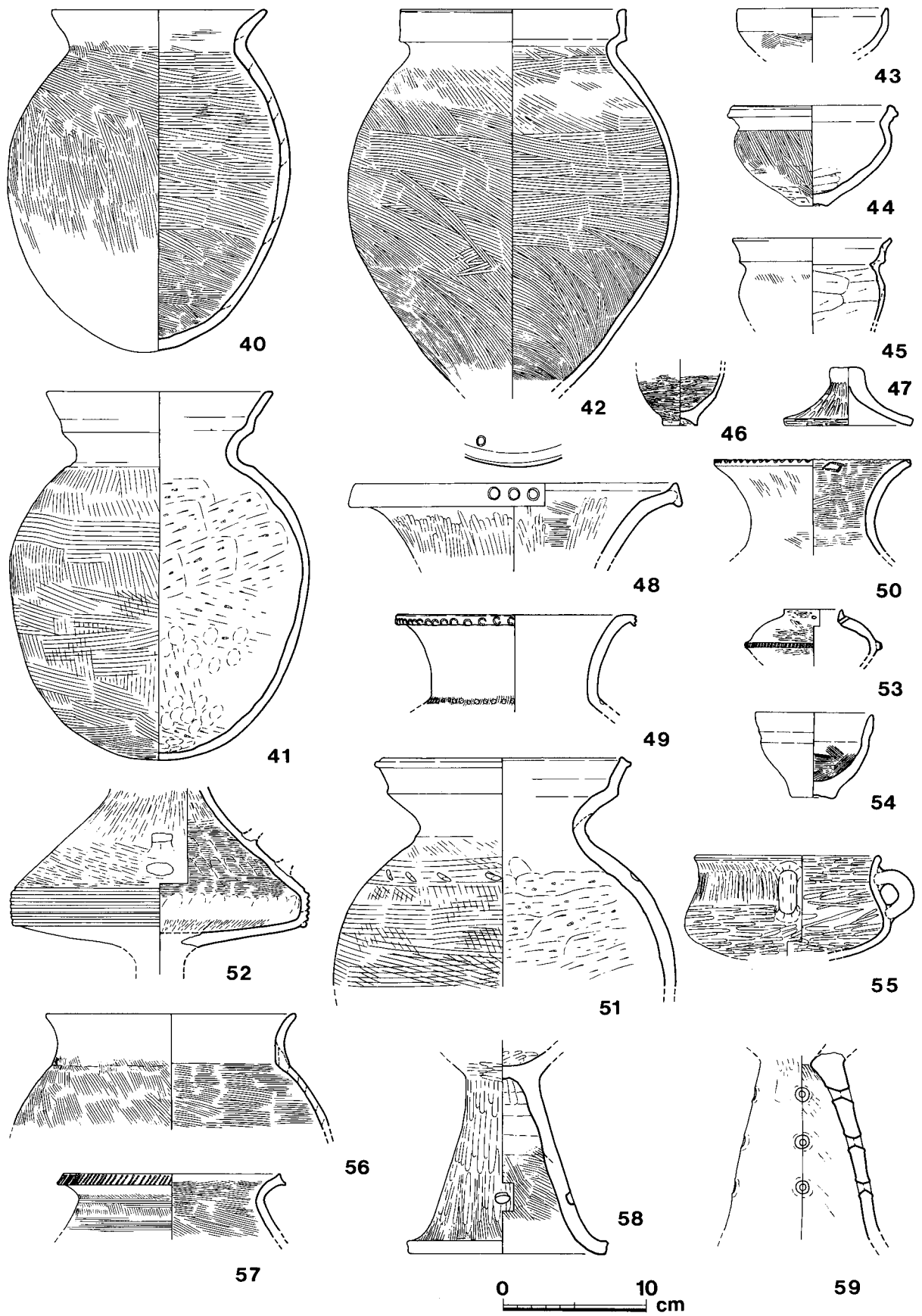


Fig. 72 SD05 出土土器 (第1次)

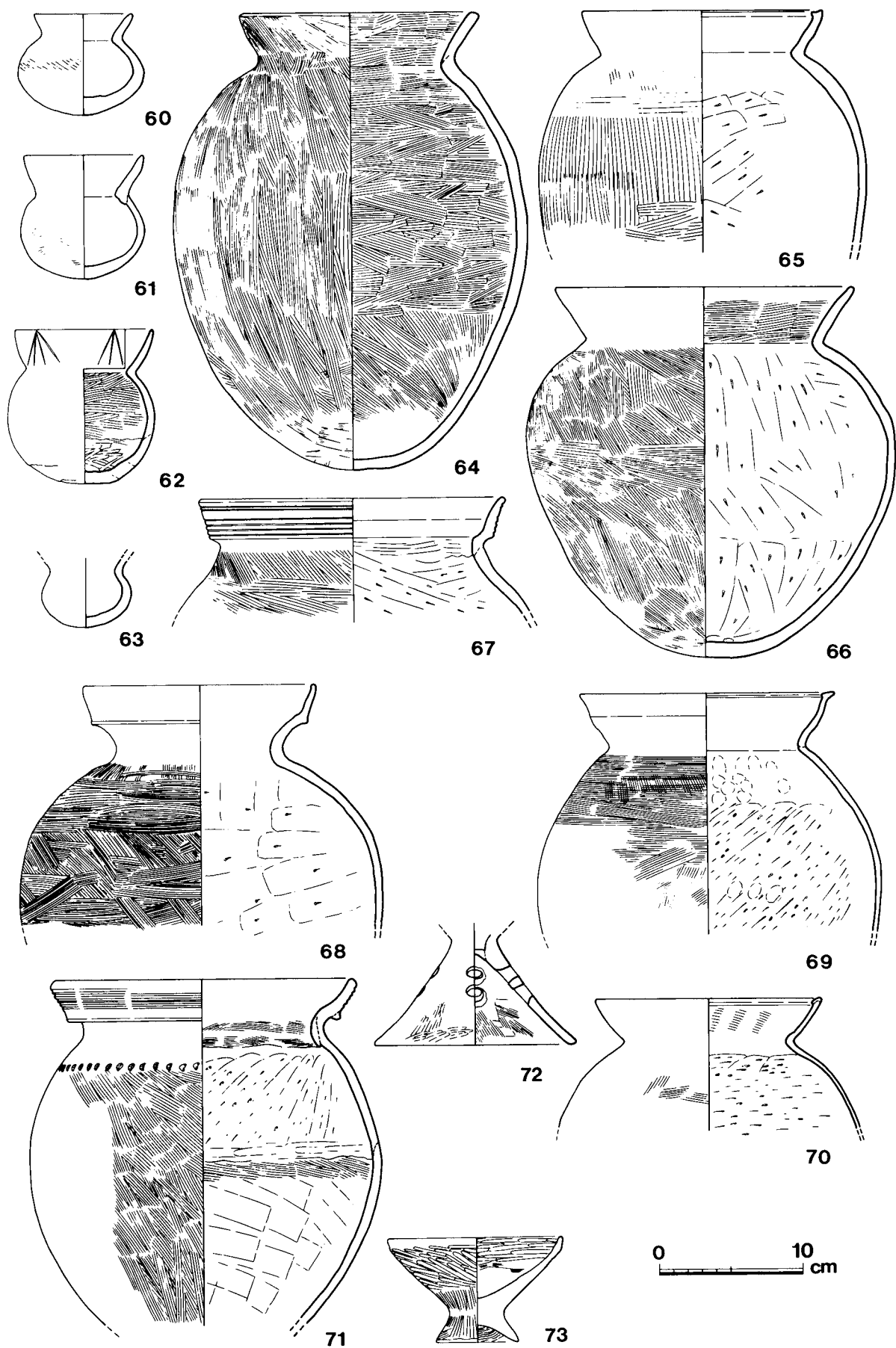


Fig. 73 SD05 出土土器 (第2次)

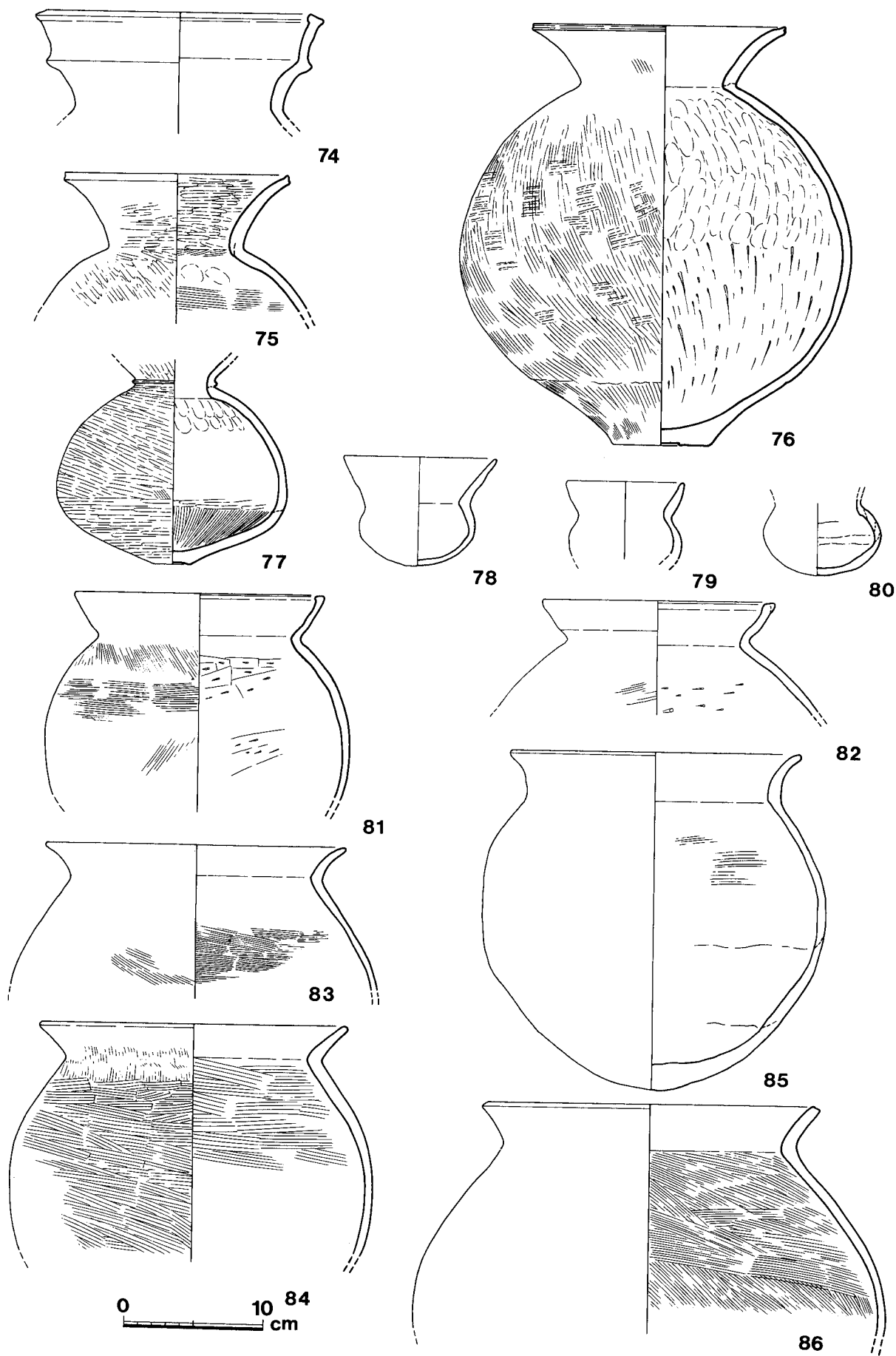


Fig. 74 SD05 出土土器 (第3次・上層)

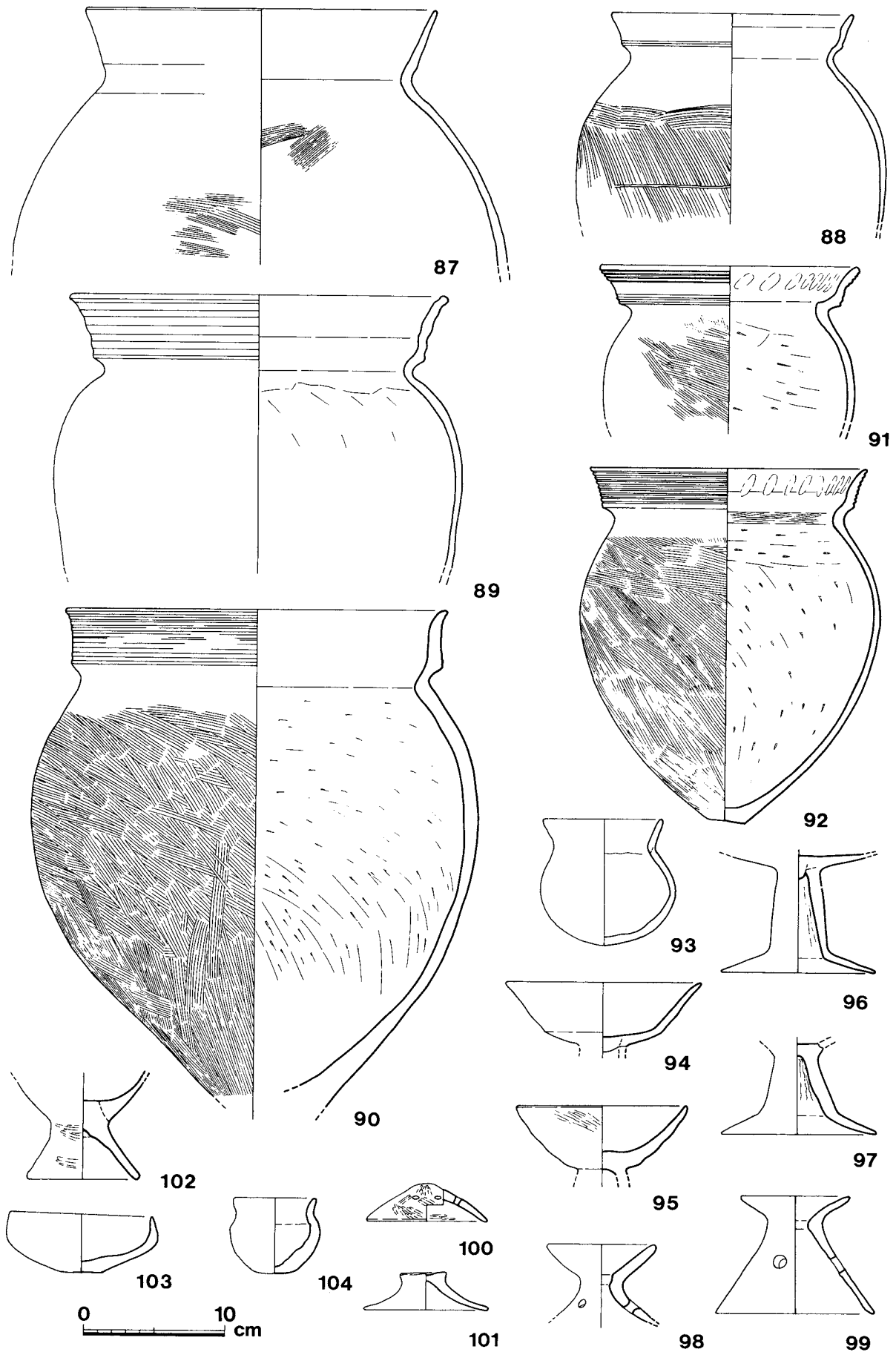


Fig. 75 SD05 出土土器 (第3次・上層)

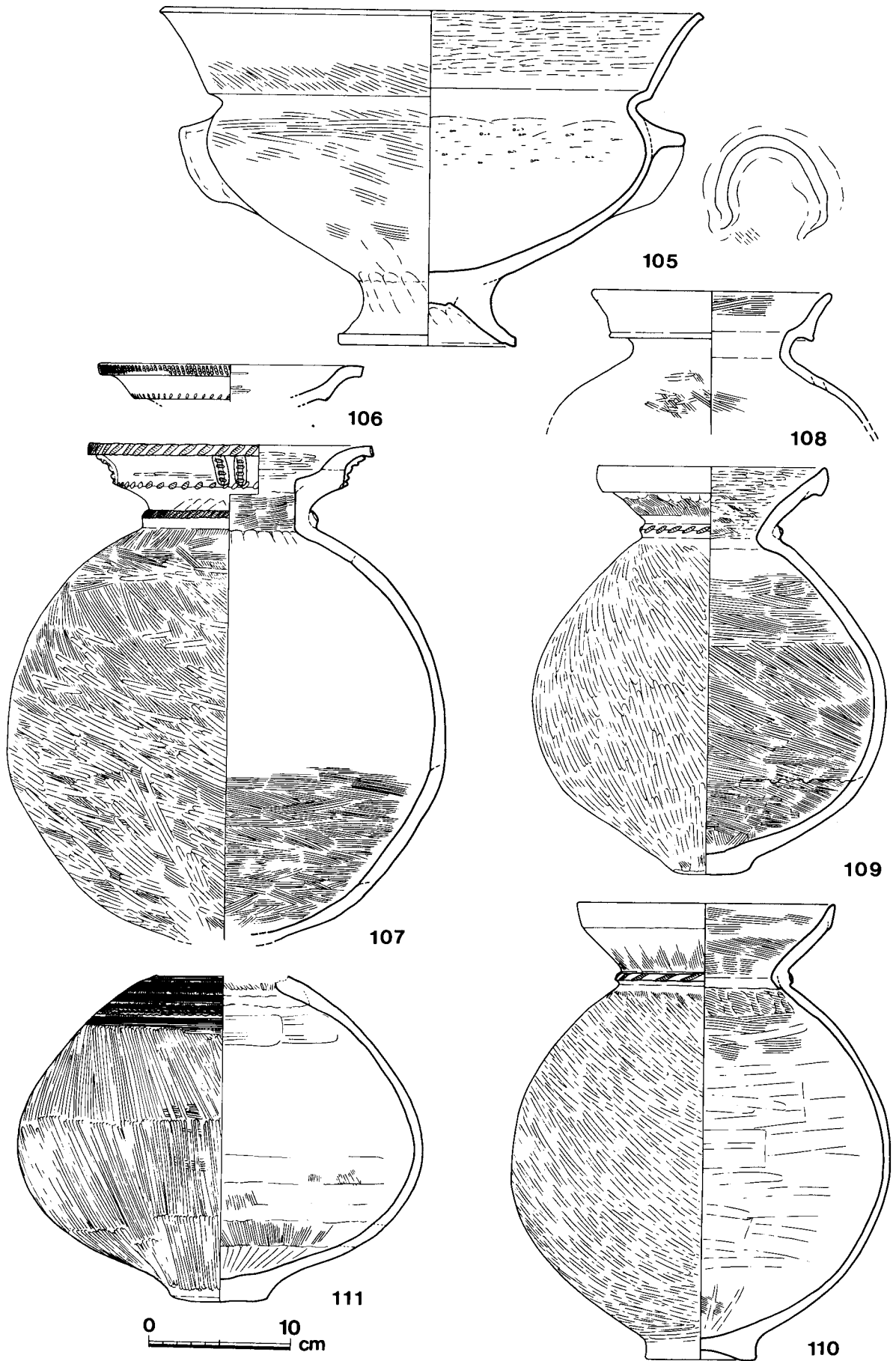


Fig. 76 SD05 出土土器 (第3次・上層・中層)

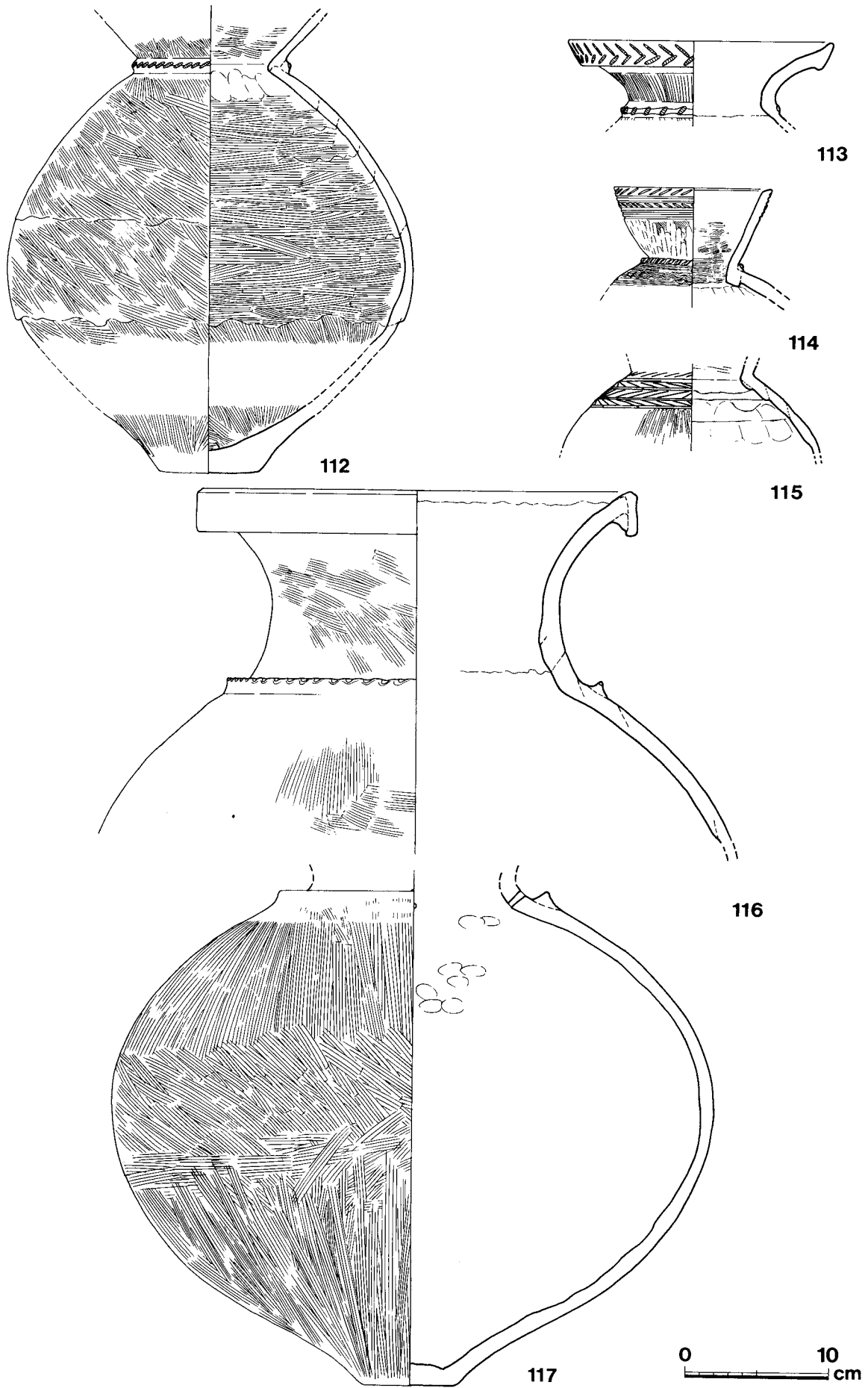


Fig. 77 SD05 出土土器 (第3次・中層)

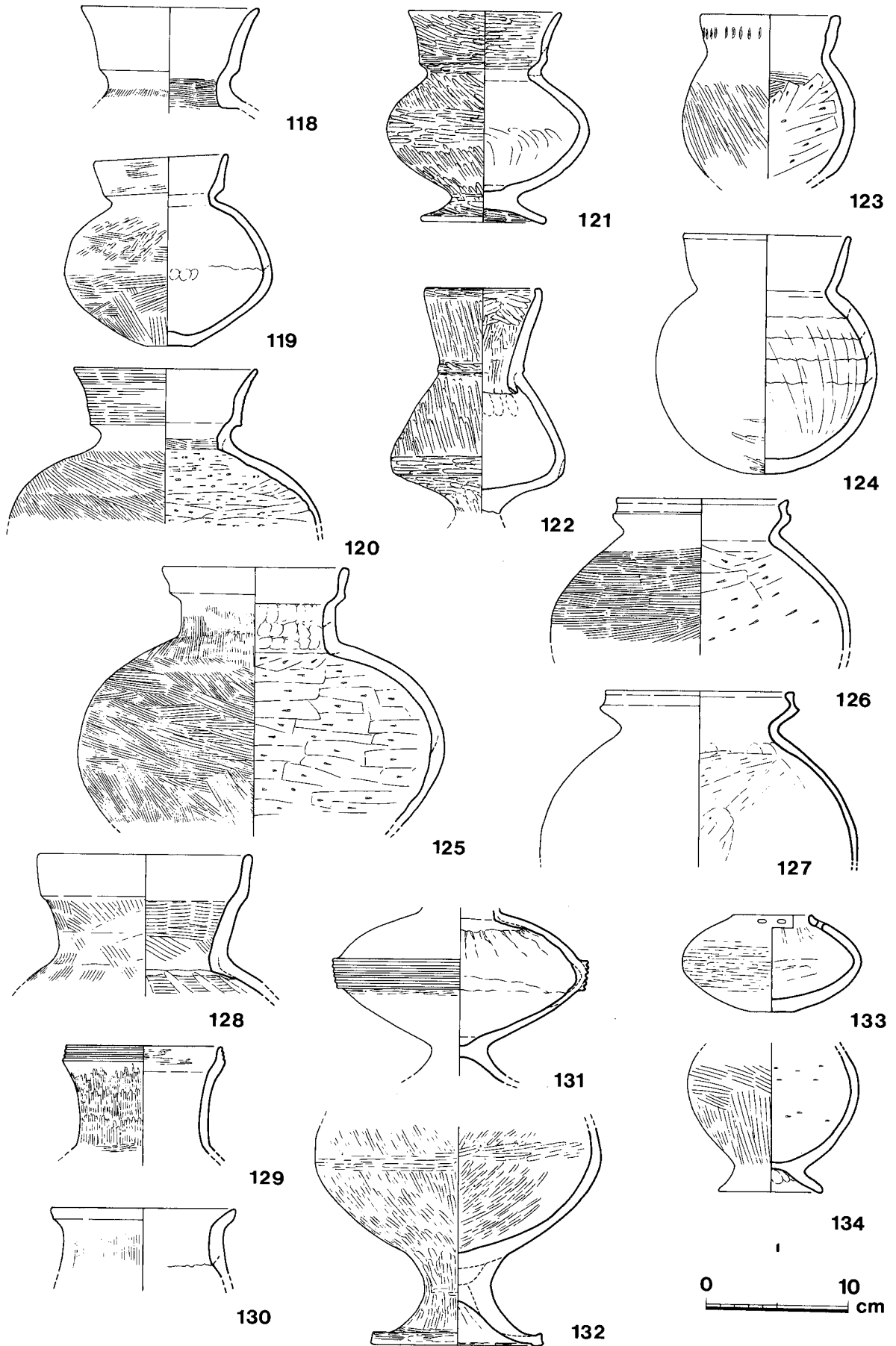


Fig. 78 SD05 出土土器 (第3次・中層)

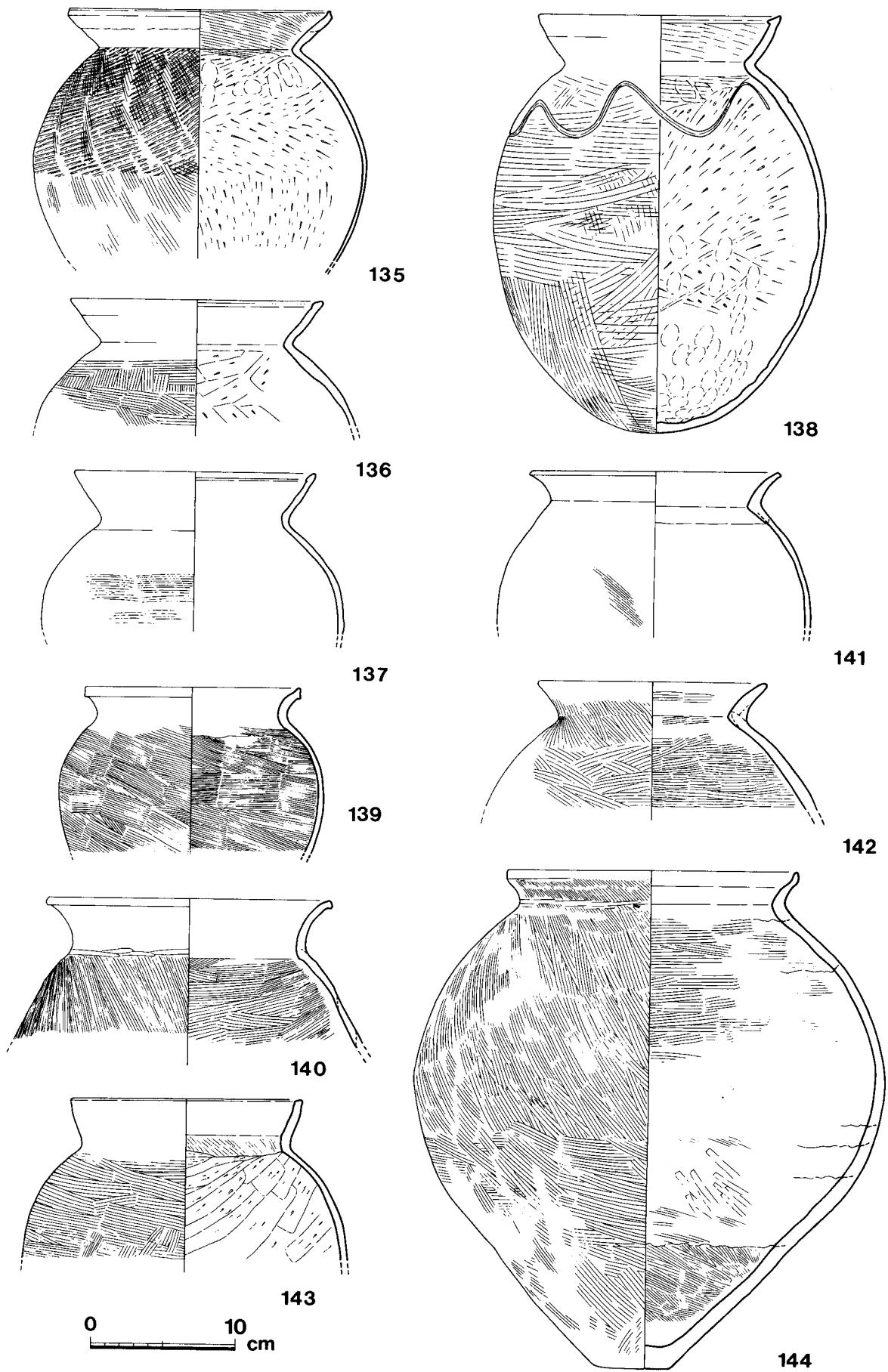


Fig. 79 SD05 出土土器 (第3次・中層)

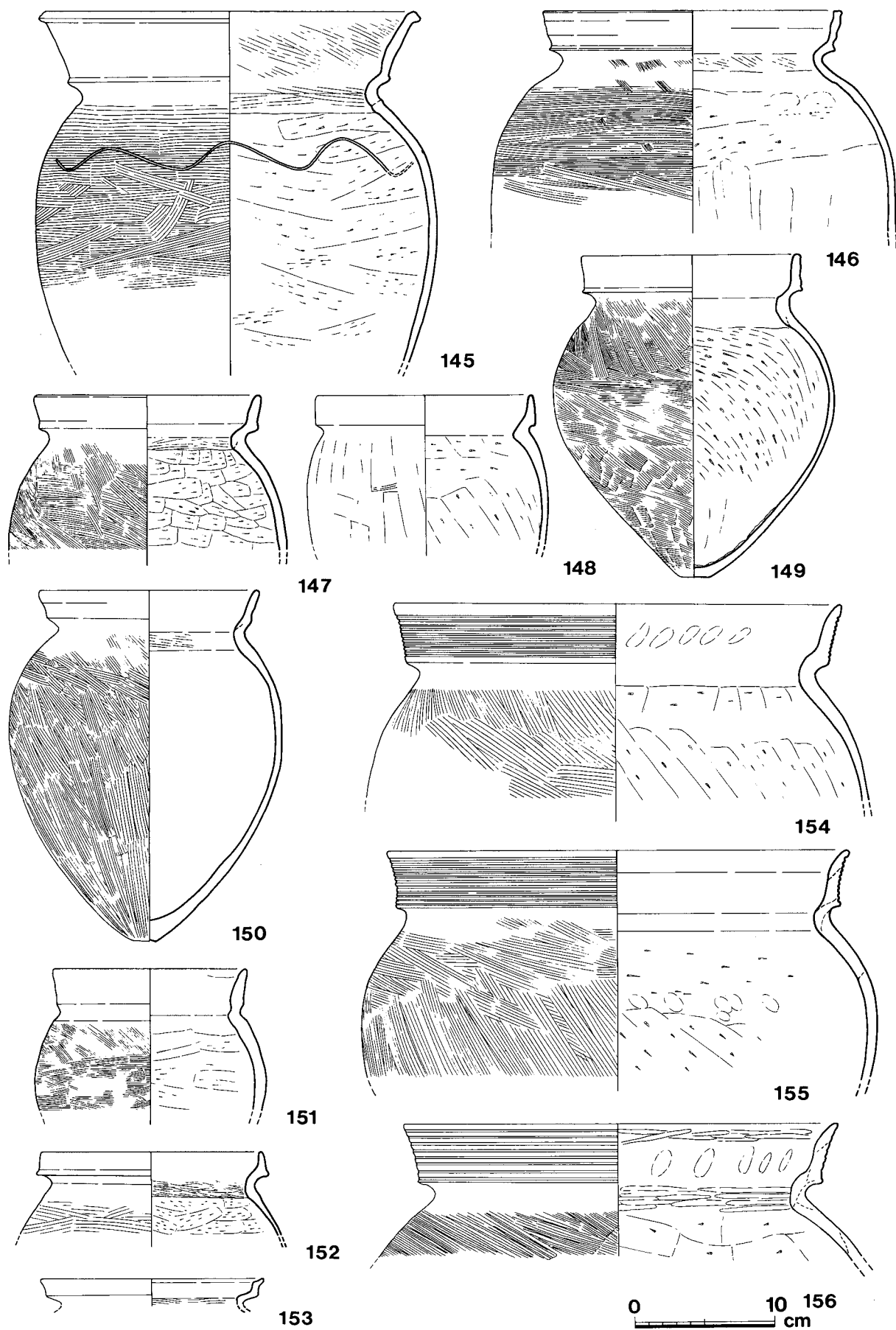


Fig. 80 SD05 出土土器 (第3次・中層)

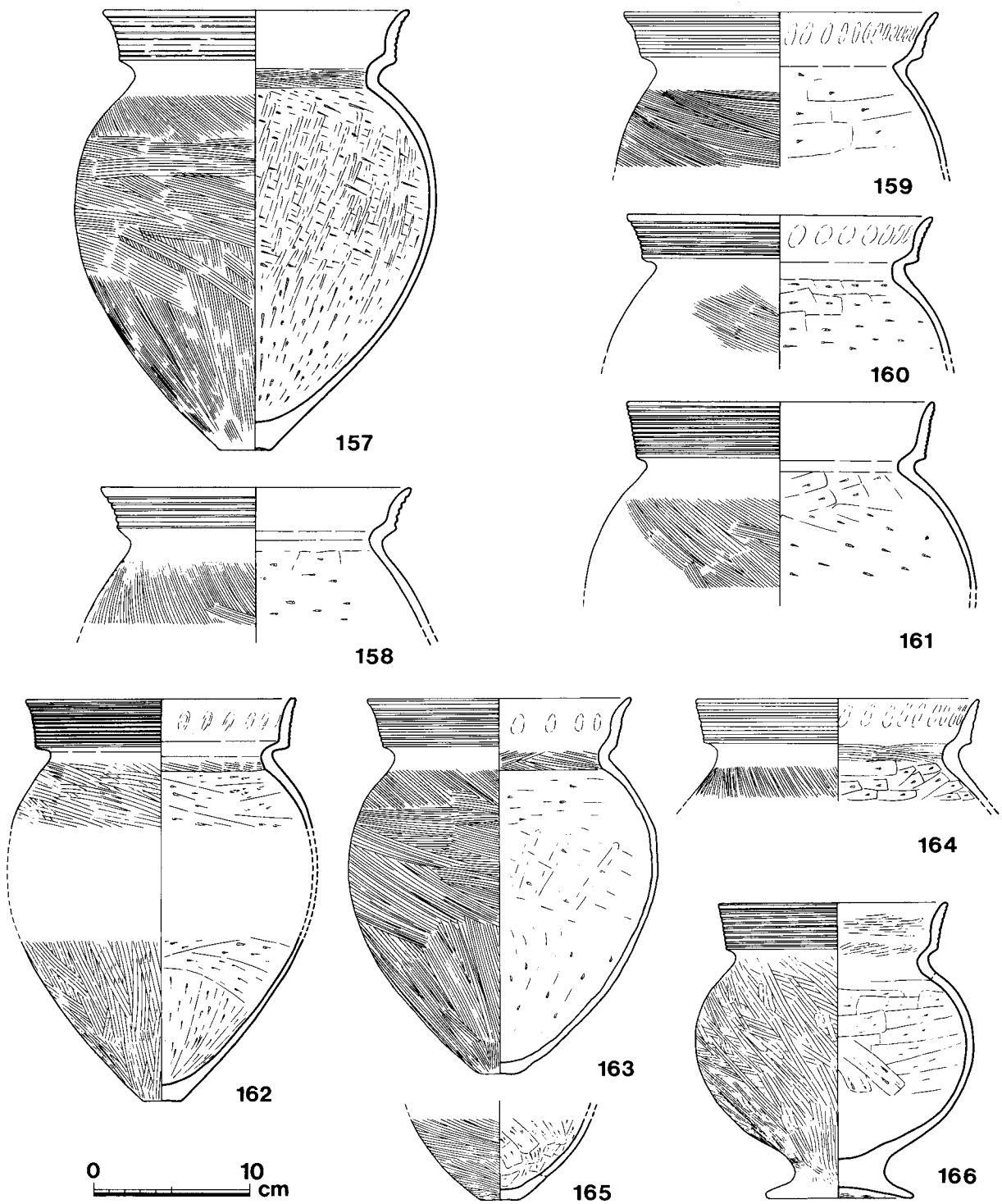


Fig. 81 SD05 出土土器 (第3次・中層)

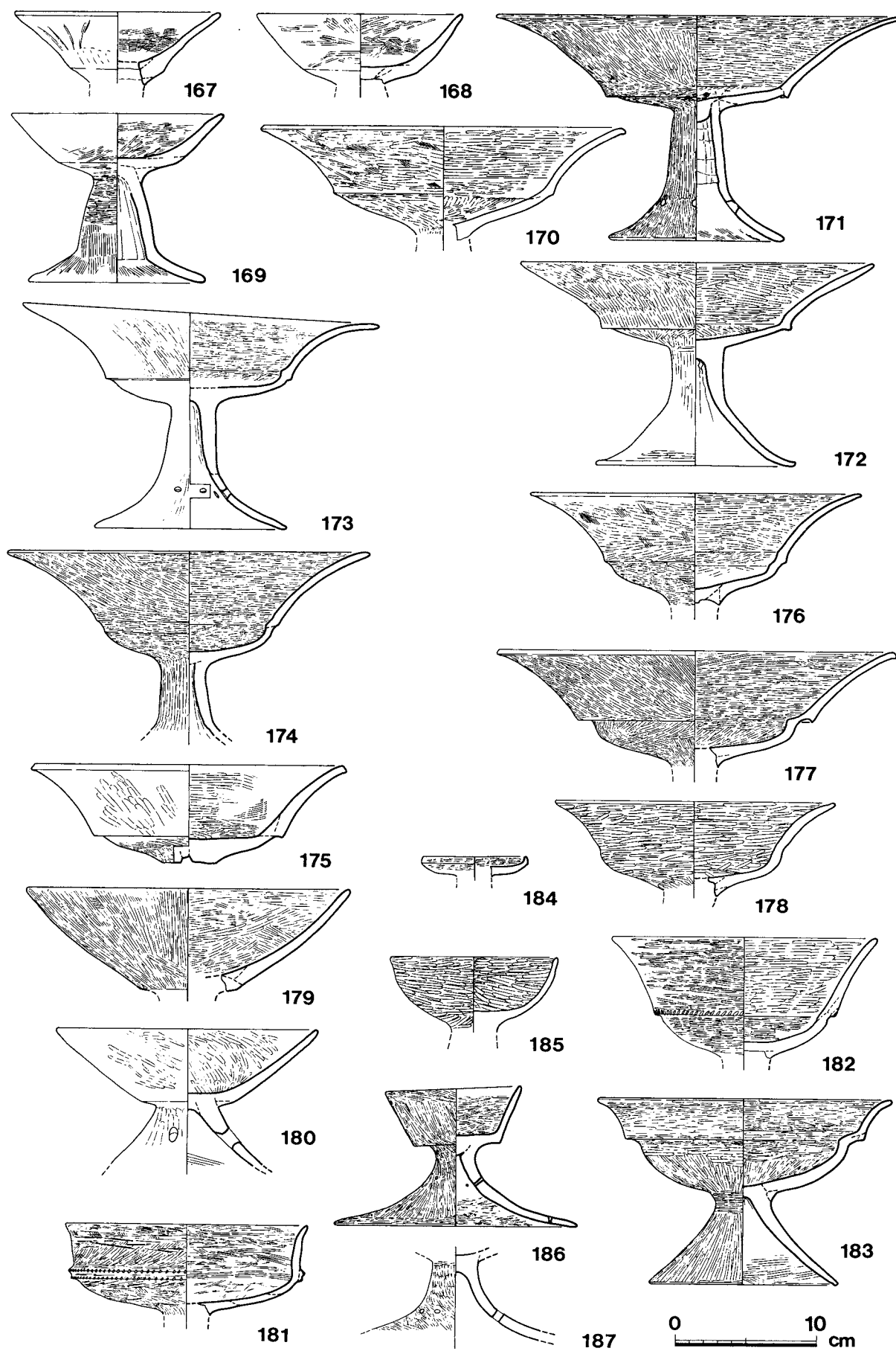


Fig. 82 SD05 出土土器 (第3次・中層)

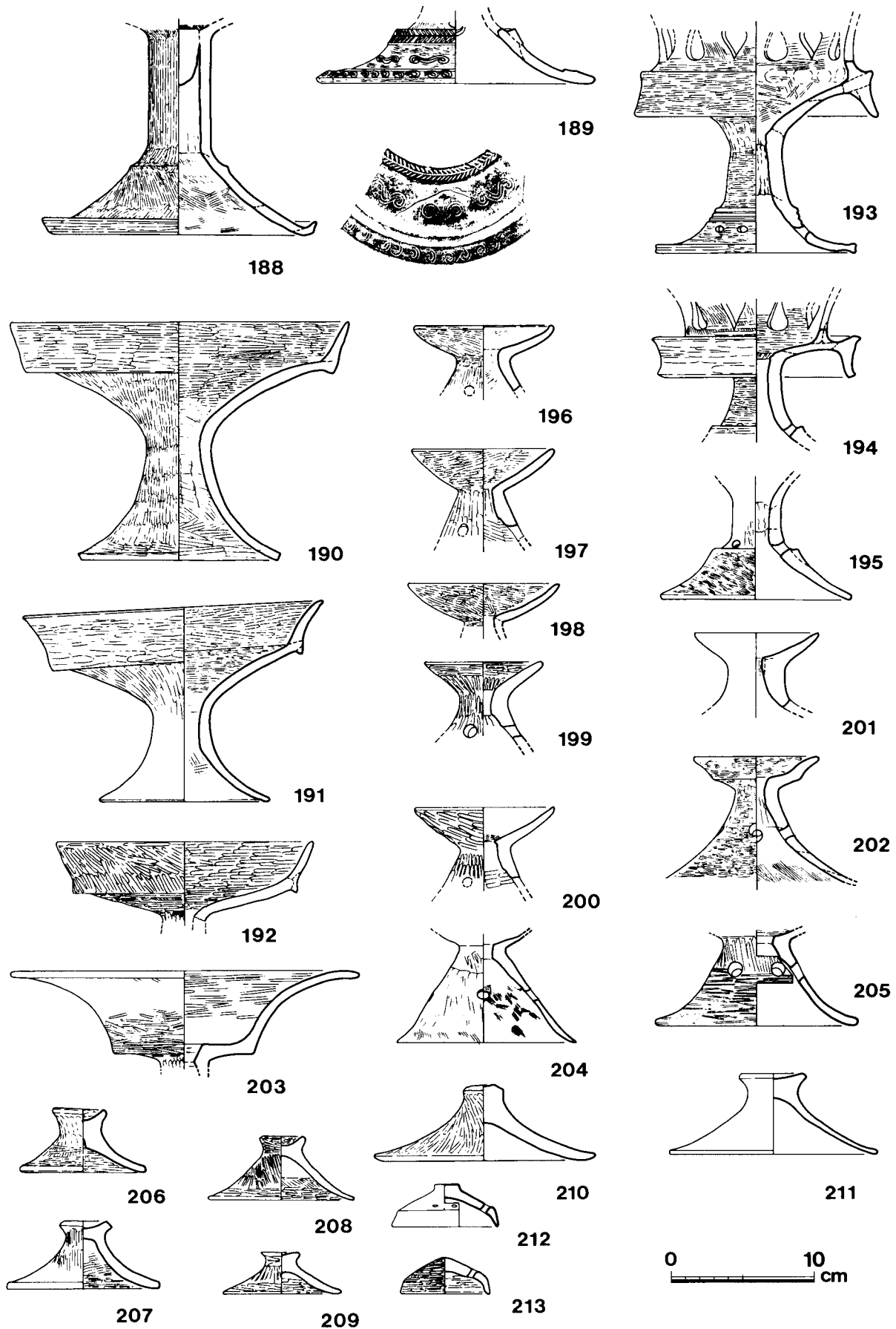


Fig. 83 SD05 出土土器 (第3次・中層)

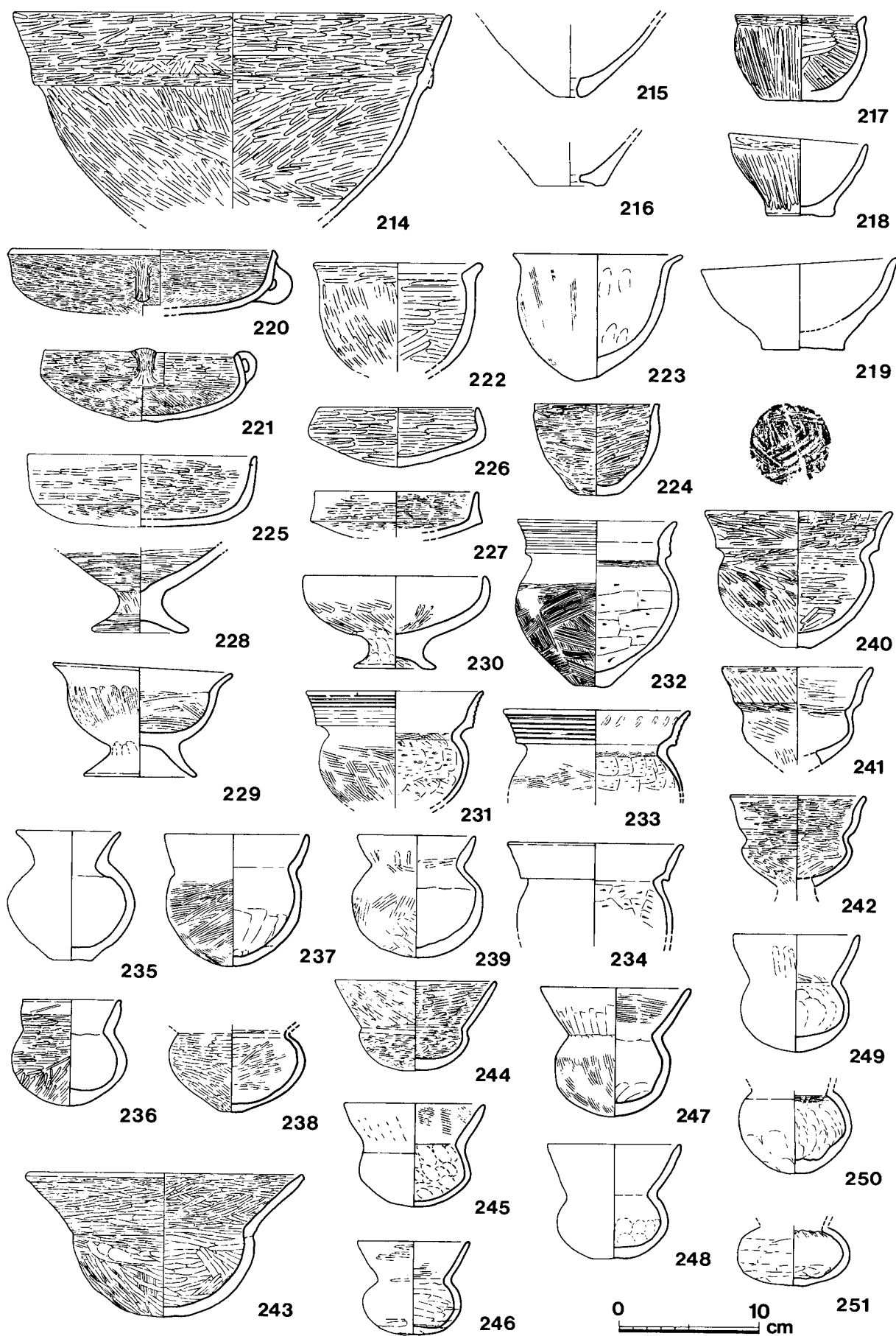


Fig. 84 SD05 出土土器 (第3次・中層)

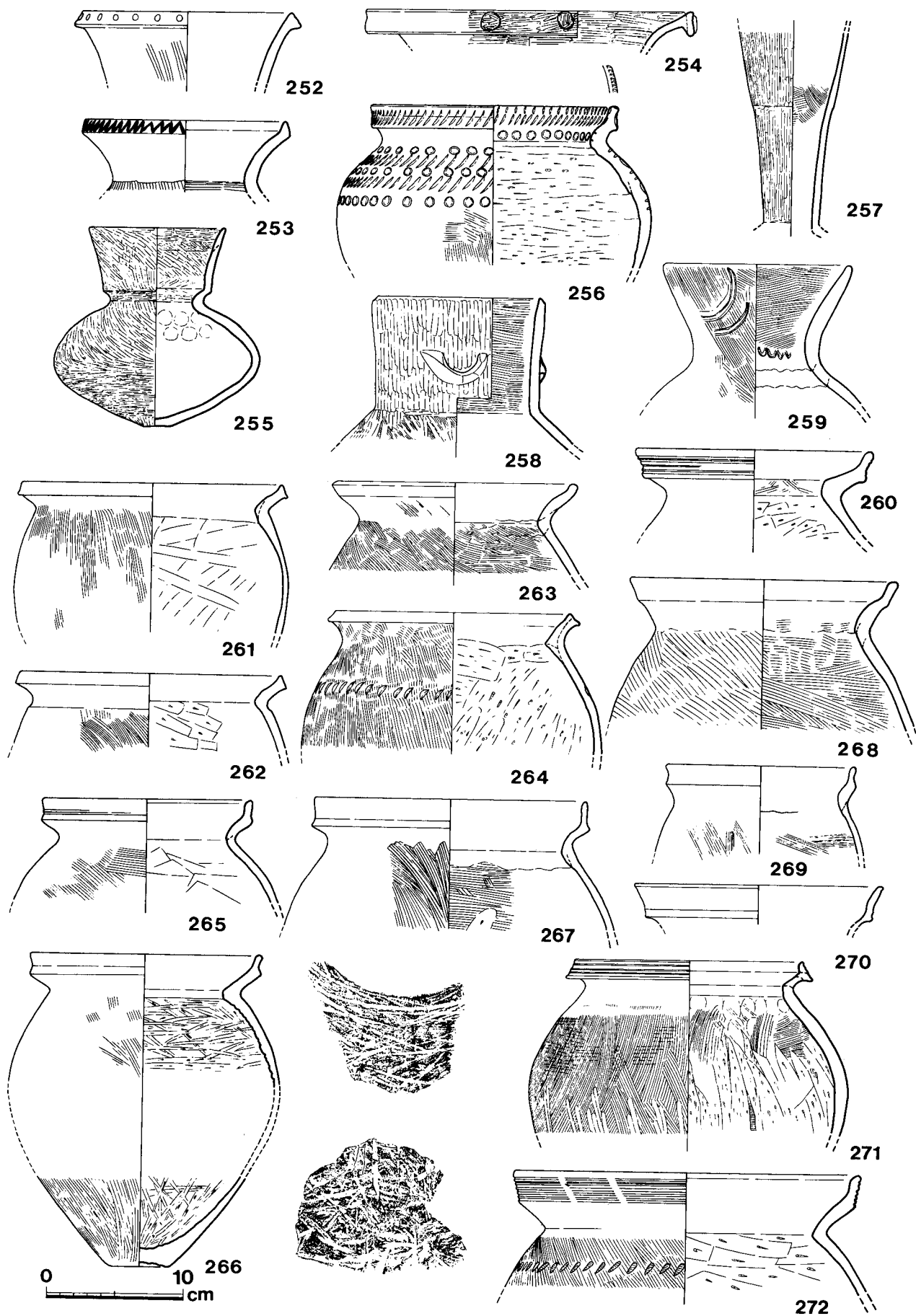


Fig. 85 SD05 出土土器 (第3次・下層)

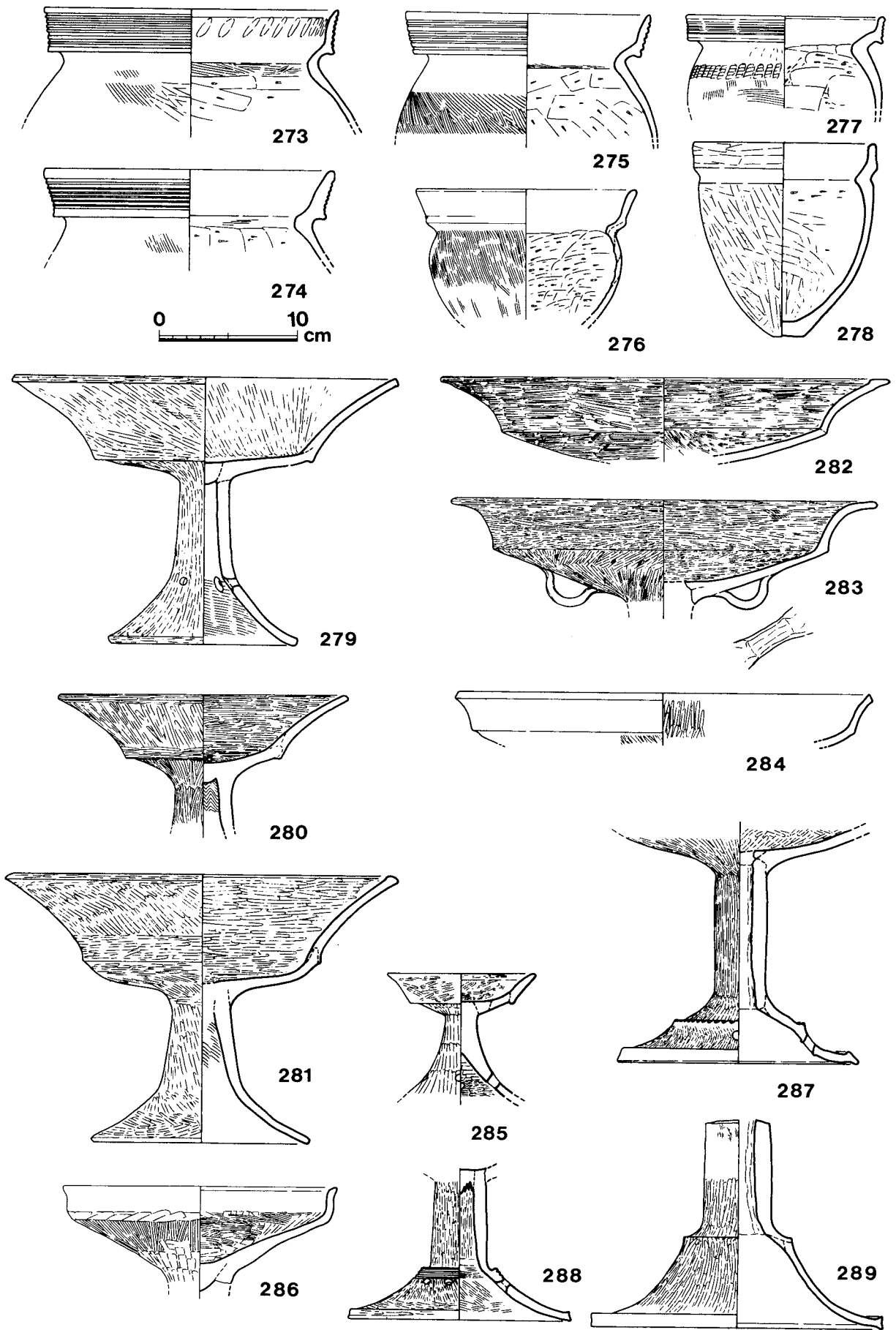


Fig. 86 SD05 出土土器 (第3次・下層)

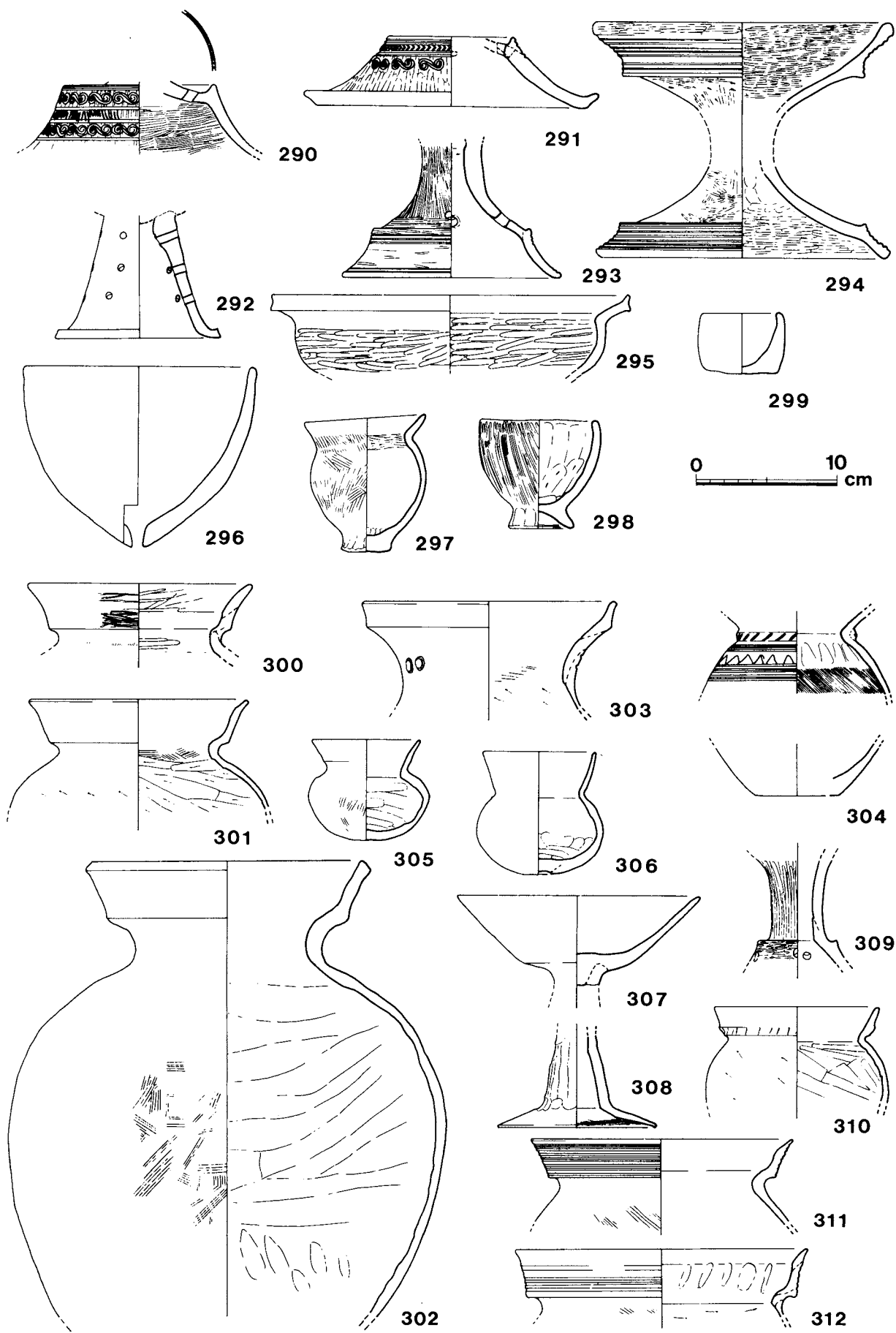


Fig. 87 SD05 出土土器(第3次・下層)・SD06 出土土器

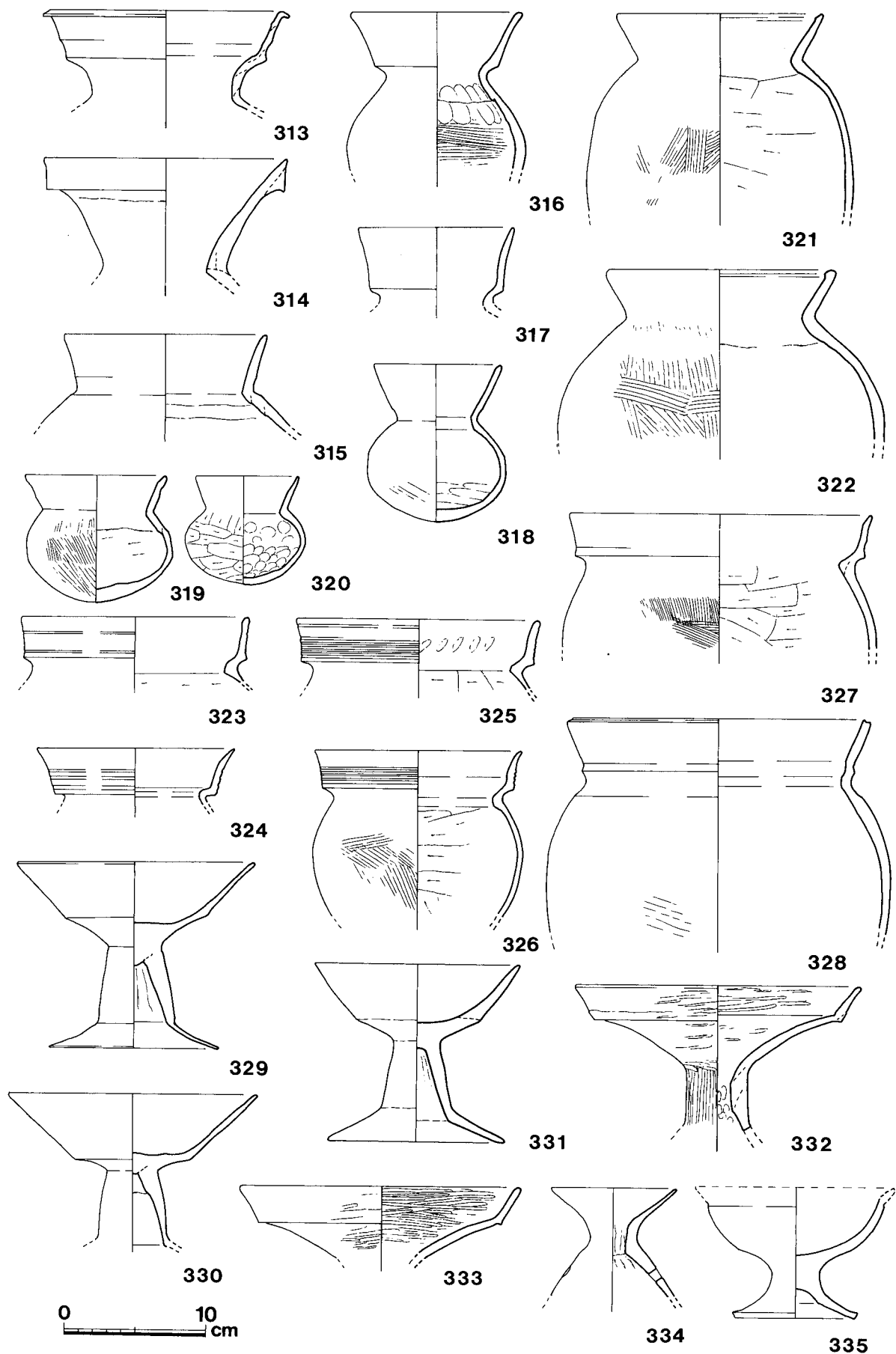


Fig. 88 SD305 出土土器

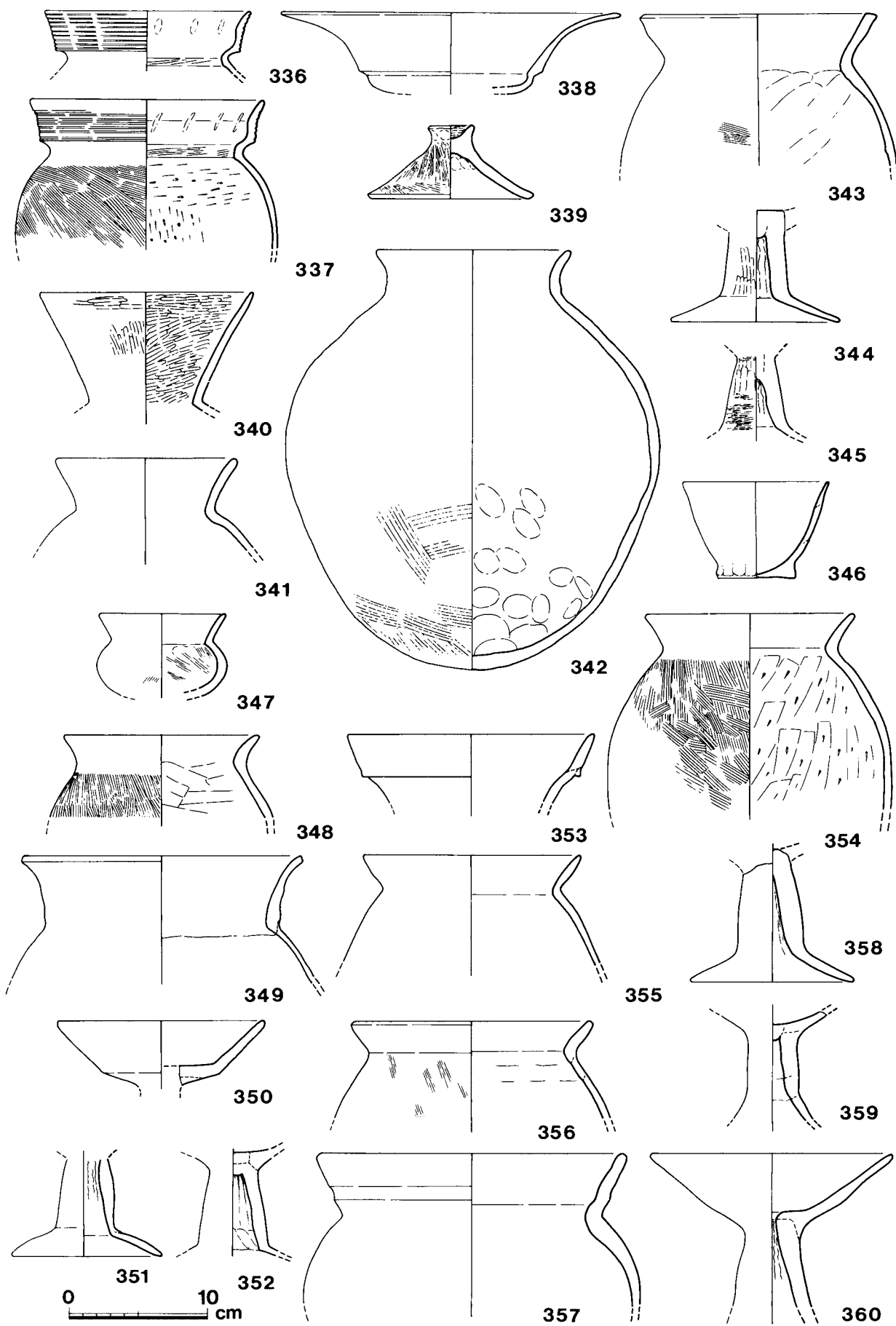


Fig. 89 各土坑出土土器 (第3次)

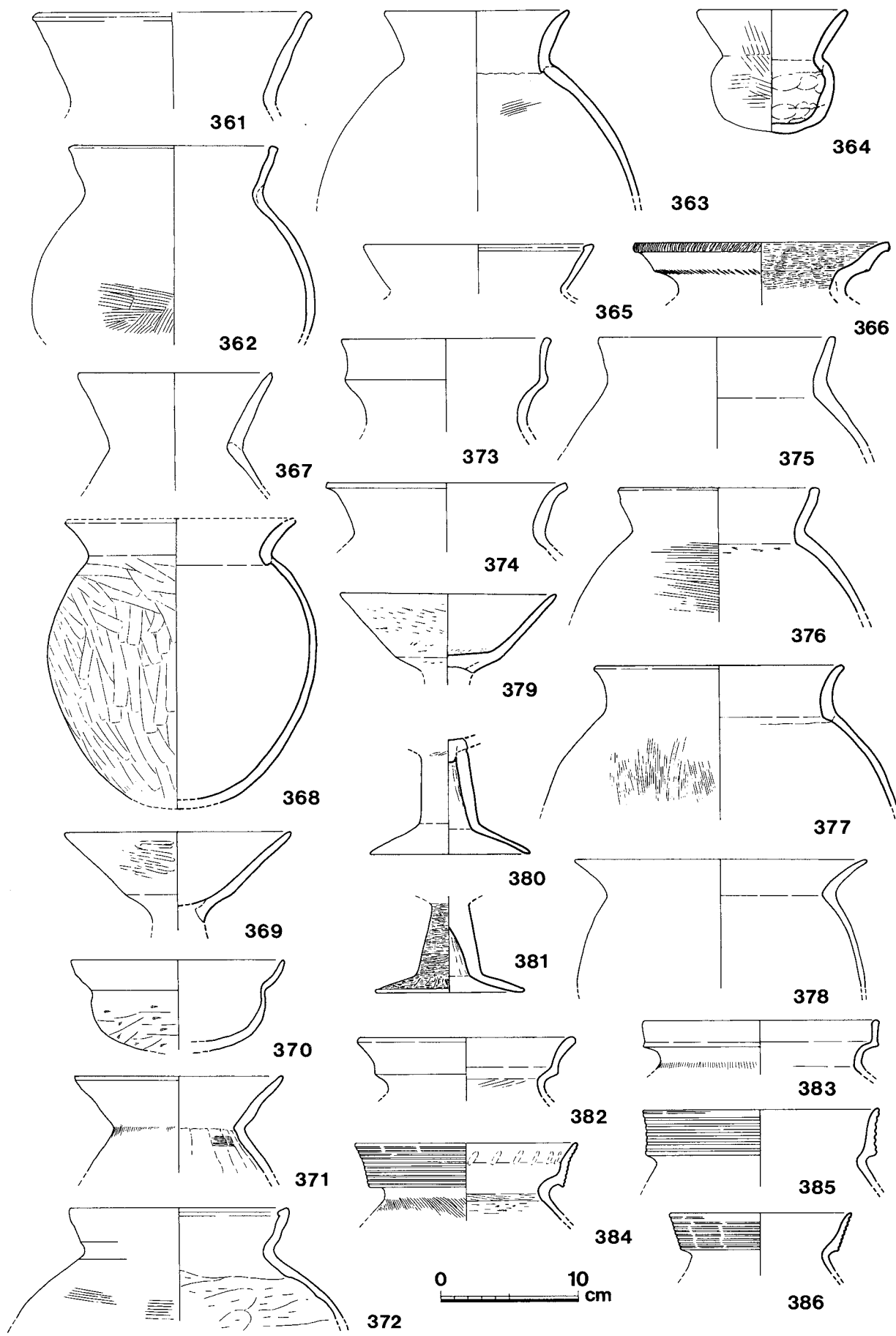


Fig. 90 各土坑出土土器 (第3次)

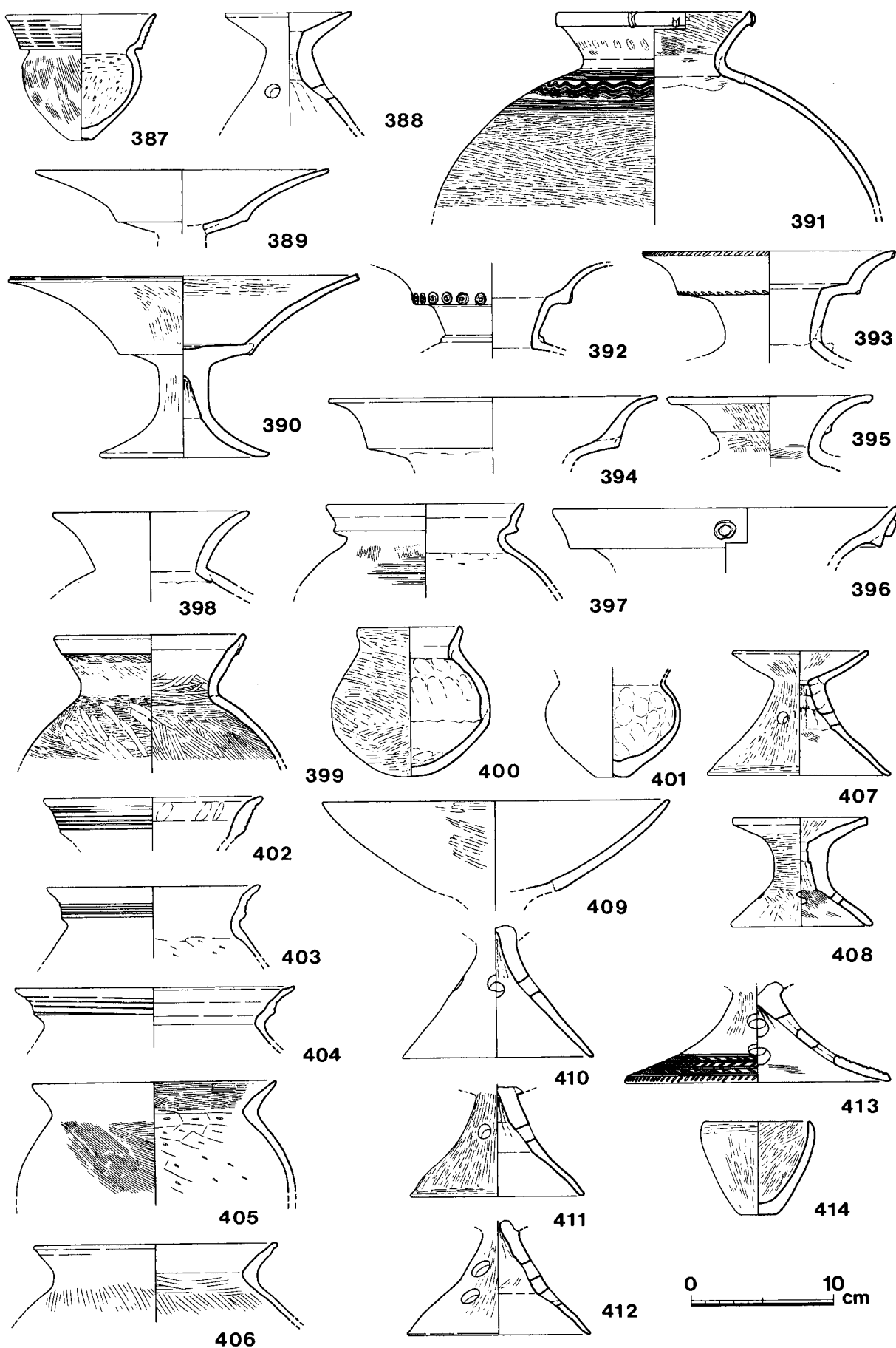


Fig. 91 各土坑出土土器（第3次）

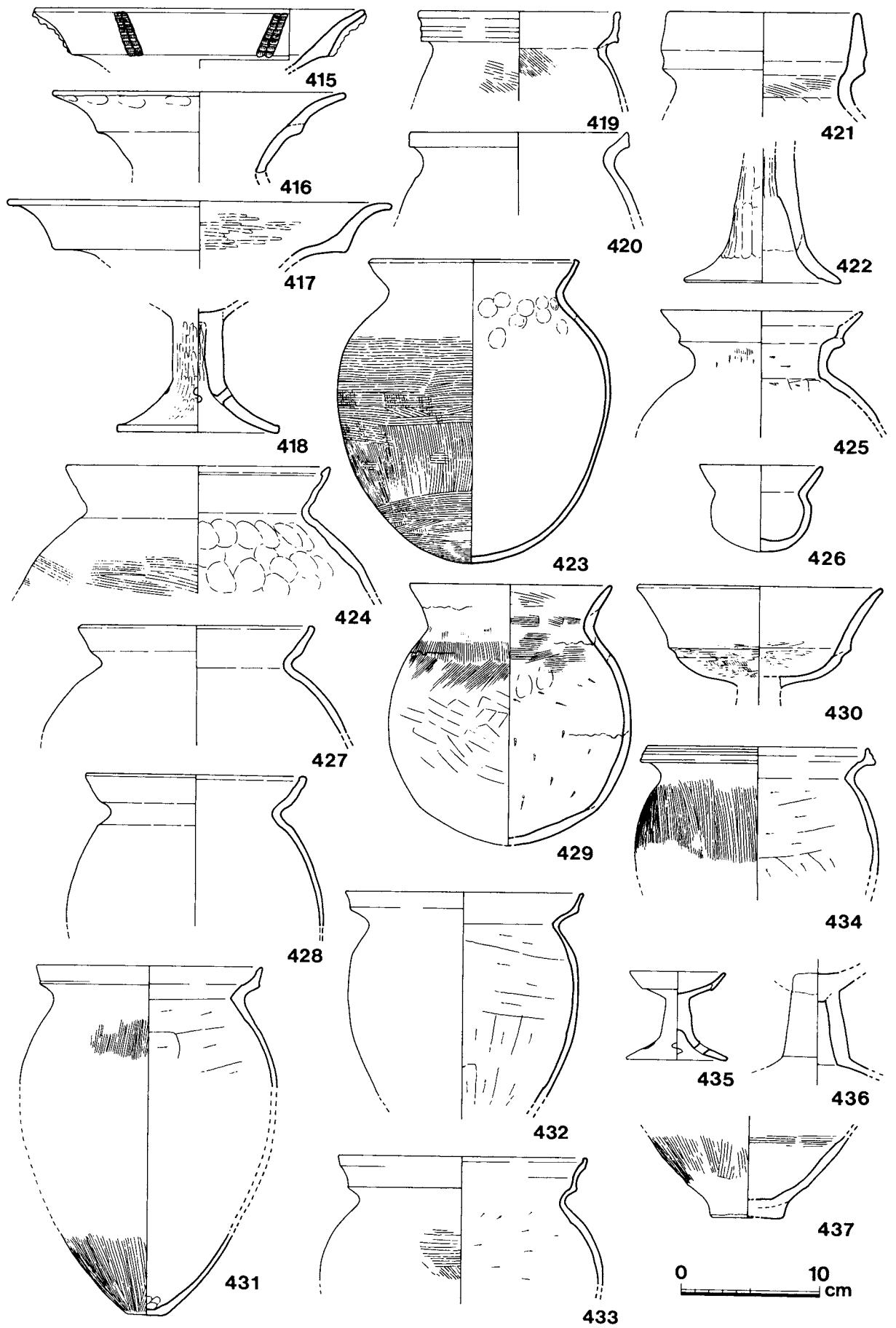


Fig. 92 各土坑各溝出土土器 (第3次)

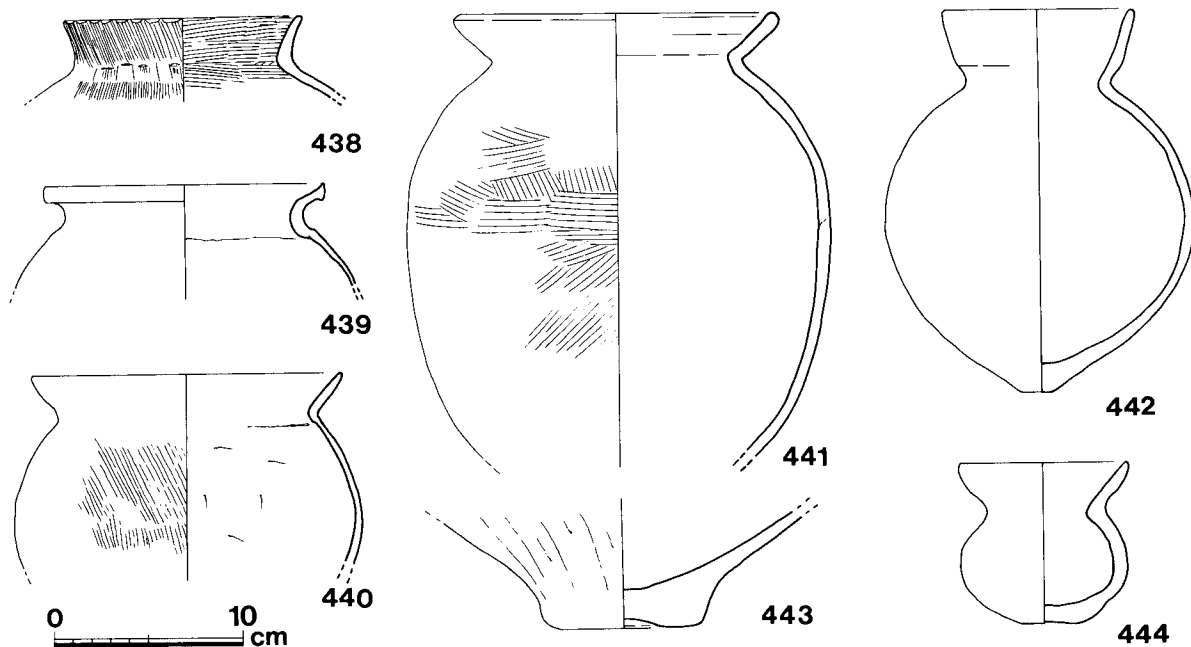


Fig. 93 各遺構出土土器

c) 古代以降

今回の調査では総量のパンケース約15箱分の古代・中世の土器が出土した。古代の土器はおおむね8世紀後半から9世紀前半に位置付けられるものが主体を占めている。

以下、各遺構出土土器・包含層出土土器の順で述べる。

1) 遺構出土土器

SB301 (1・2)

SB301からは柱穴(ピット393)覆土中より須恵器の皿A(無台皿)と内黒の土師器碗が出土した。皿Aは口径14.6cmの小型品で径高指数15、外傾度50°と浅身で外傾する体部をもち底部にヘラ切り痕を残す。碗は体部が内湾気味に立ち上がるものである。

SB302 (3・15)

SB302では幾つかの柱穴から土器が出土している。須恵器の坏B蓋は口径12.5cm(3)、13.3cm(4)、扁平化した擬宝珠つまみをもつ。坏B(有台坏)は10が口径10.2cm、径高指数46と小形で比較的深身の器形を有し、体部の立ち上がりがきついものであるが、その他は口径11.6cm前後、外傾度60~67°で直線的に開く体部と小さく丸い高台を有する。坏A(無台坏)は体部が開きやや小形の7を除き、口径12.9cm、径高指数25前後、外傾度55°前後の器形をもつ。8には底部外面に「午」らしい墨書が認められる。皿Aは口径13.8cm、外傾度48°で内黒の土師器碗はやや直線的に開く体部をもつ。これらの土器群は8世紀末から9世紀前半を主体とするものであろう。

SA301 (16)

SB303に付属する施設と考えられるSA301からは須恵器坏Aが出土している。径高指数33、外傾度54°とSB302出土のものに比べ深身体部の開きが少ない。8世紀末から9世紀前半に属するものであろう。

SE203・207 (18・17)

土師質土器の皿が出土している。いずれも非ロクロ成形で、SE203出土の18は口縁端部をつまみ上げ、薄手で外傾する体部をもつ。SE207の17は先端を丸くおさめた厚手で短い体部をもつもので、口径

15. 4cmと大形の皿である。

SK05 (19~21)

器高2cmと浅身で外傾する体部をもつ須恵器の皿Aと鉢の破片が出土したほか、白磁の碗が出土している。

SK25 (22)

珠洲焼の片口鉢が出土している。

SK302 (23)

須恵器の坏B蓋が出土している。口径15cmと大形で、口縁部は屈曲し端部の折り返しは丸く短い。

SK316 (24~26)

24の須恵器坏Bは小形深身で体部の開きの少ない器形である。26は外面赤彩で内黒の土師器稜椀である。多角外方に広がる高台をもつ。

SK327 (27)

小形の須恵器坏B蓋が出土している。口縁部が屈曲し、端部の折り返しは太く丸い。

SK333 (29・30)

須恵器の坏Aと皿Aがある。坏Aは径高指数26、外傾度46°と浅身で開いた体部を有する。皿Aは器高2.0cmと浅身で体部は短く外傾する。

SK338 (28・31)

須恵器坏B蓋と広口の瓶の破片が出土している。蓋はつまみ径が小さく先端が丸く高まる。

SK340 (32・33)

須恵器坏Aが2点出土している。32は径高指数30、外傾度61°、33は径高指数27、外傾度43°。

SD02 (3)

須恵器甕の口縁部が出土している。

SD05 (35~50)

SD05は弥生時代後期後半に営まれた大溝であるが、覆土の最上層から古代の須恵器が出土しており、溝の最終的な埋没時期をしめしている。坏B蓋(35)はやや大形で、口縁端部が緩く屈曲し、折り返しは先端の丸い三角形を呈する。坏B(48・49・50)は径高指数32・37とやや浅身で、68°前後の外傾度をとる。主体を占める坏Aは口径11.5~12cmで径高指数30前後のものが多い。中でも36~39は、器壁が厚く体部の立ち上がり丸みを帯び外傾度65~69と相対的に古手の様相を示している。これに対して46・47は体部が開き器壁も薄手で新しい特徴をもつ。50は皿Bの底部で、台径11.6cmと大形である。今回の調査で確認された皿Bはこの1点のみで、皿Bの比率が小さいことが特徴的である。これらSD05最上層の出土土器は一部に9世紀後半に下るものが含まれているが、多くは8世紀末から9世紀前半に位置付けられるものである。なお35・44・47・48には墨書が認められ、47は「午」と判読される。

SD06 (51・52)

口縁端部が屈曲するタイプの須恵器坏B蓋とやや浅身の坏Aがある。

SD07 (53~56)

須恵器の坏B蓋、坏B、甕体部片のほか稜椀が出土している。稜椀は口径16.4cm、径高指数36、外傾度67°で体部が直線的に外傾する器形を有し、体部外面に突帯一条を巡らす。

SD206 (57)

土師器の小形甕が出土している。底部は平底で体部上半にカキメ調整が施される。

SD208 (58~71)

SD208からは比較的まとまった土器が出土している。須恵器の坏Bは当遺跡で標準的な形態の62のほか、やや小形の61、大形で高台の位置が外側によった63がある。62は底部外面に墨痕が観察され、転用硯として使用されていたことを示す。坏Aは径高指数25~27、外傾度56~62°の器形である。64は体部が丸くふくらむ鉢で、口縁端部は円くおさめている。65は稜椀の底部であろう。高台は高目で外方に張出している。土師器には内黒の椀B(68)と甕の破片がある。椀Bは断面三角形の低い小さく高台が特徴的である。甕は大形と小形の2種があり、66は底部に回転糸切り痕を残す。

SD210 (72)

須恵器の小形壺が出土している。

SD301 (73・74)

坏B蓋は口径12.3cmで、つまみは扁平なボタン形である。坏Aは口径13.4cmとやや大振りで体部は54°の開きをもつ。

SD302 (75~77)

須恵器の坏Bと鉢の破片が出土している。75は口径76は上方に屈曲する把手をもつ。

SD305 (78~81)

須恵器の坏Aは口径12cm台、外傾度61°。体部外面に「上」の墨書がある。81は灰釉の椀で細く高い高台がつく。

SD307 (82・84)

須恵器坏B蓋と坏Aが出土している。坏Aは浅身の器形で径高指数25、外傾度59°。

SD311 (83・85)

須恵器坏Bは口径11.3cmと小形で体部の器肉も薄手である。坏Aは口径12.4cm、径高指数31、外傾度65°。

86~100はピットや柱穴出土の土器である。坏B蓋には口径12cm台の小形のものと18cm台の大形のものがある。いずれも口縁端部の折り返しは太く小さい。坏Aは口径13cm後半から14cmとやや大振りで、器壁が薄く開くタイプの器形である。皿Aは口径15cm前後で器高が低く体部が開いた器形である。94は長頸壺の口縁部と思われる。96は土師器の椀で、底部が小さく体部の開きは大きい。97~99は中世土師質土器の皿である。98・99はロクロ成形で底部に回転糸切り痕を残す。12世紀代の所産と思われる。100は加賀焼の破片である。

2) 包含層出土土器

須恵器

坏B蓋(101~112)須恵器坏B蓋は法量から口径11.5~13cmのⅢ、15~16cmのⅡ、18cmを超えるⅠに分けられる。量的に多いのは小形のⅢで、これは遺溝出土土器の様相と共通している。天井部は概して平坦であり、ヘラ切り痕を明瞭に残すものの散見されるが、小径のつまみをもつものは調整が丁寧な傾向がある。口縁端部の折り返しは、細身で内面が明瞭に屈曲するもの(101~103)、小形化したもの(104~107)があり、口径の大きいⅡ・Ⅰでは後者のタイプとなっている。坏B(112~127)には口径11.7cm前後のもの、12cm台のもの、13cm台のものがあり、口径をますほど体部が外傾する傾向にある。127は胎土より南加賀古窯址群産の須恵器と考えられる。坏A(113~121)は口径12~13cmで体部の外傾度60~65°のもの、55°前後のもの、50°以下のものがある。115にはヘラ記号、116・119には墨書が認められる。皿A(128~130)は口径16~17cmで器高が低い。体部外傾度はそれぞれ65°、52°、42°

をはかる。131は高坏脚部である。鉢（132～134）は口縁端部を丸くおさめ、体部は肩部の位置が多角屈曲した器形である。137～144は壺の破片である。138は台付壺の底部で端部が反転屈曲した高台をつける。139は外面下半部にケズリの痕跡が窺われ、140は底部から器肉を薄手につくっている。142・141は双耳瓶で、下半部に反りを付したタイプの把手がつく。143・144は広口壺の口縁部である。

土師器

坏Bには内黒で細めの高台がつく145、黒色処理をおこなわず太目の高台がつく146がある。甕（147・148）は口縁端部をわずかにつまみ上げるものでない外面にカキ目調整を施す。

灰釉陶器

149は灰釉の碗で細身で三日月形の高台がつく。内面に重ね焼の痕跡を残す。

輸入陶磁器

151は青白磁合子の蓋で外面に細い花卉状の文様が浮き彫りされている。152は青磁の碗で内面に花卉文が施される。153は肥厚した口縁部をもつ白磁の碗である。

中世土器

156・157珠洲焼の片口鉢。158～164は土師質土器の皿で、口径7.7cmと小形で浅身の158、口径10～11cmの159～161、口径12～14cmの大形浅身で平底の162～164がある。いずれも非ロクロ成形である。

小結

今回の調査で出土した古代の土器は8世紀後半から9世紀後半にかけての約1世紀の間にわたっているが、中でも量的な中心をなすのは8世紀末から9世紀前半期の土器である。検出された数棟の掘立柱建物の中には出土遺物がなく時期を特定できないものも含まれているが、おおむねこの頃を中心に集落が展開されたと考えて大過ないと思われる。なお、須恵器の胎土はいわゆる「高松」産のものが大半で、若干の「南加賀」「辰口」「末」産が見出される。

註

- 1) 寺沢薫他「矢部遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊 奈良県立橿原考古学研究所 1986年
- 2) 田嶋明人他「漆町遺跡」Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター 1986年
- 3) 壺B6のように、口頸部が通常の甕よりも締まっているために壺のような印象を与えるものがある。この場合、外面に煤が付着していることが多く、実際甕として使われていたことが分る。当地域において、壺と甕の不分明さのあらわれであろう。
- 4) 田中琢「布留式以前」『考古学研究』12-2 1965年
- 5) 吉岡康暢他「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ 石川県教育委員会 1976年
- 6) 谷内尾晋司「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』 石川考古学研究会 1984年
- 7) 径高指数とは、(器高÷口径)×100で求めた数値である。

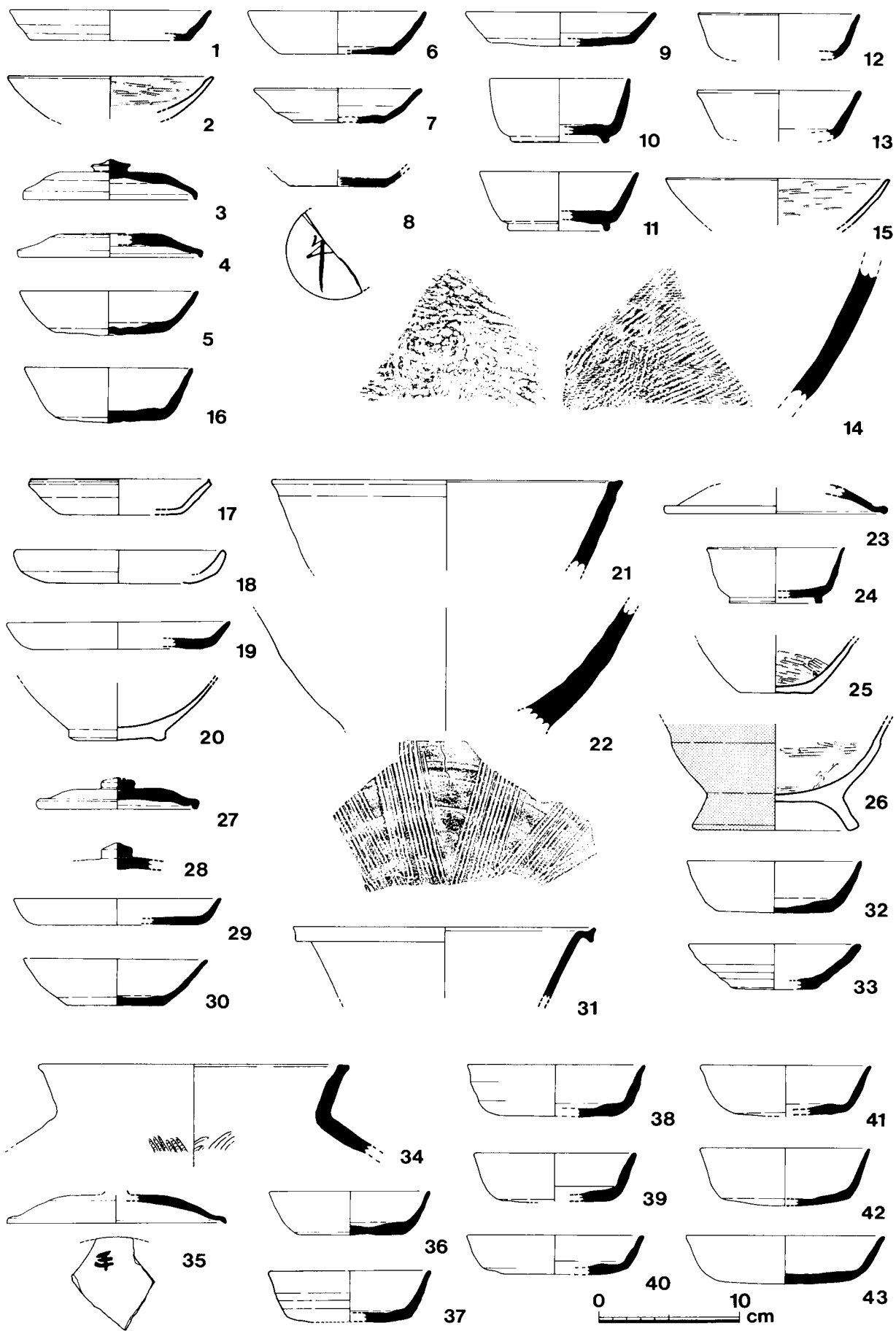


Fig. 94 遺構出土土器 (建物・井戸・土坑・溝)

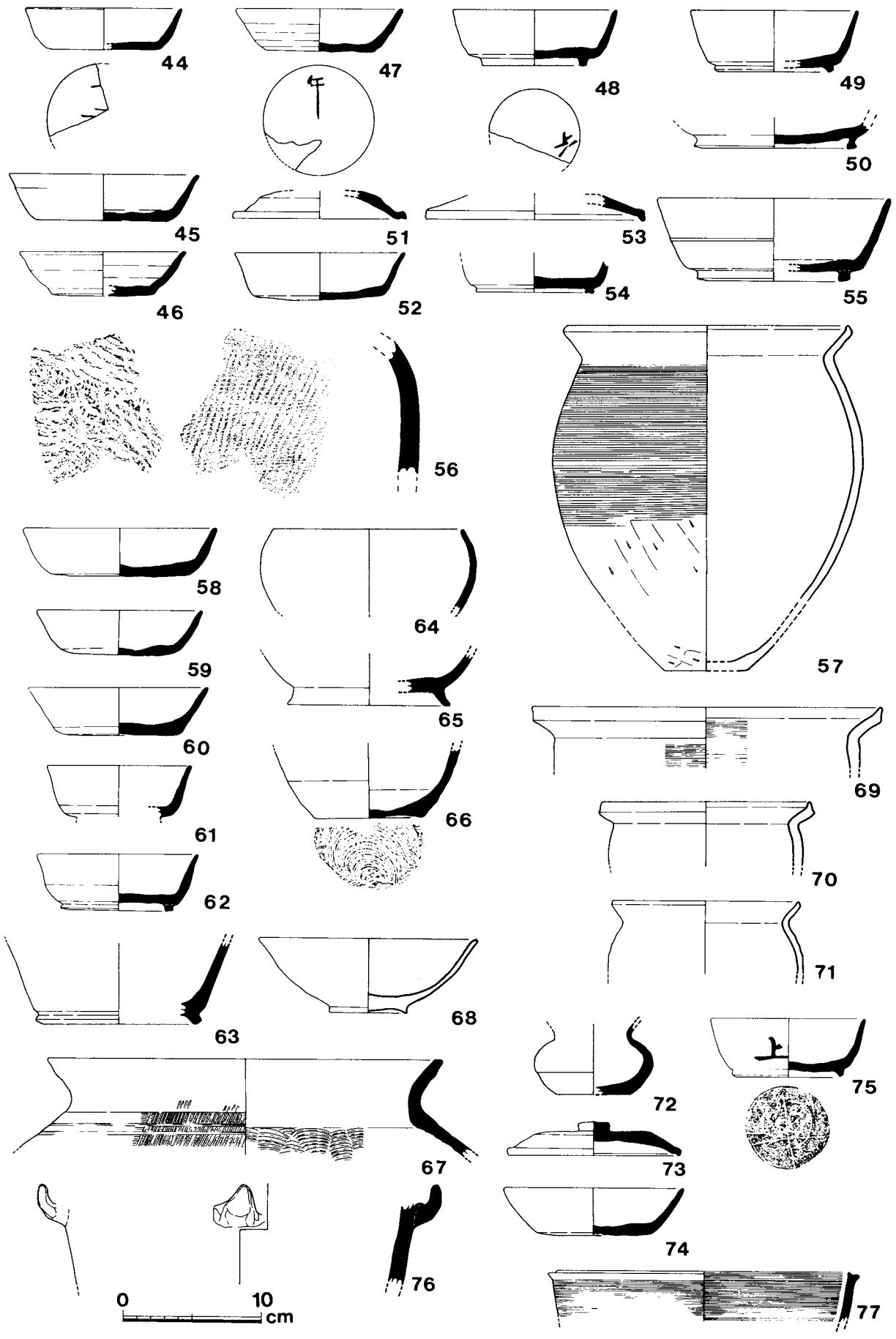


Fig. 95 遺構出土土器

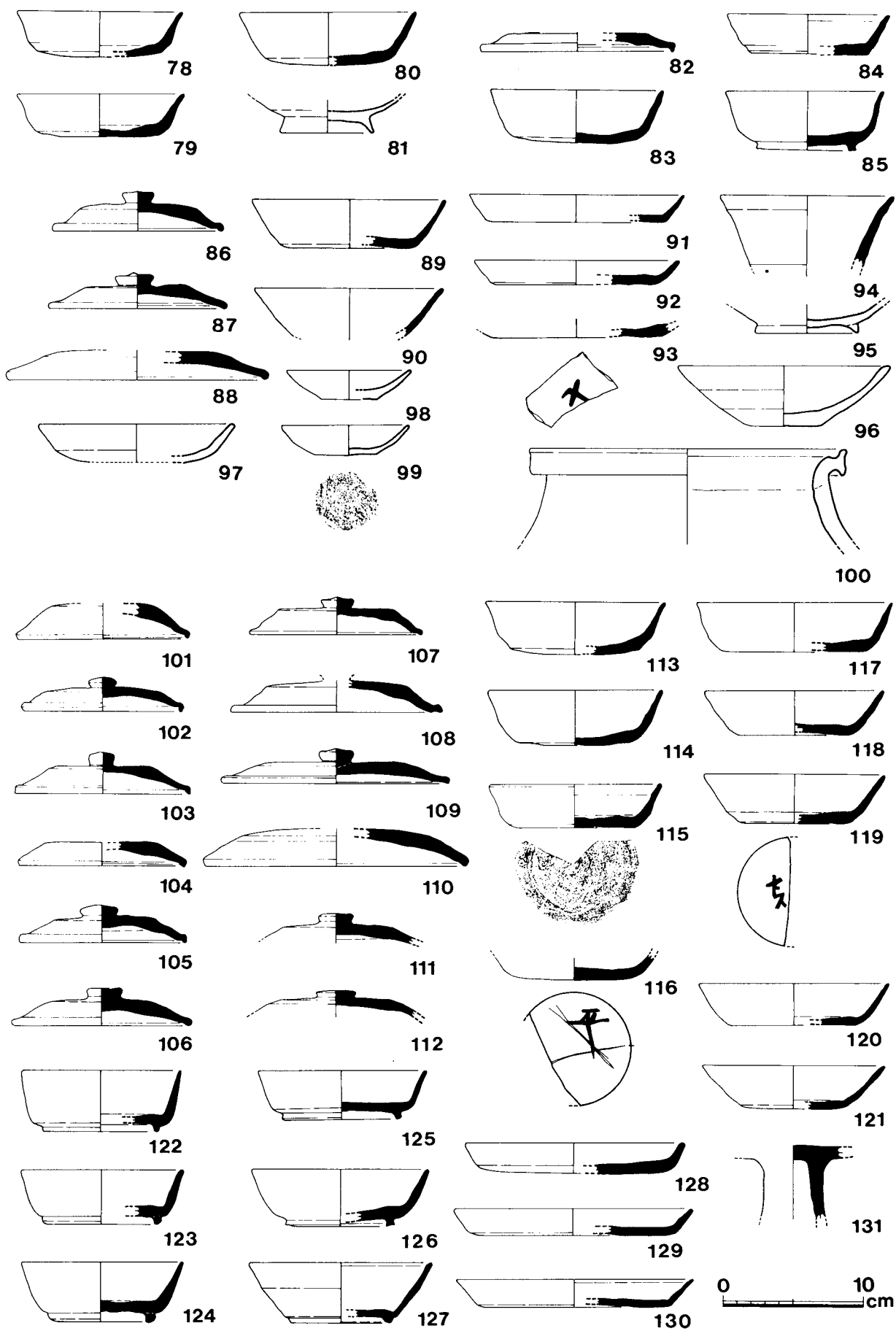


Fig. 96 遺構（溝・柱穴・ピット）及び包含層出土土器

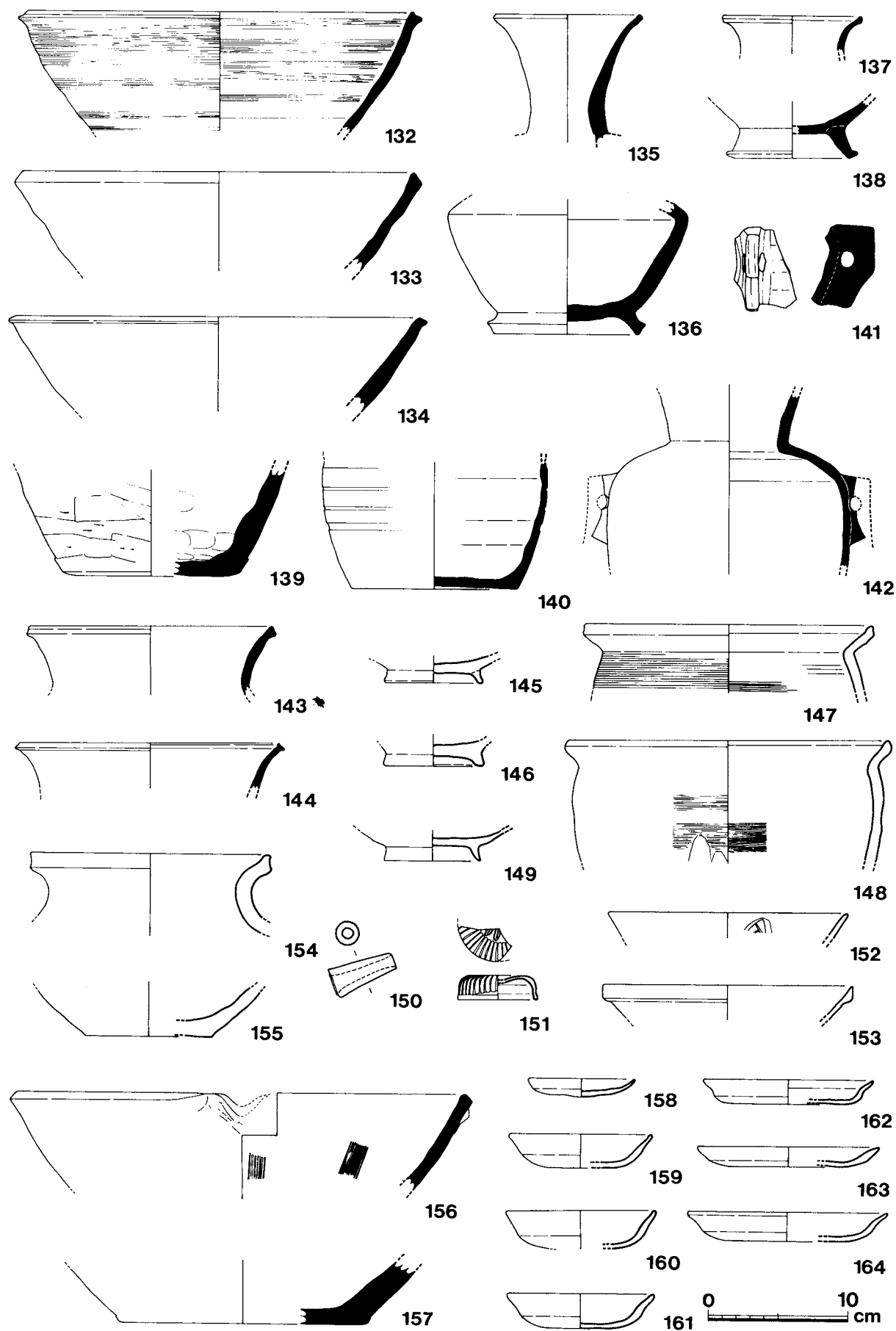


Fig.97 包含層出土土器

第2節 木製品

木器の出土量も多い。製品となったものをはじめ、原材料や未製品、何等かの加工部材等が遺物箱で80箱相当が出土している。そのほとんどがSD05中層からである。

柄穴式の鍬（1～8・201～203）

狭鍬（1～4・6・201）と広鍬（5・202）、横鍬の可能性のあるもの（8）がある。なお、7はエブリの可能性が高い。基本的にアカガシから作られている。

1・4は同じ構造をとる。1は上下縁が直線で、両側縁が湾曲し、左側の刃部は使用による摩滅のせいかすり減った状態である。裏面に柄穴から2cm上に鍬の長軸に直交する幅2cm、1cmの深さの溝がある。この溝は、補強板を差し込むもので、上の幅よりも下のほうが広くずれにくいように作られている。柄の装着角度は68°である。4も裏面に補強板を差し込む溝がある。鍬の大部分が欠損しているので全体の形状が不明であるものの、柄穴付近で明確な屈曲を持つことがわかる。柄の装着角度は59°である。鍬本体はアカガシ製で、柄はスギから作られている。2は長方形を呈し両側縁は斜めにカットされている。貧弱な舟形隆起を持ち柄穴の両側に幅1.2cmの穴がある。江上A遺跡では当て板どめの穴と報告されている⁽¹⁾。鍬上端の構造がわからないので同じものか不明である。柄の装着角度は72°である。なお6は舟形隆起が剥離したものである。

3は中膨れの長方形を呈し、柄穴は長さ2cm、幅3cmの方形である。それを中心に強度を補強するための隆起がみられる。刃部は鋭利ではなく、使用による摩滅によるものか分らない。またそこにカットの痕跡もみられる。完成を目前にした未製品の可能性もある。柄の装着角度は57°である。202は短冊型を呈する。柄穴周辺にそれを囲むように舟形隆起がみられるものの、現状では欠損している。刃部は角張っているのでよく使い込まれていることがわかる。両側縁は、斜めにカットされ面を作っている。頭部は粗く切り放たれたままである。柄の装着角度は73°である。

5は平面台形状を呈する。大きな舟形隆起を持つ。柄穴の両側上端近くに長さ1.6cm、幅0.9cmの方形の穴があげられている。泥よけ装着孔と思われ、紐ずれによる摩滅がみられる。柄の装着角度は67°である。201は5とほぼ同じ形態で、側縁は斜めにカットされている。大きな舟形隆起をもち厚手の作りである。5にある上縁端の泥よけ装着孔の有無は、被熱による炭化によってよく分らない。柄の装着角度は64°である。

7は刃部の幅が34cm（復元値）を測り、上端の狭い台形状を呈すると考えられる。大きな舟形隆起を持ち、裏面に柄穴の下端に接するように溝が切られている。どのような構造になるかわからない。柄の装着角度が83°であること、鍬の軸が年輪に直交するためにその強度は他のものに比べて弱いことや刃部が長いこと、樹種もクヌギであることからエブリの可能性もあろう。なお、刃部状に削り出されている。8は鍬の可能性を考えた。キハダから作られている。上方に8×10mmの穴がある。

203は、頭部の柄穴しか遺存していないものの、その形状からナスビ形を呈する二股鍬である。柄穴は長方形である。柄の装着角度は63°である。石川でこのタイプの出土例は比較的少ないようである。

泥よけ（9～14）

9がアカガシから作られている他は、クヌギから作られている。基本的にほぼ同じ形態で、11・12以外は肩の張った形状である。いずれも薄いつくりなので、組合せ鋤の可能性は少ない。柄との装着角度は140°～150°前後である。柄穴には緊縛用の樹皮と楔（カエデ材）が打ち込まれている。

9は全面にわたってチョンナ痕が見られ、しっかりした方形の頭部を持つ。10も同様にしっかりした頭部を持ち、身のほうに並んだ二孔がある。機能は不明。11～14はいずれも頭部を欠損している。11の

頭部の断片を見ると、外にいくにしたがって薄くなっていることから、10のような大きなものを想定し難い。また、頭部欠損のものが多くということは使用中の破損がそこに集中して見られることを表わしており、10等に比べて破損しやすい構造、つまりそれらより簡略な構造であったと予想される。

なお、15はアカガシ材から作られていることから、農具の可能性を考えると、組合せの鋤になる可能性が大きい。

鋤 (16~19)

いずれも一木造で、16・18が先の尖った長楕円形を呈し、19がスコップ状を呈する。おそらく17の柄部と接する部分の状態から、19と同じ形状であったと推定できる。アカガシ、スダジイ、コナラ材が使われ、多様な材質で作られている。

19の身は $\frac{1}{2}$ ほど欠損しており、補修孔が4ヶ所にわたって穿たれている。表面は平滑平坦だが、裏面は丸みを帯び、断面山形を呈する。これは17でもそうである。把手は柄の軸と斜交し使いにくかったのではないかと想像できる。なお柄の断面形が丸く仕上げられているもの(19)と面取りされた四角形を呈するものの二者が認められる。

鋤把手 (27)

アブキ材が使われている。底面は平坦だがその他は丸みを帯びて握りやすいように作っている。中央に柄を装着するための方孔がある。

着柄式の鍬 (20~26)

膝柄股鍬がクヌギ材、それ以外がアカガシ材というように使い分けがなされている。おそらく使用目的が異なると考えられる。

20~23はいわゆる「ナスビ形」を呈する膝柄股鍬である。いずれも両側に張り出す突起と全長の60%に及ぶ二股となった刃部をもつ。着柄軸は断面半円形に削り出され、刃部にいくに従って平坦になっている。着柄軸先端は突起が削り出され紐がずれないようにになっている。23では突出部近くに径3mmの小孔が3ヶ所あけられている。機能は不明。

24~26は「ナスビ形」を呈する膝柄鍬で、B類の範疇に入る。明確な両側に突出する突起から肩を張らずに下膨れに刃部が続く。着柄軸を欠損しているのでその形態は不明だが、膝柄股鍬のような丸みはないようである。つまり、笠形の着柄部は刃部から漸次厚み増すようで、視覚的に受ける印象は膝柄股鍬と違う。刃部は角張るもの(25・26)と丸みの強いものの2形態が認められる。なお、25の刃部は短いが、先端が利器によって切断された痕跡がある。小型のものとして注目できる。

膝柄 (29)

マツ材が使われ着柄鍬の膝柄である。芯持ち材で外方に反りを持つL字状を呈し、その両端に山形の隆起を削り出している。握り部の隆起に比べて鍬を取り付ける台部の突起およびその周辺の遺存状態は悪い。使用時における緊縛による傷みがあったと考えられる。断面カマボコ形を呈す。着柄面はやや反っているものの、本体を付けた時の着柄角度は65°前後になる。柄の長さは58cmで、少し短いような気がする。なお、平城宮朝集殿下層のSD6030出土の膝柄は、台部の前後を縛る構造だが、本例には一方しかみられないのが特徴である。

農具柄 (31~34)

全てスギ材が使われている。32は一方面を斜めにカットし、端から20cmのところでは約25°の角度で屈曲している。緊縛の痕跡は認められない。33は幅1cm程の溝を切り、頭部は三角形に作っている。底面は平滑に仕上げられ、断面山形を呈する。組合せ鋤に接続するものであろう。31は断面が面取りされた四角形を呈し下端は幅広くなっている。34は丸い棒状を呈し、両側がカットされている。

番号	種類	法 量 (cm)	装着角度	備 考	実測番号
1	狭 鍬	長25.6、刃長13.5、孔径3.2	68°		Y17
2	狭 鍬	長(21.6)、刃長10.9	72°	泥よけ孔	B70
3	狭 鍬	長27.0、刃長 9.7、孔径 2.0× 3.0	57°		B85
4	狭 鍬	長(12.1)、孔径 4.0	59°	蟻じゃぐり溝	Y21
5	広 鍬	長23.5、刃長(25.8)、孔径 3.7~ 4.0	67°	泥よけ孔	B26
6	舟形隆起				B12
7	エブリ	長(10.7)、幅(16.3)	83°	復元刃長17.4	Y23
8	鍬 状	長(17.3)、幅34.0、厚 1.4	—		B82
9	泥よけ	長32.0、柄幅10.9、幅(17.6)、孔径 3.5	140°	緊縛紐	B95
10	泥よけ	長27.0、柄幅7~ 9.2、幅19.4、孔径 3.0	141°	緊縛紐	B32
11	泥よけ	長(24.2)、幅(17.6)、孔径 3.5	—		B27
12	泥よけ	長(24.9)、幅15.8	—		B30
13	泥よけ	長(27.1)、幅23.9	146°		B88
14	泥よけ	長(25.6)、柄幅11.1、幅16.5	151°		B15
15	鋤	長(22.4)、幅(11.1)、厚さ 0.6~ 1.7	—	未製品?	B75
16	鋤	長(20.0)、柄幅 2.2、幅11.5			Y27
17	鋤	長(10.6)、柄幅 3.4			Y31
18	鋤	長(34.8)、柄幅 2.6			Y22
19	鋤	長 109.7、柄幅 3.5			B96
20	膝柄股鍬	長63.4、刃長37.6、刃幅 5.6、柄幅 3.2			B78
21	膝柄股鍬	長57.4、刃長35.1、刃幅23.1、柄幅 3.2			B44
22	膝柄股鍬	長(26.0)			B90
23	膝柄股鍬	長(20.6)			B81
24	膝柄鍬	長(53.6)、刃長32.6、刃幅12.4			B91
25	膝柄鍬	長(24.3)、刃長13.3、刃幅 8.8、柄幅 3.1			Y19
26	膝柄鍬	長(63.6)、刃長49.7、刃幅 9.7、柄幅 5.4			B3
27	鋤 把手	長10.2、幅 3.3、厚 2.7、孔長 2.6、孔幅1.1			Y55
29	鍬 柄	長55.2、柄幅 3.9、装着部長17.4	64°		Y1
31	鋤 柄	長(68.8)、幅 4.1、7.0			B67
32	柄	長(27.3)、幅 3.3			Y44
33	柄	長(16.5)、幅 2.8			Y29
34	柄	長27.3、幅 3.9		再利用?	Y11
201	広 鍬	長20.3、幅(22)、孔径 3.4	64°		R6
202	狭 鍬	長26.7、幅 9.6、孔径 3.3	73°		R10
203	鍬		63°		R9

Tab. 7 鍬・鋤類計測表

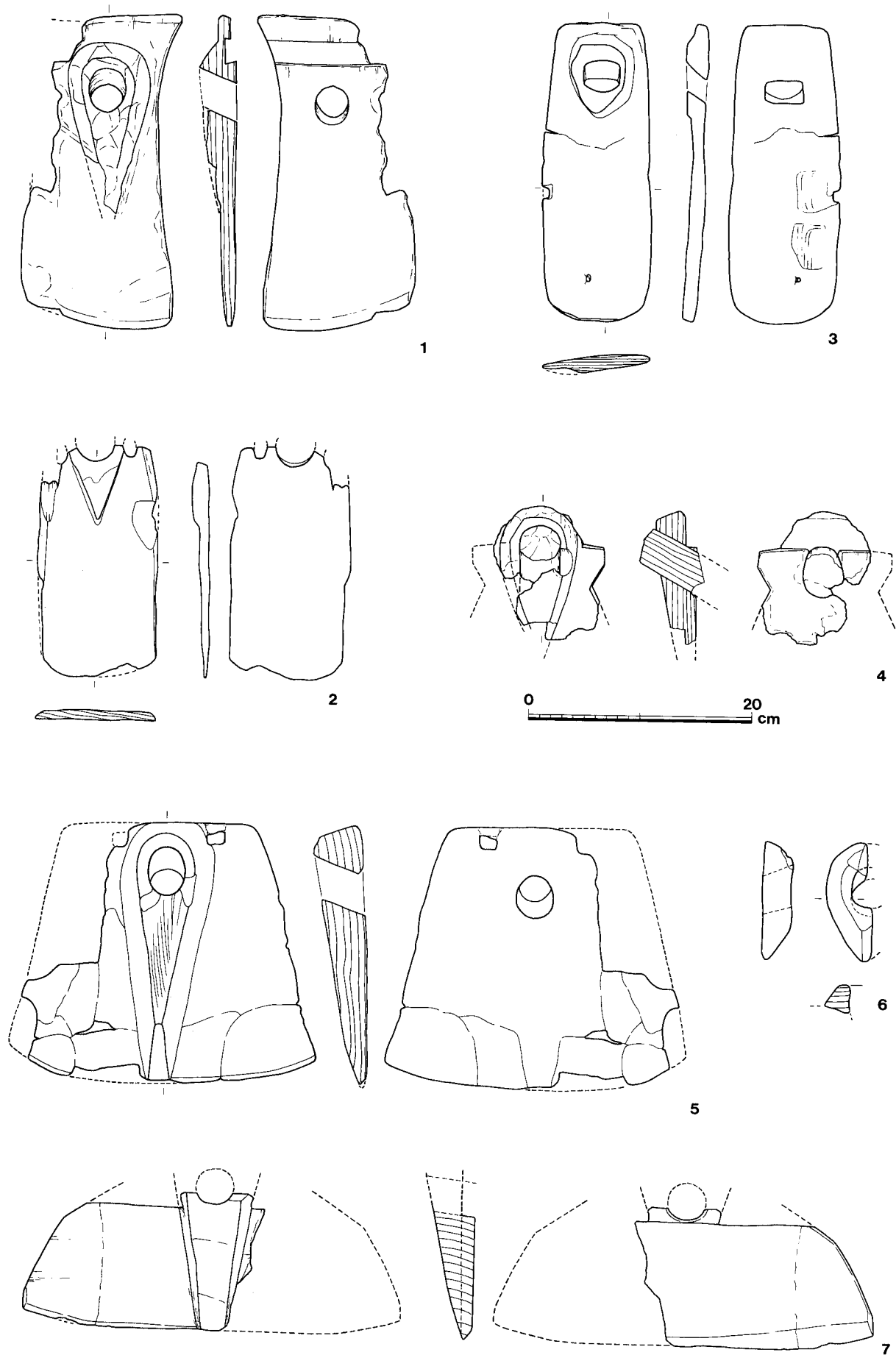


Fig. 98 SD05 出土木器

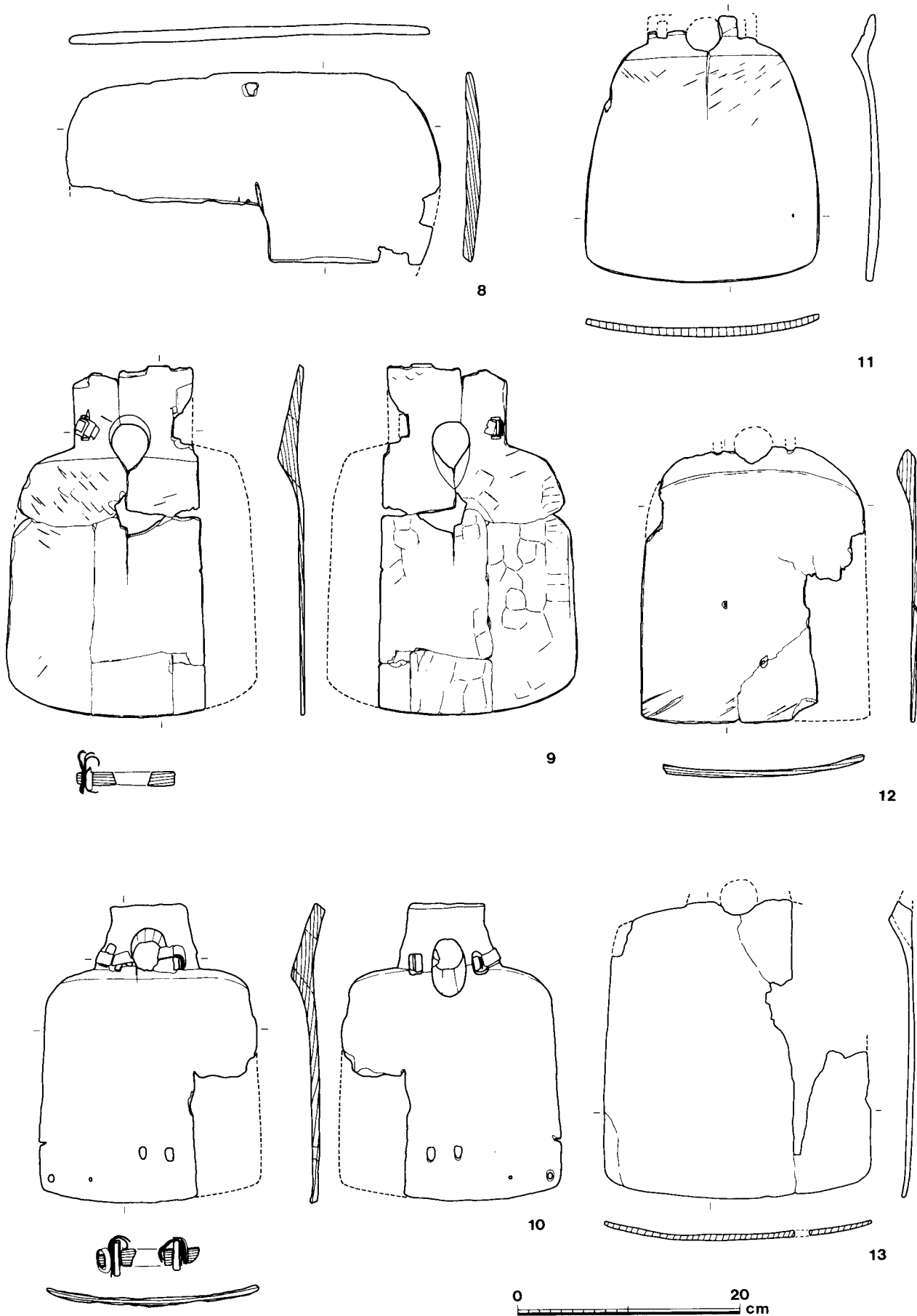


Fig. 99 SD05 出土木器

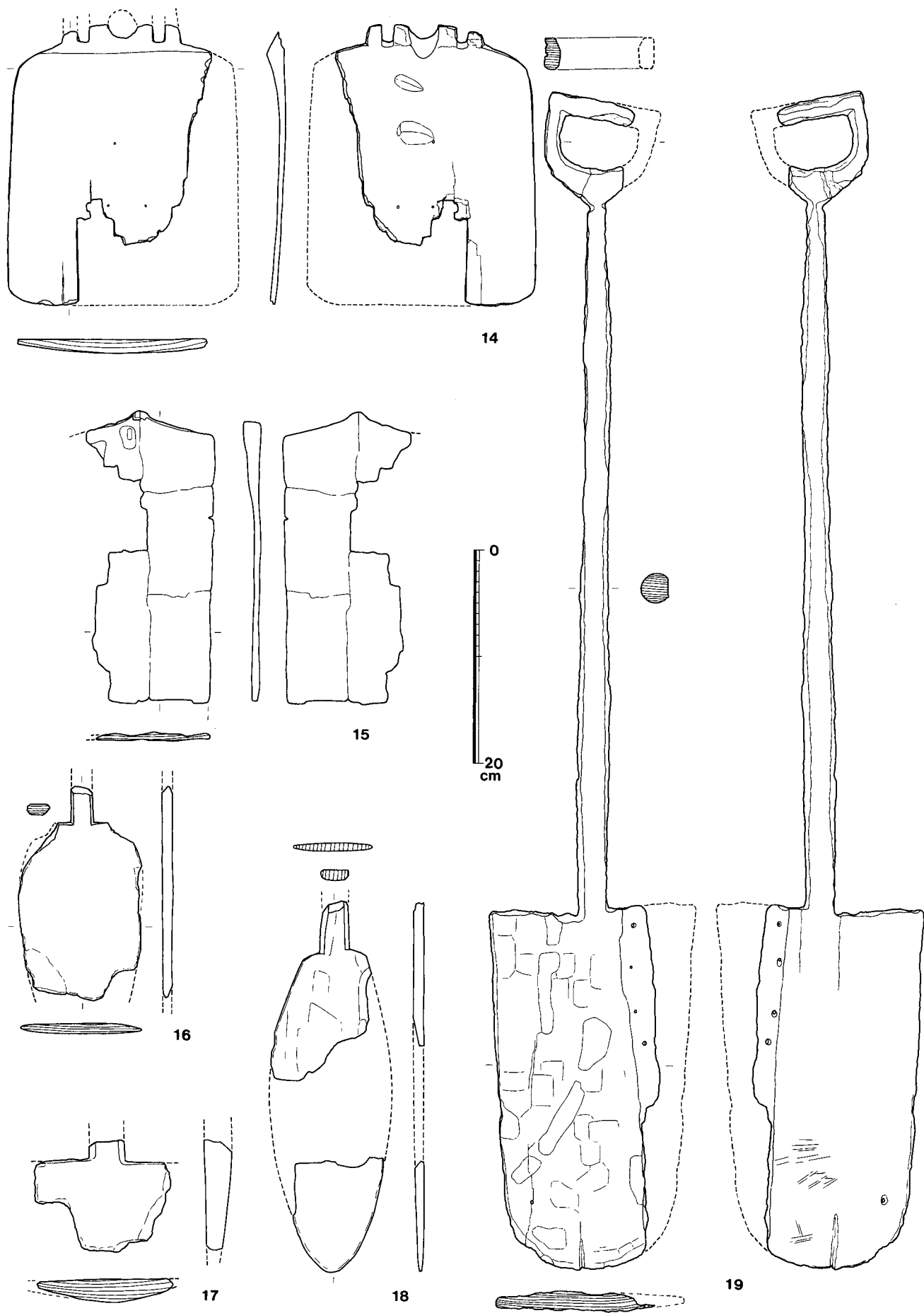


Fig. 100 SD05 出土木器

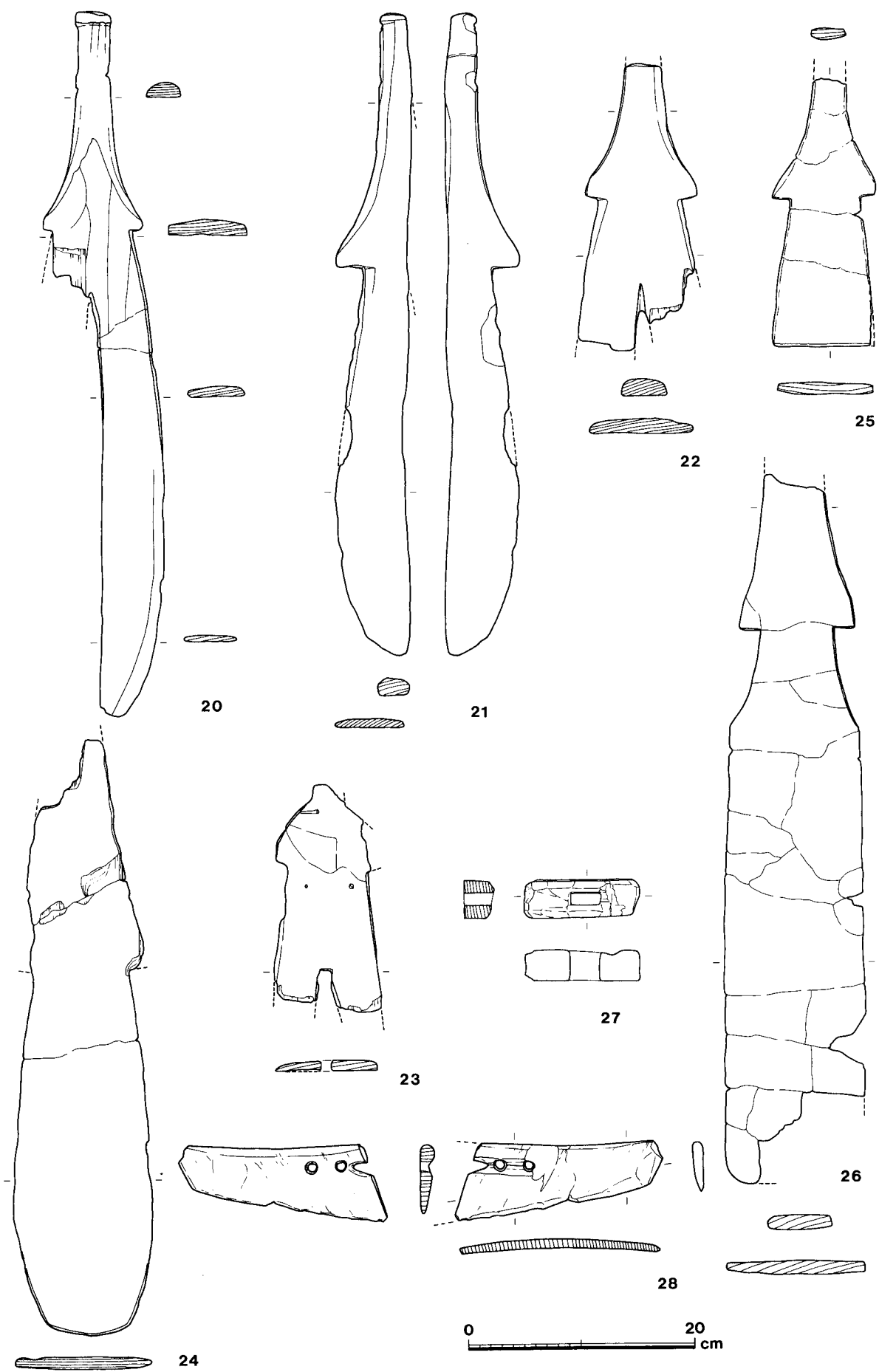


Fig. 101 SD05 出土木器

木包丁 (28・204)

ムクロジ材が使われている。28は、現存で18.3cmを測る。刃部と木目の角度は通常の65°近くである。全体的にやや外湾気味である。握り部には三角形の削り抜きが施され、それに続いてV字状に溝が片面に切られ、溝中に紐を通すための二孔が穿たれている。204は28と異なり、V字状の溝が無いものである。そのかわり握り部分は丸く山形に突出する。平行四辺形を呈するものと考えられ、木目と刃部の角度は46°である。

田下駄 (30)

広義の田下駄の杵材で、スギ材が使われている。いわゆる杵付き縦長田下駄である。長さ67cmの杵に1cm強のほぞ穴が15個穿たれている。両端から1個と2個目の穴の間に浅い凹みが彫られ、紐を縛る際の補助的な機能を持っている。具体的には、一番外側の杵材の固定を強化する目的があったと考えられる。なお、これにつけるオオアシの出土はない。

竪杵 (35・36)

同一個体の可能性がある。アカガシ材が使われている。握り部から杵部にいくにしたがってなめらかに太くなり先端に至る。つまり握り部を特に区別していない。芯をはずして削り出しによって作られている。両端の杵面は、35の方が摩滅が激しくよく使い込まれているが36の方は当初の状態に近い。同一個体であるとすれば、その使用に際して無意識的にか一方のみよく使う状況が窺われる。

番号	種類	法 量 (cm)	備 考	実測番号
28	木包丁	長(17.9)、刃長(17.3)	刃と木目の角度65°	Y39
204	木包丁	刃長(3.5)	刃と木目の角度46°	R3
30	田下駄杵	長66.8、幅 5.3、厚 1.5	孔数15	B43
35	竪 杵	長(46.1)、杵径10.0		B57
36	竪 杵	長(60.3)、杵径 9.4、柄径 2.7		B58

Tab. 8 農具計測表

斧柄 (37~39・206)

37・206がアカガシ、その他がコナラを使っている。37・38は太形蛤刃石斧柄である。37は芯を避けて削り出されている。柄は欠損している。206は組合せ式の鉄斧柄である。先端には鉄斧袋部に装着できるように削り出されている。装着部から縦斧であることが分かる。細長い長方形を呈し、中央よりやや右手に方形の柄穴があげられ、装着角度は74°である。柄穴より右手は、やや厚く作られ打撃に耐えられるように意図しているものの、柄穴両側はそれぞれ1cm程の厚みしかない。一般的には一木作りのものがほとんどだが、このような柄を組合せるものは珍しく、またどれほど実用に耐えうるか興味がある。

タモ網 (40~42)

いずれもモミ材を使用している。40と41が芯持ち材である。対称的に伸びる小枝の分枝部分を用いている。40が柄の下端に突起を作っている他は粗く削り痕を残している。42はきれいに握り部を削り出し端部にある突起も40と異なって丁寧な作りとなっている。41は左右二つの部品を組み合わせるものであり、丸いタモ網ではなくて、三角形を呈するタイプかと思われる。杵は柄の途中から伸び、柄の上下両端は削り出しによって突起を作っている。紐で固定するためのものである。網を通す杵はきれいに磨かれ、紐を通す穴はない。

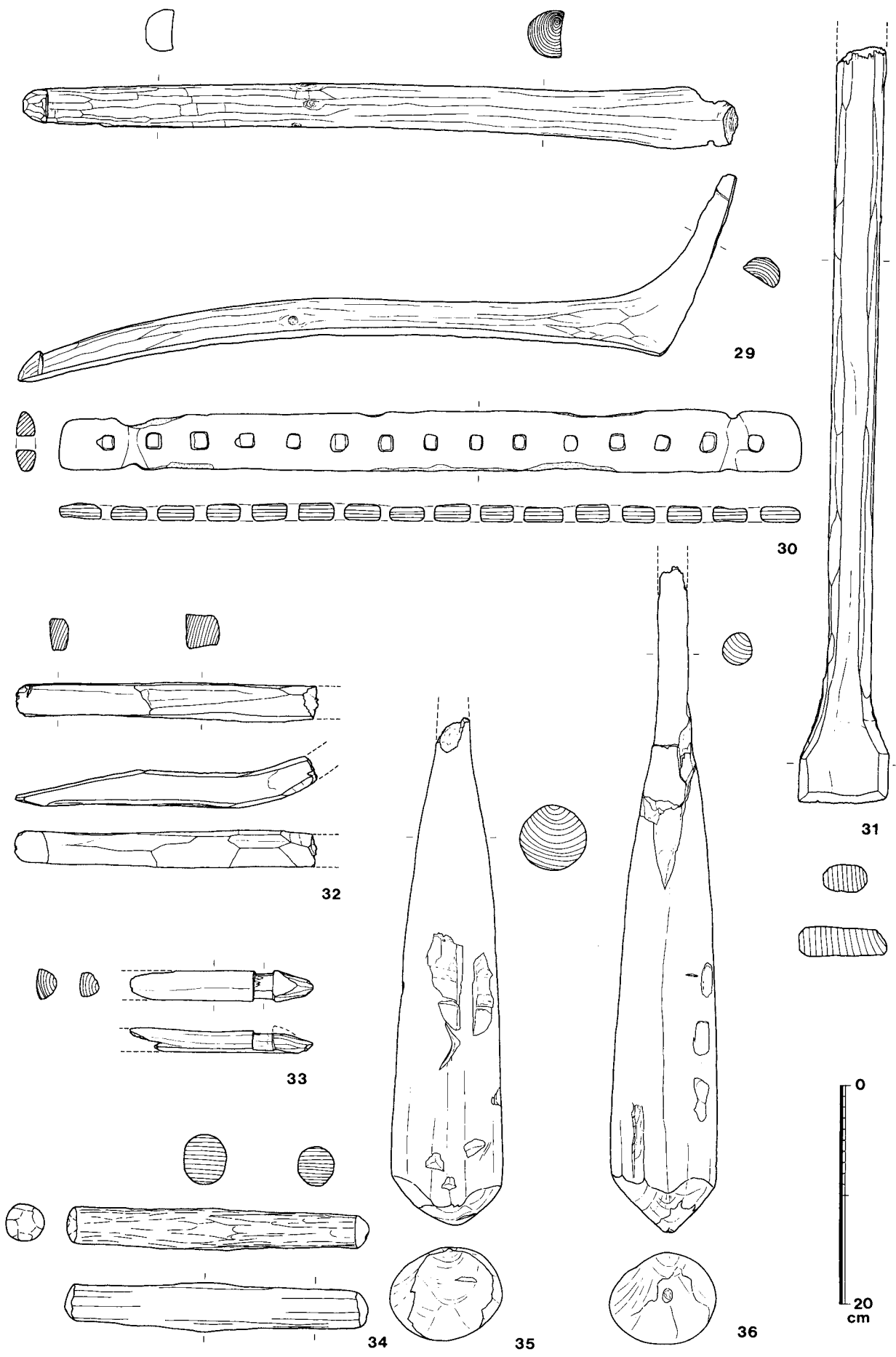


Fig. 102 SD05 出土木器

火鑽臼 (43~46・207)

45がマタタビ材である他はスギ材を使っている。全て角棒状を呈している。45が完形品である他は、どちらか一方を欠損している。43は未使用のもので、約2.5cmおきに縦に筋が入れられその一方端に径1.5cm程の浅い凹みが作られ火臼となっている。45は長さ15cmしかないものの、7つの火臼を設けることができるようになっている。火鑽臼の端までであるが、実際使われたのは3ヶ所だけである。44・46もどちらか一方端近くに火臼が設けられており、使い方を示唆してくれる。すなわち、棒の両端を固定するのではなくどちらか一方を固定して火鑽棒を回す、ということである。207は両端の角を落とされ、中央付近に4つの火臼が設けられ、図上での左から右に向かってその深さが浅くなっている。つまり使用頻度が低くなっており、右端に至っては未使用である。

番号	種類	法 量 (cm)	備 考	実測番号
37	石斧柄	長(24.3)、幅 5.9、柄幅 2.1× 3.4		B29
38	斧 柄	長 (8.4)、幅4.8		B93
206	鉄斧柄	長23.4、幅 4.1、厚 3.7	縦斧。74°	R8
40	タモ柄	長(24.7)、幅 (0.8)、柄幅 1.9		Y3
41	タモ柄	長(38.8)、幅 1.2、柄幅 (1.1)		B20
42	タモ柄	長24.2、幅 1.1、柄幅 (1.2)		B49
43	火鑽臼	長(29.6)、幅 1.8	火臼全て未使用	Y10
44	火鑽臼	長(21.7)、幅 2.1	火臼4ヶ所中使用1ヶ所	Y45
45	火鑽臼	長14.9、幅 2.3	火臼7ヶ所中使用2ヶ所	B35
46	火鑽臼	長(17.3)、幅 2.5	火臼2ヶ所	Y20
207	火鑽臼	長23.9、幅 2.2	火臼4ヶ所中使用3ヶ所	R2
47	タタキ板	長38.2、タタキ長18.9、同幅 9.8、同厚 3.7、柄幅 2.4		B39
48	横 槌	長30.8、槌長18.8、同幅 8.5、柄幅 2.6		Y12
49	横 槌	長(21.9)、槌長18.5、同幅10.8、柄幅 2.7	全面黒漆塗り	B74
50	横 槌	長(17.0)、槌幅 5.0		B25
51	横 槌	長61.5、槌長40.5、同幅12.0、同厚 6.2、柄幅 4.4		B40
53	横 槌	長53.2、槌長30.5、同幅 8.8、柄幅 4.0		B53
54	横 槌	長(11.4)、同幅 6.4		Y5
55	木 錘	長17.4、幅 3.6・6.2		Y13
56	木 錘	長(16.7)、幅 7.8・1.2		B22
57	木 錘	長(39.8)、幅 7.8	未製品か?	Y25

Tab.9 工具計測表

タタキ板 (47)

スギ材を使っている。遺存状態が悪い。タタキ部は方形を呈し3.8cmの厚みがある。柄はやや斜めに付けられており、何のタタキ板か不明である。全体的に厚く作られているのでかなり重量感がある。

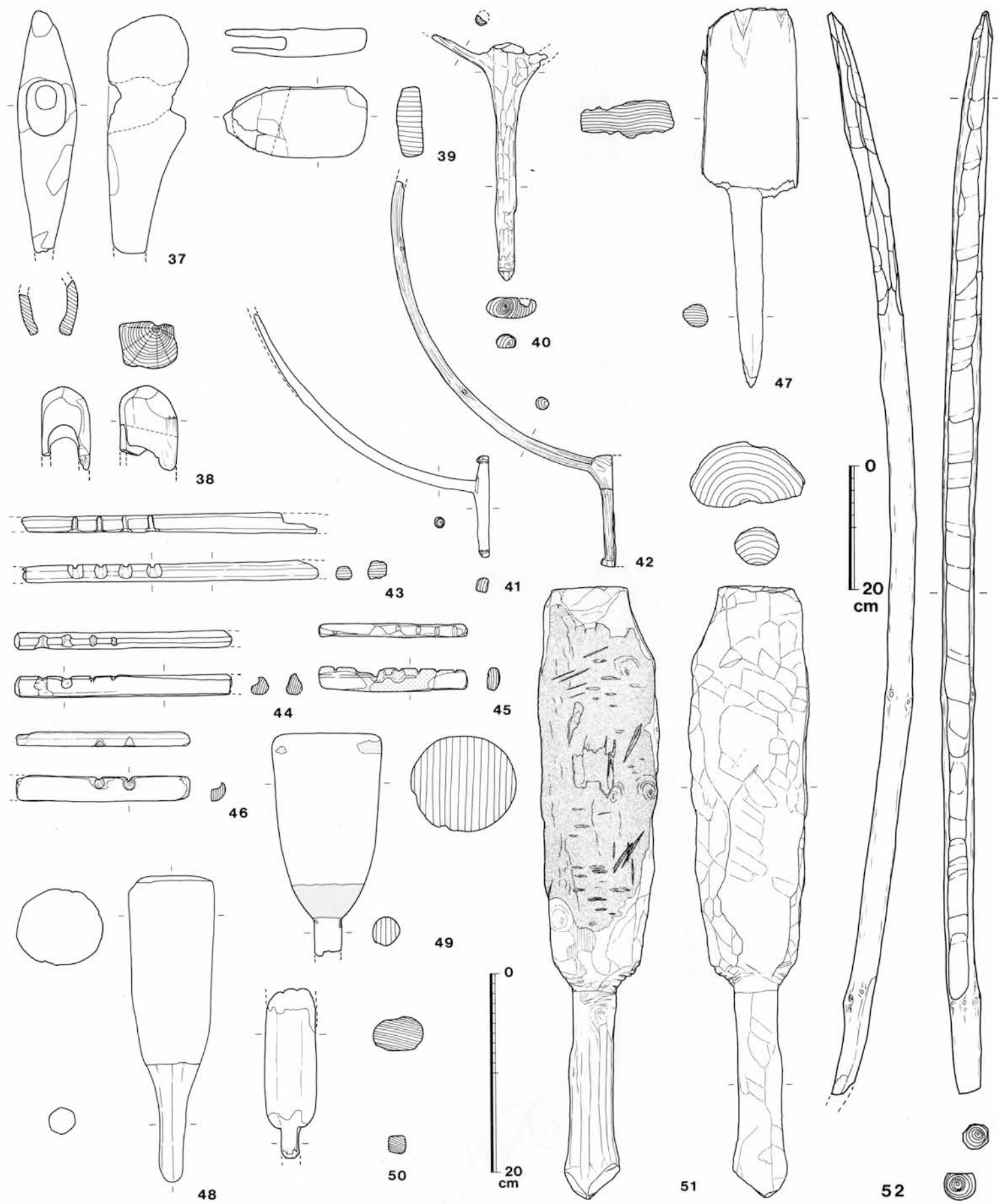


Fig. 103 SD05 出土木器

横槌 (48~51、53・54)

釣鐘形を呈するもの(49・54)、円筒状を呈するもの(48・50・53)と半円形を呈するもの(51)がある。51・53は樹皮を付けた状態である。樹種も多岐に及び、アカガシ・ヤブツバキ・モモ等がみられる。

49は釣鐘形の槌部に円筒状の柄をもつ。きれいに整形されている。現状で、部分的に黒漆が残っているが、もともと全面にわたって塗られていたものである。48の槌部は偏円形を呈し、やや角張った柄をもつ。50も同様だが、柄は四角形を呈する。51は半截した丸太の切断面を加工して槌部としたもので、柄は丸く仕上げられ、全体にチョンナ痕を粗く残している。53も同様だが、さらに作りが粗い。54は芯持ち材を用い、図上の下に柄が付くものと考えられる。

木錘 (55~57)

55がヤブツバキ、56がコナラ、57がアカガシ材からつくられ、樹種は多岐に及んでいる。いずれも芯持ち材である。両端をカットした丸太材の中央を削って窪みをつけている。55は緩やかな削り込みだが、56の方は急角度の削り込みである。57は未製品かと思われる。丸太の樹皮を残し2ヶ所削り込んである。なお、右端は丸く仕上げられている。

弓 (52)

クロマツの芯持ち材からつくられている。長さ174.4cm、幅5.0cmを測り、緩やかに湾曲している。おおよそ両端を結んだ中軸線上から弓の握り部までの長さが約20cmである。湾曲する内側を切削して面をつくっている。上端はほぼ全面にわたって削られて尖っているが、下端は斜めにカットされているのみで、その他の加工が施されていない。つまり上下端とも明確な弓弭はない。以上より、弓の未製品であると考えられる。

杓子状木製品 (58)

アカガシ材が使われている。杓子状木製品としたが、すくうことができるような窪みはなく、平面形からその名称を用いた。記述の便宜上、「杓部」、「柄部」と呼称する。現存長66.2cm、杓部長15.6cm、同幅12cm(復元値)を測る。肩を斜めに切断した杓部があり、その大きさに対して長い柄部がとりつく。杓部は偏平、平坦な板材で、柄も偏平で次第に厚みを増し方形を呈する。使われている樹種から小型の鋤の可能性もある。

木杖 (59・60)

59はスギ材が使われている。現存長15.9cm、径2.7cmを測る円筒状を呈し、頭部に4段の笠状の飾りが彫り込まれている。飾りの基部は線彫りされ基壇状になっている。しかし粗い作りである。飾りの無い部分でも切削痕を多く残しており、未製品の可能性が高い。

60はアカガシ材が使われ、全面にわたって黒漆が塗られている。記述の便宜上頭部、基部、脚部とする。頭部の全体的な形状は松林山型の琴柱形石製品を連想させる。頭部は二つに途中から分れその基底に二つの突出部があり、二つの稜を持ちながら屈曲して基部に至る。基部は船状を呈し、底は丸く両端を上げている。脚は透かし彫りされ屈曲して杖本体部分に続くと思われる。頭部、基部の大きさの割に繊細な作りである。しかも、カシ材という非常に堅い樹木から作られている点に注意する必要がある。

弧文板 (61)

カラスザンショウ材が使われている。両面に弧帯文が彫り込まれているが、記述の便宜上、遺存状態の良い方をA面、その裏をB面とし、先端部分を上にする。上辺は連続する二つの弧を描き、各々前の方に傾斜して面を見せている。また、右辺は反対に後に傾斜している。このような細工は器物に立体感を持たせる効果がある。両面に径3mmの小孔が穿たれている。鳥の羽等を差し込むためと思われる。なお現状下辺の破断面に、補修孔が認められる。

弧文は両面にわたって描かれ上辺にそって帯状にある。A面は線彫り、削り込みによって表現し、B面は線彫りによっているようだが遺存状態が悪いので何ともいえない。文様の単位は二つの線によって表現され、文様単位の重なりの上下関係を削り込むことによって表現している。また、本来透かしになる部分は楯築墳丘墓の弧帯石のように、山形に削り込んでいる。

文様の状態からA面が表になると考えられる。また弧文が彫込まれた器物の復元は困難である。

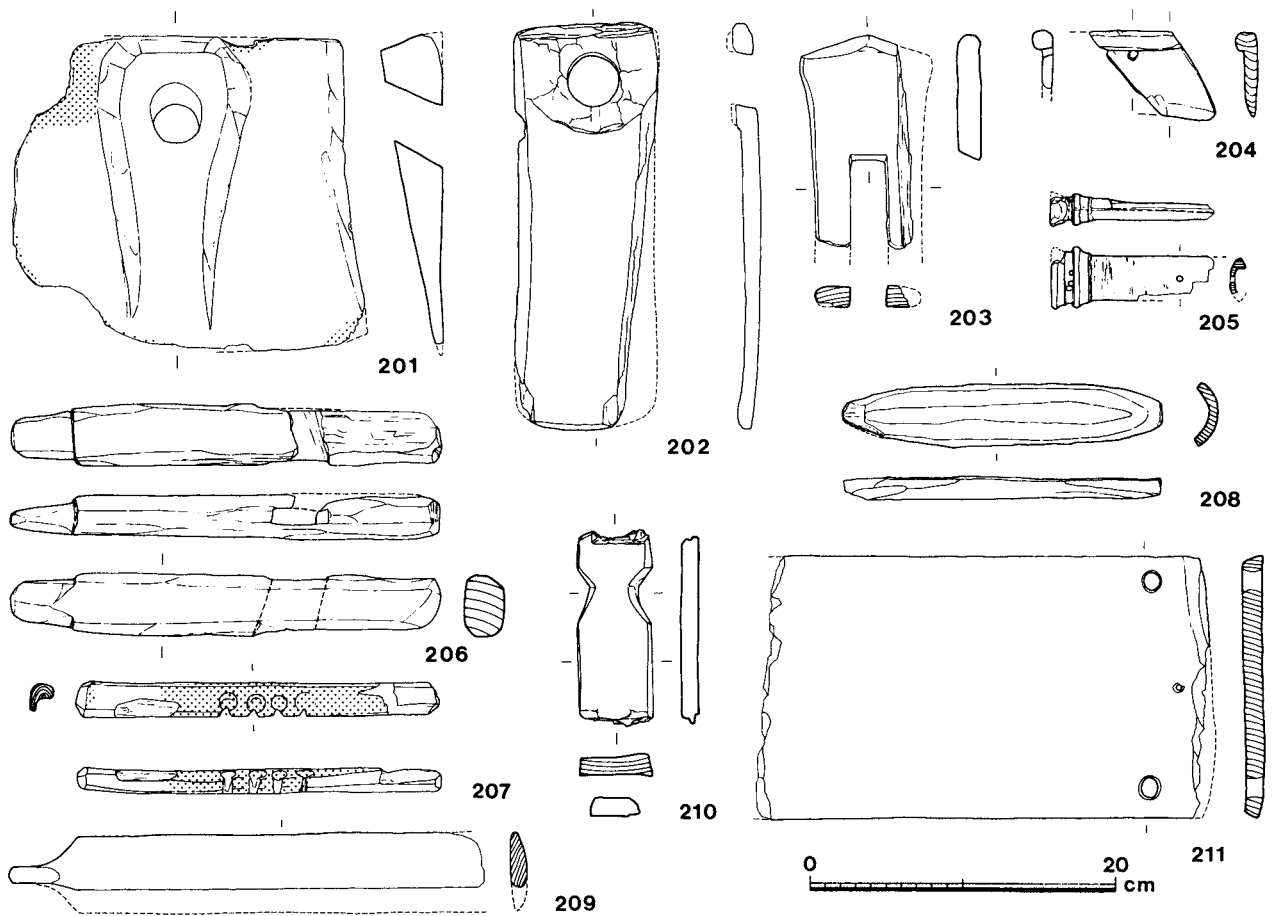


Fig. 104 SD05(第2次)出土木器(追加分)

番号	種類	法量 (cm)	備考	実測番号
52	弓	長 174.4、幅 5.0	未成品?	Y54
58	杓子状 木製品	長(66.2)、杓長15.6、同幅12(復元)、 柄幅 3.5	小型の鋤?	B60
59	木杖	長(15.9)、径 2.7	未成品?	B33
60	木杖	長(16.3)、頭厚 0.7、台長 7.9、台幅 1.3、 脚厚 0.9	黒漆塗り	B100
61	弧文板	長(13.2)、幅 5.4、厚 1.8		B99
205	刀把	長(10.7)、幅 2.9、厚 0.7、茎溝長 6.8、 同幅 1.5	漆塗り、糸巻きの痕跡	74
208	舟形 木製品	長20.8、幅 4.1、高 1.5		R1
87	櫂	長(57.3)、幅 8.4		B62

Tab.10 その他の生活用具計測表

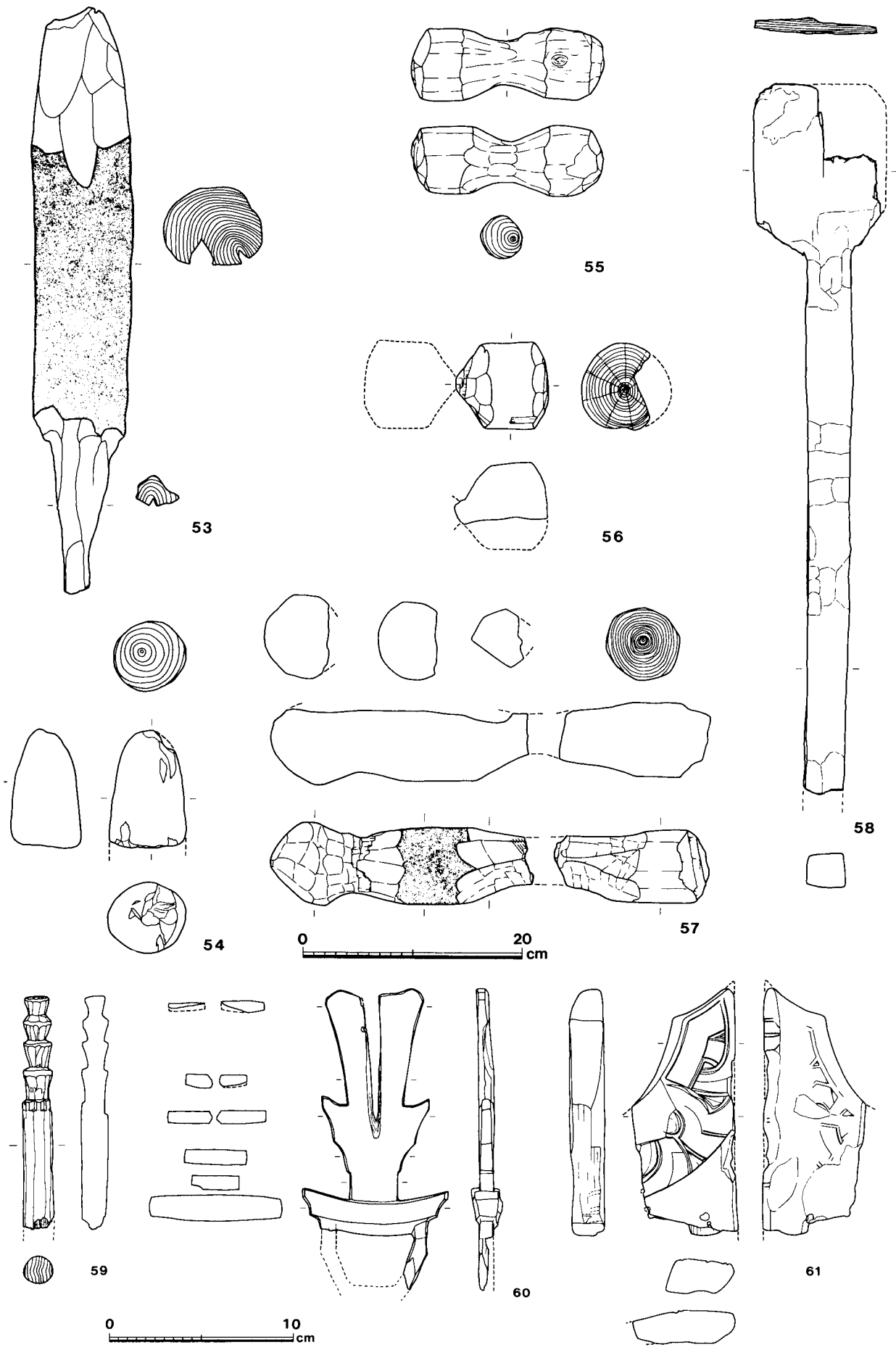


Fig. 105 SD05 出土木器

刀把 (205)

把頭は一段削り込むことによって突線を作り出し、その間に径2mmの2孔を穿っている。握り部は、一段低くなり、紐のようなもので巻かれ、漆が塗られた痕跡がある。刀基部を差し込む部分は一方面を方形に彫り込んでいる。つまりよく見られる柄穴に差し込むのではなく、刀基部を溝に詰め込むようにして把を装着している。その溝の深さと把の厚みから、蓋をするものではなく、目釘を打った後、紐を巻いて刀基部を固定したものと考えられる。なお、長さ10.7cm、幅2.9cm、厚さ1.4cmで、刀茎を詰め込む溝は幅1.5cm、深さ0.7cmを測る。

舟形木製品 (208)

ヒノキ材が使われている。長さ20.8cm、幅4.1cm、高さ1.5cmの小型品で、舟状に削られているのみである。どちらが舳あるいは艫なのかかわからない。切断痕を多く残し粗い作りである。

案 (211)

スギ材が使われている。一方端が欠損しているものの、四隅に脚を取り付ける円孔があげられている。幅17.3cm、現存長29.8cm、厚さ1.2~1.5cm、径1cm強の円孔が短辺より約4cmはなれて二つ遺存している。長辺は丁寧に削られているか、短側縁は凹凸がみられ粗く切削されたままとされている。このことから未成品の可能性が高い。

案の脚 (62)

スギ材が使われている。脚は平面台形状を呈し、上に方形のほぞをつくって案に結合させるようにしている。案本体と接する所はそれを受けように山形の突出がみられ、脚裾は座りの良いようにゆるやかに厚みを増している。全体的に内反りに作られている。

蓋 (63)

両端に把手が付く浅い皿状を呈する横長の蓋と考えられ、スギ材が使われている。把手は頭部を作り出し中央に孔を穿っている。外側面は斜めに切られて斜面をなし頂部は平坦である。全体的に粗い作りで内面及び側面に多くの切削痕を残している。

槽 (64~70)

64のみ脚付きでモクレン材が使われているが、その他はスギ材である。64は、低い脚と相対する側面中央の口縁近くに横長の把手が削り出されている。身は深く内法で8cmを測り、底部と側面を明確にしている。把手付近及び底部に切削痕を多く残している。65・66は皿状を呈する。65が隅丸なのに対し、66は角張っている。66は相対する小口の縁の厚みが他辺に比べて幅広くなっている。内外面に調整痕を残している。

67から70は、小破片で全体の法量は分からない。67は緩やかに湾曲する底部から、1.2cm程垂直に立上がる縁を持っている。かなり丸みを帯びた角槽である。68は65と、70は66と同じような形態である。69は縁の厚みが相対する辺で違う。図上の上の辺は1.4cmと厚くやや内傾しているが、左の縁は外方に開き気味の形状を示す。なお、70には補修孔がある。

筒状木製品 (71・72)

イヌガヤ、トチノキという広葉樹が使われている。71は長さ16cmを測るもので、丸木の削り抜きである。直径約10cmに復元できる。おそらく底板が付くものと考えられるが、そのための特別な細工はない。72には、部材同士と緊結する目釘穴が2ヶ所遺存している。

丸底 (73・74)

スギ材である。73は単に丸く加工されているのみだが、74の方は縁が円く仕上げられている。

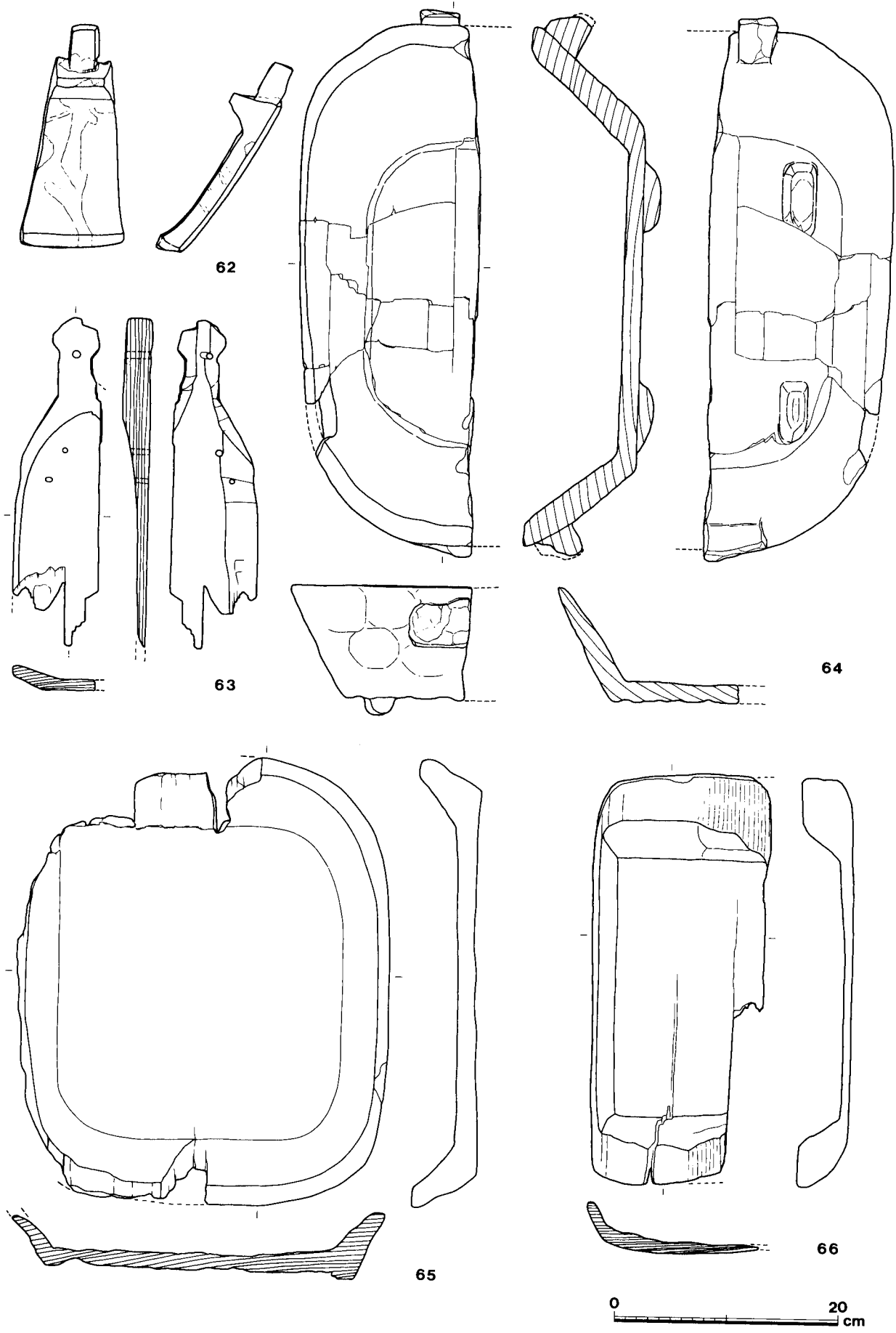


Fig. 106 SD05 出土木器

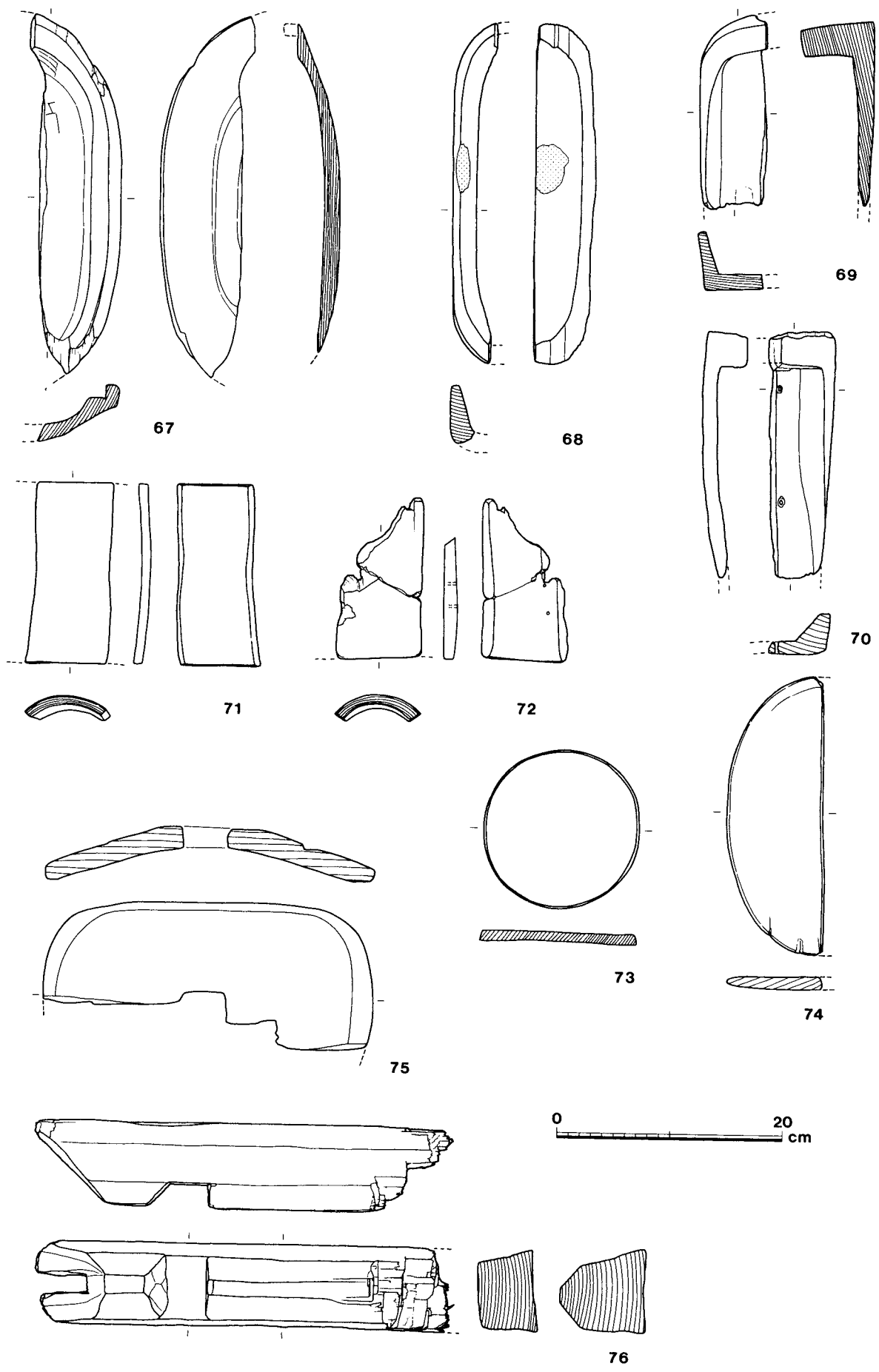


Fig. 107 SD05 出土木器

番号	種類	法 量 (cm)	備 考	実測番号
211	案	長17.1、幅(28.8)、厚 1.3		R3
62	案の脚	長20.4、裾幅 9.4、ほぞ長 3.7、同幅 2.2		B10
63	蓋	長(49.2)、幅(29.8)		B76
64	槽	長49.2、幅(16.1)、高11.8	低脚把手付き	Y18
65	槽	長40.8、幅(33.4)、高 6.1		Y26
66	槽	長37.3、幅(15.3)、高 4.7		B50
67	槽	長(28.9)、幅 (7.2)、高 (5.1)	縁付き	Y9
68	槽	長(30.2)、幅 (3.6)、高 (5.3)		B36
69	槽	長(18.6)、幅 (5.8)、高 6.7		B37
70	槽	長(22.7)、幅 (5.7)、高 3.8	補修孔	B38
71	丸筒	長16.2、復元径約10		Y8
72	丸筒	長(14.4)、復元径約10		Y24
73	底板	径13.9、厚 0.9		Y15
74	底板	厚 1.1	周縁丸い仕上げ	Y28

Tab.11 容器等計測表

原材 (88・89)

ミカン割りしたもので、アカガシ材である。89は長54.0cm、幅11.3cm、厚4.1cmを測る。平面長方形に抉りが入れられた形状を呈する。88は長42.2cm、幅10.0cm、厚4.3cmを測り、89に見られる抉りを取り除いた形態である。何の原材か不明だが、カシ材であることから農工具等の強度を必要とするものであろう。

番号	法 量 (cm)	備 考	実測番号
88	長42.0、幅10.0、厚 4.2	ミカン割り原材	B54
89	長53.6、幅11.4、高 3.8	ミカン割り原材	B55

Tab.12 原材計測表

建築部材 (75~86・88・89)

スギ材が多用されているようである。75は鼠返しである。平面が隅丸方形の笠状を呈し、中心に柱のほぞ穴を組込む方孔が割り抜かれている。きれいに整形され、チョンナ痕は見られない。76~78は梁材と思われる。他の部材を受けるくりにみがつくられている。特に76の一方面は、斜めにカットされ、その中心に幅2cm、長さ4.8cmのくりにみがある。ほぞ穴と思われる。ここに斜めに他の部材がかけられるか、あるいは斜めの部材に差し込まれたものである。一方端は利器によって切断されている。77は完形品である。中央近くに幅23cm、深さ3cm弱のカット部分がある。78は長さ12cm、深さ2cm程度である。78のみ芯持ち材である。

79の全形は不明だが、幅広い板からなだらかに柄状のものが伸びている。その基部から約20cm程で9cm×7cmの方形の穴があげられ、端部は丸く仕上げられている。80は三角形を呈し、右の角にくりにみで作られて丸く突出する。また、図の左から約11cmの所で孔が穿たれている。81は方形の板材に柄状のものが一方端に伸びている。ほぼ中央長辺近くに9.4cm×2.6cmのほぞ穴およびその両側に小孔があげられ、孔周辺に紐ずれの痕跡がある。

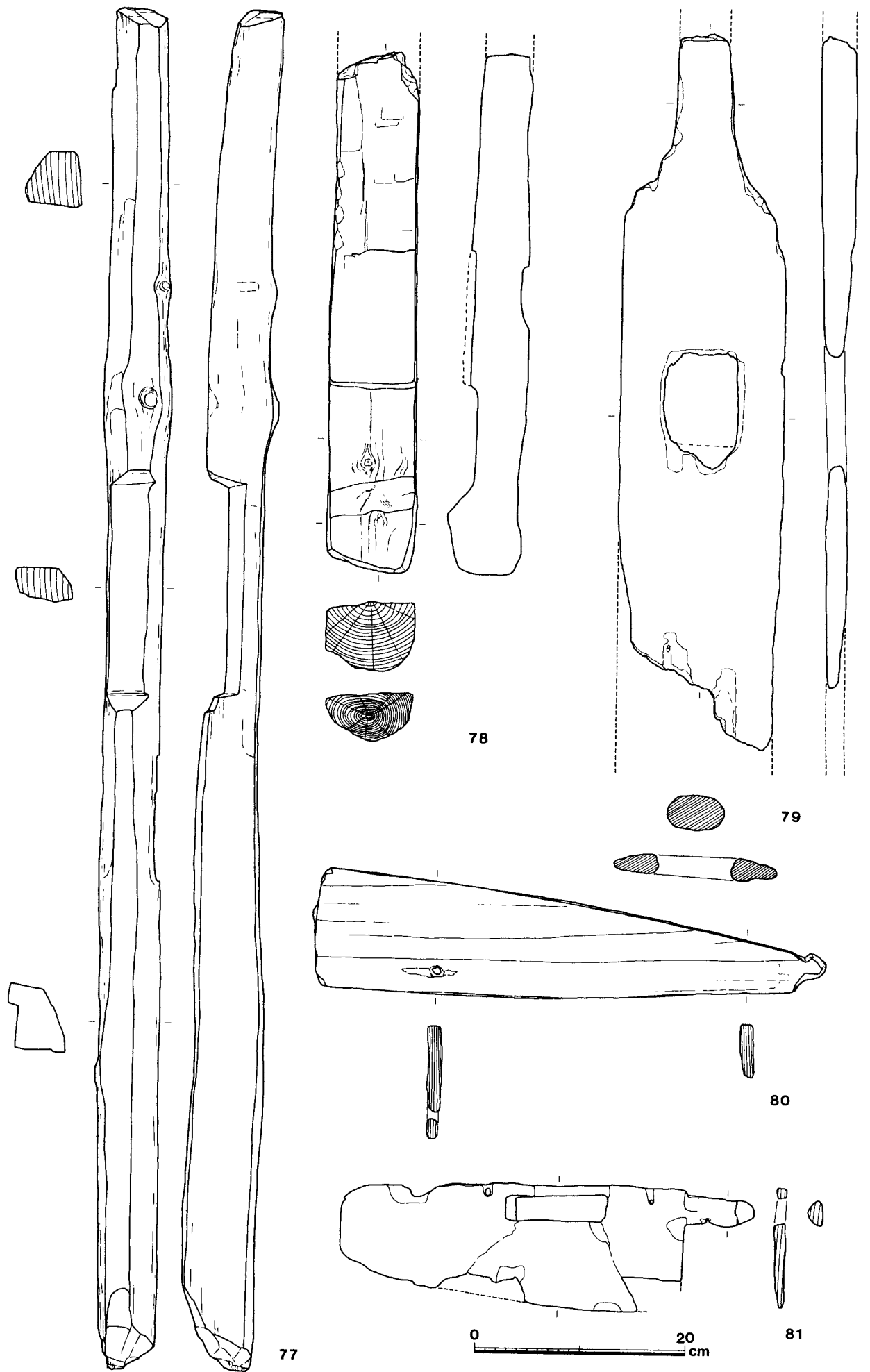


Fig. 108 SD05 出土木器

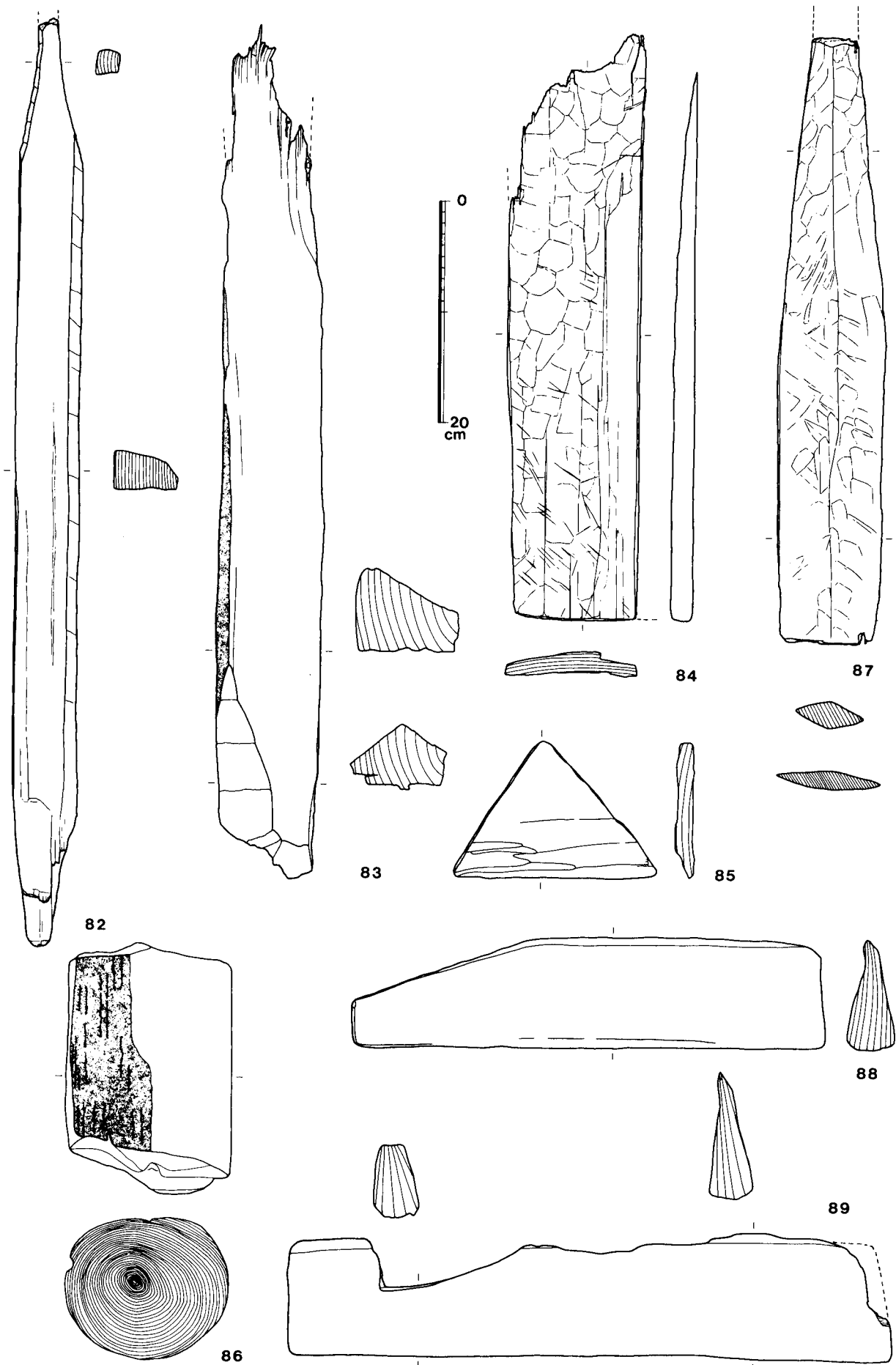


Fig. 109 SD05 出土木器

番号	法 量 (cm)	備 考	実測番号
75	長27.5、幅(12.7)、高 4.9、方孔長3.7		B31
76	長(37.6)、幅 7.5、高 7.7	ほぞ穴、組合せ溝あり	Y2
77	長 130.4、幅 5.8、高 5.8、溝長19.6、同幅 3.7	組合せ溝あり	Y38
78	長(51.3)、幅 8.5、厚 6.8		B65
79	長(72.6)、幅15.4、柄幅 5.3、厚 1.8、柄厚 3.5、 孔 8.6× 6.9	方孔あり	B66
80	長48.4、厚 1.3		B61
81	長39.2、幅11.8、孔 9.5× 2.3		B86
82	長(84.2)、幅 5.8、厚 3.5		B68
83	長(76.8)、幅 9.3、厚 7.4		B56
84	長(52.8)、幅(12.1)、厚 1.9		B64
85	長18.4、幅12.2、厚 1.6		B80
86	長(24.6)、径14.8・12.9		B48

Tab.13 建築部材計測表

83と86は柱材である。83の先端は斧によって切断され、もう一方端は燃えた痕跡が見られる。ほとんど調整されておらず部分的に樹皮を残している。86は丸太で樹皮を残し切断されている。84は板材で緩やかにカーブしている。外面にチョンナ痕を多く残している。壁を構成する板材かと思われる。88は正三角形を呈し下端が斜めに削られている。

櫂 (87)

スギ材が使われている。櫂というよりも舳に近い形状である。現存長57.3cm、櫂幅8.4cmを測る。断面菱形で、先端にいくにしたがって幅が広くなって薄くなり、中心を走る稜も不明瞭になる。チョンナ痕を多く残している。

梯子 (90~93)

アサダ、ケヤキ、アカガシ材が使われている。いずれも削り出して段をつくっている。90、92は段の中央に方形の穴が穿たれている。その大きさは90で4.8cm×3cmを測り、梯子を固定する棒を差し込む穴であろうか。91は梯子の最下部と思われる、先端が尖り、土に差し込む機能と考えられる。

番号	法 量 (cm)	備 考	実測番号
90	長(76.4)、幅18.3	方孔あり	B63
91	長(74.2)、幅19.4	先端矢板状	Y37
92	長(16.6)、幅17.9	方孔あり	Y7
93	長(25.1)、幅(13.0)		B51

Tab.14 梯子計測表

紡錘車 (94・95)

94はスギ材が使われている。円をなさずにやや角張っている。笠状の形態で粗く調整痕を残している。斜面に刻みが不規則にあり孔径9mmを測る。95はアカガシ材が使われている。上に面をなし孔径7mmを測る。

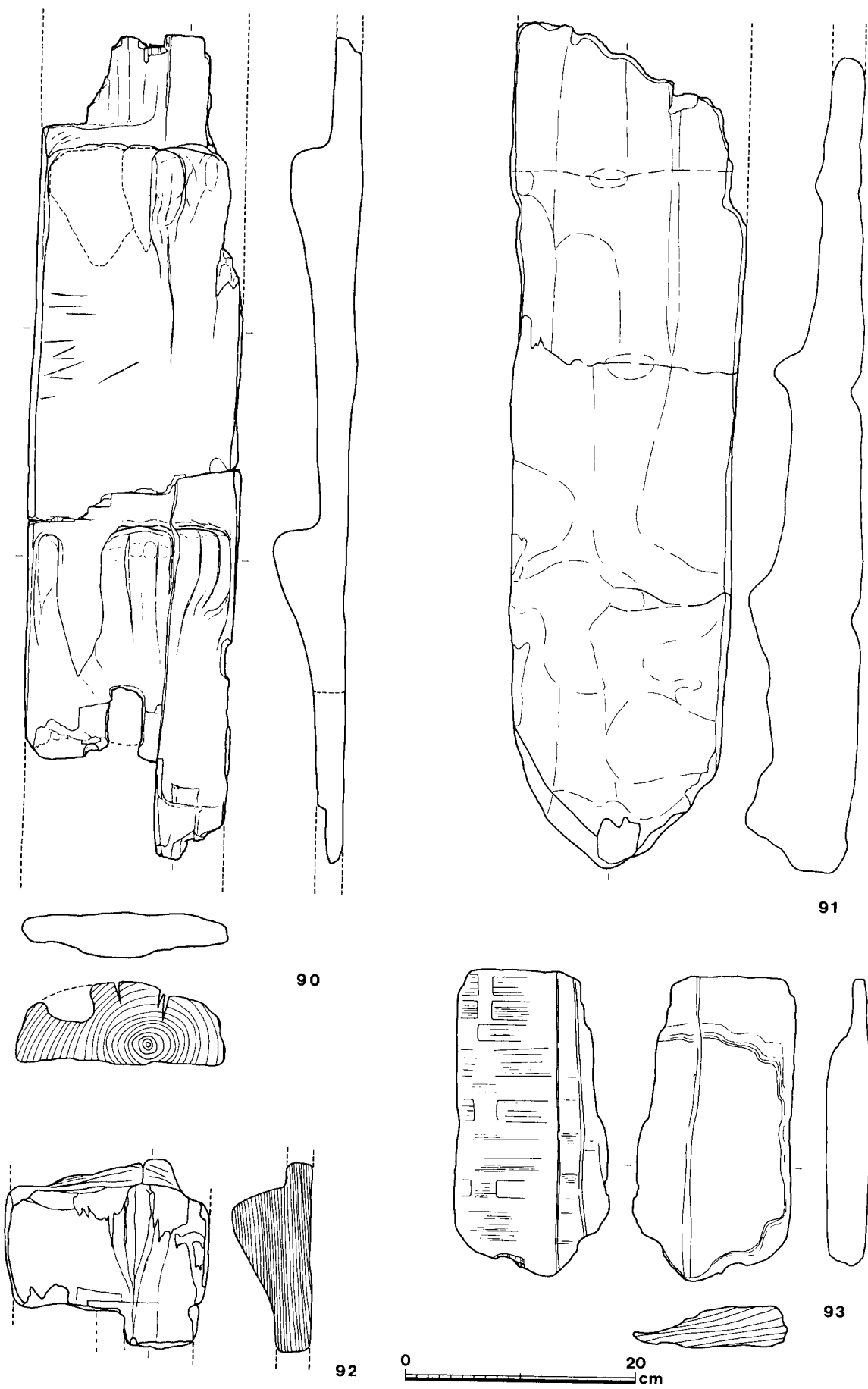


Fig. 110 SD05 出土木器

機具 (96・97・101)

96・97・101はいずれも機具と考えられるが、96・97の具体的な部位・部品として不明である。101は棒(かせ)である。一方端を欠損しているが、三つの部材からなりたち、「工」字形を呈する。現状の長さ54cmを測り、径約1.5cmの棒を組み合わせている。組み合わせ部分は、ほぞで結合し、目釘によって固定している。(ただし、目釘が反対側にまで貫通していないので、十分な固着効果があるか疑問である。)反対側もおそらく同じ構造となっていると思われる。

96は頭部を削り出し、端部より10cmのところの方孔をあけている。厚さ約2cmを測る。97は頭部を尖状に削り出し、先端に小孔を穿っている。端部より5cmのところ、径約1.5cmの円孔を5cm間隔であけている。上面両側線は面取りされ、厚さ1.2cmを測る。

布巻具 (102~107)

ほとんどにスギ材が使われている。両端に突出部分を削り出しているが、104以外は欠損している。基本的に半円状を呈しているが、106のみ円形である。それぞれに特徴ある頭(突出部分)をつくっている。104は完形品で、布を巻く部分の長さが51.6cmを測る。102・103は突出部分のみ欠損し、布巻の長さはほとんど同じで63cm弱を測る。

棒 (98~100・108~111・130~133・137~144)

98~100は、一方端に頭部を削り出しているものである。100は刀状に、その他は段を作っている。109は四角形の棒で1.9cmの孔が途中に穿たれている。110はムラサキシキブ材から作られている。樹木の髓の部分が中空になっている。111はサカキ材から作られている。中空になっており、両端に逆台形状の段を作っている。糸巻具の可能性もあろうか。

130~133は細い棒状を呈している。130は頭部を削り出している。132は先端が炭化している。137~144は頭部状の細工を施しているものである。樹種は多岐に及んでいる。137は断面四角形に削り出し2段にわたって削り込んでいる。クリ材である。138・140は丁寧に頭を削り出しいずれも樹皮を残している。139は断面半円形で布巻具の可能性もある。141・142もそのようになるだろう。144は頭部をきれいに削り出し、最低148cmの長さを確認した。部分的に樹皮を残し被熱の痕跡も認められる。ほとんどが芯材を使っていることから杭的な機能を持っていたものもあったと推測できる。

番号	種類	法 量 (cm)	備 考	実測番号
94	紡 錘 車	径 6.7、高 1.4、孔径 0.8	外周に刻み目	B13
95	紡 錘 車	径 5.4、高 0.9、孔径 0.6		B11
96		長(12.6)、幅 4.4、厚 1.8		Y41
97		長(17.8)、幅 3.4、厚 1.3、 孔径 0.2 (端部の孔)、1.6		B7
101	棒(かせ)	長(50.8)、径 1.6、短材長24.5、径 1.6		B59
102	布 巻 具	長64.4、幅 2.0、厚 0.9	頭部の扁平は欠損	Y34
103	布 巻 具	長66.4、幅 2.1、厚 1.1		Y33
104	布 巻 具	長58.0、幅 2.8、厚 1.5		Y32
105	布 巻 具	長(61.5)、幅 2.9、厚 1.7		B97
106	布 巻 具	長(25.2)、幅 1.6、厚 1.3	断面円形	B16
107	布 巻 具	長(32.5)、幅 1.3、厚 0.7	芯材	B92

Tab.15 紡績、機織具関係部材計測表

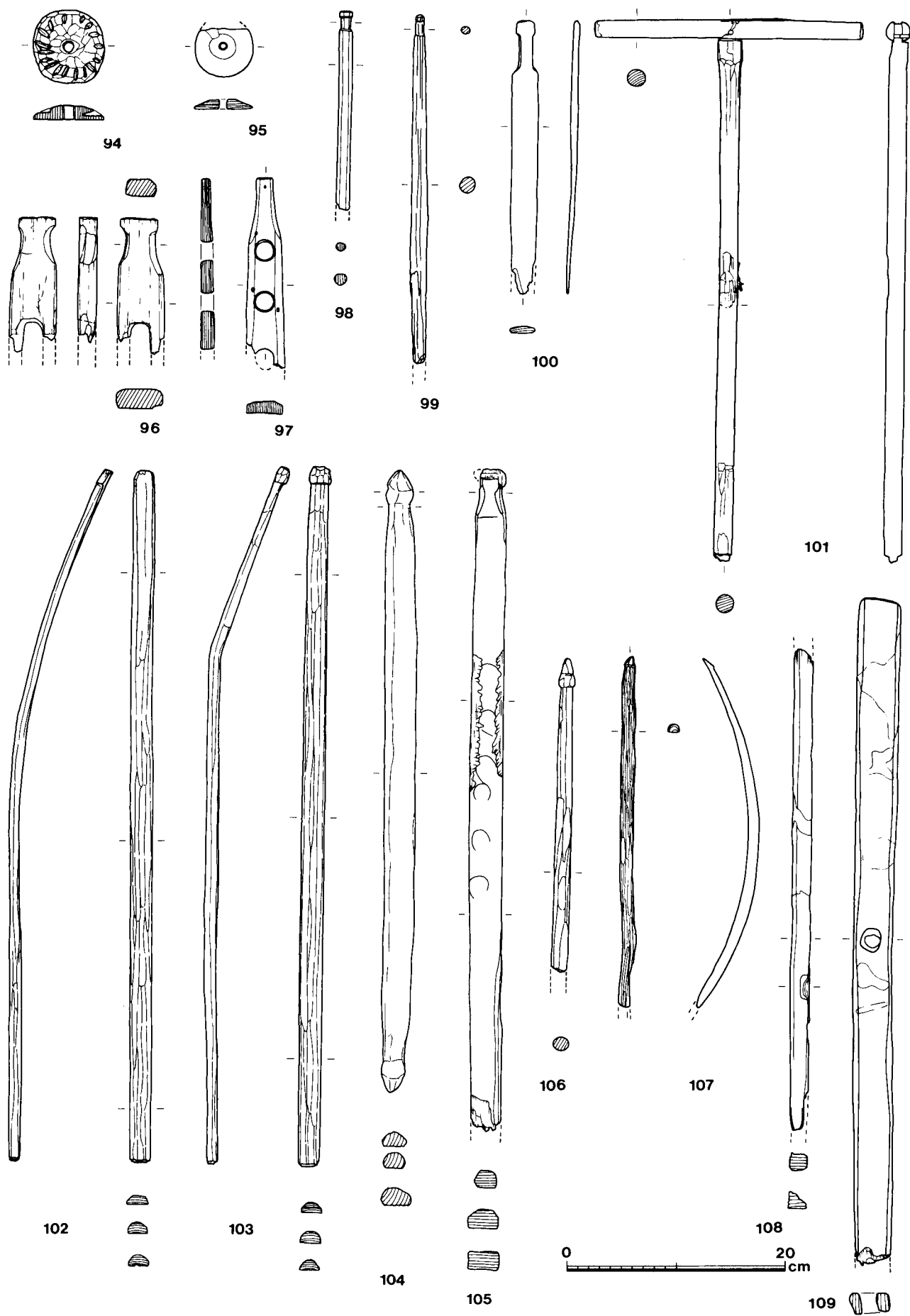


Fig. 111 SD05 出土木器

板 (112~129)

何の部材か分からないものが多い。樹種はスギを中心としている。112は楕円形の柱状を呈し、中心にはほぞをつくっている。114は飾り板のようである。下方に更に伸び両端に孔が穿たれている。115は被熱して一部分炭化している。120は栓であろうか。121はやや湾曲し、中央が細くなり両端が広がる板材で、アカガシ製であることから狭楾の未製品かと考えた。しかし柄穴周辺の隆起がないことや全体的に薄い作りであることからそのように断定できない。122は薄いタタキ板状を呈しスギ材である。123は下端に下方からあけられた8ヶ所の目釘穴があり、木製目釘が打ち込まれている。その規則性は見られない。また、上端近くには5孔ある。124・125は板材の中央に溝が切られている。129は被熱して部分的に炭化している。小孔が2列に並んで6孔認められる。この小孔を重視すれば、木製盾の可能性もある。材の樹種はヒノキであり、他の板とも異なる傾向にある。

杭 (134~136)

いろいろな木を用いている。先端は鉄製と思われる利器によってカットされ尖っている。135は途中で曲っているが、それでも使用に耐えうるものであったようである。

番号	種類	法 量 (cm)	備 考	実測番号
98	丸 棒	長(18.4)、径 1.3	頭部削り出し	B9
99	丸 棒	長(32.7)、径 1.4	頭部削り出し	Y46
100		長(20.5)、幅 2.2、厚 0.7	端部削り込み	B21
108	角 棒	長(45.0)、幅 1.6、厚 1.6		B94
109	角 棒	長(62.4)、幅 3.5、厚 1.9	孔あり	B46
110	棒	長(50.3)、径 1.9、孔径 0.3~ 0.5		B16
111	管 状	長 (9.9)、径 1.8、孔径 0.4		B71
112	—	長(13.2)、幅 5.7・ 4.3、厚 4.7・1.3		Y6
113	楔	長13.7、幅 3.7、厚 2.0		B24
114	飾 板 ?	長(10.3)、幅27.1、厚 1.1		Y36
115	板	長12.2、幅 (7.0)、厚 0.8		B84
116	角 棒	長(14.1)、幅 1.8、厚 1.5・ 2.8	削り込み	Y30
117		長 6.4、幅 3.1	糸巻き状	Y14
118	板	長15.9、幅 3.4、厚 0.4		B72
119		長13.2、幅 4.2、厚 0.8		B14
120	栓 状	長 (6.5)、幅 1.7・ 1.0、厚 0.8		B34
121	板	長(41.6)、幅 8.7・ 4.2、厚 1.2		B89
122	板	長27.6、幅 6.2・ 2.8、厚 0.8		Y4
123	板	長 9.9、幅38.9、厚 1.1	目釘穴8ヶ所	Y53
124	板	長17.6、幅 2.2、厚 0.8	中央削り込み	B83
125	半 截 板	長37.3、幅 4.9、厚 2.2	中央削り込み	B47
126	棒	長(45.9)、幅 (3.8)・ 2.6、厚 1.8		Y43
127	板	長23.0、幅 5.4、厚 1.1		B1
128		長(11.1)、幅 3.4		B8

Tab.16 その他の木製品計測表(1)

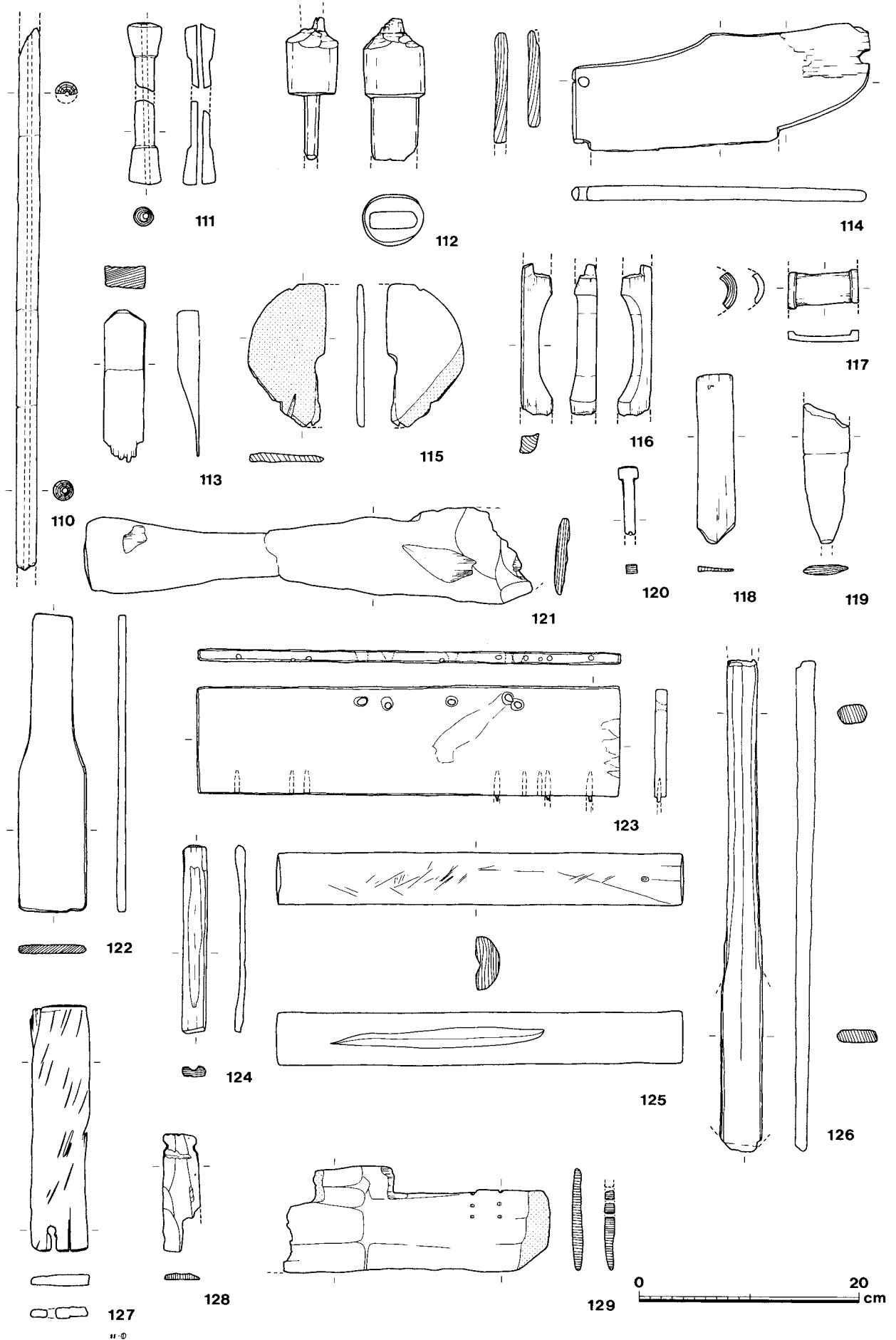


Fig. 112 SD05 出土木器

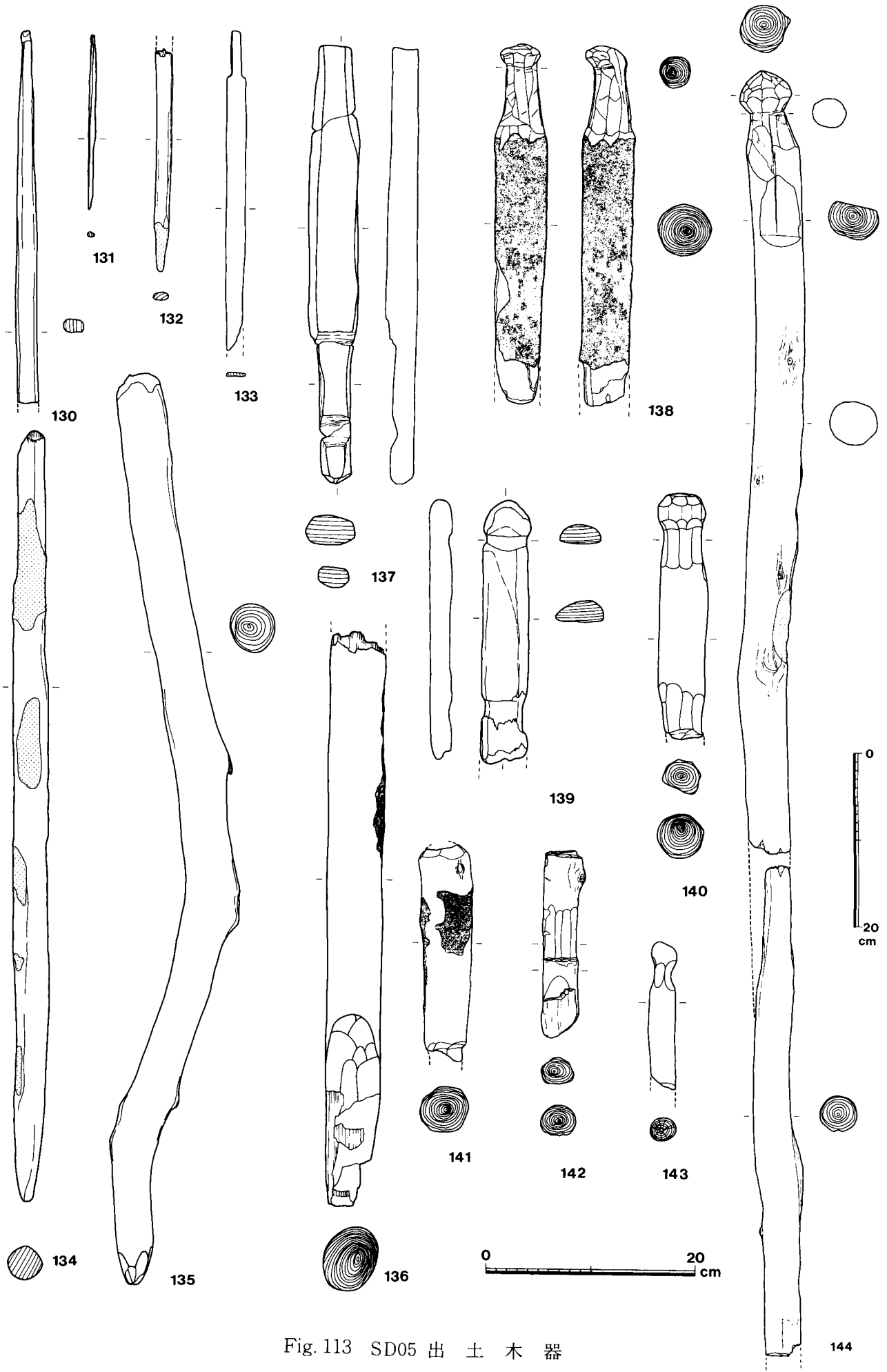


Fig. 113 SD05 出土木器

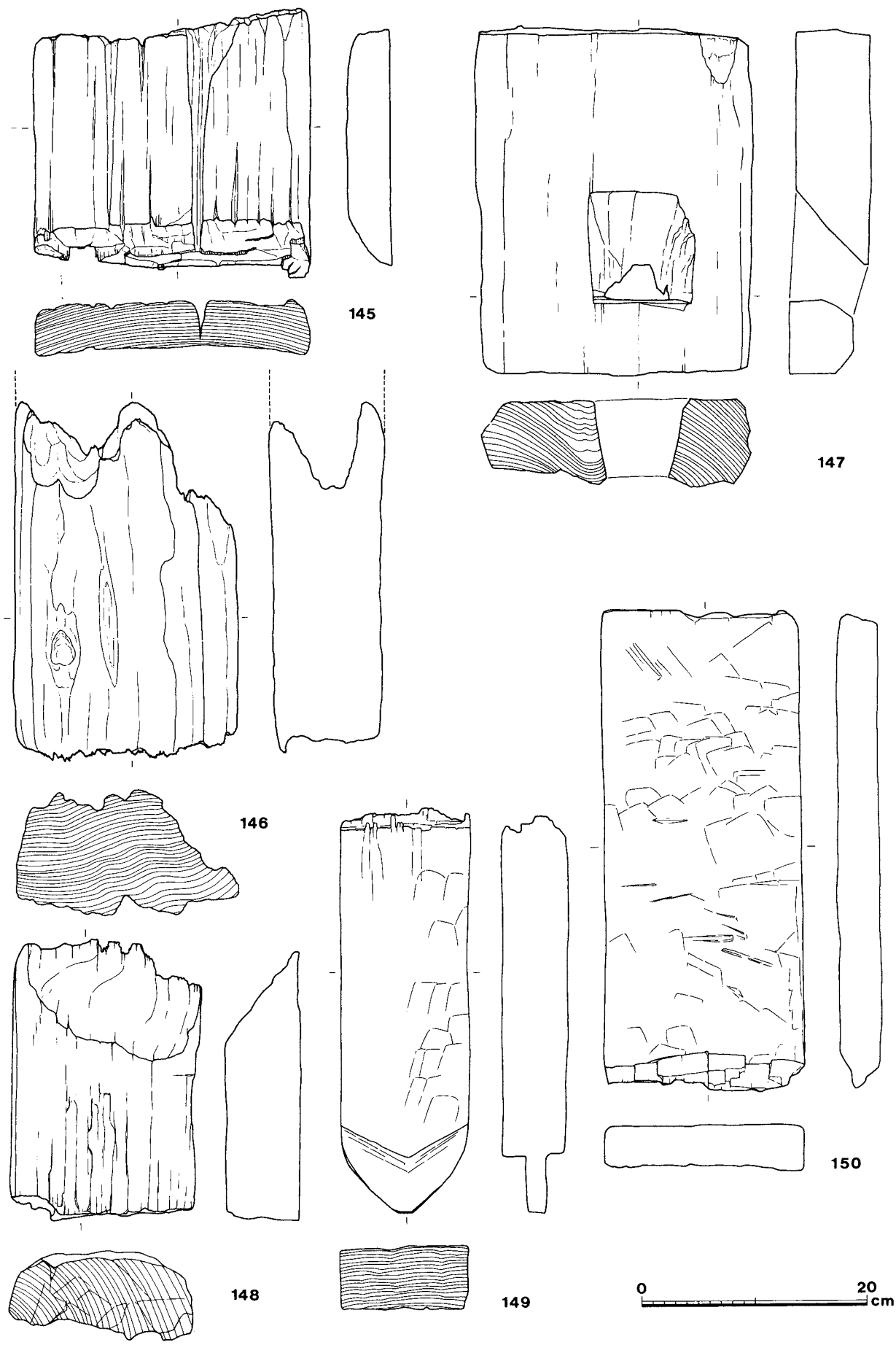


Fig. 114 第3次調査掘立柱建物の礎板

番号	種類	法 量 (cm)	備 考	実測番号
129	板 (盾?)	長 9.8、幅(24.3)、厚 1.0	火熱痕	B2
130	棒	長(35.7)、幅 2.0、厚 1.3	頭部削り出し	B79
131	棒	長17.7、径 0.4		B73
132	棒	長21.2、幅 1.6、厚 0.7	火熱痕	B17
133		長30.6、幅 1.8・1.0、厚 0.3		B19
134	棒	長74.6、径 3.2		B45
135	杭	長87.9、径 4.2		B52
136	杭	長(55.5)、径 5.8		B98
137	角 棒	長41.8、幅 4.7・2.8、厚 2.8	削り込み	B87
138	棒	長(34.5)、径 4.8	頭部削り出し	Y42
139	棒	長(25.4)、幅 4.5、厚 2.1	頭部削り出し	Y35
140	棒	長(23.6)、径 4.5	頭部削り出し	B42
141	棒	長(20.8)、径 4.9	頭部削り出し	B41
142	棒	長18.0、径 3.2		B18
143	棒	長(14.2)、径 2.4	頭部削り出し	B23
144	棒	長 (123.1)、径 4.2	頭部削り出し	B69

Tab.17 その他の木製品計測表(2)

礎板 (145~150)

全てSB302に伴うピットに使われたものである。スギ材である。146以外は切断痕を残しているの
で、それぞれ何かを礎板に転用したものである。147は中央近くに方形の穴があげられている。149は下
端に矢羽根状の切込みが見られ、差し込む機能が考えられる。145・150は厚い板状である。146・148は
柱の転用の可能性が考えられるものの、その他については何を転用したものか不明。

番号	法 量 (cm)	備 考	実測番号
145	長24.6、幅23.1、厚 2.9		
146	長(31.8)、幅20.6、厚11.3	柱の可能性?	
147	長31.3、幅24.9、厚 6.8	方 孔	
148	長24.7、幅17.0、厚 6.8		
149	長36.4、幅11.3、厚 5.9		
150	長42.3、幅18.0、厚 3.2		

Tab.18 礎板計測表

Tab.19 畝田遺跡出土木製品樹種（鈴木、能城作成表を伊藤が編集した）

遺物番号	器種	樹種	木取り	標本番号	実測番号
1	狭鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 959	Y17
2	狭鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 866	B70
3	狭鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 868	B85
4	狭鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 841	Y21
4	4の柄	スギ	削り出し	I S F - 842	Y21
5	横鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 824	B26
6	広鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 843	B12
7	エブリ	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 837	Y23
8	鋏状薄板	キハダ	板目	I S F - 952	B82
9	泥よけ	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 850	B95
10	泥よけ	コナラ属クヌギ亜属	柾目	I S F - 860	B32
10	10の楔	カエデ属	割り材	I S F - 861	B32
10	10の楔	カエデ属	割り材	I S F - 862	B32
10	10の楔との結束材	樹皮	-	I S F - 863	B32
11	泥よけ	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 864	B27
12	泥よけ	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 865	B30
13	泥よけ	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 857	B88
14	泥よけ	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 822	B15
15	鋤	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 849	B75
16	鋤	スタジイ		I S F - 839	Y27
17	鋤	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 972	Y31
18	鋤	スタジイ	柾目	I S F - 855	Y22
19	鋤	コナラ属コナラ節	柾目	I S F - 870	B96
20	膝柄股鋏	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 851	B78
21	膝柄股鋏	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 835	B44
22	膝柄股鋏	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 869	B90
23	膝柄股鋏	コナラ属クヌギ節	柾目	I S F - 827	B81
24	膝柄（ナスビ形）鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 856	B91
25	膝柄（ナスビ形）鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 840	B19
26	膝柄（ナスビ形）鋏	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 912	B3
27	鋤把手	アワブキ	柾目	I S F - 910	Y55
28	木包丁	ムクロジ	柾目	I S F - 859	Y39
29	鋏柄	マツ属複維管束亜属	削り出し	I S F - 873	Y1
30	田下駄棹	スギ		I S F - 871	B43
31	柄	スギ	削り出し	I S F - 872	B67
32	柄	スギ	削り出し	I S F - 923	Y44
33	柄	スギ	削り出し	I S F - 935	Y29

遺物番号	器種	樹種	木取り	標本番号	実測番号
34	柄	スギ	削り出し	I S F - 919	Y11
35	堅杵	コナラ属アカガシ亜属	削り出し	I S F - 830	B57
36	堅杵	コナラ属アカガシ亜属	削り出し	I S F - 831	B58
37	蛤刃石斧柄	コナラ属アカガシ亜属	削り出し	I S F - 867	B29
38	石斧柄	コナラ属コナラ節	削り出し	I S F - 917	B93
39	斧柄	コナラ属コナラ節		I S F - 929	B6
40	タモ網杵	モミ属		I S F - 838	Y3
41	タモ網杵	モミ属		I S F - 823	B20
42	タモ網杵	モミ属		I S F - 834	B49
43	火きり臼	スギ		I S F - 921	Y10
44	火きり臼	スギ		I S F - 924	Y45
45	火きり臼	マタタビ属	丸木半割	I S F - 846	B35
46	火きり臼	スギ	板目	I S F - 825	Y20
47	タタキ板	スギ	板目	I S F - 833	B39
48	横槌	ヤブツバキ	丸木	I S F - 858	Y12
49	横槌	コナラ属アカガシ亜属	削り出し	I S F - 905	B74
50	横槌	スギ		I S F - 939	B25
51	横槌	モモ	削り出し	I S F - 911	B40
52	弓未製品	クロマツ	丸木	I S F - 874	Y54
53	横槌	ケヤキ		I S F - 922	B53
54	横槌	ムクノキ	削り出し	I S F - 927	Y5
55	木錘	ヤブツバキ	丸木	I S F - 928	Y13
56	木錘	コナラ属アカガシ亜属		I S F - 927	B22
57	木錘	コナラ属コナラ節		I S F - 926	Y25
58	しゃく子状木製品	コナラ属アカガシ亜属	桁目	I S F - 990	B60
59	木杖	スギ	削り出し	I S F - 844	B33
60	木杖(玉杖形木製品)	コナラ属アカガシ亜属	桁目	I S F - 854	B100
61	弧文板	カラスザンショウ		I S F - 826	B99
62	案脚	スギ		I S F - 954	B10
63	蓋	スギ	板目	I S F - 853	B76
64	槽	モクレン属		I S F - 828	Y18
65	槽	スギ	板目	I S F - 832	Y26
66	槽	スギ		I S F - 829	B50
67	槽	スギ		I S F - 920	Y9
68	槽	スギ		I S F - 913	B36
69	槽	スギ		I S F - 914	B37
70	槽	スギ	板目	I S F - 847	B38

遺物番号	器種	樹種	木取り	標本番号	実測番号
71	筒状木製品	イヌガヤ	丸木	I S F - 906	Y 8
72	筒状木製品	トチノキ	丸木	I S F - 930	Y 24
73	底板	スギ	柾目	I S F - 970	Y 15
74	底板	スギ	板目	I S F - 971	Y 28
75	鼠返し	スギ		I S F - 845	B 31
76	建築部材	スギ	削り出し	I S F - 960	Y 2
77	建築部材	コナラ属クヌギ節		I S F - 965	Y 38
78	建築部材	コナラ属コナラ節		I S F - 993	B 65
79	建築部材	スギ	斜目	I S F - 1002	B 66
80	建築部材	スギ	板目	I S F - 963	B 61
81	建築部材	コナラ属アカガシ亜属		I S F - 909	B 86
82	建築部材	スギ		I S F - 998	B 68
83	建築部材	スギ		I S F - 994	B 56
84	建築部材	スギ	板目	I S F - 964	B 64
85	建築部材	スギ	板目	I S F - 916	B 80
86	建築部材	カエデ属	丸太	I S F - 961	B 48
87	櫓状木製品	スギ	斜目	I S F - 836	B 62
88	原材	コナラ属アカガシ亜属	ミカン割り	I S F - 1001	B 54
89	原材	コナラ属アカガシ亜属	ミカン割り	I S F - 997	B 55
90	梯子	アサダ		I S F - 852	B 63
91	梯子	ケヤキ	板目	I S F - 1003	Y 37
92	梯子	アサダ	柾目	I S F - 848	Y 7
93	梯子	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 982	B 51
94	紡錘車	スギ	柾目	I S F - 956	B 13
95	紡錘車	コナラ属アカガシ亜属	柾目	I S F - 955	B 11
96		ヒノキ		I S F - 908	Y 41
97		スギ		I S F - 946	B 7
98		スギ	削り出し	I S F - 948	B 9
99		ヒノキ	削り出し	I S F - 925	Y 46
100		スギ		I S F - 978	B 21
101	枡(かせ)	ヒノキ		I S F - 962	B 59
102	布巻具	スギ	削り出し	I S F - 984	Y 34
103	布巻具	スギ	削り出し	I S F - 983	Y 33
104	布巻具	スギ	削り出し	I S F - 985	Y 32
105	布巻具	スギ		I S F - 1000	B 97
106	布巻具	スギ	削り出し	I S F - 941	B 16
107	布巻具	モミ属		I S F - 976	B 92

遺物番号	器種	樹種	木取り	標本番号	実測番号
108	角棒	スギ	割り材	I S F - 981	B 94
109	角棒	スギ		I S F - 996	B 46
110	棒	ムラサキシキブ属	丸木	I S F - 968	Y 16
111		サカキ		I S F - 958	B 71
112		スギ	削り出し	I S F - 934	Y 6
113	楔	スギ		I S F - 979	B 24
114		スギ	板目	I S F - 907	Y 36
115		スギ	桁目	I S F - 945	B 84
117		マタタビ属	丸木	I S F - 931	Y 14
118		スギ	桁目	I S F - 950	B 72
119		コナラ属アカガシ亜属	桁目	I S F - 957	B 14
120		スギ		I S F - 949	B 34
121		コナラ属アカガシ亜属	桁目	I S F - 932	B 89
122		スギ	斜目	I S F - 969	Y 4
123		スギ	板目	I S F - 988	Y 53
124		スギ		I S F - 944	B 83
125		ヒノキ		I S F - 989	B 47
126		スギ	桁目	I S F - 987	Y 43
128		スギ	板目	I S F - 947	B 8
129	板(盾?)	ヒノキ	桁目	I S F - 940	B 2
130		スギ		I S F - 980	B 79
131		スギ	削り出し	I S F - 951	B 73
132		スギ		I S F - 942	B 17
133		スギ	削り出し	I S F - 977	B 19
134		スギ		I S F - 995	B 45
135	杭	クマノミズキ類	丸木	I S F - 918	B 52
136	杭	マツ属複雑管束亜属	丸木	I S F - 991	B 98
137		クリ		I S F - 936	B 87
138		コナラ属クヌギ節		I S F - 986	Y 42
139		スギ	板目	I S F - 922	Y 35
140		コナラ属コナラ節	芯持ち材	I S F - 915	B 42
141		コナラ属アカガシ亜属	丸木	I S F - 933	B 41
142		ヤマグワ	丸木	I S F - 943	B 18
143		カエデ	丸木	I S F - 938	B 23
144		コナラ属クヌギ節	丸太	I S F - 999	B 69

第3節 その他の遺物

土器および木器の出土量に比例して石製品も多く出土し、遺物箱で約15箱を数える。ここでは代表的なもののみ実測したので、出土個体数はずっと多いことになる。

1は鉄製の直刃鎌で、SD05（1次調査）の上面で出土している。先端が欠損しており、現存長10.8cmを測る。向かって右側が手前に8mm程折込まれ、柄の装着部をなしている。よく使われたようで刃部の研ぎ減りが著しい。層位的には第3次調査の土坑群と同じ時期になり、古府クルビ期から高島期と思われる。

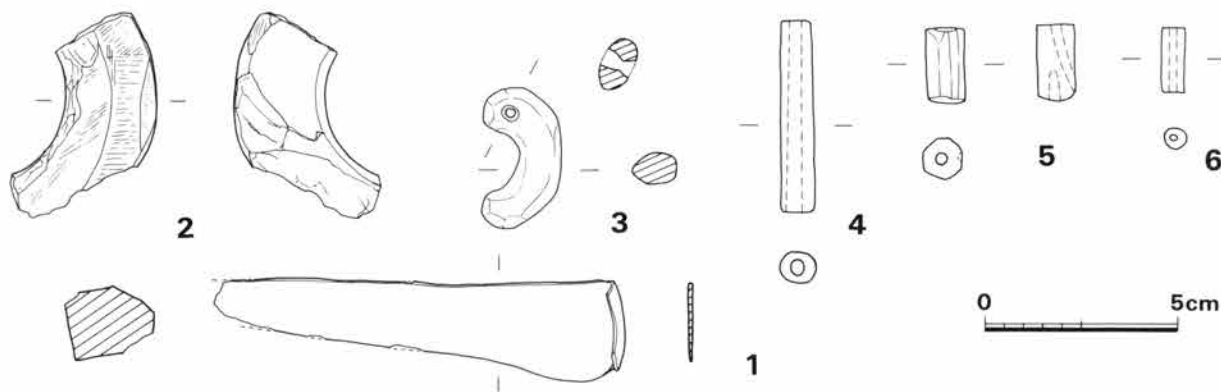


Fig. 115 鉄製品・玉製品（玉製品3～6のみ縮尺1/4）

2は碧石製腕飾類の未製品である。第3次調査で10J区南の自然の落込みから出土した。かなり加工の進んだもので全面にわたって研磨が見られる。底面はやや傾斜し、外面の斜面と側面も研磨によって作ろうとしている。復元内径は約5cmを測り、石釧になると考えられる。古府クルビ～高島期頃の時期が考えられ、土坑群と同時期に作られたものである。また、塚崎遺跡の管玉と同じ石材を用いていることに注目できよう。すなわち、粒子の粗い粉っぽい石質である。3は滑石製勾玉の完成品である。全長19mm、1.3gの重量を測る。C字形を呈し頭部に比べてやや小さな尾部となっている。また偏平な作りである。孔は両側からあけられている。4～6は管玉でいずれも碧玉製である。4は長さ26mm、径4.1～4.5mm、重さ0.95gを測る。SD06（第1次調査）暗灰色粘土層から出土した。泥岩質の石材でくすんだ灰緑色を呈する。両側から穿孔されている。なお、両端面の径が異なり、平面台形状を呈する。5は未製品で穿孔に失敗し放棄したものである。長さ10mm、径5mm、重さ0.6gを測る。不整形な多面体を



Fig. 116 SD05出土ヒスイ
(Fig. 117と同一物)

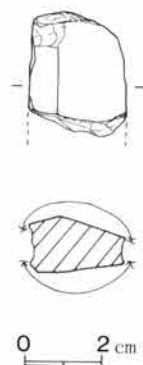


Fig. 117 SD05出土ヒスイ

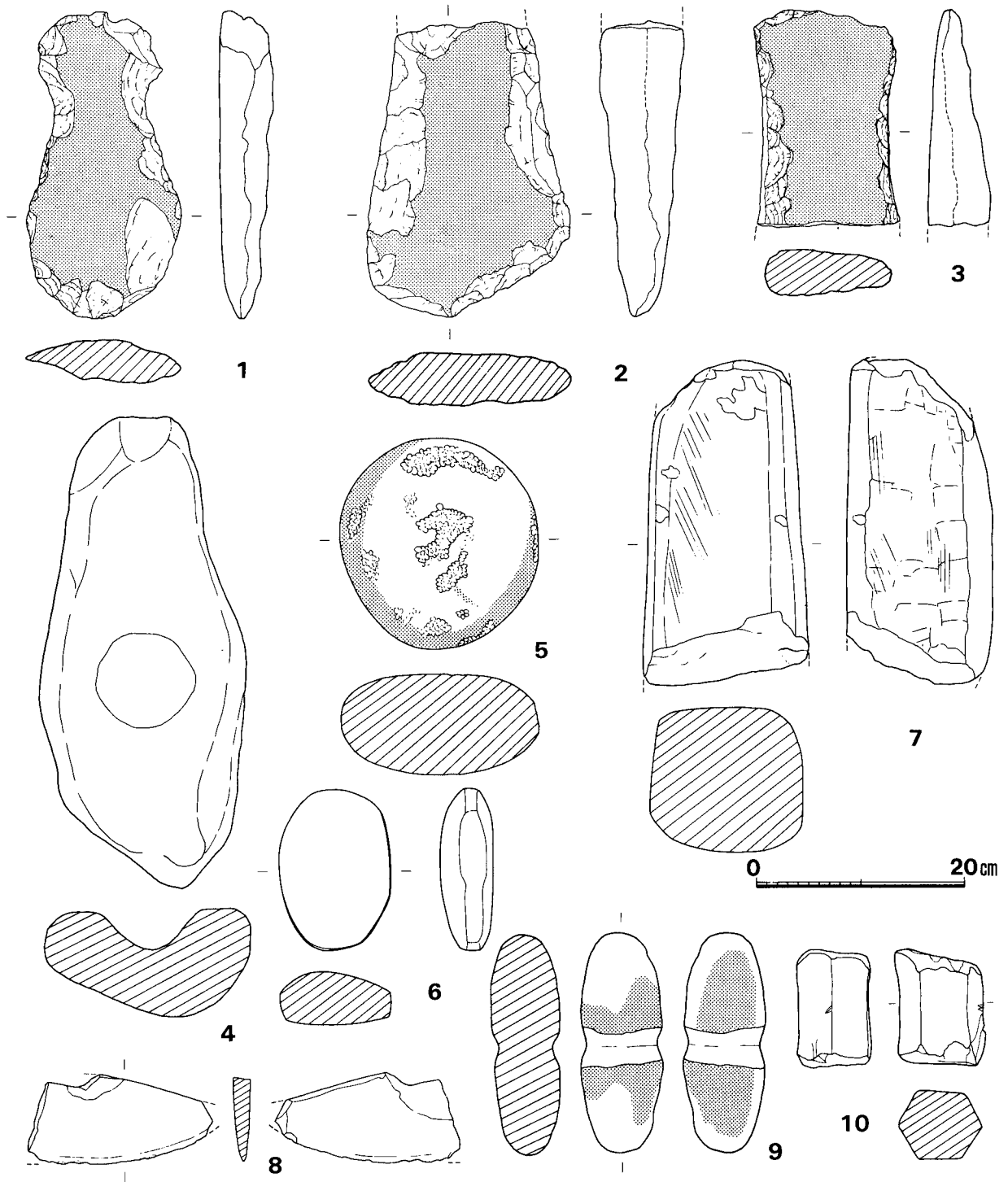


Fig. 118 石製品 (4のみ $\frac{1}{2}$)

呈し研磨痕を明瞭に認めうる。6は長さ8.5mm、径3mm、重さ0.3gを測る完成品である。両側から穿孔されている。碧玉材は、このほかにもチップ等が多数認められ、本遺跡で玉生産がなされたことを示す。玉砥石の出土も1点みられる。

なお、第3次調査のSD05上層からヒスイの加工品が出土している (Fig. 116・117)。

ヒスイは、良質ではないが緑色の部分も多くある。ヒスイ片は下端を欠失している。両面に研磨が施されている (図上の矢印で範囲を示した)。研磨によって山形に稜を研ぎだしているが、その稜は両面に対応したものとなっていない。両側縁は破断面のままだが、一部分研磨が及んでいる。つまり、これが

ら研磨しようという作業の痕跡が認められる。上端にも研磨が一部分およんでいるが、自然面を残している。ヒスイから作られる器物の種類は少ないが、具体的に何の未製品であるか不明。

1～3は打製石斧でいずれもSD05下層から中層にかけて出土した。図示した3点以外にも数個体出土している。いずれも一方の面に自然面を残している。1は長さ15cm、重さ300gを測り完形品である。2は基部を欠損している。現存長14.5cm、重さ640gを測る。両側縁に歯潰しが見られ、また右の刃部に再加工が施されている。3は基部のみ遺存し現存長10.5cm、重さ260gを測る。側縁には歯潰しが施されている。また基部に加工が施されていない。

4は凹石でSD05（第1次調査）から出土した。長さ47.2cm、幅19.5cm、重さ11.5kgを測る。長楕円形を呈し上面は全体的にやや凹み、中央に約4cmの深い凹みがある。擦って潰して、という機能である。5、6は磨石でSD05（第3次調査）下層から出土した。5は最大径10.3cm、重さ730gを測る。全面にわたって使用痕が認められ、ところどころ敲打痕も認められる。6は長さ7.9cm、重さ173gを測り全面が使用されている。7は砥石でSD305上層から出土した。最大長16cm、重さ1.3kgを測る。3面を砥石として使用している。かなり軟質なので仕上げ用のものであろう。

8は石包丁でSD05（第3次調査）上面から出土した。刃部が外湾する三日月形態を呈するようである。9は石錘でSD05（第1次調査）から出土した。中央に溝が走り、敲打によって作られている。一方端に敲打痕が認められるので叩き石としても使われた可能性がある。10は砥石でSD02から出土した。近世のものであろう。6面体を呈し全面にわたって使用されている。

ト骨

SD05（第3次調査）中層から2個体出土した。もう1つのト骨は小破片であるので、図示しなかった。金沢医科大学助教授平口哲夫先生の御教示によると、シカの左肩甲骨で、図の左が骨の内側、右が

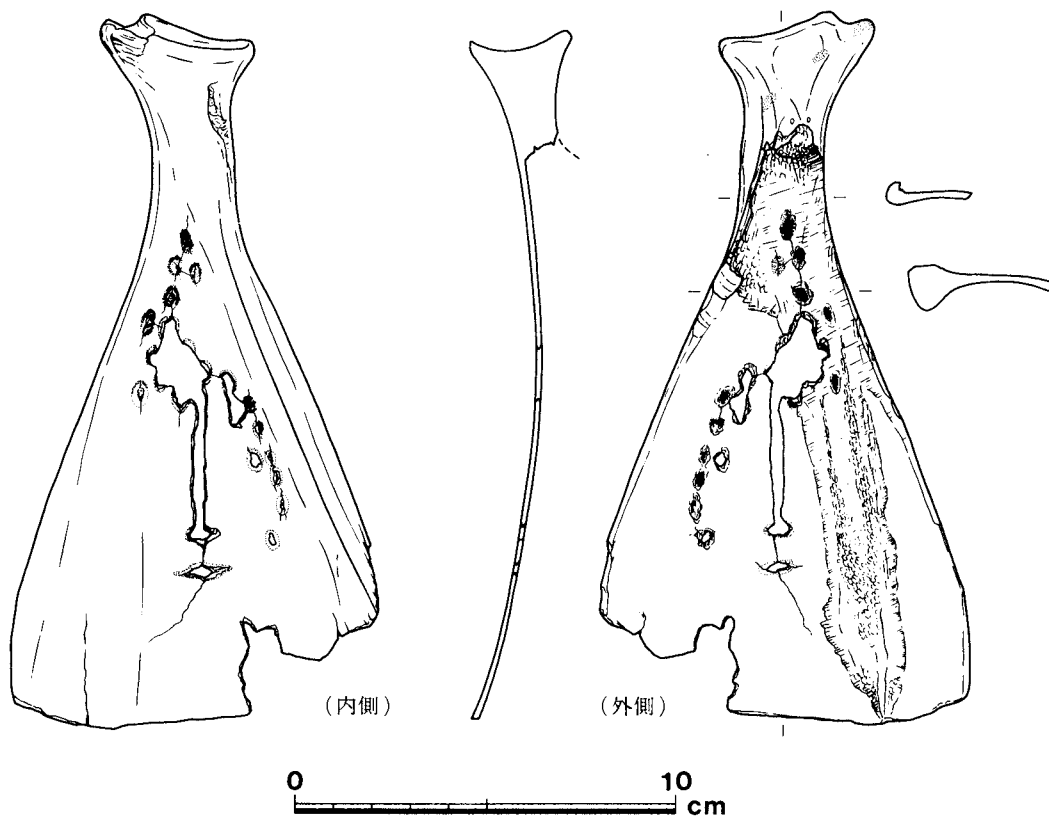


Fig. 119 SD05 出土人骨

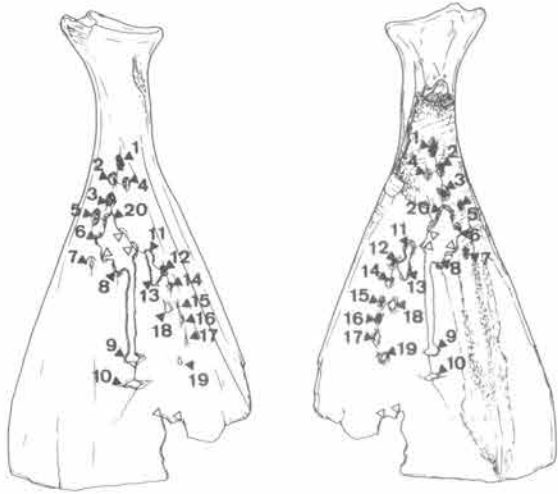
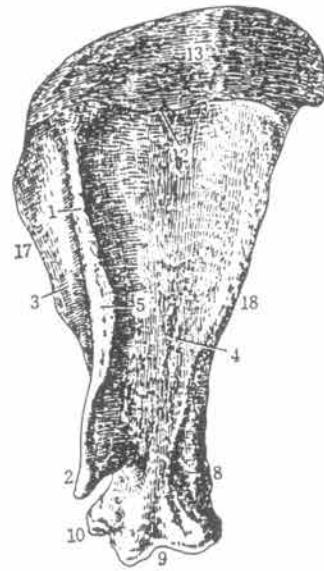


Fig. 120 ト骨焼灼孔分布図



- 部分名称
1. 肩甲棘
 2. 肩峰
 3. 棘上窩
 4. 棘下窩
 5. 肩甲棘結節
 8. 肩甲頸
 9. 関節窩
 10. 関節上結節
 12. 背縁
 13. 肩甲軟骨
 17. 前縁
 18. 後縁

Fig. 121 シカの肩甲骨の部分名称(註3より)

外側ということである。骨の全面にわたって擦痕が見られるが、主に骨の内側を削り込んでいる。関節窩から派生するたかまり(肩甲棘)を除去し、しかも骨の稜状に突出する部分(肩峰)と肩甲軟骨をカットしている。また、焼灼する面は両面から削られて薄くなっている。

焼灼孔は可能性のあるものも含めて23個確認した。焼灼孔はFig. 119で黒塗り三角形のNo. 1~20で明示し、その可能性のあるものを白抜き三角形で示した。焼灼孔は、関節窩にはみられず、加工されて三角形を呈する骨の関節窩近くから、肩甲棘を除去しない方の側縁近くに縦列状態でみられる。このような焼灼行為のために、孔をあける部位を約2mmの薄さにまで削り込んでいる。焼灼行為は骨の外側から行なわれていることが、灼痕の状態から分かる。灼痕は完全に穴があいたりヒビ割れがおきているものと、黒あるいは黒褐色に変色しているものの二者が認められる。

なお、本来あるはずのない関節窩付近に小さく焦げて黒褐色に変色している所が3ヶ所認められる。おそらく誤って焦がしてしまったものと考えられ、焼灼行為の参考になろう。

ふいご羽口状土製品

SD05中層から出土している。本体の土製の大部分を欠損し、付着した鋳滓が剥離したような状態である。確実にSD05中層に伴うか不明である。もし伴うとすると、時期的に見て鉄関係とは考えられず、鋳銅関係の遺物と考えられる。



Fig. 122 ふいご羽口状土製品

註

- 1) 上市町教育委員会「北陸自動車道遺跡発掘調査報告—上市町本製品・総括編—」1984年
- 2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査』X 1981年
- 3) シカの肩甲骨に関し、金沢医科大学助教授平口哲夫先生に文献を紹介して頂いた。
加藤嘉太郎「家畜比較解剖図説(第2次増訂改版)」1983 養賢堂

第7章 若干の考察

第1節 弥生中期前後の畝田遺跡

本書で扱った弥生土器（Fig.57）は、その大半がSD05出土であるが、前章で述べられた通りSD-05は弥生後期後半～古墳前期の膨大な遺物を包含していることから、これらの微量な弥生土器は同じ遺構とはいえ後世の流れこみと考えられる。そして時期的にも弥生中期を主体として一部前期や後期に及ぶ広い幅が見られ、一括性は全く無い。そこで本節では北陸のⅠ～Ⅴ様式の各時期に特徴的な技法・文様からそれぞれの位置付けを行いたい。また、観察の結果、胎土により複数グループの分類が可能であり、それが土器の時期・系譜と関連するようなので付記することとしたい。

1. 条痕調整される土器について

17および、24～27がこれにあたる。北陸では弥生前期から中期初頭にかけて存在するが、その祖型はハケ調整される一般的な弥生土器よりも古く、時期的には縄文晩期以前に、地域的には東海地方に求められる。17に見られる指頭ナデ文や、24に見られる小波状口縁は、Ⅰ～Ⅱ様式併行の北陸の条痕調整土器の典型的な技法の一つであり、底部も同時期と見てよいだろう。より時期を限定できるものとしては、24が指頭押圧による小波状口縁であることからⅠ様式に、17が指頭ナデ文の多条化・退化したものとしてⅡ様式併行にそれぞれ位置付けられる可能性が高い。^{註1}

2. ハケ調整される土器について

すなわち一般的な弥生土器であり、その主体となる文様によって大まかにヘラ描文系（Ⅰ様式）・櫛描文系（Ⅱ～Ⅲ様式）・凹線文系（Ⅳ～Ⅴ様式）と推移が示される。

ヘラ描文系すなわち弥生前期に位置付けられる土器は甕形土器29がある。この時期の北陸の弥生土器は条痕調整土器が主体で、ハケ調整土器は希な存在と言える。29は2条のヘラ描直線文に加えて口縁が外反するが胴部の張り出さない器型も遠賀川式土器に類似するが、ハケをよくのこす点や胎土が他の土器と変わらない点から、在地化したものとみたい。弥生前期でも末葉に属するもので、Ⅰ様式新段階を遡ることはなからう。

櫛描文系の土器は多数あるので、Ⅱ様式とⅢ様式に分けて整理したい。

Ⅱ様式は櫛描文系土器が登場する時期であり、北陸では条痕調整土器と共伴する。該期に位置付けられるものには甕形土器28がある。太い櫛状具による簡略な櫛描直線文や、29と変わらない器型は、櫛描文系土器の初源期の特徴といえる。

Ⅲ様式は櫛描文が盛行する時期であり、北陸独特の文様も生み出される。壺2・4～6・15～18・19～22、甕8～14がここに属する。さて、Ⅲ様式においては、現在のところ、①櫛描文が盛行するが北陸の独自性といった意味では未発達と言える資料と、②櫛描文の施文率は少なくなるが独自の文様が盛行すると言える資料、③櫛描文がほとんど施文されず遺跡によっては凹線文系土器が共伴する資料の3パターンが確認され、古いほうから①→②→③の流れとして捉えられる。^{註2}しかし各パターンを構成する資料の一括性に不安があり、遺跡・地域の偏りも大きいことから、これがそのまま北陸Ⅲ様式の3期細分と認定されるのは難しかろう。ここでは、複数期細分を考えずに、技法・文様の存続・消長から新古の要素を指摘するにとどめたい。

古い要素を持つものとしては2・14がある。壺形土器2について、太い櫛状具による簡略な櫛描文自体はⅡ様式に遡りうるが、ハケ調整土器の受け口状口縁が現在までのところⅢ様式以降でしか確認できていない。この器型は、凹線文系土器の段階に登場する30のような近江系受け口状口縁とは系譜の異なるものであり、この段階には見られなくなるのでⅢ様式内でも古く位置付けられる。甕形土器14に見られるさざ波状口縁は、羽咋市吉崎・次場遺跡V-5号溝等に例があるが、現在までに口縁内面の綾杉文・櫛描斜行短線文など北陸独自の技法との共伴はあまり無く、むしろ単純な構成の櫛描文と出土することが多い。そしてⅡ様式には確認できないことから、Ⅲ様式でも古相に限定されるようである。

新しい要素を持つものとしては、6・8・9・16・20・22がある。壺6・16・22、甕8・9⁴³に見られる口縁内面に施される綾杉文は、Ⅲ様式の北陸のメルクマルのひとつである。この文様は凹線文系土器を含む金沢市磯部運動公園遺跡やⅣ様式併行の金沢市戸水B遺跡にも定量確認できることから、中期でもかなり新しい段階まで残存することがわかる。だが、その一方で、羽咋市吉崎・次場遺跡V-5号土坑や金沢市寺中遺跡等の櫛描文が盛行する遺跡でははっきりと確認できない。どこから出現するかは明確にできないが、櫛描文の盛行期よりは後出的なようである。施文原体はハケ条具か貝殻復縁にほぼ限定できるが、他遺跡ではヘラ状具によるものもある。その差が何を示すものかについては今後の検討課題となろう。壺20の頸部の凸帯は、薄く幅広く、摂津地方など畿内北部で盛行する凸帯とは異なるものである。20に類似した形態は金沢市磯部運動公園遺跡、七尾市細口源田山遺跡等の櫛描文が衰退した遺跡に見られることから中期でも後出的な要素と見たい。

土器属性 土器様式	条痕調整土器	ハケ調整土器															
		ヘラ描文系土器	櫛描文系土器								凹線文系土器						
			櫛描文					技法その他			凹線文	近江系受け口状口縁	無頸壺				
			3本櫛	直線文	波状文	簾状文	扇形文	斜行短線文	口縁端部刻み	さざ波状口縁				受け口状口縁	口縁内面綾杉文		
Ⅰ新																	
Ⅱ																	
Ⅲ																	
Ⅳ																	
Ⅴ古																	

Fig. 124 北陸の弥生土器における文様・技法等の消長

どちらともいえないものは4・5・10～12・15・18・19・21である。壺形土器4・5、甕形土器10～12は、口縁内面に綾杉文を持たない点では古相、胴の張る器型や口縁端にはっきり面を持つ点では新相と言えるが、確実に限定できない。壺15の櫛描斜交文は北陸では類例に乏しく、畿内でⅢ様式に見られることからここに含めた。壺18は口縁形態が受け口状を呈することからⅢ様式のものとした。口縁端部の斜交刻みについてはⅡ様式からⅣ様式にかけての弥生中期全般に類例が見られるが、各時期とも決して量的には多くないものである。壺19は、受け口状口縁から18同様にⅢ様式に含めた。口縁外面の綾杉文は、Ⅱ様式の条痕調整土器から存在し、⁴⁴中期全般に類例が見られる。ただし新しい段階のものはハケ状具を用い、鉢や無頸壺に多いようである。壺21に見られる櫛描扇形文は、Ⅱ様式併行の矢木ジワリ遺跡からⅢ様式全般にかけて類例がある。櫛描文の多条化からⅢ様式に降るものとしたが、それ以上細かい位置付けはできない。これらの土器は、単品では新古どちらにも限定できず、共伴資料によってはどちらにも振り分けることができる。

凹線文系の土器は本遺跡では確認できなかったが、それに共伴してもおかしくないものとして壺1・23、甕7・30を考えることができる。1は器型的には30に類似し、小型のため壺としたが、甕の可能性が高い。受け口状を呈する口縁帯の面の取り方などから凹線文に影響されていると考え、ここに含めた。23は無頸壺という器種自体が新しい要素であり、磯部運動公園遺跡11号土坑出土のタイプにもなるものだろう。縄文帯を沈線で区切る手法は中部高地に祖型を持ち、栗林Ⅰ式の土器に近いものであろう。⁴⁵7は小型化した甕にケズリ調整を行うことからⅣ様式以降のものと言えよう。30は近江系の受け口状口縁を持つものであり、粗いハケ・粗い櫛状具刻みも共通する。近江ではⅣ様式に定型化するとされるが、北陸のⅣ様式に確実に共伴するものとはいえない。口縁端が細く、稜がきわめてはっきりしていることから新しく位置付けられ、Ⅴ様式すなわち後期に降る可能性が高い。

3. 弥生土器の胎土について

条痕調整される土器の胎土はいずれも砂礫が多くそれも径2～3mmと大粒のものが含まれ、気泡も多くて、締まりのない感じのものが通有である。縄文晩期の土器が同じ調整でも比較的緻密で精良な胎土であることから、弥生時代前期から中期にかけての条痕調整土器に特有の胎土と言えよう。細かいところでは17・25のように他形の石英を含むもの、24・26のように海面骨片を含むものが、畝田遺跡周辺出土の土器に特有のものかどうかを今後注目していくべきであろう。

ハケ調整される土器の胎土は、全般に条痕のそれより砂礫が細かめで、気泡が追い出されて締まった感じになる。しかし、20のように砂礫をほとんど含まないもの、2・4・14・28のように条痕のそれほどではないが多く含むもの、両者の中間的なものとおおよそ3グループに分けることができる。さらに23など搬入品の可能性をもつものがある。砂礫を多く含むものに、時期的に古い形態を呈するものが多いことや、器形では甕形土器が多いことが看取された。前者は一部共伴する条痕調整土器の影響の存在、後者は用途によるつくり分けの存在を想定できる。

1～30の土器について、以上のような点が現在肉眼でも観察できた。今後、より多量の時期的にまとまった資料に対してより細かい観察から同じことがいえれば、弥生土器の胎土の類型化も可能になるであろう。

4. まとめ

今回出土の弥生土器は、時期的には中期、特にⅢ様式を中心として前期から後期に及ぶものであり、断片的ではあるが各時期の様相を探る手掛かりとなりうるものであろう。まずは各時期の概要と問題点

をあわせてまとめてみることにする。

前期、Ⅰ様式は縄文晩期の特徴を残す土器群が主体である中に、遠賀川系土器が散見するから弥生文化波及の時期と推定される。但し、土器以外の具体的な資料を欠くことから、実際に定期的な水稲農耕が伴っていたかどうかは該期の最大の焦点となるであろう。

中期は櫛描文系土器が中心になり弥生文化が推移していく時期であり、Ⅱ様式は条痕調整土器との共伴、Ⅲ様式は櫛描文土器の盛行、Ⅳ様式は凹線文系土器との共伴がそれぞれ標式となる。だが近年、条痕調整土器の下限がⅢ様式初頭に、また凹線文系土器の出現がⅢ様式の末に遡るという事例が示されており、⁴⁸⁶各様式を単純に区切ることは難しくなっている。そうした細分論に加えて、櫛描文の出自と他地方との併行関係、23のような東日本系の土器のもつ意味なども重要な検討課題であろう。

後期、Ⅴ様式は無文化・規格化が進む畿内Ⅴ様式を基調とし、凹線文系・近江系の土器が見られるが、徐々に山陰地方の影響が強まって法仏式へと展開していくようである。

以上のようにⅠ～Ⅴ様式ともきわめて大まかな概要しか説明できない。つまり北陸の土器様式は、ある程度の独自性は見られるが、資料の少なさもあって各地方の土器様式に比肩するだけの組成が把握されておらず、未確立な状態にあると言えよう。今後は、現行の資料で時期的にまとまった土器群の抽出と再検討を行いつつ、資料の増加を待ちたい。

弥生時代中期前後の畝田遺跡は、明確な遺構が確認できなかったのが惜しまれるが、土器の時期幅を存続期間と捉えるなら、金沢沖積平野という地域の弥生社会においてかなり重要な意義をもって存在している可能性が高いと言えよう。遺跡としての位置付けをより明確にするには、土器ばかりでなく、石器・木器等の遺物や住居・墓等の遺構から遺跡自体のあり方までをも含めた総合的な考察が不可欠であり、今後の調査・研究にあたっての課題はきわめて多い。それがなされてはじめて遺跡は正当に評価されることになるだろう。

註

1. 金沢市教育委員会1987・同1990で増山仁氏がこの傾向を指摘している。
2. すなわち、増山1989で同氏が提唱する3期・4期・5期にはほぼ相当する。
3. 甕形土器9の口縁内面の文様は、交互の斜行刻み3帯であるが、その効果や意味は綾杉文と大きく変わらないものとして、ここに含めた。
4. 羽状条痕が横方向に変化したものとして、主として壺形土器に見られる。
5. 久田1991による。なお、23の土器を長野県の中沢氏に実見して頂いた結果、中部高地では見られない胎土であるというコメントが得られた。前述したように在地の胎土とも言えないが、今後は信越に加え、北関東・南東北などの胎土も考えて行かねばなるまい。
6. Ⅲ様式における条痕調整土器の存在は、金沢市下安原遺跡101号溝や羽咋市吉崎・次場遺跡Ⅴ-5号溝で確認されるが、一括性は弱く、現状では確実に共伴するとはいえない。凹線文系土器の共伴は金沢市磯部運動公園遺跡で確認されている。

参考文献

- 荒木繁行・吉岡康暢 1970 「金沢市畝田弥生遺跡調査予報」『石川考古学研究会々誌』第13号
久田正弘 1991（発刊予定）「能登における弥生時代中期の一様相(1)」『石川考古学研究会々誌』第34号
増山 仁 1989 「小松式土器の再検討—小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通して—」
『北陸の考古学 II』（『石川考古学研究会々誌』第32号）
石川県教育委員会 1975 『金沢市戸水B遺跡調査報告』
石川県立埋蔵文化財センター 1987 『吉崎・次場遺跡』資料編(1)
金沢市教育委員会 1977 『金沢市寺中遺跡—第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査報告書—』
金沢市教育委員会 1987 『金沢市矢木ジワリ遺跡 金沢市矢木ヒガシウラ遺跡』
金沢市教育委員会 1988 『金沢市磯部運動公園遺跡』
金沢市教育委員会 1989 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ』
金沢市教育委員会 1990 『金沢市下安原遺跡』

第2節 石川の初期木製農具をめぐって

a) はじめに

遠賀川式土器に代表される弥生文化の地方への波及は、単に遠賀川式土器の移動ではなくて農耕文化の総体としての伝播である。それは東北地方南部における遠賀川式土器の波及に伴って水田址が検出されていることは、これを裏付けるものである。ただし全ての文化要素を受け入れたか疑問視され、むしろ地域ごとに取舍選択があったものとかんがえる。少なくとも農耕に関する諸々の技術や生活様式を伴っているはずである。従来、石川においては、主に弥生土器に目が向けられ、その母体である弥生文化への関心が薄かった。そこで、本稿では基礎作業として木製農具の集成作業をおこない、問題点を明らかにしたい。なお、発掘調査の疎密さから、資料の大部分は金沢平野周辺出土のものになっており、しかも弥生時代終末から古墳時代初頭に属するものがほとんどを占めている。¹⁾蛇足ながら、報告資料中心に扱ったので資料の遺漏があるかもしれない。以上のような前提があるものの、社会変化の大きかったと思われる弥生時代後期から古墳時代にかけての農具の大きな変化の傾向を把握できよう。

b) 木製農具集成

鍬・鋤・泥よけ

最も古い資料として吉崎次場遺跡(8)と畝田無量寺遺跡(9)の広鍬がある。ともに中期前葉に位置付けられ、本地域における本格的な農耕文化の波及期の農具である。9は頭部山形を呈し小さく低い舟形隆起を持つ。8は反対に通有の大きさの舟形隆起を持つ。大きな形態差を見出し難く、未だ地域色を示していない状態と考えられる。

これ以外の中期の資料は皆無に近く、以下の資料は全て弥生後期後半から古墳時代前期に属する。これは、中期の弥生農耕文化の貧弱さを示すものではなく、単に出土機会がないものと考えたい。

狭鍬は4例を確認した(1~4)。いずれも短冊型を呈し柄孔を中心に舟形隆起がある。舟形隆起は柄穴を中心に円形のものや舟形の形態のものがみられ、前者が主流を占めるようである。また、泥よけを装着する構造にはなっていないので、



Fig.125 木製農具出土地

もともとそれを必要としないものと考えられ、次にみる広鋤と用途の違いによって使い分けられていたと思われる。

広鋤は10例（5～7、10～16）、同未製品を2例（17・18）確認した。4タイプに類別できよう。つまり5～7の狭鋤を広くしたような長方形を呈するもの（1類）、11・12・14の孔両側に突起を持つもの（2類）、10のそれを持たないもの（3類）、15・16の台形状を呈するもの（4類）である。ほとんどに泥よけ装着用の構造（蟻じゃぐり溝、固定紐を通す穴）がみられ、11では明確でないものの、泥よけを装着できるようになっている。つまり広鋤は、泥よけ装着を基本としている。なお、富山県小矢部市江上A遺跡の分類と対比すれば、2類がA5類に、3類がA4類に類似する。²⁾

鋤およびその可能性のあるものを7例（25～31）、その他に鋤柄把手を3例（32～34）、計10例を確認した。全て一木造りの鋤である。着柄鋤の本体は確認できなかったものの、鋤柄の出土からその存在が予想される。鋤は權状を呈するもの（26～30）と肩の張るスコップ状を呈するもの（25・31）の二種が認められるものの、權状のものが本当に鋤であるかどうか確証はない。鋤柄把手は単純に差し込むものだが、33のように横から目釘を打ち込めるようになったものもある。また、着柄鋤柄の可能性のあるものが3例出土している（60～62）。61は先端に鋤本体と装着固定するための突起が造り出されており、本体の柄穴に差し込むためのものである。

以上鋤類を23例確認したものの形態差はあまり見られない。また遺跡ごとの特性も見られない。これは金沢平野の資料がほとんどなので、鋤の型式の個性あるいは地域性が見られるほどの資料の蓄積がないことによると判断できる。さらに、能登との比較は不可能である。ただし、江上A遺跡に類似するもの（鋤1類）があり注目できよう。

鋤に装着される泥よけは8例確認した（63～70）。基本的に同形態だが、肩の張り方で分類できる可能性がある。江上A分類での「鋤」A1類に相当する。装着方法はFig. 126で示したように蟻じゃぐり溝に頭部を差し込み柄穴両側の孔に楔を打ち込んで固定する。その際、より強く固定するために楔と本体との間に桜の樹皮を用いて巻きつけている。柄との装着角度は140°～150°前後で鋤の装着角度が65°前後とすると、両者の空間は80°～90°となりかなり狭いものとなる。泥よけ本体は鋤よりやや小さいかほぼ同じ大きさなので、鋤として実際使用できる空間は更に狭くなる。したがって使われ方を想定すると、泥田であまり深く打ち込まず表層を攪拌する状況と思われる。

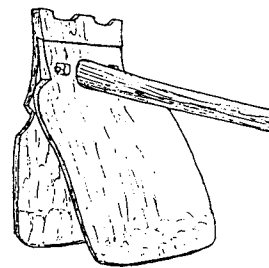


Fig. 126 泥よけ具を装着した鋤(註3より)

なお、エブリを3例確認した（35・36・100）。36は横鋤とも呼ばれるものである。装着角度からエブリと判断した。35は北部九州地方でよく見られる柄穴が中央にあげられ、上端2ヶ所に添え木を固定する孔があげられているタイプである。100は、細長い板の長辺に鋸歯をつけるタイプである。これらは江上A例とも大きく異なり、エブリの北陸としての特性を抽出できない。

膝柄鋤⁴⁾

膝柄鋤の着柄方法はどれもほぼ同じである。そして、いわゆる「ナスビ形」の笠部を呈する「膝柄鋤B」が主流である。鋤身の形状から大きく2タイプに区分できる。一つは透かし穴のあるもの（37・38）、もう一つはそれが無いもの（39～45）である。前者における着柄部（軸部ともいう）の形状から更に区分され、37は「膝柄鋤A」、38は「膝柄鋤B」となる。樋上昇氏⁵⁾によると、弥生中期の山陰地方には三角形の透かし穴を持つので、37・38のようなタイプはそれと関連する可能性があるとして注意を

うながしている。北陸地方は、土器やその他の面において山陰地方の影響を強く受けているものの、本例は古墳時代前期初頭に属し、時間的隔りがあるので直接的な影響を認め難い。

39～45は「膝柄鍬B」形式のみである。良好に遺存した資料が少ないものの、鍬身は着柄部とあまり大きさを違えず伸びるようである。あるいは42のように下膨れ状を呈している。さらに膝柄股鍬には及ばないものの狭長な点も指摘でき、幅と鍬長の比が、41で1:4.2である。42で1:2.8である。これは、実際の使われ方において膝柄股鍬と同じであったことを推定させる。

股鍬・膝柄股鍬

46～49は柄を穴に挿入する股鍬で、50～56が膝柄形式の股鍬である。いずれも頭部は左右に突出部を持ついわゆる「ナスビのへた」状を呈しているので一括して扱う。

柄穴式の股鍬は江上遺跡群中の中小泉遺跡でも出土している。ただし、中小泉遺跡では別に着柄部が「ナスビのへた」状の鍬（B2類）も出土している他、江上A遺跡にはB1類とされた狭長な狭鍬もみられる。樋上氏はB1類の鍬をB2類のバリエーションと捉えている。また、中小泉例のB2類は46と類似する形状なので、樋上氏の推定したことを勘案すれば、これも一つのバリエーションとなろう。なお、北陸で確認している柄穴式の股鍬は全て二股で、北部九州のそれは三股というような違いがある。江上遺跡群では膝柄形式のものが少ないのに対し、石川では柄穴式と折半する状況である。

膝柄股鍬も全て二又である。全体に分かる資料がないのではっきりしないものの、形態差は少なく、あまり足の開かない刃部の長いタイプと思われる。このような形態差の少なさが金沢西部地域の特性と考えられる。

着柄式鍬（膝柄タイプ）の柄を2例確認した（57・58）。57は報告書中で石斧柄と報告されているものだが、偏平片刃石斧を受け止める段がないことや、平城宮SD6030出土品に類似することから鍬柄と判断した。台部は前後に細長く伸び、それぞれの端部に山形の頭部を削り込んでいる。鍬本体を紐で固定する時に紐がずれないようにする工夫である。58は一方端にしか頭部が作られていない。柄の端部は山形に頭部を作り出し、滑り止めの効果を狙ったものかと考えられる。

田下駄

2例出土している（71・72）。71はいわゆるタゲタで全長約55cmを測る大型品である。前端は丸く仕上げられている。紐を通す穴が中央より前の方に3孔あけられ後に重心がかかるようになっている。72はいわゆるオオアシを固定する杵材である。江上A遺跡での出土はなく、おそらく北陸で初めて確認できたものとなろう。オオアシの杵材の出土は全国的にも少なく、形態変化も少ない。今後、オオアシ本体および狭義の田下駄の出土による検討が必要となる。そして、畝田遺跡とほぼ同時期の大量の木器を出土した江上A遺跡や西念南新保遺跡でも認められなかったので、北陸では、その必要性があまり大きくなかったと予想される。

竪杵

8例確認した（81～88）。それぞれ100～120cmの範囲に収るが、88のみ142cmと長い。竪杵をよく観察すると、竪杵は両端面を杵面とし使用できるようになっているが、一方面のみ摩滅が著しくなっているものが多い。これは、使用に際して意識的、あるいは無意識的に、一方をよく使ったためと判断できる。また、88は原木の乾燥段階で曲ったものをそのまま製品にし、曲っていない方を使用している。

握り部分を明確に作るものとそうでないものが認められる。85は丁寧な作りで、握り部と杵部の境に段を設けて突帯状にし装飾性を持たせている。これは特別な例と思われる。また、杵本体の形態も複数認められる。一つは握り部から杵面にいくにしたがって徐々に太くなるもの、もう一つは握り部と杵面の太さがあまり変化しないものである。このような違いが、単に製品としての個性なのかというか不明

である。

木包丁

8例確認した(73~80)。全体の形状の分かるものはないが、少なくとも石包丁に近い形態のものは認められない。79の右側縁が当初のままであることから、概ね平行四辺形を呈するものと考えられる。手を固定するための紐を通す孔が2つあけられ、片面に溝を施している。この場合79、80にみられるような背の加工を施していないようである。そして、79・80は施溝せずに背を丸く外面に突出させている。木目と刃部の角度は60°前後を測る。畝田遺跡および吉崎・次場遺跡等では、木包丁とともに石包丁も出土しており、その関係に注目できるかもしれない。つまりその補完的なものとして木包丁があるのであろうか。工楽善通氏は石包丁から鉄製穂摘具への過渡期の一道具として位置付けており⁶⁾、そうすると石川でのその変化が弥生後期末を中心とする時期ということになるだろう。

鉄鎌柄

二口六丁遺跡で2例のみ確認した(89・90)。90の全長は43cmあまりを測り長いものとなっており、途中欠損している89の全長は20cm程で、完形でも30cm以下のものであろう。装着される鉄鎌の大きさもそれぞれ大型、小型に使い分けられていたと考えられる。松井和幸氏によると、弥生時代の鉄鎌には大型(18cm以上)と小型(15cm内外)の二種があると指摘されている。それぞれに対応するのであろうか。さらに畝田遺跡出土の鉄鎌は小型の部類に入ることも注目しなければならない。90は鎌本体を差し込む縦長の穴があけられ、頭部は鎌を覆うように突出する。柄は手元近くで内側に屈曲している。概ね現在の鎌柄と同じようだが、鎌を覆うような突出部の存在に特色がある。おそらく鎌を固定するために紐を巻きつけていたのものと考えられる。なお、本例は古墳時代前期に属する。

c) まとめ

簡単に木製農具を見た。木製農具は、発掘調査件数が多くしかも地下水位の高い金沢西部地域に集中しており、分布の偏りから加賀能登における木製農具の傾向を知ることは困難である。逆にいえば、当該地域における弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての様相を把握できる。

膝柄形式の鍬は弥生時代後期から古墳時代にかけて全国的に流行することといわれている。黒崎直氏は「ナスビ形」と称し、着柄鋤と考えていた⁸⁾。しかし、1977年静岡県宮塚遺跡から膝柄型式の鍬の発見に及び、それらが鍬としての可能性を示すことになった。そして1980年に至って膝柄鍬A・Bの概念規定を見た。これらの研究史は町田章氏や樋上昇氏の論文に詳しい。そして、弥生中期には出現し、膝柄形式の鍬は瀬戸内から近畿地方に分布の中心が見られ、東海地方にまで分布している。後期にいたり北陸・関東地方までその分布域を広げており、畝田遺跡の資料群はこの中にある。

石川は膝柄鍬Bがほとんどだが、一方関東地方ではA型式も多く見られ、それぞれの鍬の流入系譜を異にしているようである。当該時期はA形式からB形式への変化が近畿地方で見られる。一つの可能性として近畿地方の直接的な影響の下で石川の膝柄形式の鍬が成立したと考えられる。さらに山陰地方でも軸部がナスビ形になるのは早い。また土器や墓制に山陰の影響が北陸で顕著に認められ、彼地からの影響も無視できまい。

また、江上A遺跡で見られるような柄穴を有する狭鍬を樋上氏は北陸の地域色と捉え、柄穴形式の股鍬をそのバリエーションと考えた。たしかに47や48のようにナスビ形の頭部で柄穴をもつものがあり何等かの関連が認められるものの、膝柄と挿入柄の原理は全く違うので、同じ系譜で考えることに躊躇を覚える。むしろ北部九州や山陰、近畿の各地域の要素を取入れた北陸独自の鍬であり、無理に膝柄の系譜で考える必要もないと考える。想像をたくましくすれば、11や12・14のような広鍬で柄穴の左右に突

起をもつものもナスビ形の形態を採用したものとも考えられる。

これら以外の台形状を呈する広鋤が中期以来の系譜を引くものと予想される。そして弥生後期終末近くになって新たに他地域の影響の下に新たな農具が開発され、本地域における農具の画期と理解できよう。それは膝柄鋤であり、泥よけである。北陸の水田の実情にあうように工夫されて、農耕の技術的水準が低いものではなかったことを示している。さらにこれらの農具は主に月影期のものだが、この時期にいたって遺跡数がかなり増加する。この社会動向と、新たな画期を迎えた木製農具の動向とが密接に絡んでいることは容易に予想される。

なお、鉄製農具の出土は古墳時代前期初頭（古府クルビ期）の本報告所収の鉄鎌や二口六丁遺跡の鎌柄が知られているものの、実際の使用がどれほど遡るか興味のあるところである。その結果で弥生後期終末近くの木製農具の画期の評価がどのように変化するか期待したい。

註

- 1) 土器型式でいえば月影式から古府クルビ式を中心とする時期で、一部高畠式を含む。なお、第8章総括も参照願いたい。
- 2) 上市町教育委員会「北陸自動車道遺跡発掘調査報告―上市町木製品・総括編―」 1984年
- 3) 黒崎 直「農具」『古墳時代の研究』第4巻 1990年
- 4) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』X 1981年
- 5) 樋上 昇「木製農具の地域色とその変遷」『助愛知県埋蔵文化財センター年報』
- 6) 工楽善通「木製穂摘具」『弥生文化の研究』第5巻 1985年
- 7) 松井和幸「鉄鎌」『弥生文化の研究』第5巻 1985年
- 8) 黒崎直「古墳時代の農具―ナスビ形着柄鋤を中心として」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所学報 第28冊 1976年
- 9) 町田章「SD6030出土木製品の検討」『平城宮発掘調査報告書』X 1981年

挿図の出典

猫橋遺跡	加賀片山津猫橋遺跡出土遺物図集「北陸大谷高校地歴クラブ 紀要」第2号 昭和42年
南新保D遺跡	金沢市教育委員会報告 1981年
西念・南新保遺跡	金沢市教育委員会報告Ⅰ 1983年 金沢市教育委員会報告Ⅱ 1989年
近岡・ナカシマ遺跡	金沢市教育委員会報告 1986年
二口・六丁遺跡	金沢市教育委員会報告Ⅰ 1983年 金沢市教育委員会報告Ⅱ 1986年
近岡遺跡	石川県立埋蔵文化センター報告 1986年
吉崎・次場遺跡	羽咋市教育委員会 第3次調査概報 1975年 石川県立埋蔵文化センター所蔵、福島正実氏の好意による
戸水B遺跡	石川県立埋蔵文化センター所蔵、伊藤が実測
小川新遺跡	石川県立埋蔵文化センター所蔵、川畑 誠氏の好意による
北安江遺跡	石川県立埋蔵文化センター報告 1985年
畝田・無量寺遺跡	金沢市教育委員会報告 1983年
寺家遺跡	石川県立埋蔵文化センター報告 1989年

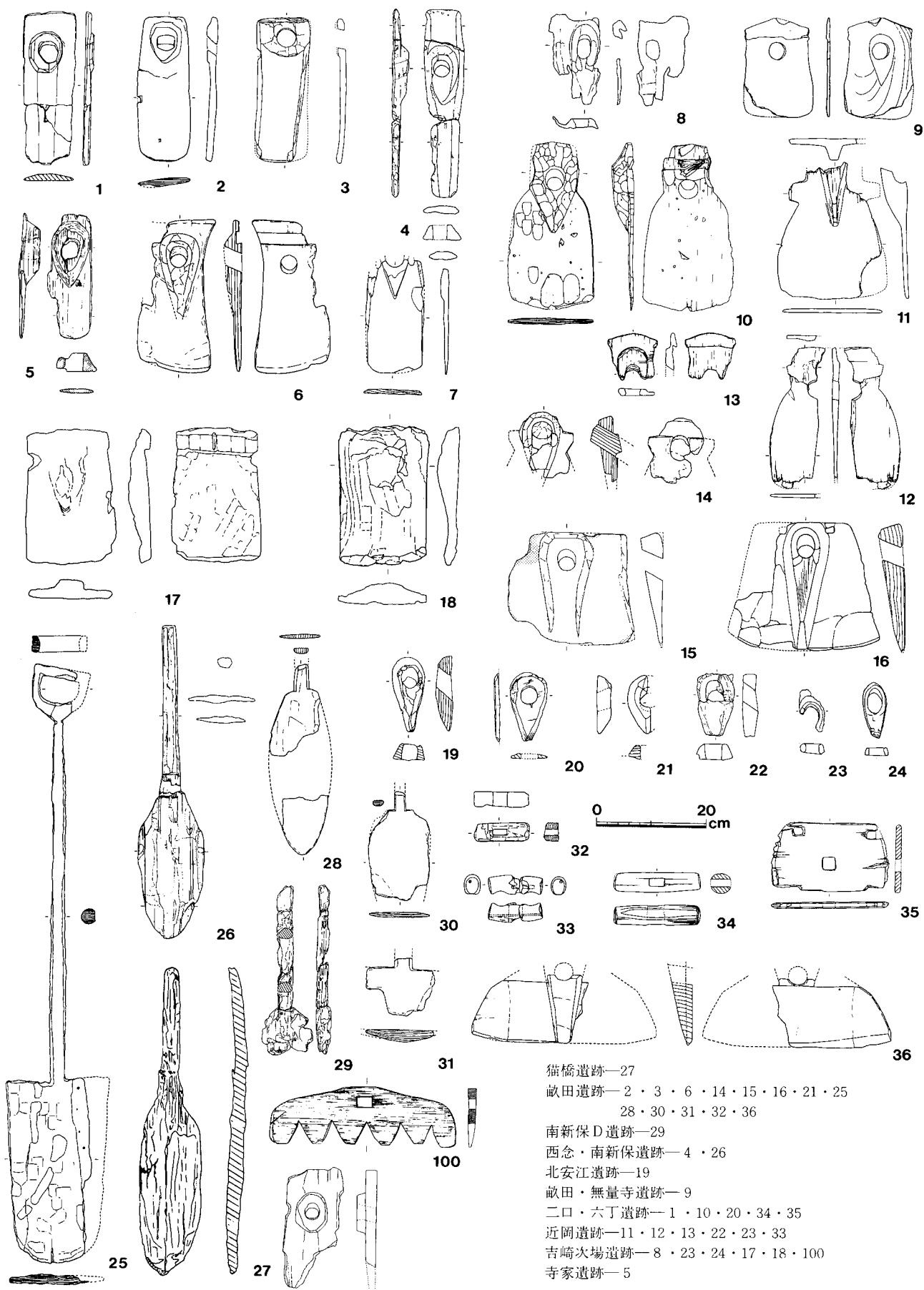


Fig.127 石川出土木製農具(1)

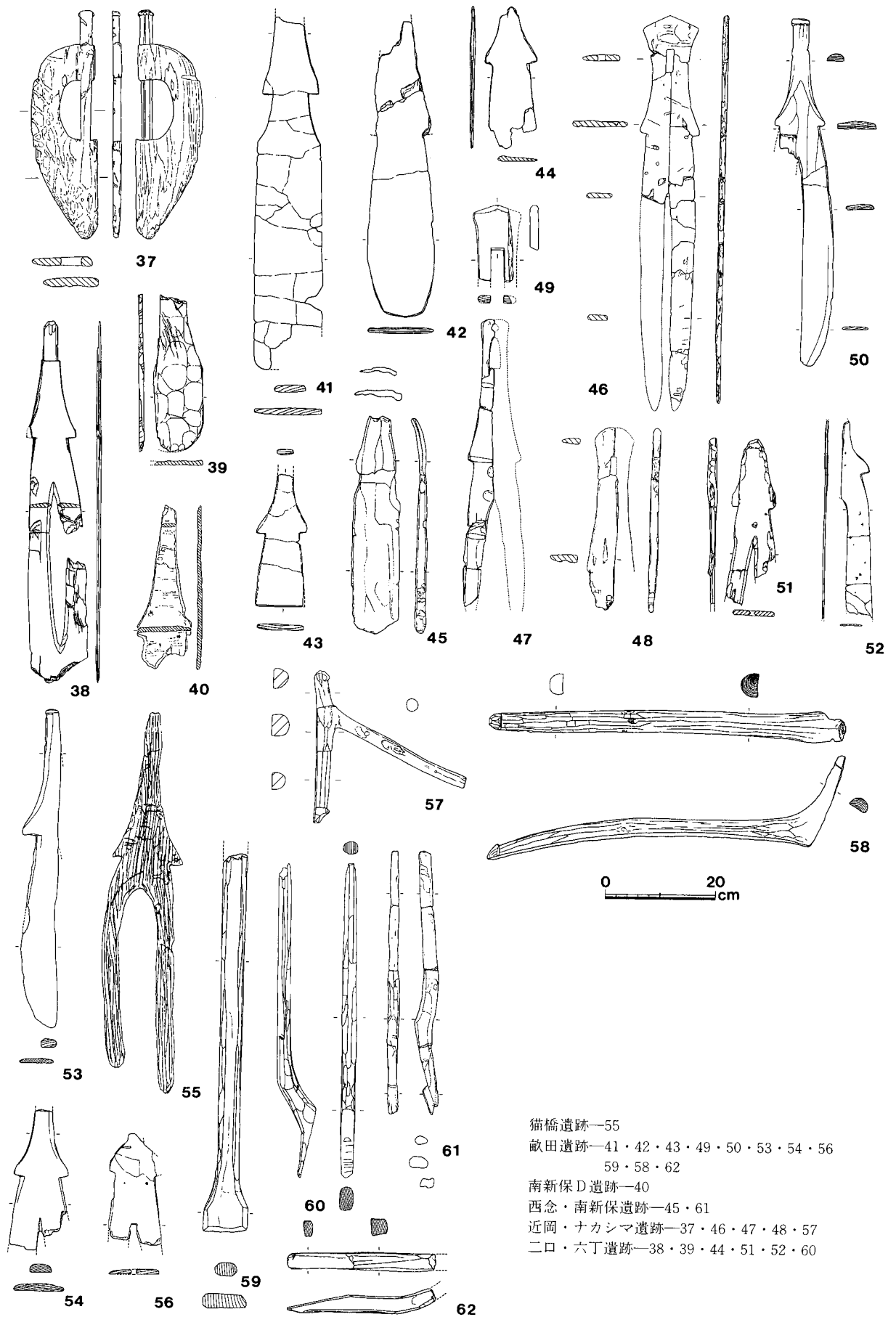
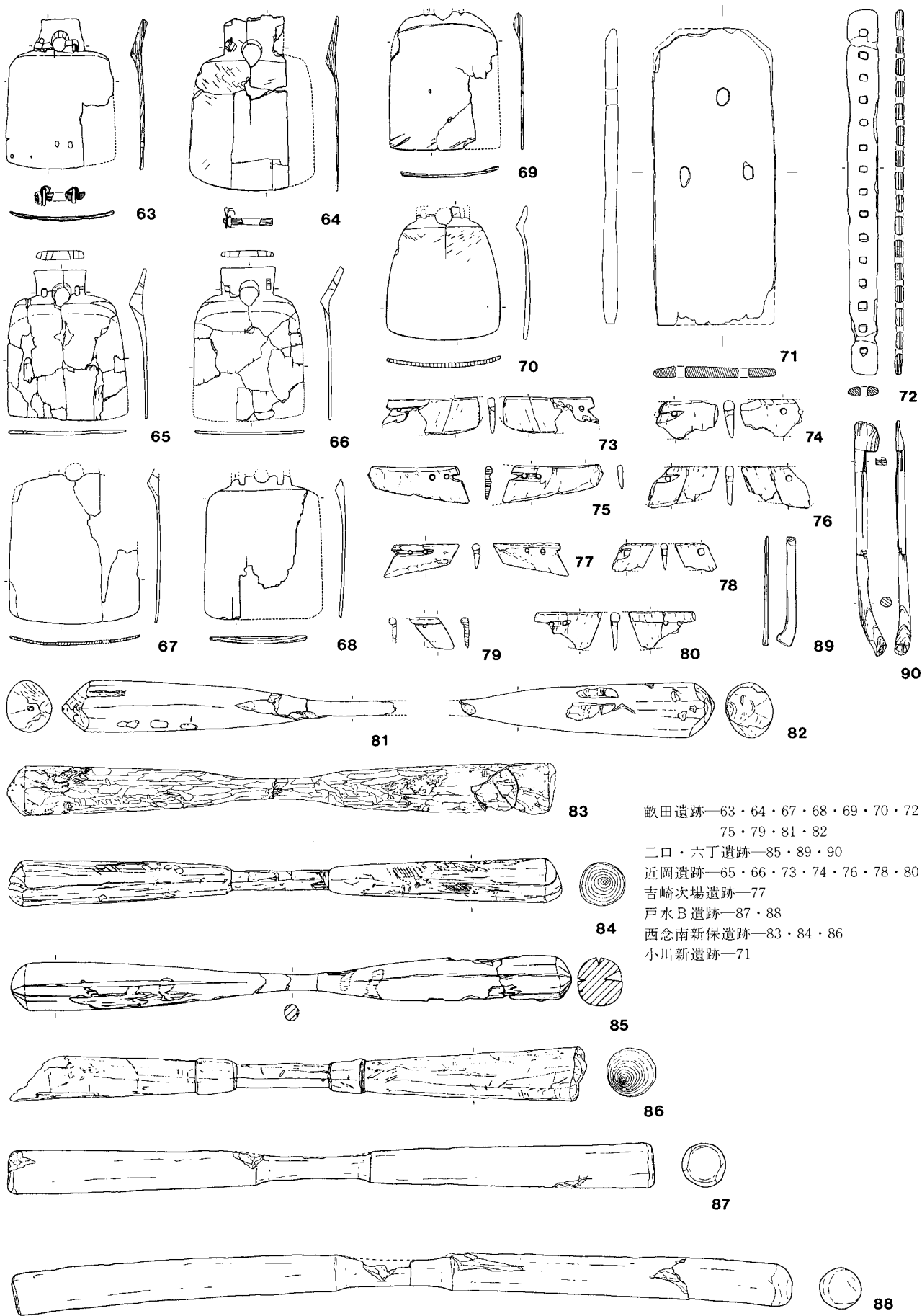


Fig.128 石川出土木製農具(2)



畝田遺跡—63・64・67・68・69・70・72
 75・79・81・82
 二口・六丁遺跡—85・89・90
 近岡遺跡—65・66・73・74・76・78・80
 吉崎次場遺跡—77
 戸水B遺跡—87・88
 西念南新保遺跡—83・84・86
 小川新遺跡—71

Fig.129 石川出土木製農具(3)

第8章 総括

第1節 畝田遺跡の古墳時代への夜明け

土器の編年的位置づけをめぐって

本調査で大量の土器を出土した。その7割近くが自然河道であるSD05からの出土であるので、土器群の精密な編年的位置づけをおこなうことは困難である。また、主要検出遺構が溝・河道・土坑というように遺構の様相が単純なので、これらの年代的な位置づけをおこなうのに、漆町編年¹⁾のような細かな編年を採用するよりも、その大きな変遷を把握できるようなモノサシが必要になる。そこで、最新の研究に背くようなことにならうが、大雑把な編年を用いたい。

一般的な型式名で、月影式—古府クルビ式—高畠式、あるいは土師器1様式—土師器2様式—土師器3様式という流れである。研究者によって、どの用語を用いるかこだわりもあろうが、筆者は、具体的な型式名があった方が記述を容易にするので、月影式、あるいは古府クルビ式、高畠式の語句を用いることにする。

編年観のアウトラインを記すと、月影式は、弥生後期の土器型式の流れをくみ、弥生時代末から畿内の庄内式古段階にはほぼ平行する。有段口縁に擬凹線を施す点が特徴的である。高畠式は布留式土器と平行し、加賀で碧玉製腕飾類の生産が始まる。古府クルビ式はその間を埋めるもので、東海系や近江系・畿内系など各地域の搬入品が顕著になる。

1980年代は、北陸の古式土師器研究が盛んになった時期であり、細かい土器変化や器種組成の分析を通して、細かな編年案が提示されつつある²⁾。そのような編年にどのような評価を与えるか本稿の目的とするところではない。さらに、多くの研究者によって土器群の変化に対する捉え方の差が存在するが、ここでそれを論議することを主眼としていない。

住居・倉・土坑

本調査出土遺構を特徴づけるものに、大小50以上の土坑がある。その分布は、第3次調査区ほぼ中央、SD301中央西側付近に集中するようで、土坑や柱穴、ピットなどが複雑に折り重なるように存在する。土坑埋土中から出土する遺物は、故意に入れられたものや埋没過程で混入した可能性の高いものなどである。そして、主体をなす土器は、古府クルビ～高畠期に属し、それ以前に遡る土器は少ないようである。なお、古代以降の土坑は、SK301・318・341・343・356・357・359で、本稿の考察対象外である。

さて、土坑は形状から大きく二つに区分できる。すなわち浅い皿状を呈するもの(a)と、しっかりした掘り込みをもち周囲の壁が明確に立ち上がるもの(b)である。浅い皿状を呈するaの平面プランは不定形なものが多く、坑底にも凹凸が見られる。また、小ピットとの重複が見られることが多い。これは、人為的な掘り込みというよりも自然の落ち込みと考えられ、深くて平面プランのしっかりしたbの形状の土坑と対照的である。

aの形状の土坑にはあまり認められないが、多くの土坑bの埋土中に炭や炭粒が混入している場合が多く見られる。SK334では、厚さ10cmほどの炭層が坑中位に見られる他、SK336で坑底に炭層が存在する。しかし、多くは炭化物が層をなさずに炭粒として土坑の埋土中に含まれている。SK345は井戸の可能性が高く、その下層は自然堆積で、中層に土器の一群が炭化物粒とともに出土している。ま

た、SK310や311、355では、土器が多く混入している層に、より多くの炭化物が入る傾向にある。つまり、土坑への土器廃棄と炭化物の堆積・混入が同じ過程と判断できる。ただし、この炭粒は、火熱による有機物の炭化によるものなのか、それとも自然に炭化したものかわからない。そして、調査区域内での火災の痕跡を見出すことができなかった。

bの形状を呈する土坑は、この土器廃棄を主たる目的とした穴であろう。それが目的に作られたものか、それとも粘土採掘坑等の再利用かにはわかに判断できないが、土坑底より若干浮いた状態で、廃棄された土器が出土していることから、後者の可能性を考える方がよいかもしれない。さらに、このような土器廃棄は、土坑ばかりではなく河道（SD05）上層にも及び、SD305の埋没時期ともほぼ一致する。つまり、本調査区における土器等の物資廃棄の行動が、土坑や溝などの遺跡の凹地を利用する形で、調査区全面にわたっておこなわれていると理解できる。

弥生時代末頃の掘立柱建物は4棟確認した。SB306・308は布掘りを共有し、東の桁がSD05によって流されている。SD05最下層・下層は、堆積状況から激しい水の流れが予想され、その時、桁が流されたものかもしれない。布掘りを持つことも考えあわせ、本調査区で最も古い遺構の一つで、月影期頃であろうか。SB304は、この掘立柱建物の建て替えと考えている。古府クルビ期の包含層を除去して柱穴を確認できたことから、先に見た土坑群より古いことを傍証する。SB305はSD301と切り合っているものの、現地で切り合い関係を確認できなかったことや、出土遺物の面からも新古関係を判断しがたい。しかし、SD301がSD06（SD06はSD05中層に対応する）に接続すると仮定すると、SB305とSB304とは同時期の可能性が高く、月影期頃の建物を推定できる。

一般的に、これらの掘立柱建物は、高床倉庫と住居の可能性がある。月影期という時代を考えると、本調査で検出した掘立柱建物は、高床倉庫の可能性の方が大きいと考える。そして、本地域の住居跡として「周溝を有する平地式住居」の検出が相次いでいる。この住居は、弥生時代中期に出現し、古墳時代前期に継続する³⁾。

そのような観点で遺構群を見ると、SD302、308、309から土坑が集中する地区にわたって、溝状に連続する落ち込みとなり、ほぼ円形に囲まれる空間ができる。つまり、「周溝を有する平地式住居」の周溝の可能性が高い。実は、調査時および報告書本文編作成時には気づかなかったが、同僚の浜崎悟司氏に指摘されて改めて検討したわけである。時期的には掘立柱建物と同時期の可能性が高く、平地式住居・倉のセットと認識している。また、平地式住居西2mに井戸状遺構（SK345）がみられ、一連の住生活に係る遺構である。そして、SD305が、住居の区画溝になる可能性も併せて考えておきたい。

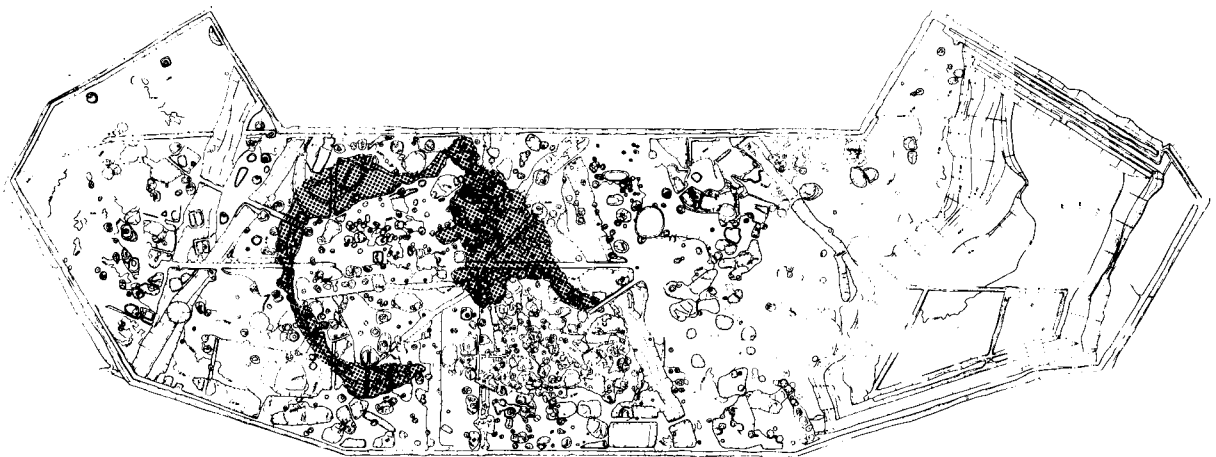


Fig.130 平地式住居の同溝相当部分（ドットで示す）

以上を整理すると、月影段階で居住域になっていたが、古府クルビの段階に至って不用品の廃棄場所になる。こわれた土器や不要な有機物などが捨てられ、炭粒あるいは有機物層としての炭化物層になる場合もある。この時、平地式住居の周溝の凹みや自然の小凹地に捨てられた他、形状bの土坑にも捨てられている。この場合、土坑底より若干浮いた状態で土器が出土しているので、土器廃棄と形状bの土坑の掘削が同時におこなわれたのではなく、ある一定時間の経過を考える方が妥当で粘土採掘等人間行動が考えられる。そして高阜式の段階になって廃棄行為が終息に向かう。それ以後、畝田遺跡の本調査区における直接的な人間活動の痕跡はみられず、集落本体を他所に移したと考えられる。

特徴的な遺物群

畝田遺跡から、今まで北陸でほとんど出土しなかった器物が出土している。それは、弧文板やト骨であり、玉杖形木製品と言うべきか櫛（たたり）と言うべきか、そのような用途不明の漆塗木製品がある。また、研磨されたヒスイ製品や碧石製腕飾類未製品は、玉生産地滞で稀に見る遺物である。このような遺物群はどのような性格を持っているのか、そして畝田遺跡で出土する意味はどこにあるのであろうか、考えてみたい。

弧文板は、宇佐晋一・斎藤和夫両先生に実見して頂き、多くの懇切なる御教示を受けた。また、滋賀県入江内湖遺跡発掘調査報告書考察中でも、両氏によって本資料が紹介されている。⁴⁾ 弧文板の表裏は確実に存在し、文様の表現方法の違いによって区別されている。原単位甲・乙図形が表現され、図形間の空間部分を纏向遺跡出土例のように透かす方法をとることをせず、楯築墳丘墓弧帯石のように山形に彫り込むことによって表現している。

畝田遺跡の弧文板表面には、鳥の羽を差込むことができるような孔があげられているが、漆を塗るとか彩色を施すなどの装飾はない。具体的な器物は不明だが、立体的に作られ1.8cmも厚みがあるので、かなりの大きさを想定できる。そして、宗教的色合いの濃い器物である。

吉備地方の弥生後期の墳丘墓に樹立された「特殊器台」に弧文（弧帯文）を施すのが特徴的である。弥生時代終末には吉備地方に限らず、おそらく古墳祭祀に見られるような首長権継承の場としての墳墓祭祀が成立していたと考えられ、このような場に弧文（弧帯文）に意味付けをおこないつつ、彫り込んだ器物の使用に意義を見出している。そして、弧文を彫り込んでいる器物は、土器が多数を占めるようである。壺形土器や高杯形土器など、日常生活から離れたところで使用されたと考えられる器物に見られるようである。このような観点で弧文を彫り込んだ土器を同義的に解釈すれば、「特殊器台」と同じように首長権に関わる祭祀用器物であろうか。

また、奈良県纏向遺跡などで、弧文を彫り込んでいる木製器物が出土している。纏向石塚古墳周濠では円盤が、纏向遺跡東田大塚南方溝地区ではさしばのようなものが出土している。また、米原町入江内湖遺跡では、木製槽に彫り込まれている。このように、祭祀に使用されたものであるとわかるが、「特殊器台」のような墳墓祭祀（首長権に関わる祭祀）とは違い、その内容を特定することはできない。少なくとも、畝田遺跡の弧文板は、纏向遺跡などと同じ祭祀理念（弧文に何らかの意味を見出す）を共有していたことを示し、同じ祭祀をおこなっていた可能性もあろう。

ト骨もまた宗教的色合いの濃い遺物である。神崎勇一氏によると、24遺跡で出土しているとの事である。⁵⁾ 現状でのト骨の分布は、静岡県から三浦半島、畿内に集中するようである。また、弥生時代から古墳時代さらに現代までもト骨祭儀がおこなわれていることも神崎氏によって紹介されている。⁵⁾ 『魏志倭人伝』に「骨を灼きてトし、以って吉凶を占い」と記述されているのは、ト骨を示すものと理解できる。つまり、遺物としてあまり出土することのない、そして分布に偏りがあるように見えるト骨だが、

西日本を中心とする弥生時代の宗教的行為の具体的な遺物として一般化できる可能性が高い。それが畝田遺跡から出土しているということは、少なくとも北陸の古墳時代初頭には、このような習俗が定着していたと考えられる。

さて、従前「玉杖形木製品」と称する遺物を紹介した。⁶⁾類似遺物として、鳥取県塞ノ谷遺跡・千葉県菅生遺跡から出土しており、塞ノ谷遺跡では玉杖形木器、⁷⁾菅生遺跡では弓矢形木製品（本文中で玉杖の木製品化したものの可能性も指摘）と報告されている。⁸⁾

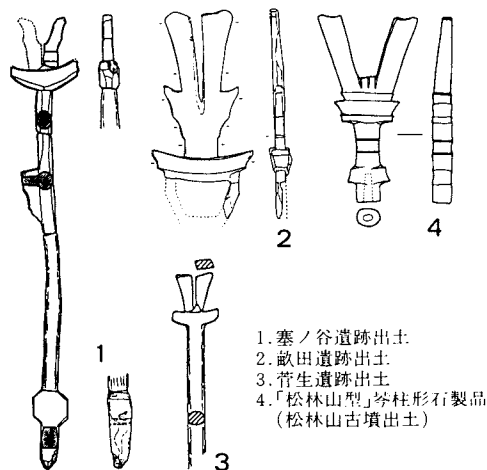
畝田例は古墳時代前期初頭に属するが、他の2例は5世紀後半から末頃の時期が与えられており、本例と時間的な隔りがある。しかも、亀井照人氏によると、塞ノ谷遺跡は祭祀遺跡の可能性が高いとの事である。⁷⁾以上より、頭部の形状が、畝田例と他2例と類似しているにもかかわらず、直接的な系譜関係があるのか慎重にならざるをえない。つまり、玉杖が古墳時代初頭で消失したにもかかわらず、木製遺物として中期から後期にかけて遺存するとは考えがたい。また、「古事記」・「日本書紀」にも権威の象徴としての儀杖の記述がないことからもまた、古墳時代中・後期以降、その機能を果たす器物がなくなっていたと判断したい。

古墳時代初頭に属する畝田例との類似遺物は、管見に及ぶかぎり寡聞である。本例の遺物の性格を知る手がかりがない上に、遺物の名称すら決しがたい状況である。頭部の形状に着目すれば松林山型の琴柱形石製品に類似する。亀井正道氏によると、松林山型の琴柱形石製品の頭部（亀井氏は角状突起と呼称）の先端にかい抉りの入っているものがあると述べている。このような特徴は、畝田例にも認められるところである。ただし、松林山型の突起は「Y」字ではなくて間隔をもっているものが多数を占めるという違いがある。また亀井氏は、川柳型・松林山型が玉杖に係るものであり、特に松林山型の「原型」を玉杖などの杖頭などに求め、石へ材質変化して形式化・小型化したものとのべている。つまり、原形としての杖との関連を想定している。

畝田例は、舟形状の台部に「く」の字にまがる脚部をもち、上には「Y」字の頭部が伸びる。脚部から下がどのような形状で展開するか不明であるが、現状では松林山型の琴柱形石製品が最も類似しており、その原形を考えると「(玉)杖形木製品」と称するのがよりふさわしいと判断したい。

古墳時代前期の石製品は、原形を石に写したものが多い。亀井氏は松林山型の祖形の材質を鹿角に求めている。木では「ある程度の大きさのものでなければ宗教的あるいは呪術的な荘重さや、装飾的意図とは程遠く、一見浅薄の感をまぬがれない」と述べている。しかしながら、漆を塗り繊細な細工で作られている畝田例を、実用品としての(玉)杖に想定するには無理があろうか。さらに、カシ材から作られていることを考えると、木工技術の粋を集めて作られており、それを作らしめる象徴的器物ではなからうかと、考えたい。

畝田遺跡には、権威あるいは霊力の象徴としての杖を持ち、卜骨をおこなうことのできるシャーマンが居住し、しかも畿内中枢部の祭祀を共有する。このような人(々)が居住する集落は、ある一定エリアにおける中核的存在として、古墳時代突入に主体的に関わっていたと考えられる。



1. 塞ノ谷遺跡出土
2. 畝田遺跡出土
3. 菅生遺跡出土
4. 「松林山型」琴柱形石製品
(松林山古墳出土)

Fig. 131 玉杖形木製品と琴柱形石製品

石製品生産と古墳

現在、加賀平野で碧玉製腕飾類の未製品を出土する遺跡の数は、9遺跡を数える。片山津遺跡群が最も有名で最も大規模な遺跡群であり、多くの論考が加えられている。片山津遺跡群の歴史性は吉岡康暢氏によって、家内労働に依存した専門的工人集団そして「部」の初現的形態、と理解され¹²⁾現在に至っているようである。その生産が、畿内政権に隷属するのか、中間に首長を介する貢納なのか、それとも違う形態なのか意見の別れるところであろう。しかし、片山津遺跡群が玉生産に係る専門集団の集落群であるという理解は不動のものである。

問題点は、加賀平野部に点々と出土している碧玉製石製品の未製品の評価である。松任市竹松北遺跡からは、多数の未製品が出土していることや、住居址の特殊ピットの存在から碧玉製石製品生産遺跡と判断できる。¹³⁾松任市旭小学校遺跡から鍬形石が出土し、上部に途中穿孔が見られる。報告者は、渡辺貞幸分類のIV類の鍬形石で他所から持ち込まれたものと考えている。¹⁴⁾金沢市黒田町や野々市町御経塚遺跡から削り抜き円盤が出土している他、高島遺跡から石削が出土している。¹⁵⁾また、漆町遺跡からも削り抜き円盤が出土している。¹⁶⁾これら全ての遺跡で碧玉製石製品生産がおこなわれたと考えられないが、少なくとも、未製品を出土する遺跡については、その生産に主体的に関与していたと考える。

竹松北遺跡は高島期に属し、片山津遺跡群よりも後出する。畝田遺跡の未製品の時期は明確にしがたいが、概ね古府クルビ〜高島期に属する。ここで注意したいのは、畝田遺跡例の石材産地が、鑑定の結果、浅野川中流域に求められることである（第5章参照）。かなり砂性の強い碧玉で、塚崎遺跡の石材にも共通する。竹松北遺跡の石材も、現地調査見学時の印象では、かなり砂っぽい記憶がある。

つまり、加賀平野の北と南で碧玉製石製品生産がおこなわれ、それぞれの石材産地も異なるようである。北を加賀グループ、南を江沼グループ（福井県坂井郡河和田遺跡も含む）と仮称する。加賀グループの方の生産が若干遅れると予想されるが、畝田遺跡例が古府クルビ期に属すると仮定すると、さらに遡る可能性も否定できず、江沼グループと併立するか、あるいは先行して生産が開始されるかもしれない。

河村好光氏は、¹⁷⁾最も初期の段階の碧玉製腕飾類生産が北陸の在地で起こったわけではなく、河村氏の言う「鍬形石中型式」になって始まったと述べている。それは、氏の言う「鍬形石古型式」が、北陸には少ない良質の石材を用いていることによる。さらに、最初期の生産形態が、北陸・出雲の工人が畿内政権の下に出仕して製作に従事し、帰還して技術を移植するという。そして工人の出仕と製品の貢納の代償に玉の製作流通を確保したとも述べている。¹⁸⁾

碧玉製腕飾類は、管玉・勾玉製作技術を前提としつつも、円盤をくり抜く技術やロクロ技術、繊細な条線刻み、匙面取りの技術など、玉製作技術に直接繋がらない要素が多数認められる。特に円盤をくり抜く工具が、管状工具が想定されたり、¹⁹⁾ヤリガンナ状の工具が想定されている。いずれにしても、製作専用の特殊な工具であり、その供給も集落単位でできるようなものではなく、より大きな組織体を想定しなければならない。

このように考えると、碧玉製石製品生産集落はかなり専門性が高く、管玉のような片手間の生産形態を想定し難たい。そして、工人が畿内から北陸に帰還して技術を在地に移植しても、かなり製作技術が管理された状態と推測されるので、在地における自発的技術の拡散は考えられない。つまり、二つの生産地域は、ともに畿内政権の碧玉製石製品生産に直接関与していたと考える。その関係の持ち方の違いが古墳の様相の違いになって現れている。

江沼グループの古墳は、かなり初期の段階から出現する。纏向型前方後円墳と言われている分校カン山1号墳である。纏向型前方後円墳は寺沢薫氏が設定し、²⁰⁾定形化以前の前方後円墳を弥生墳墓から前方後円墳への発展過程を説明し、初期大和政権の中核の古墳時代へ導入した役割を論証した。分校カン山

1号墳築造時期は、片山津遺跡群で石製品生産が始まる前夜にあたる。弥生社会を脱却し新しい秩序を模索している段階の古墳が当地域に出現していることは、碧玉製石製品生産の開始にあたって畿内中部との繋がりが非常に密であったと思われ、石製宝器創出にあたって象徴的古墳である。

また、江沼グループで分校カン山1号墳が石・玉生産の象徴的存在ならば、加賀グループでは、纏向遺跡と同じ文様原理を持つ弧文板や玉杖形木製品にその象徴を求めることができる。両者ともに畿内中部の纏向的要素を持ちつつも、一方は墳墓、もう一方は器物という違いをどのように意味付けできるか今後の課題として残しておきたい。

江沼グループの次の段階は、全長60m以上の吸坂A3号墳（前方後方）・D13号墳（前方後円）が築造されている。直接碧玉製石製品生産に関与するものであろう。あるいは、吸坂丸山10号墳が素環頭太刀を持つなど、古墳時代前期のある段階から小古墳の築造が見られる。これら前期に築造された小古墳は、前方後円墳の被葬者と共に生産組織の一翼を担った存在である。玉生産終息後も小古墳のみならず大型古墳の築造も継続している。

加賀グループの周囲には、削平された古墳が存在する。旭遺跡群、戸水C遺跡や御経塚シンデン遺跡、西念南新保遺跡、藤江C遺跡など30m以下の前方後円墳や方墳があるが、群形成は古府クルビ期のものが多くを占め、碧玉製石製品生産時である高阜期の古墳は少ないようである。これから検出される可能性を持っているものの、それに期待するのはどうであろうか。加賀グループで前方後円墳が出現してくるのは、全長50mを測る長坂二子塚古墳の中期初頭まで待たねばならない。この時期は、玉・石生産を終息した後なので、それを象徴するような古墳である。

加賀グループは法仏、月影頃から墳墓形成が始まり、高阜に属するものが少ないというように、弥生時代終末の造墓活動の延長で古墳初頭の墳墓が作られている。その時、特定被葬者の墳墓が成立しつつも、造墓集団内の関係は保持されたままであり、大型古墳築造への飛躍は見られない。換言すれば、古墳時代に突入しても弥生時代的な集団関係のままで特定首長成立を認め難い。一方、江沼グループの月影期の墳墓は、小菅波4号墓のみ実態が明らかにされているので、加賀グループほど明確さはないが、特定被葬者の墳墓は成立しているようである。そして、分校カン山1号墳へとさらに飛躍して古墳社会に参入し、それ以後より卓越した存在として地域首長としての道を歩む。

このような古墳築造の違いは、地域集団構造や集落構造の違いを反映したものであり、それに対する畿内政権のアプローチの仕方の違いを予想させる。各在地的な玉・石生産の構図も違うであろう。そして、古墳前期の段階で、旧郡域を越えるような統治を想定できる古墳が検出されていないので、加賀・江沼の二つの生産組織体と理解したい。

福井平野は南北40km強、東西10km強を測り、そこを支配する首長墓は六呂瀬山1号墳（140m）や手繰ヶ城山古墳（128m）など100mを越す規模を持つ。加賀平野（加賀グループ周辺まで）は南北50km以上、東西10kmを測り福井平野よりも大きいので、100mをゆうに超すような前方後円墳でなければ平野部全体を統治しうる首長墳と見なしえない。110mを測る秋常茶臼



Fig.132 碧玉製腕飾類未成品出土地分布図

- A. 畷田遺跡 B. 分校カン山1号墳 C. 塚崎遺跡
- 1. 高阜遺跡 2. 黒田遺跡 3. 御経塚遺跡
- 4. 旭小学校遺跡 5. 竹松北遺跡 6. 漆町遺跡群
- 7. 片山津玉遺跡群 8. 富塚遺跡
- (福井県河和田遺跡から出土している)

山古墳²²⁾にその可能性もあろうが、築造時期が未確定なので将来の検討課題として残しておきたい。

ともかく、片山津遺跡群の石生産に関わる遺物量と種類の豊富さには、群を抜いたものがあり、もう一度再評価する必要性があろう。

さて、塚崎遺跡3号住居址から径19mm長さ90mm以上の長い管玉²³⁾が出土している。この大型管玉は首飾りとして実用品ではなく、住居址内の祭祀遺構から出土していることから考えると、玉造りに関係する宗教的器物と推測できる。大型管玉は、玉杖軸部1個体よりやや長い程度なので、それを連想してしまう。塚崎遺跡例は月影期に属するために、玉杖軸部の可能性は少ないが、同じ形状の管玉を作りえる技術をもっていたことになる。

また、畝田遺跡からヒスイ研磨品が出土している。弥生時代のヒスイ製品の生産は、羽咋市吉崎次場遺跡で確認されている。擦切り痕を残し弥生中期頃と考えられる（本章付記参照）。近隣の寺中B遺跡からも出土しており、弥生時代中期の属するようである²⁴⁾。また、荒木繁行・吉岡康暢氏の報告中で、畝田遺跡からも硬玉（ヒスイ）原石が採集されており、弥生中期に属するのであろうか。現状では、弥生中期に口能登から北加賀にかけてヒスイ製品の生産が確認されており、本例もそれに属する可能性もある。しかし、出土位置であるS D 05上層は高島期に属し、弥生中期の土器の出土は皆無であることから、石生産と共にヒスイ製品も生産している蓋然性を支持したい。そのような観点で、出土したヒスイ研磨品を見ると、弥生時代のヒスイ加工品と異なる点は、かなり大型品ということである。つまり、その点からも、非弥生時代的な遺物「ヒスイ研磨品」であることがわかる。

ヒスイ製玉生産として、まづ糸魚川周辺があげられるが、弥生時代のヒスイ製品生産遺跡は未検出である。弥生時代終末頃に再び再開し、中期には浜玉技法として有名な富山県朝日町浜玉遺跡が知られる。つまり、弥生時代から古墳時代前期にかけて多く出土するヒスイ製勾玉のいくつかは、口能登から北加賀で作られたものである。当地域のヒスイは糸魚川周辺より運ばれたものであり、当地域が北陸の中でかなり高い攻玉技術を持っていたことを示す。

このような玉生産の多様さが、畿内政権をして碧玉製品をつくらしめた背景をなしていると考える。

そして、畝田遺跡は、その生産に深くそして主体的に関わっていたと考えられ、北加賀における中心的集落のひとつである。碧玉製品を積極的に生産するという内容活動が「弧文板」や「玉杖形木製品」という遺物であらわれている。なお、この点に関しては、更に別稿で論及したい。

第2節 古代「畝田村」の世界

日本靈異記の「畝田村」

奈良時代の畝田遺跡周辺は、越前国加賀郡大野郷に属している。そして、「日本靈異記」中に「畝田の村」という地名が出てくる。下巻第16「女人、濫（ミダガワ）しく嫁ぎて、子を乳に飢ゑしむるが故に、現報を得る縁」と題して畝田の村に住んでいる人にまつわる話である。書き下し文を参照して頂きたい。愛欲に任せて我子たちに乳を与えなかった「横江臣成百女」が、その罪ゆえに死んでも罪を背負って苦しんでいた。寂林法師の夢の中に出て救いを求め、その結果、法師の介在によって、我が子「横江臣成人」の知るところとなる。そして「横江臣成人」が仏を作って経を写すという法事を行うことによって、無事成仏できた話である。

この説話は、宝亀元年（770）に寂林法師が夢の中で、「横江臣成百女」が自分の犯した罪から救われるように訴えたことが発端になっている。この年代は、まさに本調査で検出した古代の遺構群の時期にあうものである。「日本靈異記」に記された「畝田村」が畝田遺跡である蓋然性は大きいとも小さい

報を得る縁 第十六
 女人、濫シク嫁きて、子を乳に飢えしむるが故に、現

横江臣成人は、越前の國加賀の郡の人なり。天骨姪洗にして、濫しく嫁ぐことを宗とす。未だ丁なる齡を盡さずして死に、淹しく年を歴たり。紀伊の國名草の郡能應の里の人、寂林法師、國の家を離れて、他の國を經、法を修し道求めて、加賀の郡畝田の村に至り、年を逕て止住す。奈良の宮に大八嶋國御宇めたまひし白壁の天皇のみ世、寶龜元年庚戌の冬、十二月二十三日の夜、夢に見る。大和の國鵜飼の聖徳王の宮の前の路より、東を指して行く。其の路鏡の如く、廣さ一町許、直きこと墨繩の如く、邊に木草立てり。林、佇キテ看れば、草の中に太伏しく肥エたる女有り、裸衣にして、蹈りをり。兩つの乳脹レタルコト大きにして、臍戸の如く垂れ、乳より膿流る。長跪きて手を以て膝を押し、病める乳に臨みて言はく「痛き乳かな」といひて、呻吟び苦しび病む。林、問ふ「汝は何くの女ぞ」といふ。答ふ「我は、越前の國加賀の郡大野の郷畝田の村に有る横江臣成人が母なり。我、齡丁ナリシ時に、濫しく嫁ぎ、邪姪にして、幼稚き子を棄て、丈夫と俱に寐ぬ。多の日を逕て、子乳に飢う。唯子の中に、成人甚だ飢う。先に幼き子を乳に飢えしめし罪に由りての故に、今乳の脹るる病の報いを受く」といふ。問ふ「何にしてか、此の罪を脱れむ」といふ。答ふ「成人知らば、我が罪を免さむ」といふ。林、夢より驚き醒めて、獨心に怪しむ思ひ、彼の里を巡り訊ふ。是に人有り。答へて言はく「當に余是れなり」といふ。林、夢の狀を述ぶ。成人、聞きて言はく「我、稚き時、母を離れて知ら不。唯我が姉有りて、能く事の狀を知れり」といふ。姉に問ふ時に答ふらく「實に語るが如し。我等が母公、面姿殊妙しくして、男に愛欲せられ、濫しく嫁ぎ、乳を惜みて、子に乳を賜はら不き」といふ。爰に諸の子、悲しびて言はく「我、怨に思は不。何ぞ慈母の君、是の苦しみの罪を受くる」といひて、佛を造り經を寫し、母の罪を贖ふ。法事已に訖はりて後、夢に悟して曰はく「今は我が罪免れぬ」といひき。誠に知る、母の兩つの甘き乳、寔に思深しと雖も、惜みて哺育ま不は、返りて殊罪と成ることを。豈飲ま令め不らむや。

Fig.133 日本靈農記下巻第16より

とも言えないが、同じ時代の同じ地域の資料として興味深いものがある。また、横江臣成人が写経し仏を作ることができる、「知識」階層に属していることもわかる。つまり、全くの一般農耕民ではなく、文字を知っているというそれなりの階層の人間である。

事実確認

- 1) 出土した遺物は8世紀後半から9世紀前半に位置づけられるものが中心で、土器以外の遺物の出土は非常に少ない。
- 2) 土器は、杯など食膳具と甕類がほとんどを占め、椀や高杯、長頸壺・双耳瓶も見られる。緑釉などの施釉陶器の出土がないのは、時代的なものである。
- 3) 墨書土器は7点と非常に少ない。「午」が2点、「口」が3点、「平」が1点、「上」が1点である。本地域でよく出土する「依」と書かれたものの出土はない。遺跡の中心が8世紀代にあるために墨書土器が少ないのであろうか。
- 4) 皇朝銭の出土は、S B 302南西隅の柱穴わきの地鎮遺構から十枚程度出土した。しかし、残念ながら遺物が紛失したので、詳細は不明。
- 5) 大型掘立柱建物には礎板が多用されており、建築部材などからの転用である。

掘立柱建物と畝田遺跡

2間×6間の大型建物(S B 301・302)と2間×3間の建物(S B 303)を検出したことに注目したい。S B 301の床面積は約73㎡、S B 302は約68㎡、S B 303は約30㎡をはかり、S B 301・302と303とでは2倍以上の開きがある。S B 303の柱の掘り方は1m近くを測り床面積が小さいとはいえ、他のS B 307や309の柱穴と全く違い、S B 301・302に共通する要素である。そして、床や上屋構造はわからないが、大型建物に礎板が多用されていることと、S B 303にその痕跡が全く認められないことから、S B 301、302と303の建物構造が異なると予想される。さらに、S B 301~303とS B 307・309と建物の使用目的が違う可能性も予想される。

千木ヤシキダ遺跡の礎板は、報告書中で地形の低いところに位置する建物を中心に使われている点を指摘しつつ、上屋構造の違いも示唆している²⁷⁾。しかし畝田遺跡の場合、溝と重複するようであるSB303が、SB301・302より軟弱な地に建てられているにもかかわらず礎板をもっていないので、礎板の採用の可否は建物構造に起因するものと考えられる。つまり、建物の大きさの違いに伴う床構造の違いではないかと考えている。

SB301・302の柱の掘り方に須恵器杯蓋が完形で埋納されている。二つの建物の同じ位置、すなわち西の桁の北から4つ目の柱の掘り方である。両者の土器が同じ時期（8世紀後半）であることや、同じ位置に埋納されていることから、二つの建物の同時建築の可能性が高い。しかしながら、建物の主軸が約6°の違いが認められる。同時期の建物は主軸を同じくする傾向にあるが、数度のちがいは許容誤差と考えられようか。

地鎮に埋納される遺物は皇朝銭がよく使われる。本調査でもSB302南西隅の柱穴脇に埋められている。遺物が紛失してしまったので正確さを欠くが、直径14cmほどの小さな穴に十枚近くの皇朝銭が小箱に入れられて埋納されていた。つまり、銭貨の脇に木片が出土していたことから、容器と考えられる。建物隅の柱穴あるいはその周囲に埋納される例は多く認められ、同じ祭式にのっ



Fig.134 SB302南西隅柱穴脇
出土埋納銭出土状況

とっていることがわかる。そして、SB301・302が同時に建上されながら地鎮が1ヶ所のみであることは、その対象がSB302の1棟のみというよりも建物群全体になっていると判断できる。古代の建物の建て替えによる重複が認められないことから、祭祀の対象となるこの建物群とは、8世紀後半の建物群である。

また、8世紀後半から9世紀前半にかけての遺物が主体を占めることから、8世紀後半に建てられた建物群の存続時期（約50～60年程度と考えられる。）を示すものと理解できる。しかし、それ以後も遺物が少量ながら出土することから、次の段階以降から中世にかけて、建て替えせずに近隣に施設や家屋を移したと判断できる。

大型掘立柱建物と集落

古代の掘立柱建物の研究は、奈良・平安時代を一括して扱っていることが多いようである。北陸の場合、初期荘園が成立していることから、両時代を通した考察は有効であろう。

大型建物の目安として、床面積50㎡以上ということがいわれている。その中でも100㎡以上もある建物を含む建物群を検出している遺跡として、近隣では戸水C遺跡がある。本遺跡から出土する遺物群から、官衙に関連する遺跡と考えられ、寺家遺跡などのように、特殊な性格をもつ遺跡にも見られる。このように、「官」と関係深い遺跡に100㎡以上もある大型建物が見られる傾向にある（Ⅰ類）ことが、湯尻修平氏によって指摘されている²⁸⁾。さらに、50～99㎡程度の床面積の大型建物を含む遺跡の性格を、荘園に関連するもの（Ⅱ類）と指摘している。

畝田遺跡で検出した大型建物は、この規模にあたるが、どのような性格をもつものであろうか。畝田遺跡を中心に見た場合の古代集落の展開状況から考察したい。ただし、田島明人氏がおこなった建物群の分析から古代集落の性格把握作業とは違って、大まかな性格づけをおこなった集落の分布を主眼としている²⁹⁾。

古代北陸道の正確な道程はわからないが、「延喜式」に載っている駅の配置が、朝倉—潮津—安宅—

比楽－田上－深身－横山、という順序である。比楽駅は手取川河口に位置し、次の田上駅は卯辰山周辺と思われ、深身駅（現在の津幡町か）に続く。畝田遺跡周辺いわば大野郷は、比楽－田上間にあるものの、北陸道のルートにのるかどうか不明であり、この地域は官道から外れた地域の可能性がある。

河北潟の日本海への出口のところに戸水C遺跡がある。漆紙文書や石帯、希有な人面獣脚円面硯³⁰⁾などの遺物、整然と配置された掘立柱建物から、官衙的施設をもつ遺跡と認識されている他、港湾遺跡としても認識されている³¹⁾。小嶋芳孝氏は、さらに郡津や国府津の可能性を考え、渤海国使の安置供給地として「佐利翼津」を戸水C遺跡に比定している³²⁾。本遺跡のこのような評価は、これからの発掘調査の進展によって、ますます確固たるものになるであろう。

戸水C遺跡は9世紀になって顕著になる遺跡である。これは荘園の成立・展開と深く関連するものと考えられる。その物資を都に送るために、水運が非常に有効な手段であったと浅香年木氏によって指摘されている³³⁾。単純に考えれば、河北潟を媒体にし、それに流れ込む河川流域の物資の流れにのる位置に戸水C遺跡があるといえる。

また、藤江B遺跡から「石田庄」あるいは「石」等と墨書された土器が多数出土している³⁴⁾。土器の年代から9世紀頃には石田庄が成立していたことがわかり、藤江A・B遺跡がそれにあたる可能性が大きい。しかし文献資料に出てこない。大野郷には、ほかに得蔵庄、大野庄の荘園が知られている。それぞれ具体的な遺跡名と結びついてはいないものの、畝田無量寺遺跡や藤江A遺跡、近岡ナガシマ遺跡、畝田遺跡など大型建物を検出している遺跡に注目できる。

荘園の村落風景は、荘園絵図によってある程度予想することができるが、単純に整理すると、ある一定エリアの中で、荘園を管理・運営する「荘家」部分と荘田を耕作する農民が居住する集落に区分できる。考古学的に荘園遺跡と認識できるのは「荘家」部分になる。荘園の一般耕作民の村落を検出したとしても、国衙領の耕作民の村落と考古学的に区別しがたいものがあると予想され、「荘」として総合的に把握しがたい状況であろう。

大型建物が検出されていない古代集落遺跡として、藤江C遺跡・金石本町遺跡などがあげられる。金石本町遺跡の建物は2間×3間程度の小規模なもの。湯尻氏は、雑然と配置された小規模な掘立柱建物（面積30㎡前後）と竪穴住居（IV・V類）を一般集落と解釈している。しかし大野郷で古代の竪穴住居が検出されていないことや、掘立柱建物が整然と並んでいるかいないのか、かなり主観による部分があったり、調査面積の大きさに左右される側面がある。したがって大野郷における耕作民の村落を、大型建物が含まれない集落と予想したい。

畝田遺跡の大型建物は、荘園に関係する施設と考えられようが、具体的にどのようなものかを知る手がかりは少ない。あるいはまた、渤海使節の往来に関連する可能性もあろう。いずれにしても荘園と渤海使節とは、当時の加賀の社会を考える上に無視することのできない事項であり、遺構群や遺跡の性格を考える上に前提になることである。

註

- 1 田島明人他「漆町遺跡」I 石川県立埋蔵文化財センター 1986年
- 2 石川考古学研究会「シンポジウム『月影式』土器について」報告編 1986年で手際よくまとめられており、今日の研究水準を示すものである。
- 3 楠正勝「西念・南新保遺跡」II 金沢市教育委員会 1989年
- 4 宇佐晋一・斎藤和夫「入江内湖遺跡（行司町地区）出土の木製品の文様について」『入江内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告』米原町教育委員会 1988年
- 5 神崎勇一「卜骨」『弥生文化の研究8 祭りと墓の装い』雄山閣 1987年

- 6 伊藤雅文「金沢市畝田遺跡出土木製品」『拓影』26号 石川県立埋蔵文化財センター 1988年
- 7 小野山節「古墳時代の装身具と武器」『日本原始美術体系』講談社 1978年
また、本例の詳細を亀井照人氏からの御教示を得た。
- 8 大場磐雄・乙益重隆「上総菅生遺跡」木更津市教育委員会 1979年
- 9 佐野大和「古墳出土の杖」『大和文化研究』第3巻第6号 1955年
本論中に、杖の持つ靈力の記述を紹介している。
- 10 亀井正道「琴柱形石製品考」『東京国立博物館紀要』第8号 1972年
- 11 加賀市教育委員会「加賀片山津玉造遺跡の研究」 1963年
- 12 吉岡康暢「高志路の展開」『古代の日本』6 中部 角川書店 1970年
- 13 松任市教育委員会 前田清彦氏の御教示による
- 14 木田清「松任市旭小学校遺跡」松任市教育委員会 1990年
- 15 寺村光晴「古代玉造形成史の研究」吉川弘文館 1980年
- 16 河村好光「漆町遺跡出土碧玉製石製品未製品の検討」『漆町遺跡』II 石川県立埋蔵文化財センター 1988年
- 17 河村好光「碧玉製腕飾の成立」『北陸の考古学』II 石川考古学研究会 1989年
- 18 河村好光「玉生産の展開と流通」『岩波講座 日本考古学』3 生産と流通 岩波書店 1986年
- 19 亀井清「石釧の材質調査」『谷畑古墳』棒原町教育委員会 1974年
- 20 寺沢薫「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会 1988年
- 21 田島正和「吸坂丸山古墳群」加賀市教育委員会 1990年
- 22 金沢大学考古学研究会「金沢大学考古学研究会活動報告第4号－能美地域の古墳群と梯川流域」 1986年
- 23 吉岡康暢他「塚崎遺跡」『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』II 石川県教育委員会 1976年
- 24 宮本哲郎「金沢市寺中遺跡－第II・III・IV次調査報告書－」金沢市教育委員会 1977年
- 25 荒木繁行・吉岡康暢「金沢市畝田弥生遺跡調査予報」『石川考古学研究会会誌』第13号 1970年
- 26 『日本古典文学大系 日本靈異記』岩波書店 1967年
- 27 出越茂和・楠正勝「金沢市千木ヤシキダ遺跡」金沢市教育委員会 1897年
- 28 湯尻修平「加賀・能登における掘立柱建物の類型と性格」『東大寺領横江庄遺跡』石川考古学研究会 昭和58年
- 29 田島明人「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡－加賀能登の掘立柱建物群を中心とした覚書－」『北陸の考古学』石川考古学研究会 1983年
- 30 北野博司「戸水C遺跡の発掘調査」『拓影』35号 石川県立埋蔵文化財センター 1991年
- 31 戸潤幹夫他「金沢市戸水C遺跡」石川県立埋蔵文化財センター 1986年
- 32 小嶋芳孝「日本海を越えてきた渤海使節」『古代の日本』3 海を越えての交流 1986年
- 33 浅香年木「古代の「北陸道」と海運」『古代地域史の研究』法政大学出版局 1978年
- 34 石川県加能史料編纂委員会「石川県内出土墨書土器」『加能史料』奈良・平安I 1982年

付 記

1993・4年に当埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、羽咋市吉崎・次場遺跡V・W調査区からヒスイ製玉製品関係遺物が出土し、1988年に報告されている。畝田遺跡と同じヒスイ製玉製品関係遺物を出土していることから、ここで再び紹介したい。吉崎・次場遺跡例は弥生時代中期～後期の可能性が高く、畝田遺跡例よりも古い。なお、遺物は、伊藤が再実測をおこなった。図中の番号は報告書中の遺物番号である。

出土遺物は石核・剥片・施溝具で、打割状態から剥片Iと剥片IIに分けられ、剥片IIは製品製作のための形割最終段階の剥片と考えられる。打割は、擦り切りによって施された溝に間接打撃を加える方法、すなわち施溝分割法である。溝幅は碧玉よりも広く、5～6mmを測る。このような剥片別離の方法は、弥生時代中期の碧玉の技法と同じであるが、401や403など徹底的に擦り切り技法を駆使している点に、管玉製作技法との違いを見出すことができる。これは、碧玉よりもかなり硬質であることに起因していると考えられる。つまり、硬質であるがゆえに、形を作り出すための研磨作業量をできるだけ少な

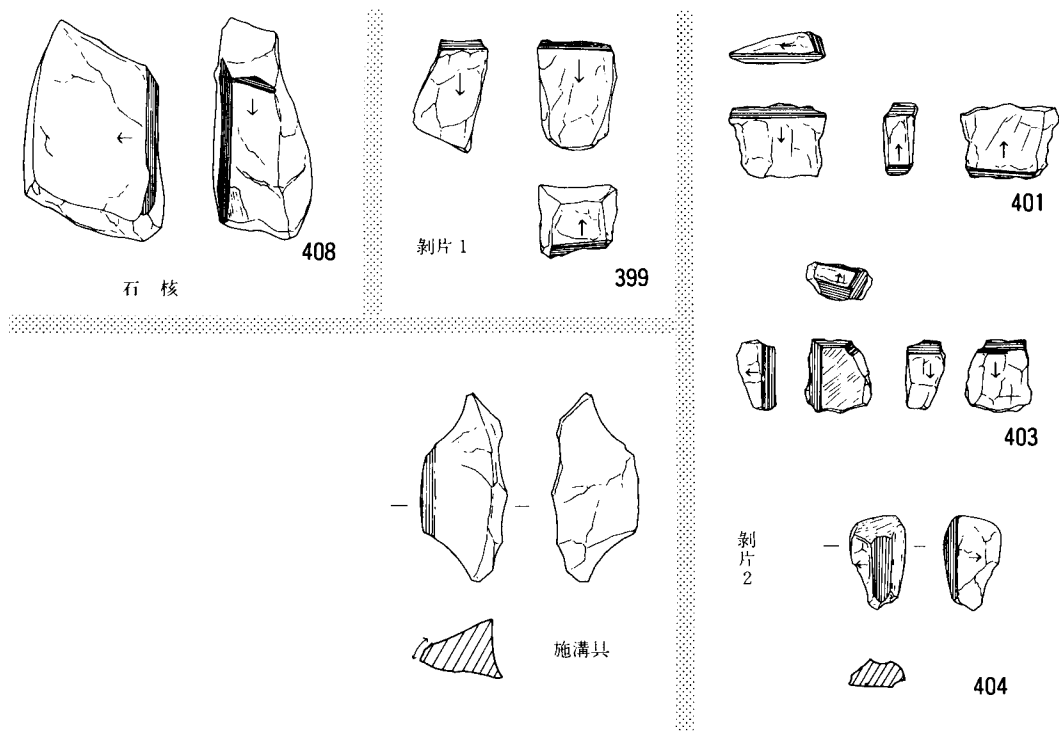


Fig.135 羽咋市吉崎次場遺跡出土ヒスイ玉類未成品と工程

くするという意図である。剥片Ⅱ以後の工程は、研磨によって形を整えて玉を（勾玉か）作っていくようである。施溝工具と推定される遺物が出土している。これもヒスイ製品で、一側縁に刃部状に研磨痕が認められ、手で握りやすくなっている。両刃ではなく片刃であるので、施工具であったものか、何らかの要因で2つに破損したその一方である、という2つの可能性がある。

以上のような工程が想定された。吉崎・次場遺跡例から作られるヒスイ製勾玉は、弥生時代によく見られる小さくて偏平に近い勾玉と思われる。畝田遺跡例は、剥片Ⅱより研磨がかなり進んだ工程であるものの、吉崎・次場遺跡例に比べてかなりの厚みが見られることから、大型の製品（勾玉か？）を作ろうと意図していたことがわかる。この点から、古墳時代的な勾玉であることがわかる。

ヒスイ製玉、製作技法の代表として、よくいわれる、浜玉技法にみられるような、「加熱処理」の痕跡を見出すことはできなかった。つまり、ヒスイ製品加工技術として、擦切打割、研磨の二つが多用されていたことがわかり、管玉製作技術と同じである。しかし、石材の硬度の違いによって、擦切の材質が管玉と違ったものになっている。研磨材も違うであろうか。このような遺物は小さいので、見過す可能性が高く、意識的にみるか、あるいは、大量に出土しなければ他の遺物群の中に埋没してしまう。実は、畝田遺跡例も遺物整理中に全く気付かず、報告書作成時に目にとまったのである。したがって、ヒスイ製品を出土した、吉崎・次場遺跡や畝田遺跡に特殊性を付与できるか、それとも碧玉製品と同等の普遍性を付与できるのか、現在のところ判断を下すことはできない。この点は、本章第一節の碧玉製腕飾類生産と古墳と深く関与する。先にも述べたように別稿で論を深めたい。

畝田遺跡 出土土器観察表

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
1	壺	1	SD-05 (緑灰砂)	口径12.2	外：口縁部ナナメハケ、 頸部タテハケ 内：口縁部ナデ、頸部 ヨコハケ	外：浅黄橙 内：浅黄橙	微砂粒を含む	外面煤付着	89033
2	壺	1	SD-05 (緑灰砂)	口径19	外：ハケのち、所々ナ デ 内：口縁部～頸部ヨコ ハケ、他ナデ	外：浅黄橙 内：浅黄橙	1mm前後の砂粒を 多量に含む	櫛描波状文 櫛描直線文	89024
3	壺	1	SD-05 (緑灰粘砂、 緑灰砂)	口径6.3	外：ハケ 内：ハケ	外：にぶい黄橙 色 内：にぶい黄橙 色	0.5～1mmの砂粒 含む	端部櫛状具に よる刻み	89478
4	壺	1	SD-05 (緑灰砂)	口径21.6	外：端部ヨコナデ、他 タテハケ 内：ヨコハケ、ナデ	外：浅黄橙 内：灰白色	1～2mm位の礫を 含む	端部へら状具 による刻み	89032
5	壺	1	SD-05 (緑灰砂)	口径12.2	外：ハケ 内：上半工具によるナ デ、下半ハケ	外：にぶい褐色 内：浅黄橙	1mm位の礫を少し 含む	端部へら状具 による刻み	89028
6	壺	1	SD-05 (緑灰砂)	口径10.8	外：ハケのちナデ 内：ナデ	外：淡黄色 内：淡黄色	微砂粒を含む	ハケ状具直線 文、刻み、綾 杉文	89025
7	甗	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径12	外：ハケ 内：上半ヨコハケ、下 半へらケズリ	外：灰白色 内：口、鈍い橙 色 胴、褐白色	0.5～1位の礫を 含む。海綿骨片も 少し含む	小波状口縁	89040
8	甗	1	SD-05 (緑灰砂)		外：ハケのちヨコナデ 内：ヨコナデ	外：灰白色 内：灰白色	赤色酸化粒を多く 含む	ハケ状具刻み、 内面綾杉文	89031
9	甗	1	SD-05 (緑灰砂)		外：端部付近ヨコナデ 他タテハケ 内：端部付近ヨコナデ 他ヨコハケ	外：淡黄色 内：淡黄色	微砂粒を多く含む 6mm位の礫を1個 含む	ハケ状具、刻 み、内面綾杉 文	89034
10	甗	1	SD-05 (緑灰砂)		外：端部付近ヨコナデ 他タテハケ 内：端部付近ヨコナデ 他ヨコハケ	外：鈍い黄橙 内：鈍い黄橙	1mm位の砂粒を少 し含む	へら状具刻み、 外面煤付着	89029
11	甗	1	SD-05 (緑灰砂)		外：端部付近ヨコナデ 他ハケ 内：端部付近ヨコナデ 他ハケ	外：灰白色 内：灰白色	微砂粒を多くと、 1mm位の礫を少し 含む	へら状具刻み、 外面煤付着	89027
12	甗	1	SD-05 (緑灰砂)		外：ヨコナデのちハケ 内：上方からナデ、ヨ コハケ、ナデ、ヨ コハケ	外：浅黄橙 内：浅黄橙	微砂粒を多量にと、 1mm位の砂粒を少 し含む	ハケ状具刻み、 外面煤付着	89030
13	甗	1	SD-05 (緑灰砂)	口径23	外：端部付近ヨコナデ 他ナナメハケ 内：端部付近ヨコナデ 他ヨコハケ	外：黄褐色 内：黄褐色	0.5～1mm位の砂 粒を少し含む	ハケ状具刻み、 外面煤付着	89026
14	甗	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径22.2	外：端部付近ヨコナデ 他タテハケ 内：わずかにハケ調整 を残す	外：鈍い褐色 内：鈍い褐色	1～2mmの礫を多 量に含む	小波状口縁、 外面煤付着	89041
15	壺	2	SD-208 拡張部		外：摩耗のため不明 内：摩耗のため不明	外：淡黄色 内：淡黄色	1mm前後の砂粒を 多量に含む	へら斜格子文	89023

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
16	壺	2	C検区 用水用 溝土客土	口径15.6	外：摩耗のため不明 内：摩耗のため不明	外：灰黄 内：灰黄	0.5mm位の白い砂 (?)を含む	ハケ状具による斜行文3帯	89022
17	甕	2	SD-05 下層(青灰 砂~ベルト)	口径30.4	外：ヨコナデ 内：板状具によるナデ	外：鈍い黄褐 内：鈍い黄褐	0.5~1mm位の砂 粒を多量に含む (黒色のものを多く含む)		89042
18	壺	3	SD-305 南下層(12)		外：ハケわずかにのこ る 内：摩耗のため不明	外：浅黄橙 内：黄橙	1~2mmの礫を含 む	ヘラ状具による斜格子文	89017
19	壺	3	SD-05 (赤褐色強 粘)		外：摩耗のため不明 内：摩耗のため不明	外：橙色 内：橙色	1mm位の砂粒と焼 土塊(?)を含む	ヘラ状具による綾杉文	89011
20	壺	3	SD-05 下層(青灰 色砂)		外：頸部ナデ, 胴部ハ ケ 内：ハケのちナデ	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	粘土が密なかんじ で1mm位の礫を少 し含む	凸帯に斜行文 海綿骨片を含 む	89007
21	壺	3	SD-05 下層(青灰 色砂)		外：ハケのちナデ 内：指頭圧痕, ナデ	外：浅黄橙 内：灰色	粘土が密なかんじ で1mm位の礫を少 し含む	櫛描直線文 斜行短線文 円弧文	89010
22	壺	3	SD-05 下層(青灰 色砂)	口径17	外：タテハケ 内：ヨコハケ	外：浅黄橙 内：浅黄橙	微砂粒を多く含む 海綿骨片を含む	貝殻(?)に よる綾杉文, 外面煤付着	89012
23	無頭壺	3	SD-05 下層(青灰 色砂)	口径6.8	外：ていねいなナデ 内：ていねいなナデ	外：灰白色 内：灰白色	0.5~1mm位の砂 粒を少し含む 海綿骨片を含む	凸状に縄文 粗いハケ 1対の孔	89005
24	甕	3	SD-05 15層		外：条痕 内：ナデ	外：灰オリーブ 内：明黄褐	2mm位の礫と海綿 骨片を含む	小波状口縁	89015
25	甕	3	SD-05 中層下		外：条痕, 底面網代圧 痕 内：ナデ	外：淡黄色 内：淡黄色	1mm位の砂粒(黒 色が多い)を多量 に含む 海綿骨片を含む		89009
26	甕	3	SD-05 下層	底径8.4	外：不明, 底面網代圧 痕 内：ナデ	外：灰白色 内：灰白色	1~2mm位の礫と 海綿骨片を多量に 含む		89008
27	甕	3	SD-05 13・14層	底径11	外：条痕, 底面木葉痕 (平行脈) 内：ナデ	外：淡黄色 内：淡黄色	2mm前後の礫, 砂 粒を多量に含む	外面煤タール 状に付着	89014
28	甕	3	SD-05 下層(青灰 色砂)	口径43.8	外：口縁部ヨコナデ 他ハケのちナデ 内：ナデ	外：灰白色 内：灰白色	2mm位の砂粒を少 し含む	外面煤付着	89004
29	甕	3	SD-05 下層(青灰 色砂)	口径24.8	外：口縁部ヨコナデ 他タテハケ 内：口縁部ヨコナデ 他ヨコハケ	外：灰オリーブ 内：灰オリーブ	1mm位の砂粒を少 し含む 海綿骨片を含む	ヘラ状具刻み 沈線文	89006
30	甕	3	SD-05 下層(青灰 色砂)	口径20.7	外：口縁部ヨコハケ他 ヨコ~ナナメハケ 内：口縁部ヨコナデ 他ヨコハケ	外：淡黄色 内：淡黄色	1mm位の砂粒を少 量含む	ヘラ斜行文 外面頸部煤付 着	89003

畝田遺跡 出土土器観察表

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
1	壺A2	1	SD-05 (緑灰粘砂 黒色粘)	口径21.6 頸径8.0 器高(5.6)	内:ナデ,ハケメ 外:ナデ,ハケメ	橙色	海綿骨片含む 1mm砂微	口縁は違う 粘土使用	89461
2	壺K2	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径13.7	内:ヘラミガキ 外:ナデ,ヘラミガキ	橙色	1mm以下の砂微		89462
3	壺B3	1	SD-05 (緑灰粘砂 暗灰砂)	口径9.7 頸径8.0 体径16.7 底径1.8 器高13.4	内:ヘラミガキ,ナデ 外:ヘラミガキ	浅黄色	1.5mm前後の砂粒 含む	1.44ℓ	89330
4	壺B2	1	SD-05 (緑灰粘)	口径11.2 頸径9.1 体径15.9 器高17.9	内:ナデ,ハケメ 外:ヘラミガキ,ハケ	にぶい黄褐色	微砂粒多く含む	内面有機物 赤彩,体部穿 孔 1.65ℓ	89446
5	壺B5	1	SD-05	口径8.5 頸径7.2 体径12.0 底径2.7 器高8.6	内:ヘラミガキ,ナデ 外:ヘラミガキ	黄橙色	緻密	赤彩 孔二対	
6	小型丸底壺 C2	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径9.4 頸径6.9 体径8.9 器高9.2	内:ナデ 外:ケズリ後ナデ	にぶい黄橙色	1mm前後の砂 シャモット		89458
7	小型丸底壺 (分類不可)	1	SD-05 (緑灰粘砂)	頸径6.1 器高(6.0)	内:ナデ,板ナデ 外:ケズリ後ナデと ヘラミガキ	灰黄色	2mm前後の砂多く 含む		89459
8	甕A1	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径16.5 頸径12.7 体径21.5 器高22.9	内:ナデ,ケズリ 指おさえ(体下) 外:ナデ,ハケメ	浅黄橙色	1mm以下の砂粒含 む	内面炭化物 4.85ℓ	89442
9	甕A2	1	SD-05 (緑灰粘, 緑灰粘砂)	口径16.5 頸径12.5 体径23.0 器高(16.3)	内:ナデ,ケズリ 外:ナデ,ハケメ	内:淡灰黄色 外:灰白色	0.5~2mmの砂多		88008
10	甕A1	1	SD-05 (黄褐粘)	口径17.9 頸径14.0 体径24.5 器高(18.4)	内:ナデ 外:ハケメ,ナデ	浅黄色	0.5~1mm大の砂		89490
11	甕 くの字1類	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径19.1 頸径14.6 体径22.1 器高(22.2)	内:ハケメ 外:ハケメ	にぶい橙色	1.5mm以下の砂粒 多い	5.29ℓ	89320
12	甕 くの字2類	1	SD-05 (緑灰粘)	口径17.0 頸径15.1 体径22.7 器高(23.2)	内:ケズリ,ナデ 外:ナデ	黒褐色	1mm前後の砂	内面炭化物 5.18ℓ	89452
13	甕 くの字3類	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径17.6 頸径13.8 体径22.0 器高(12.2)	内:ハケメ,ナデ 外:ハケメ後ナデ	にぶい橙色	1~2mm砂少		89456
14	甕 くの字3類	1	SD-05 (緑灰粘)	口径15.5 頸径13.4 器高(5.8)	内:ハケメ(板ナデ的) 外:ハケメ	内:淡赤褐色 外:淡灰褐色	0.5~1mmの砂含	内面有機物	88013
15	甕 くの字3類	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径16.2 頸径13.3 器高(3.5)	内:ケズリ 外:ナデ	淡灰褐色	1~2mmの石含む		88012

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
16	甕K3	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径18.7 頸径16.1 器高(11.8)	内:ハケメ, 指押え 外:ハケメ	灰白色	0.5~1mm大の小 石少量	肩に列点文 内面有機物	88014
17	甕K1	1	SD-05 (緑灰粘)	口径18.0 頸径14.4 体径22.0 器高17.4	内:ケズリ 外:ハケメ	灰褐色	1mm前後の砂多		89493
18	甕N3	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径14.9 頸径12.1 体径14.1 底径4.1 器高16.3	内:板ナデ, ケズリ後 ナデ 外:ハケメ	内:灰黄色 外:暗黄橙色	2mm以下砂粒多	肩に列点文 内面有機物 1.40ℓ	89443
19	甕L1	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径16.2 頸径13.0 器高(5.6)	内:ハケメ 外:ハケメ	暗橙色	3mm以下砂		89463
20	甕D3	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径19.0 頸径14.8 器高(6.1)	内:ヘラケズリ, ハケ メ, 指押え 外:ハケメ	内:灰白色 外:暗褐色	0.5~1mm砂粒		88017
21	高杯F2	1	SD-05 (緑灰粘)	口径16.4 底径12.0 器高9.1~ 11.2	内:ヘラミガキ 外:ケズリ(杯)	灰白色	1mm前後の砂多		89662
22	高杯L	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径11.9 器高(6.2)	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	灰白色	1mm砂, 赤色粒多		89467
23	器台C3	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径8.7 底径8.5 器高8.5	内:ヘラミガキ(受部) ハケメ(脚) 外:ハケメ後ナデ	浅黄橙色 断面灰色	0.5~1mmの砂	三方透し	89492
24	器台I	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径13.9 体径5.8 底径15.3 器高8.0	内:ヘラミガキ(受部) ハケメ, ナデ(脚) 外:ヘラミガキ	暗黄橙色	1mm以下の砂 焼土塊		89319
25	鉢E3	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径10.8 器高6.5	内:ケズリ 外:ケズリ	内:淡黄色 外:灰黄色	1mm前後の砂		89454
26	鉢E4	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径10.4 体径12.1 器高(8.7)	内:ケズリ 外:ヘラミガキ, ケズ リ(脚)	灰白色	0.5~1mmの砂		89456
27	鉢 (分類不可)	1	SD-05	底径11.7 器高(5.1)	内:ケズリ 外:ナデ	内:灰色 外:灰白色	1mm前後の砂多 赤色粒, 海綿		89469
28	蓋D2小	1	SD-05 (緑灰粘砂)	鈕径2.6 底径7.6 器高3.4	内:ナデ 外:ヘラミガキ	灰白色	1.5mm前後の砂多		89455
29	壺B8	1	SD-05 (暗灰粘)	口径18.1 頸径9.4 器高(5.5)	内:ナデ 外:ナデ	内:灰白色 外:灰黄白色	0.5mm大の砂多		88001
30	壺B7	1	SD-05 (暗灰粘)	口径12.1 頸径9.3 器高(4.8)	内:ヘラミガキ(口頸 部), ナデ 外:ヘラミガキ	内:黄灰色 外:淡赤灰色	0.5~1mm砂多		88002

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
31	甕K3	1	SD-05 (暗灰粘)	口径15.0 頸径13.8 器高(6.5)	内:ハケメ 外:ハケメ	内:淡褐色 外:淡暗灰褐色	緻密	内面炭化物	88016
32	壺H5	1	SD-05 (暗灰粘)	口径12.7 頸径10.9 器高(6.7)	内:ヘラミガキ(口縁) ナデ(体) 外:ヘラミガキ	淡灰褐色	0.5mmと3mm大の 小石少量		88003
33	壺F	1	SD-05 (暗灰粘)		内:ヘラミガキ(上半) ハケメ(下半) 外:ヘラミガキ	内:灰褐色 外:淡黄橙色	0.5mmの砂, 雲母	竹管刺突文	89470
34	壺R	1	SD-05 (暗灰粘)	口径8.6 頸径4.3 器高(10.5)	内:ヘラミガキ, ナデ 外:ヘラミガキ	暗赤褐色	1mm前後の砂	赤彩	89480
35	小型丸底壺 C2?	1	SD-05 (暗灰粘)	頸径5.8 器高(6.9)	内:ナデ, クモの巣状 圧痕 外:ナデ	暗黄橙	1mm前後の砂少 海綿骨片		89482
36	甕A6	1	SD-05 (暗灰粘)	口径15.4 頸径11.5 器高(5.6)	内:ケズリ, ハケメ (口縁) 外:ハケメ	内:黒灰色 外:淡灰褐色	0.5mm大小石やや 多		88010
37	甕A1	1	SD-05 (暗灰粘)	口径15.0 頸径11.1 体径19.0 器高(14.7)	内:指押え(下半), ケ ズリ(上半), ナデ 外:ハケメ	淡褐色	1mm以下の小石	頸部内面に絞り 痕 3.54ℓ	88007
38	甕 くの字1類	1	SD-05 (暗灰粘)	口径13.6 頸径11.1 体径16.0 底径3.1 器高15.9	内:ハケメ 外:ハケメ	暗黄橙色	1mm前後の砂多	1.63ℓ	89489
39	甕 くの字3類	1	SD-05 (暗灰粘)	口径14.6 頸径13.1 器高(5.2)	内:ハケメ 外:ハケメ	内:灰褐色 外:暗灰褐色	1mm大の石少量	内面有機物	88011
40	甕 くの字2類	1	SD-05 (上面, 暗灰 粘, P-2)	口径15.0 頸径12.7 体径19.5 器高24.1	内:ハケメ 外:ハケメ	淡橙色	3mm以下の砂 シャモット少 海綿骨片	4.08ℓ	89441
41	壺B6	1	SD-05 (上面, 暗灰 粘砂, P- 5)	口径15.7 頸径11.2 体径21.0 器高25.8	内:指押え(下半), ケ ズリ 外:ハケメ	灰白色	0.5~1mmの砂 海綿骨片	4.93ℓ	89445
42	甕K3	1	SD-05 (暗灰粘)	口径15.9 頸径14.5 体径23.3 器高(26.5)	内:ハケメ 外:ハケメ	浅黄橙色	1~3mm大砂やや 多	内面炭化物 6.54ℓ	89325
43	鉢C6	1	SD-05 (暗灰粘)	口径10.5 器高(3.4)	内:ナデ 外:ハケメ, ナデ	淡灰黄色	緻密		88006
44	鉢I	1	SD-05 (暗灰粘)	口径10.9 頸径10.3 体径10.9 底径2.0 器高7.1	内:指ナデ, ナデ 外:ケズリ(底), ナデ, ハケメ	暗黄橙色	1mm大以下の砂と 海綿骨片		89312
45	甕N1	1	SD-05 (緑灰粘砂)	口径11.0 頸径9.2 体径10.1 器高(5.9)	内:ケズリ 外:ハケメ?	内:黒褐色 外:暗灰褐色	0.5mm大石多	0.45ℓ	88015

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
46	小型土器	1	SD-05 (暗灰粘)	底径2.5 器高(3.6)	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	淡灰白色	海綿骨片, 砂多		88005
47	蓋D1小	1	SD-05 (暗灰粘)	鈕径2.4 口径9.0 器高4.1	内:ナデ 外:ヘラミガキ	灰白色	1mm前後の砂	赤彩?	89471
48	壺K2	1	SD-05 (緑灰砂)	口径22.6 器高(5.2)	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	橙色	1.5mm以下の砂	赤彩文様	89481
49	壺K3	1 2	SD-05 (緑灰砂) SD-05 (黒粘)	口径17.0 頸径14.7 器高(6.3)	内:ナデ 外:ナデ	暗橙色	0.5~1mmの砂	竹管刺突文 棒状刺突文	89036
50	壺K4	1	SD-05 (緑灰砂)	口径13.6 頸径8.6 器高(6.7)	内:ハケメ 外:ハケメ後ナデ	内:浅黄橙色 外:淡黄色	海綿骨片, 赤色粒多	口縁端刻み 菱形文	89475
51	壺B8	1	SD-05 (緑灰砂)	口径18.1 頸径11.6 体径(24.0) 器高16.0	内:ケズリ, ナデ 外:ハケメ	内:淡黄色 外:灰白色	0.5mm砂	肩に刺突文 内面炭化物	89479
52	壺P	1	SD-05 (緑灰砂)	体径20.8	内:ヘラミガキ(下半) ハケメ, ナデ 外:ヘラミガキ	内:灰褐色 外:暗黄橙色	雲母粒 0.5mm砂少	把手付 赤彩	89337
53	壺M	1	SD-05 (緑灰砂)	口径3.9 体径9.4 器高(3.2)	内:ナデ 外:ヘラミガキ	内:淡黄橙色	1.5mm以下の砂	体部に突帯 赤彩	89476
54	鉢N	1	SD-05 (緑灰砂)	口径8.2 底径3.1 器高6.0	内:ハケメ 外:ナデ	灰白色	1mm前後の砂 海綿骨片		89472
55	鉢M	1 3	SD-05 (緑灰砂) SD-05 (下層・青 灰砂)	口径12.9 体径14.2 器高(7.1)	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	内:暗橙色 外:暗赤褐色	2mm砂少	把手	89483
56	甕 くの子3類	1	SD-05 (緑灰砂)	口径17.5 頸径15.9 器高(8.1)	内:ハケメ 外:ハケメ	内:淡黄色 外:浅黄色	海綿骨片 0.5~1mmの砂		89485
57	甕Q4	1	SD-05 (緑灰砂)	口径15.1 頸径13.0 器高(4.5)	内:ハケメ 外:ハケメ	内:暗黄橙色 外:暗橙色	0.5mm以下砂多 2mm大砂少	櫛の刺突文	89464
58	高杯 (分類不可)	1	SD-05 (緑灰砂)	底径14.0 脚径5.2 器高(14.2)	内:ハケメ, ナデ ヘラミガキ(杯) 外:ハケメ後のミガキ	暗黄橙色	2mm以下の砂	透しの作りか けひとつ	89473
59	器台 (分類不可)	1	SD-05 (緑灰砂)		内:ナデ 外:ヘラミガキ	暗黄橙色	0.5~1mmの砂多	絞り目 3段4方透し	89474
60	壺 (小型壺)	2	SD-05 (黒灰粘)	口径7.0 頸径5.6 体径8.9 器高7.2	内:ナデ 外:ハケメ, ナデ	灰黄褐色	1mm前後の砂	赤彩	89499

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
61	小型丸底壺 C2	2	SD-05 (黒灰粘)	口径8.1 頸径6.2 体径8.8 器高8.8	内:ナデ 外:ハケメ後ナデ	灰黄色	1.5mm砂多		89460
62	壺 (小型壺)	2	SD-05 (黒灰粘)	口径9.9 頸径7.8 体径10.4 器高11.0	内:ハケメ 外:ナデ	暗褐色	3~4mmの砂	口縁鋸歯文 内面有機物 0.53ℓ	89314
63	小型丸底壺 C1	2	SD-05 (黒粘)	頸径5.1 体径6.4 器高(4.1)	内:ナデ 外:ナデ	黒褐色	1mm前後の砂		894444
64	甗 くの字2類	2	SD-05 (黒灰粘)	口径16.9 頸径13.8 体径25.0 器高32.5	内:ハケメ 外:ハケメ	暗黄橙色	3mm以上の砂	内面有機物 9.04ℓ	89334
65	甗A5	2	SD-05 (上面, 黒 灰粘)	口径16.8 頸径14.2 体径22.9 器高(16.5)	内:ケズリ, ナデ 外:ハケメ, ナデ	灰黄褐色	1.5mm以下の砂		89491
66	甗 くの字1類	2	SD-05 (上面, 黒 灰粘)	口径20.7 頸径16.6 体径25.6 器高26.3	内:ケズリ, 指押え (底) 外:ハケメ	暗黄橙色	1mm以下の砂多 海綿骨片	7.78ℓ	89326
67	甗E2	2	SD-05 (黒灰粘)	口径21.8 頸径18.8 器高(8.3)	内:弱いケズリ, ハケ メ 外:ハケメ	浅黄橙色	1mm以下の砂		89487
68	壺B6	2	SD-05 (黒粘)	口径16.4 頸径11.8 体径25.6 器高(17.0)	内:ケズリ 外:ハケメ	黒褐色	1mm前後の砂 海綿骨片		89468
69	甗A6	2	SD-05 (黒粘)	口径17.7 頸径13.7 体径23.9 器高(17.1)	内:ケズリ, ナデ 外:ハケメ	黄橙色	0.5~1mmの砂		89486
70	甗A1	2	SD-05 (黒粘)	口径15.8 頸径11.8 器高(10.2)	内:ケズリ 内:ハケメ	灰褐色	0.5~1mmの砂	煤が口縁内ま で及ぶ	89497
71	甗G	2	SD-05 (下層, 青 灰砂)	口径21.6 頸径17.0 体径25.0 器高(24.5)	内:ハケメ, ケズリ 外:ハケメ	内:暗黄褐色 内:暗褐色	0.5mmの砂	内面炭化物 7.92ℓ	89494
72	器 台 (脚7類)	2	SD-05 (黒粘)	底径14.2 脚径3.3 器高(7.8)	内:ハケメ 外:ヘラミガキ	橙 色	1mm以下の砂少	2段4方透し	89466
73	鉢O	2	SD-05 (青灰砂)	口径12.4 底径5.8 器高7.5	内:ヘラミガキ, ハケ メ(台) 外:ヘラミガキ, ハケ メ(台)	暗褐色	1mm前後の砂		89475
74	壺B8	3	SD-05 (上面, 赤 褐色強粘)	口径20.6 頸径14.9 器高(7.8)	内:ナデ 外:ナデ	淡黄色	1mm以下砂多 雲切		89536
75	壺H1	3	SD-05 (上面, 赤 褐色強粘)	口径16.1 頸径9.6 器高(9.7)	内:ヘラミガキ(口), ハケメ 外:ヘラミガキ	浅黄橙色	1mm以下砂多		89543

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
76	壺H1	3	SD-05 (最上部, 暗灰色強粘)	口径17.9 頸径11.0 体径27.8 底径6.8 器高30.0	内:ケズリ(下),指 押え,ナデ 外:タタキ後ハケメ	内:浅黄色 外:淡黄色	0.5~2mm砂礫多	分割成形 9.06ℓ	89389
77	壺E4	3	SD-05 (暗灰色強粘)	頸径6.1 体径16.5 底径2.7 器高(14.7)	内:ハケメ(下),ナデ 外:ヘラミガキ	内:暗灰色 外:灰白色	0.5~1mm砂多, 海綿骨片少	分割成形, 赤彩 1.44ℓ	89309
78	小型丸底壺 C1	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	口径11.0 頸径7.6 体径8.3 器高7.8	内:ナデ 外:不明	灰白色	1mm前後砂多,海 綿骨片		89537
79	小型丸底壺 C2	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	口径8.4 頸径6.6 体径8.0 器高(5.4)	内:ナデ 外:ナデ	灰白色	1mm前後砂		89539
80	小型丸底壺 (分類不可)	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	頸径6.0 器高(5.4)	内:ナデ 外:ナデ	灰白色	1mm前後砂,シャ モット		89525
81	甕A5	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	口径17.9 頸径14.5 体径21.9 器高(14.6)	内:ケズリ 外:ハケメ	浅黄橙色	2mm以下砂多	4.85ℓ	89549
82	甕A6	3	SD-05 (最上部, 灰褐色強粘)	口径16.6 頸径13.0 器高(8.1)	内:ケズリ 外:ハケメ	浅黄色	1mm以下砂多		89531
83	甕 くの字3類	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	口径21.5 頸径18.0 器高(10.2)	内:ハケメ? 外:ハケメ	内:淡黄色 外:暗橙色	1mm前後の砂多, 赤色粒		89550
84	甕 くの字3類	3	SD-05 (上面,青 灰色強粘)	口径22.0 頸径18.3 体径26.0 器高(16.5)	内:ハケメ,ナデ 外:ハケメ	内:灰褐色 外:浅黄橙色	2mm以下の砂粒多, 海綿骨片		89540
85	甕 くの字1類	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	口径20.7 頸径18.0 体径24.4 器高24.1	内:ナデ 外:不明	暗橙色	1mm前後の砂多, シャモット	6.64ℓ	89542
86	甕 くの字2類	3	SD-05 (上面,青 灰色強粘)	口径24.0 頸径20.8 体径33.7 器高(16.5)	内:ハケメ 外:不明	灰白色	1~2mm大礫多		89544
87	甕L5	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	口径25.0 頸径21.7 器高(18.2)	内:ハケメ 外:ハケメ	暗橙色	1.5mm砂多		89541
88	甕L2	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘, 黒褐色粘砂)	口径17.0 頸径14.2 体径21.7 器高(14.8)	内:ナデ? 外:ハケメ	暗橙色	1mm前後の砂多		89545
89	甕C4	3	SD-05 (上面,赤 褐色強粘)	口径26.8 頸径21.8 体径29.0 器高(19.5)	内:ケズリ 外:ハケメ	灰白色	1.5mm前後の砂多	内面炭化物	89548
90	甕C1	3	SD-05 (上面,黒 褐色強粘)	口径27.1 頸径24.7 体径31.7 器高(35.5)	内:ケズリ 外:ハケメ	灰白色	1~2mmの砂多, 赤色粒,海綿骨片	16.17ℓ	89547

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
91	甕D3	3	SD-05 (第2層, 黒褐色強粘)	口径18.2 頸径13.9 体径17.6 器高(11.1)	内:ケズリ 外:ハケメ	暗黄橙色	1.5mm以下の砂, 海綿骨片		89557
92	甕D2	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	口径19.3 頸径16.0 体径21.0 底径2.7 器高25.2	内:ケズリ 外:ハケメ	浅黄橙色	2mm以下砂多, シャ モット	5.15ℓ	89439
93	小型甕	3	SD-05 (最上部, 赤褐色粘)	口径8.4 頸径7.1 体径9.5 器高9.0	内:ナデ 外:不明	浅黄色	1~3mm砂多		89521
94	高杯F1	3	SD-05 (上面, 赤色強粘)	口径13.8 器高(5.0)	内:不明 外:不明	内:暗黄橙色 外:橙色	0.5~1mm大の砂多		89527
95	高杯G	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	口径12.1 器高(4.9)	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	浅黄橙色	1~2mm大の砂や や多		89526
96	高杯 (脚5類)	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	底径10.7 脚径3.0 器高(8.3)	内:不明 外:不明	内:灰黄褐色 外:暗黄橙色	0.5~1mm砂多	脚絞り痕	89528
97	高杯 (脚5類)	3	SD-05 (最上部, 灰褐色強粘)	底径10.9 脚径3.1 器高(6.5)	内:不明 外:不明	橙色	1mm程度の砂		89533
98	器台C2	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	口径7.7 脚径2.9 器高(5.3)	内:ヘラミガキ(受), ナデ(脚) 外:ヘラミガキ	浅黄橙色	1mm程度の砂多	3方透し	89530
99	器台C2	3	SD-05 (上面, 黒褐色強粘)	口径7.6 脚径3.8 底径11.2 器高8.5	内:不明 外:不明	暗橙色	1mm前後の砂多		89523
100	蓋C	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	口径8.5器 高2.7	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	淡橙色	1mm程度の砂多, 海綿骨片	2個2対の孔, 赤彩	89534
101	蓋D2小	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	口径8.7 鈕径3.2 器高2.7	内:不明 外:不明	淡橙色	1mm以下砂少		89535
102	鉢 (分類不可)	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	底径7.7 器高(7.2)	内:不明 外:ヘラミガキ(脚)	淡黄橙色	1mm以下砂少		89529
103	鉢C3	3	SD-05 (最上部, 赤褐色粘)	口径10.0 底径2.8 器高4.2	内:不明 外:不明	浅黄橙色	1mm前後砂	赤彩	89520
104	小型土器 (鉢)	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘)	口径5.8 器高5.5	内:不明 外:不明	灰褐色	2mm砂多		89538
105	鉢P	3	SD-05 (上面, 赤褐色強粘, 中層黒灰色粘砂)	口径38.5 頸径29.6 底径12.7 器高23.7	内:ケズリ(体), ヘ ラミガキ(口縁) 外:ハケメ	淡橙色	0.5~1mmの砂, 赤色粒含む		89496

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
106	壺E3	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘)	口径18.8 器高(2.2)	内:ヘラミガキ 外:不明	淡黄色	1mmの砂と海綿骨 片多		89013
107	壺E3	3	SD-05 (中層, 中 層~中層下, 9層, 10層)	口径19.8 頸径11.3 体径31.0 器高(35.2)	内:ハケメ(下), ナ デ, ヘラミガキ (口) 外:ハケメ後ヘラミガ キ(部分的)	内:灰褐色 外:淡黄橙色	3mm以下砂多い, 海綿骨片	13.44ℓ	89346
108	壺B7	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径16.8 頸径11.0 器高(9.1)	内:ハケメ 外:ヘラミガキ	浅黄橙色	1~2mm以下砂多		89514
109	壺E1	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径16.2 頸径9.9 体径24.7 底径5.4 器高28.8	内:ハケメ(体), ヘ ラミガキ(口) 外:ヘラミガキ, ハケ メ(口)	橙色	2mm以下砂, シャ モット, 海綿骨片	赤彩 6.39ℓ	89450
110	壺E1	3	SD-05 (黒灰色粘 砂)	口径18.0 頸径12.5 体径26.6 底径7.8 器高32.4	内:板ナデ, ハケメ 外:ヘラミガキ	暗橙色	0.5~1mmの砂, 海綿骨片	9.16ℓ	89563
111	壺E2	3	SD-05(中 層, 中層下 10層, 11層)	体径28.5 底径6.8 器高(23.2)	内:ハケメ, ナデ 外:ヘラミガキ	内:黒色 外:淡黄色	1mmの砂少, 海綿 骨片多	7.70ℓ	89018
112	壺E1	3	SD-05 (中層, 9層)	頸径11.0 体径28.7 底径7.0	内:ハケメ 外:ハケメ	内:黒色 外:淡黄橙色	1.5mm以下砂, 海 綿骨片	分割成形 9.89ℓ	89451
113	壺E1	3	SD-05(中 層, 黒灰色 粘)	口径18.6 頸径11.0 器高(5.7)	内:ナデ 外:ハケメ	浅黄橙色	1mm前後の砂多		89035
114	壺H3	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径10.9 頸部7.1 器高(7.1)	内:ハケメ, ナデ 外:ハケメ後ヘラミガ キ	内:灰褐色 外:暗褐色	0.5mm以下砂少, 海綿骨片		89347
115	壺H3	3	SD-05 (中層, 中 層下)	頸径8.4 器高(6.1)	内:ナデ 外:ヘラミガキ	灰白色	海綿骨片		89002
116	壺F	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂, 黒褐色粘砂)	口径31.0 頸径26.5 器高(24.8)	内:ナデ 外:ハケメ	淡橙色	1mm以下の砂多い		89364
117	壺F	3	SD-05 (黒灰粘, 黒灰粘砂, 9層, 10層)	頸径18.9 底径6.7 器高(35.7)	内:ナデ 外:ハケメ	内:暗黄橙色 外:浅黄橙色	1.5mm以下の砂, シャ モット, 海綿骨片	26.27ℓ	89552
118	壺C2	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径12.6 頸径8.5 器高(7.5)	内:ハケメ, ナデ 外:ハケメ	内:明灰褐色 外:灰褐色	1.5mm前後の砂多, 海綿骨片		89579
119	壺B4	3	SD-05(黒 褐色強粘)	口径9.5 頸径7.3 体径14.6 底径3.1 器高13.4	内:ナデ 外:ハケメ, ヘラミガ キ	内:黒褐色 外:浅黄橙色	1.5mm以下砂多, 赤色粒, 海綿骨片 多い	1.00ℓ	89318
120	壺C1	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径13.0 頸径9.1 器高10.8	内:ケズリ, ハケメ (頸) 外:ハケメ	内:灰色 外:浅黄橙色	0.5~3mm砂多, 海綿骨片		89343

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
121	壺C2	3	SD-05 (黒褐色強粘)	口径10.9 頸径8.1 体径14.4 底径8.9 器高15.0	内: ナデ, ヘラミガキ (口, 底) 外: ヘラミガキ	暗橙色	1mm前後の砂多い	赤彩 0.94ℓ	89333
122	壺O	3	SD-05 (中層下)	口径8.4 頸径6.2 体径12.9 器高(16.0)	内: ヘラミガキ (口), ナデ 外: ヘラミガキ	暗黄橙	0.5~1mmの砂, 海綿骨片	赤彩 0.61ℓ	89301
123	壺 (小型壺)	3	SD-05 (中層黒灰色強粘)	口径9.8 頸径8.6 体径12.1 器高(11.6)	内: ケズリ 外: ヘラミガキ, ナデ	内: 灰白 外: 暗橙	1mm前後砂	赤彩 0.73ℓ	89499
124	壺 (小型壺)	3	SD-05 (中層黒灰色粘砂)	口径11.7 頸径9.8 体径15.5 器高16.9	内: 板ナデ 外: ナデ	灰黄褐色	緻密	内面有機物煤 1.61ℓ	89317
125	壺B1	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径13.2 頸径11.3 体径26.0 器高(18.3)	内: ケズリ, ナデ 外: ハケメ	内: 黒褐色 外: 淡黄橙色	赤色粒, 2mm下の 砂, 海綿骨片	5.63ℓ	89385
126	壺D	3	SD-05 (黒褐色粘砂, 黒褐色強粘)	口径12.0 頸径10.9 体径21.0 器高(10.4)	内: ケズリ 外: ハケメ	浅黄橙色	1.5mm以下の砂		89568
127	壺D	3	SD-05 (黒灰色粘)	口径13.3 頸径11.0 体径22.3 器高(12.0)	内: ケズリ 外: ハケメ (?)	内: 暗赤灰色 外: 暗赤褐色	0.5~1mm砂多		89050
128	壺J3	3	SD-05 (黒灰色粘砂)	口径15.2 頸径11.9 器高(9.0)	内: ハケメ 外: ハケメ	浅黄橙色	0.5~1mmの砂, シャモット, 海綿骨片		89356
129	壺J3	3	SD-05 (中層下)	口径11.1 頸径9.4 器高(7.4)	内: ナデ, ヘラミガキ (口) 外: ヘラミガキ	橙色	1mm以下の砂		89553
130	壺 (分類不可)	3	SD-05 (中層, 青灰色砂)	口径13.1	内: ナデ 外: ハケメ	橙色	1mm以下の砂多		89554
131	壺Q	3	SD-05 (中層, 黒灰色粘砂)		内: ナデ 外: ヘラミガキ	内: 黒色 外: 暗橙色	0.5mm砂少	赤彩 0.94ℓ	89338
132	鉢Q	3	SD-05 (中層, 黒灰色粘砂, 青灰色粘砂)	体径20.4 底径12.3 器高(15.6)	内: ヘラミガキ 外: ヘラミガキ	内: 暗橙色 外: 浅黄橙色	0.5~1mm砂少	赤彩 (内)	89308
133	壺L	3	SD-05 (中層)	口径5.7 頸径12.6 底径3.2 器高6.9	内: ナデ 外: ヘラミガキ	暗黄橙色	0.5~2mmの砂, 海綿骨片	赤彩	89339
134	壺 (分類不可)	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂, 黒褐色粘砂)	口径12.0 底径7.2 器高(10.1)	内: ケズリ (体), ナ デ (台) 外: ハケメ	暗黄橙色	1mmの砂, 海綿骨片		89313
135	甕B	3	SD-05 (中層, 中層下)	口径18.3 頸径14.0 体径23.2 器高(17.7)	内: ケズリ, ハケメ (口) 外: タタキ後ハケメ	灰褐色	0.5mm大の砂多	5.92ℓ	89387

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
136	甕A1	3	SD-05 (中層, 灰 褐色粘砂)	口径17.5 頸径13.3 器高(8.8)	内:ケズリ 外:ハケメ	暗黄褐色	緻密		89359
137	甕A4	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径16.8 頸径13.0 体径21.0 器高(11.2)	内:ナデ 外:ハケメ	灰白色	1mm前後の砂, シャ モット		89575
138	甕A2	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘)	口径16.7 頸径13.1 体径23.0 器高29.3	内:指押え(下), ケ ズリ(上), ハケ メ(口頸) 外:ハケメ	暗黄褐色	0.5~1mmの砂	7.16ℓ	89409
139	甕 くの字3類	3	SD-05 (黒灰色粘 砂)	口径14.9 頸径13.1 体径18.3 器高(11.6)	内:ハケメ 外:ハケメ	内:暗橙色 外:淡赤橙色	1mm前後の砂		89043
140	甕 くの字3類	3	SD-05	口径19.8 頸径16.1 器高(10.0)	内:ハケメ 外:ハケメ	内:淡灰色 外:淡灰褐色	海綿骨片多, 1mm 小砂少		88009
141	甕 くの字3類	3	SD-05 (中層~中 層下)	口径16.9 頸径14.4 器高(10.8)	内:ナデ 外:ナデ, ハケメ	内:暗黄橙色 外:暗橙色	1~3mm大砂多		89360
142	甕 くの字2類	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径15.8 頸径13.0 器高(8.9)	内:ハケメ 外:ハケメ	暗橙色	1mm以下の砂多, 海綿骨片		89357
143	甕	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘)	口径16.1 頸径18.1 器高(11.2)	内:ハケメ(頸) 外:ハケメ	内:灰黄色 外:暗黄褐色	1~2mm大の砂や や多		89361
144	甕 くの字2類	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径19.9 頸径18.1 体径32.5 器高35.2 底径5.2	内:ハケメ, ナデ 外:ハケメ	暗黄褐色	1~2mm大砂多, 海綿骨片	14.98ℓ	89453
145	甕L3	3	SD-05 (黒灰色粘 砂)	口径27.5 頸径21.2 体径28.9 器高(25.7)	内:ケズリ 外:ナデ, ハケメ	浅黄褐色	1~3mm大の砂含 む	内面炭化物 13.98ℓ	89392
146	甕K2	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径21.2 頸径18.4 体径28.7 器高(16.0)	内:ナデ(下), ケズ リ(上), ハケメ (頸) 外:ハケメ	内:暗橙色 外:暗褐色	1.5mmの砂多		89345
147	甕K2	3	SD-05 (11層)	口径16.3 頸径14.1 器高(11.1)	内:ケズリ, ハケメ (頸) 外:ハケメ	淡黄色	1~2mmの砂多		89327
148	甕L7	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径15.8 頸径14.9 体径17.4 器高(10.7)	内:ケズリ 外:板ナデ	内:淡橙色 外:暗褐色	1.5mm以下の砂多		89351
149	甕K3	3	SD-05 (11層)	口径15.6 頸径13.7 体径19.9 底径2.0 器高23.2	内:ナデ(下), ケズ リ 外:ハケメ	暗黄褐色	0.5~1mmの砂多	内面に炭化物 (粒状) 3.83ℓ	89386
150	甕L2	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径15.8 頸径13.3 体径19.5 底径1.6 器高25.2	内:ケズリ 外:ハケメ	灰褐色	1mm前後の砂多, 海綿骨片	4.14ℓ	89315

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
151	甕L6	3	SD-0.5 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径14.0 頸径13.0 体径16.6 器高(10.2)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:暗黄橙色 外:灰褐色	0.5~1mm大の砂 やや多		89564
152	甕J	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径15.8 頸径14.6 器高(6.0)	内:ケズリ 外:ハケメ	淡黄色	0.5~1mm大の砂 多		89565
153	甕M	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径16.0	内: 外:	灰褐色	0.5~1mmの砂, 海綿骨片		89513
154	甕C2	3	SD-05 (11層)	口径32.2 頸径28.4 器高(14.0)	内:ケズリ 外:ハケメ	淡橙色	2mm以下砂多		89363
155	甕C3	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径33.2 頸径30.4 体径36.8 器高(16.3)	内:ケズリ 外:ハケメ	橙色	1.5mm以下の砂多		89358
156	甕C2	3	SD-05 (11層)	口径31.2 頸径26.6 器高(9.6)	内:ケズリ 外:ハケメ	暗橙色	1.5mm前後の砂多		89362
157	甕E2	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径19.6 頸径15.6 体径23.2 底径3.3 器高28.4	内:ケズリ 外:ハケメ	暗黄橙色	0.5~1mmの砂多	内面炭化物 6.56ℓ	89388
158	甕E3	3	SD-05 (中層, 黒 褐色粘砂)	口径19.9 頸径16.1 器高(8.8)	内:ケズリ 外:ハケメ	橙色	2mm以下の砂		89573
159	甕D2	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径20.0 頸径15.9 器高(10.0)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:浅黄橙色 外:明灰褐色	1mm前後の砂多		89574
160	甕D2	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径19.4 頸径15.7 器高(8.9)	内:ケズリ 外:ハケメ	浅黄橙色	1mm程度の砂多		89570
161	甕E1	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径19.6 頸径17.0 器高(12.1)	内:ケズリ 外:ハケメ	浅黄橙色	1.5mm以下の砂, 赤色粒, 海綿骨片		89569
162	甕D1	3	SD-05 (黒灰色粘 砂)	口径17.3 頸径14.2 底径2.5 器高(24.2)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:灰白色 外:灰褐色	0.5~2mm砂やや 多 3~5mm石少	4.66ℓ	89572
163	甕D2	3	SD-05 (中層, 黒 褐色粘砂)	口径16.9 頸径13.8 体径19.9 底径2.5 器高24.2	内:ケズリ, ハケメ (頸) 外:ハケメ	暗黄褐	1mm砂多, ジャモッ ト少	内面炭化物 4.31ℓ	89390
164	甕D1	3	SD-05 (黒灰色粘 砂)	口径18.0 頸径15.3 器高(6.5)	内:ケズリ, ハケメ (頸) 外:ハケメ	内:赤灰色 外:明赤灰色	1mm前後の砂多		89571
165	甕 (分類不可)	3	SD-05 (11層)	底径2.5 器高(5.2)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:暗褐色 外:黒褐色	1mm大の砂やや多		89341

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
166	甕H	3	SD-05 (黒褐色強粘)	口径14.5 頸径12.1 体径17.6 底径9.3 器高(19.1)	内:ケズリ,ヘラミガキ(口) 外:ハケメ	暗褐色	1~3mm大の砂やや多	煤 2.33ℓ	89328
167	高杯 (分類不可)	3	SD-05 (中層,黒灰色粘砂)	口径14.6 器高(5.2)	内:ハケメ 外:板ナデ,ナデ	暗橙色	1~3mmの砂多,海綿骨片	脚の可能性大	89595
168	高杯F1	3	SD-05 (9層)	口径14.8 器高(5.1)	内:ハケメ後ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	暗黄橙色	1mm以下砂微,海綿骨片	杯内面剥離	89368
169	高杯F1	3	SD-05 (断割り,中層,黒色粘)	口径15.0 脚径3.4 底径12.5 器高12.1	内:ハケメ後ミガキ(杯),ハケメ(脚) 外:ミガキ,ハケメ(脚)	暗橙色	緻密,2mm大石微		89311
170	高杯E	3	SD-05 (中層下)	口径26.0 器高(7.8)	内:ミガキ 外:ハケメ後ミガキ	浅黄橙色	微砂		89589
171	高杯E	3	SD-05 (中層,暗灰色粘)	口径28.6 脚径3.2 底径12.4 器高16.0	内:ミガキ,ハケメ(脚) 外:ミガキ	暗黄褐色	1~3mm大砂少	絞り痕,赤彩,脚4方透し	89371
172	高杯E	3	SD-05 (黒灰色強粘,中層黒灰色粘)	口径25.0 脚径3.7 底径13.8 器高14.5	内:ミガキ,ナデ(脚) 外:ミガキ	浅黄橙色	1mm以下砂	絞り痕	89484
173	高杯D	3	SD-05 (黒褐色強粘)	口径25.4 脚径3.1 底径13.4 器高15.4	内:ミガキ,ナデ(脚) 外:ミガキ	内:淡橙色 外:明灰褐色	0.5~1mm大砂やや多,シャモット多	絞り痕,二個一対の透し孔	89661
174	高杯D	3	SD-05 (黒褐色強粘)	口径25.8 脚径3.1 器高(13.2)	内:ミガキ 外:ミガキ	淡橙色	0.5~1.5mm大砂やや多,シャモット		89583
175	高杯D	3	SD-05 (中層下青灰色粘砂)	口径22.4 器高7.0	内:ハケメ後ミガキ 外:ミガキ(上),ハケメ(下)	灰黄色	0.5~2mm大の砂少	杯部を脚部で切断	89507
176	高杯D	3	SD-05 (黒褐色強粘)	口径23.4 器高(8.0)	内:ミガキ 外:ハケメ後ミガキ	赤橙色	1~2mm大砂多,焼土塊	赤彩	89581
177	高杯D	3	SD-05 (中層下青灰色粘砂)	口径28.2 器高(8.4)	内:ミガキ 外:ミガキ	橙色	0.5~2mm大砂少		89508
178	高杯D	3	SD-05 (中層,黒灰色粘砂)	口径19.8 器高(6.8)	内:ミガキ 外:ミガキ	浅黄橙	1mm前後砂,海綿骨片	赤彩	89593
179	高杯J	3	SD-05 (中層,黒褐色強粘,黒灰色粘,暗灰色粘)	口径23.0 器高(7.3)	内:ミガキ 外:ミガキ	内:暗橙色 外:黄橙色	0.5~1mm大砂多,海綿骨片		89590
180	高杯J	3	SD-05 (9層)	口径18.6 脚径4.4 器高(9.7)	内:ミガキ,ナデ,ハケメ(脚) 外:ミガキ	浅橙色	緻密	脚3方透し	89366

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
181	高杯H	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂, 10層, 11層)	口径17.2 器高(7.0)	内:ハケメ後ミガキ 外:ハケメ後ミガキ	灰白色	0.5mm大砂やや多		89340
182	高杯I	3	SD-05 (中層下)	口径18.7 器高	内:ミガキ 外:ミガキ	橙色	1mm以下砂微,海 綿骨片		89373
183	高杯N	3	SD-05 (中層, 黒 灰粘, 暗灰 粘, 中層下 青灰色粘砂)	口径20.8 脚径3.9 底径13.4 器高13.3	内:ミガキ, ハケメ, ナデ(脚) 外:ミガキ	内:暗黄橙色 外:橙色	1~2mm大砂少, 赤色粒		89370
184	器台F	3	SD-05 (中層)	口径7.5 器高(1.4)	内:ミガキ 外:ミガキ	暗黄橙色	緻密	赤彩	89588
185	高杯G	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径12.1 器高(5.4)	内:ミガキ 外:ミガキ	橙色	1mm前後の砂, 海 綿骨片		89516
186	高杯L	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径9.8 脚径2.7 底径17.2 器高9.8	内:ミガキ, ハケメ (脚) 外:ミガキ	黄橙色	0.5~2mm砂少	絞り痕 2段4方透し	89323
187	高杯L	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)		内:ミガキ, ナデ(脚) 外:ミガキ	橙色	0.5mm以下砂	2個1対の3 方透し	89501
188	高 杯 (脚3類)	3	SD-05 (中層, 暗 青灰粘)	底径18.7 器高(15.0)	内:ハケメ, ナデ 外:ミガキ	灰黄色	1~3mm大砂少	赤彩	89369
189	高 杯 (脚1類)	3	SD-05 (中層下)	底径19.8	内:ナデ 外:ミガキ	淡黄橙色	緻密	赤彩 スタンプ文	89504
190	器台B	3	SD-05 (中層, 中 層下, 11層, 13層, 14層, 15層)	口径24.0 脚径4.5 底径14.2 器高17.0	内:ミガキ, ハケメ (脚) 外:ミガキ	橙色	1mm程度の砂		89378
191	器台B	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径21.3 脚径4.0 底径12.0 器高13.8	内:ミガキ, ナデ(脚) 外:ミガキ	内:暗橙色 外:浅黄橙色	1mm前後の砂やや 多, 海綿骨片, シャ モット		89324
192	器台B	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂, 11層, 下層, 青灰色砂)	口径18.2 器高(5.7)	内:ミガキ 外:ミガキ	内:灰褐色 外:灰白色	海綿骨片		89374
193	器台H	3	SD-0 (黒褐色強 粘)	底径13.0 脚径3.6 器高(16.2)	内:ハケメ, ナデ 外:ミガキ	浅黄橙色	海綿骨片	赤彩	89375
194	器台H	3	SD-05 (中層, 暗 灰色粘)		内:ハケメ, ナデ 外:ミガキ	暗黄橙色	砂多		89376
195	器台H	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	底径13.5 器高(8.2)	内:ナデ 外:ミガキ	浅黄橙色	1mm以下砂, 海綿 骨片		89594

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
196	器台C1	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径10.0 脚径3.8 器高(4.5)	内: ミガキ(受), ナ デ(脚) 外: ミガキ	暗黄橙色	0.5~1mm砂やや 多	3方透し 赤彩	89586
197	器台C1	3	SD-05 (9層)	口径12.2 脚径3.2 器高(6.6)	内: ミガキ(受), ハ ケメ(脚) 外: ミガキ	暗橙色	緻密	3方透し	89367
198	器台C1	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径10.8 脚径2.7 器高(3.1)	内: ミガキ 外: ミガキ	橙色	緻密		89413
199	器台C3	3	SD-05 (中層)	口径8.4 脚径3.3 器高(5.8)	内: ミガキ(受), ナ デ(脚) 外: ミガキ	暗黄橙色	2mm前後の砂多	3方透し	89591
200	器台C1	3	SD-05 (中層)	口径10.0 脚径3.5 器高(5.8)	内: ナデ, ハケメ(脚) 外: ミガキ	灰白色	1mm前後の砂, シャ モット少	3方透し	89592
201	器台C2	3	SD-05 (黒灰色粘 砂)	口径8.7 脚径4.0 器高(5.2)	内: 不明 外: 不明	暗黄橙色	1~3mmの砂多		89585
202	器台E	3	SD-05 (中層, 青 灰色粘砂)	口径8.8 脚径3.0 器高(9.0)	内: ミガキ, ナデ, ハ ケメ(脚) 外: ミガキ	浅黄橙色	緻密, 海綿骨片	赤彩 4方透し	89372
203	器台G	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘)	口径24.4 脚径3.4 器高(6.9)	内: ミガキ 外: ミガキ	淡橙色	1mm以下砂やや多		89053
204	器 台 (分類不可)	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘)	底径12.9 脚径3.3 器高(7.8)	内: ハケメ後ナデ 外: ハケメ後ナデ	内: 黒色 外: 浅黄色	海綿骨片, 0.5mm 砂	4方透し	89052
205	器 台 (分類不可)	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘)	底径14.2 脚径4.6 器高(6.9)	内: ミガキ(受), ナ デ(脚) 外: ミガキ	暗黄橙色	0.5~1mmの砂多	2個1対の透 し孔	89049
206	蓋D2小	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	底径9.0 鈕径3.9 器高4.5	内: ミガキ 外: ミガキ	暗橙色	緻密		89355
207	蓋D2中	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	底径11.0 鈕径3.8 器高4.9	内: ミガキ, ハケメ? 外: ミガキ	灰白色	0.5~2mm砂多		89051
208	蓋D2中	3	SD-05 (中層)	底径10.4 鈕径3.2 器高4.6	内: ハケメ後ミガキ 外: ミガキ	明灰褐色	微砂粒		89306
209	蓋D2小	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	底径8.3 鈕径2.7 器高3.0	内: ミガキ 外: ミガキ	灰白色	1mm前後の砂, 赤 色粒		89505
210	蓋D1大	3	SD-05 (黒灰色強 粘)	底径15.8 鈕径2.9 器高5.4	内: ナデ 外: ミガキ	淡黄色	0.5mm大の砂少		89584

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
211	蓋D2大	3	SD-05 (黒褐色強粘)	底径14.6 鈕径4.7 器高5.8	内:不明 外:不明	浅黄橙色	0.5~2mm砂多		89056
212	蓋A	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径7.6 鈕径1.8 器高3.1	内:ナデ 外:ミガキ	黒褐色	0.5~1mm砂多, 海綿骨片	2個1対の孔	89518
213	蓋B	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径5.5 器高2.6	内:ミガキ 外:ミガキ	浅黄色	1mm前後の砂	1対の孔	89336
214	鉢J	3	SD-05 (中層下)	口径31.6 器高(14.7)	内:ミガキ 外:ミガキ	暗橙色	1mm前後の砂		89503
215	鉢A	3	SD-05 (黒褐色強粘)	底径1.6 器高(5.1)	内:ナデ 外:不明	内:暗黄橙色 外:灰白色	1mm大の砂多	有孔 外面被熱	89577
216	鉢B	3	SD-05 (黒灰色粘砂)	底径4.9 器高(3.0)	内:ナデ 外:ハケメ	灰白色	1mm前後の砂	有孔	89576
217	鉢F	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径9.3 底径5.7 器高6.1	内:ミガキ 外:ミガキ	暗黄橙色	2mm大の砂	底面までミガキ	89354
218	鉢D	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径9.9 底径4.7 器高5.5	内:ミガキ 外:ミガキ	内:暗赤褐色 外:暗橙色	1mm前後の砂		89500
219	鉢D	3	SD-05 (黒灰色粘)	口径14.0 底径5.9 器高6.1	内:ナデ 外:ナデ	内:黄灰色 外:暗褐色	2mm前後の砂	内面底部剥離	49348
220	鉢C2	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径18.8 器高(4.7)	内:ミガキ 外:ミガキ	内:褐色 外:暗黄橙色	0.5~1mm砂やや 多	把手付	89506
221	鉢C4	3	SD-05 (11層)	口径13.9 底径2.0 器高5.0	内:ミガキ 外:ミガキ	浅黄橙色	緻密, 海綿骨片, シャモット	把手付	89307
222	鉢G	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径12.2 器高(7.8)	内:ミガキ 外:ミガキ	暗橙色	2mmの砂		89353
223	鉢G	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径12.2 器高8.8	内:ナデ 外:ハケメ	灰白色	1~3mmの砂多, 赤色粒		89498
224	鉢E1	3	SD-05 (中層, 中 層下, 青灰 色粘砂)	口径8.9 底径3.0 器高6.6	内:ミガキ 外:ミガキ	橙色	微砂粒多		89331
225	鉢C1	3	SD-05 (黒褐色強粘)	口径16.5 器高(5.1)	内:ミガキ 外:ミガキ	浅黄橙色	1mm以下の砂	高杯?	89511

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
226	鉢C3	3	SD-05 (中層, 暗青灰色粘)	口径11.5 器高4.3	内: ミガキ 外: ミガキ	灰褐色	海綿骨片		89355
227	鉢C5	3	SD-05 (中層, 青灰色粘砂)	口径11.9 器高(13.3)	内: ミガキ 外: ミガキ	橙色	緻密		89502
228	鉢O	3	SD-05 (黒灰色強粘)	底径6.3 器高(6.1)	内: ミガキ 外: ミガキ	内: 浅黄橙色 外: 赤褐色	微砂多	赤彩	89055
229	鉢H	3	SD-05 (中層, 黒灰色粘砂)	口径13.0 底径8.1 器高7.9	内: ハケメ, ナデ 外: ハケメ, ナデ	内: 暗褐色 外: 灰白色	0.5~1mm砂多, 赤色粒		89304
230	鉢C3	3	SD-05 (中層下)	口径13.0 底径5.7 器高6.7	内: ミガキ 外: ハケメ, ナデ	内: 灰黄褐色 外: 暗黄橙色	1mm前後の砂 海綿骨片		89349
231	鉢I1	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂)	口径12.9 頸径9.5 体径10.8 器高(8.0)	内: ケズリ, ハケメ (頸) 外: ハケメ	橙色	0.5~2mm砂多		89344
232	鉢I1	3	SD-05 (中層下, 黒灰色粘砂)	口径11.4 頸径9.6 体径11.7 底径2.4 器高12.0	内: ケズリ 外: ハケメ	淡黄色	2mm大砂多	0.66ℓ	89524
233	甕I2	3	SD-05 (中層, 黒灰色粘砂)	口径13.4 頸径10.0 器高(5.8)	内: ケズリ 外: ハケメ	内: 浅黄橙色 外: 灰褐色	0.5~2mm砂多		89566
234	甕N1	3	SD-05 (中層, 黒褐色粘砂)	口径12.7 頸径9.6 体径11.1 器高(6.4)	内: ケズリ 外: ナデ	浅黄橙色	1mm以下砂多	煤	89567
235	小型土器	3	SD-05 (中層, 黒褐色粘砂)	口径7.4 頸径5.2 体径9.1 底径2.7 器高9.3	内: 不明 外: 不明	灰白色	1mm砂多		89578
236	小型土器	3	SD-05 (中層, 黄褐色強粘)	口径7.1 頸径6.5 器高7.1	内: ナデ 外: ミガキ	灰白色	海綿骨片微		89305
237	小型土器	3	SD-05 (中層, 黒灰色粘)	口径10.4 頸径8.2 器高9.5	内: 板ナデ 外: ハケメ	内: 赤灰色 外: 淡赤橙色	海綿骨片, 1.5mm 以下の砂		89352
238	小型土器	3	SD-05 (中層, 黒灰色粘砂)	頸径7.9 器高(5.9)	内: ミガキ 外: ミガキ	浅黄橙色	緻密 1mm大砂少		89519
239	小型土器	3	SD-05 (中層, 黒灰色粘)	口径8.6 頸径6.7 器高8.7	内: ナデ 外: ハケメ, ナデ, ミ ガキ(部分的)	内: 暗褐色 外: 橙色	2mm砂多, 海綿骨 片		89350
240	小型土器	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂, 11層)	口径13.4 頸径10.3 体径11.0 底径2.0 器高9.9	内: ミガキ 外: ミガキ	暗黄橙	1mm前後の砂		89342

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
241	小型土器	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径10.8 頸径7.6 体径7.9 器高(7.0)	内: ナデ, ミガキ 外: ミガキ	浅黄橙色	1.5mm前後の砂	台付	89580
242	小型土器	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径9.4 頸径7.7 器高(6.5)	内: ミガキ 外: ミガキ	浅黄橙色	1mm程度の砂	台付 赤彩	89517
243	小型丸底壺 A (参考)	3	SD-05 (中層下, 青灰色粘砂, 13・14層)	口径20.0 頸径12.9 器高10.5	内: ミガキ 外: ミガキ	内: 内黒褐色 外: 橙色	1~3mm砂多		89391
244	小型丸底壺 A	3	SD-05 (中層, 暗 灰色粘)	口径11.8 頸径7.8 器高6.5	内: ミガキ 外: ミガキ	淡橙色	2mm以下の砂少	小さな底部あり, 内面赤彩	89377
245	小型丸底壺 C1	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘砂)	口径10.2 頸径7.3 体径8.1 器高7.5	内: 指押え(体), ハ ケメ 外: ナデ	赤灰色	海綿骨片		89303
246	小型丸底壺 C2	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径8.2 頸径5.3 体径7.1 器高6.8	内: ナデ 外: ナデ, ミガキ	暗橙色	1mm砂多		89512
247	小型丸底壺 C2	3	SD-05 (中層, 黒 褐色粘砂)	口径10.7 頸径6.7 体径8.3 器高9.2	内: ナデ(体), ハケ メ(口) 外: ハケメ	灰褐色	緻密		89316
248	小型丸底壺 C1	3	SD-05 (中層, 黒 灰色粘)	口径9.6 頸径6.5 体径7.9 器高8.3	内: ナデ 外: ナデ	灰白色	1mm前後の砂		89551
249	小型丸底壺 C2	3	SD-05 (中層, 赤 灰色粘砂)	口径9.0 頸径6.5 体径7.7 器高8.5	内: ナデ 外: 不明	浅黄橙色	微砂多		89302
250	小型丸底壺 C2	3	SD-05 (9層)	頸径5.8 体径8.1 器高(6.1)	内: ナデ 外: ケズリ後ナデ	灰黄色	海綿骨片 1~2mm砂少		89329
251	小型丸底壺 (分類不可)	3	SD-05 (中層, 黒 色粘)	頸径4.8 体径8.0 器高(4.3)	内: ナデ 外: 板ナデ	灰白色	微砂		89332
252	壺K2	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径15.4 器高(5.2)	内: ナデ 外: ハケメ	橙色	1mm砂		89039
253	壺K2	3	SD-05 (中層下, 下層, 青灰 色砂)	口径14.4 頸径10.5 器高(5.3)	内: ハケメ 外: ハケメ	浅黄橙	赤色粒多		89038
254	壺I1	3	SD-05 (15層)	口径23.9 器高(12.6)	内: ミガキ 外: ミガキ	灰白色	0.5mm砂微	円形浮文, 数 不明	89016
255	壺C2	3	SD-05 (黒褐色強 粘)	口径10.0 頸径6.8 体径15.0 底径2.0 器高14.6	内: ナデ, 指押え, ミ ガキ(口) 外: ミガキ	暗黄橙色	1~2mm大砂やや 多, 海綿骨片	中層か? 0.95ℓ	89322

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
256	壺G	3	SD-05 (中層下, 下層, 青灰砂)	口径18.1 頸径16.4 体径23.0 器高(11.8)	内: ケズリ 外: ハケメ	暗黄橙色	1~2mm大砂多	装飾著るしい	89430
257	壺S	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	器高(14.2)	内: ナデ, ハケメ 外: ミガキ	内: 橙色 外: 黄橙色	0.5~1mm大砂少		89510
258	壺J1	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径12.8 頸径12.1 器高(11.1)	内: ナデ(体), ハケメ(口) 外: ハケメ後ミガキ	浅橙色	1mm砂, シャモット多	記号文	89532
259	壺J2	3	SD-05 (下層, 赤灰色砂)	口径13.6 頸径9.0 器高(10.5)	内: ナデ, ハケメ(口) 外: ハケメ	内: 浅黄色 外: 暗黄橙色	1mm以下砂多	煤記号文	89558
260	甕G	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径17.1 頸径12.5 器高(6.5)	内: ケズリ 外: ナデ	暗橙色	2mm以下砂	煤	89432
261	甕 くの字3類	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径19.3 頸径17.0 体径20.0 器高(11.0)	内: ケズリ後ナデ 外: ハケメ	暗橙色	0.5~1mm砂		89382
262	甕 くの字3類	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径19.8 頸径17.1 器高(5.3)	内: ケズリ 外: ハケメ	灰白色	2mm前後砂多		89561
263	甕 くの字3類	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径18.0 頸径14.0 器高(6.7)	内: ハケメ 外: ハケメ	浅黄橙色	2mm以下砂多 海綿骨片		89435
264	甕 くの字3類	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径18.4 頸径16.4 器高(10.2)	内: ケズリ, ナデ 外: ハケメ	内: 暗黄褐色 外: 暗黄橙色	0.5~2mm砂		89383
265	甕K3	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径15.3 頸径12.8 器高(7.5)	内: 板ナデ 外: ハケメ	暗黄橙色	1.5mm以下砂		89434
266	甕L1	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径16.9 頸径13.9 底径4.5 器高(23.0)	内: ケズリ 外: ハケメ	暗黄橙色	1mm大砂多	内面有機物 3.80ℓ	89429
267	甕K3	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径20.0 頸径17.9 器高(9.5)	内: ハケメ, ケズリ (部分的) 外: ハケメ	灰白色	2mm前後の砂多		89562
268	甕O2	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径19.3 頸径15.4 器高(10.6)	内: ハケメ 外: ハケメ	浅黄橙色	0.5~2mm砂, 雲母, 海綿骨片		89431
269	甕O2	3	SD-05 (下層, 青灰色砂)	口径13.6 頸径12.4 器高(6.5)	内: ハケメ 外: ハケメ	暗橙色	1.5mm前後砂		89560
270	甕K2	3	SD-05 (下層)	口径17.9 器高(2.9)	内: ナデ 外: ナデ	灰褐色	1mm前後砂多		89587

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
271	甗P1	3	SD-05 (中層下, 下, 青灰色 砂)	口径16.5 頸径15.0 体径23.0 器高(12.8)	内: ハケメ後ケズリ, 指押え 外: タタキ後ハケメ, ミガキ(下に部分的)	内: 暗黄橙色 外: 明黄褐色	1~3mm大砂やや 多		89425
272	甗F	3	SD-05 (下層 青灰 色砂)	口径25.1 頸径20.2 器高(9.0)	内: ケズリ 外: ハケメ	内: 暗黄橙色 外: 淡黄橙色	2mm以下の砂 海綿骨片		89428
273	甗D1	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径21.2 頸径18.3 器高(8.0)	内: ケズリ 外: ハケメ	浅黄橙色	1mm以下砂		89427
274	甗E2	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径21.0 頸径17.7 器高(6.4)	内: ケズリ 外: ハケメ	褐色	2mm以下砂		89433
275	甗E1	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径17.8 頸径14.2 器高(8.9)	内: ケズリ 外: ハケメ	灰褐色	1mm大砂多		89426
276	甗N1	3	SD05 (下層, 青 灰色砂)	口径16.0 頸径13.0 体径13.9 器高(9.4)	内: ケズリ 外: ハケメ	内: 黒褐色 外: 灰褐色	0.5~1mm砂	1.22ℓ	89381
277	甗I3	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径14.2 頸径11.7 体径13.9 器高(6.6)	内: ケズリ 外: ハケメ	暗橙色	1~2mm砂		89384
278	甗N4	3	SD-05 (下層)	口径13.1 頸径12.2 底径2.2 器高14.1	内: ケズリ 外: 板ナデ	内: 灰褐色 外: 淡黄橙色	1.5mm以下の砂	0.94ℓ	89437
279	高杯E	3	SD-05 (中層下, 下層, 青灰 色砂)	口径28.0 脚径3.5 底径13.6 器高19.4	内: ミガキ, ハケメ (脚) 外: ミガキ	黄橙色	緻密, 赤色粒	4方透し 赤彩?	89412
280	高杯F3	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径21.0 脚径4.0 器高(9.5)	内: ミガキ(杯) 外: ミガキ	内: 橙色 外: 明黄褐色	0.5mm砂少, 赤色 粒	赤彩	89044
281	高杯D	3	SD-05 (中層下, 下層, 青灰 色砂)	口径28.3 脚径4.2 底径15.7 器高19.4	内: ミガキ, ナデ(脚) 外: ミガキ	浅黄橙色	緻密	赤彩文様(杯)	89515
282	高杯B	3	SD-05(中 層, 下層)	口径32.3 器高(6.1)	内: ミガキ 外: ミガキ	暗黄橙色	0.5mm以下砂		89054
283	高杯C	3	SD-05 (11層)	口径30.7 器高(7.8)	内: ミガキ 外: ミガキ	黄灰色	0.5~2mm大の砂 やや多	1対の把手 赤彩	89448
284	高杯A	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径30.1 器高(3.7)	内: ミガキ 外: ミガキ	内: 浅黄橙色 外: 暗黄褐色	1mm以下砂微		89046
285	高杯M	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径10.8 脚径2.3 器高(8.9)	内: ミガキ 外: ミガキ	橙色	2mm以下砂少, 砂っ ぽい		89410

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
286	高杯 (分類不可)	3	SD-05 (下層, 15層)	口径19.8 器高(7.7)	内: ハケメ後ミガキ 外: ハケメ	黄橙色	0.5mm砂少		89380
287	高杯 (脚3類)	3	SD-05 (中層下, 下層, 青灰色砂)	底径17.3 脚径3.6 器高(17.0)	内: ミガキ(杯), ナ デ(脚) 外: ミガキ	内: 暗橙色 外: 浅黄橙色	0.5~1mm大の砂少	赤彩 4方透し	89424
288	高杯 (脚3類)	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	底径16.2 脚径3.7 器高(11.1)	内: ミガキ(杯), ハ ケメ, ナデ(脚) 外: ミガキ	内: 暗黄橙色 外: 暗橙色	0.5mm大の砂少 海綿骨片	2個1対の3 方透し	89310
289	高杯 (脚3類)	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	底径20.9 脚径4.6 器高15.1	内: ナデ 外: ミガキ	内: 暗黄橙色 外: 浅黄橙色	0.5mmの砂少	杯切断	89509
290	高杯 (脚2類)	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)		内: ハケメ 外: ミガキ	淡黄色	0.5~1mm砂		89045
291	高杯 (脚2類)	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	底径21.2 器高(5.0)	内: ナデ 外: ミガキ	橙色	0.5mm砂少	赤彩	89411
292	高杯 (分類不可)	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	底径11.7 器高(9.1)	不明	黄褐色	0.5~2mm砂多	3段6方透し	89048
293	器台A	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	底径15.6 器高(9.7)	内: ケズリ, ナデ 外: ミガキ	内: 黒褐色 外: 暗褐色	0.5mm砂	4方透し	89047
294	器台A	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂, 15 層, 中層下)	口径21.4 底径20.0 器高(17.0)	内: ミガキ 外: ミガキ	暗黄橙色	2mm以下の砂	赤彩	89495
295	鉢K	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径25.8 器高(5.6)	内: ミガキ 外: ミガキ	内: 灰白色 外: 暗橙色	2mm大の砂少	赤彩	89556
296	鉢A	3	SD-05 (中層, 13, 14, 15層)	口径16.4 器高12.8	不明	淡黄色	1.5mmの砂多	有孔 内面有機物	89440
297	小型土器	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径8.9 頸径7.0 体径8.4 底径3.7 器高9.6	内: ナデ 外: ナデ, ハケメ	浅黄色	1mm以下砂微 海綿骨片		89379
298	鉢E2	3	SD-05 (下層, 青 灰色砂)	口径8.5 底径4.6 器高7.8	内: ケズリ, ナデ 外: ミガキ	暗黄褐色	1~2mm砂多		89037
299	小型土器	3	SD-05 (下層, 赤 灰砂)	口径5.6 底径5.2 器高4.4	内: ナデ 外: ナデ	暗黄橙色	1mm砂	手づくね	89555
300	壺B6	1	9 DG, SD-06 (暗灰粘)	口径16.2 頸径11.6 器高(5.5)	内: ミガキ 外: ミガキ	灰白色	0.5~1mm大の砂	赤彩	91003

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
301	甕K1	1	8 EG SD-06 (暗灰粘砂)	口径15.8 頸径11.3 器高(7.8)	内:ケズリ, ハケメ 外:軽いケズリ	内:灰白色 外:灰黄色	0.5mm前後の砂 赤色橙		91001
302	壺B6	1	9 DG SD-06 (暗灰粘)	口径19.6 頸径13.3 体径31.5 器高(33.0)	内:ケズリ 外:ハケメ	灰白色	1mm前後砂多 シャモット	内面炭化物 16.25ℓ	89365
303	壺K1	1	8, 9 EG SD-06 (暗灰粘)	口径18.4 頸径12.4 器高(7.8)	内:ケズリ 外:ナデ	淡赤灰色	赤色粒, 0.5~1 mm砂多	記号文	88004
304	壺H3	1	9 DG SD-06 (暗灰粘)		内:ハケメ 外:	内:浅黄橙色 外:黒褐色	1mm前後砂多 海綿骨片		89001
305	小型丸底壺 C3	1	8 DG SD-06 (黄褐粘)	口径7.7 頸径5.7 体径8.7 器高7.7	内:指ナデ 外:ハケメ, ナデ	灰白色	0.5~1mm大砂多		91004
306	小型丸底壺 C2	1	10DG SD-06 (暗灰粘)	口径8.1 頸径6.4 体径9.1 器高8.9	内:指ナデ 外:ナデ	内:暗赤橙色 外:浅黄橙色	0.5~1mm砂多 海綿骨片	赤彩	91005
307	高杯F2	1	SD-06	口径17.3 脚径3.3 器高(6.8)	不明	赤灰色	0.5~2mm砂多		91010
308	高 杯 (脚6類)	1	8 EG SD-06 (暗灰粘)	底径11.2 器高(6.7)	内:ハケメ(脚) 外:指ナデ	灰白色	1~2mm砂多 シャモット少		91006
309	器台H	1	8 EG SD-06 (暗灰粘)		内:ナデ 外:ミガキ	淡赤橙色	0.5~1mm砂		91009
310	甕N1	1	8 DG SD-06 (暗灰粘)	口径11.2 頸径9.6 体径12.9 器高(7.0)	内:板ナデ 外:軽いケズリ	灰白色	0.5~1mmの砂, 赤色粒, 海綿骨片		91002
311	甕E3	1	9 EG SD-06 (暗灰粘)	口径18.6 頸径14.5 器高(6.2)	内:不明 外:ハケメ	内:浅橙色 外:灰白色	1~2mm砂多, 赤 色粒		91007
312	甕D2	1	9 EG SD-06 (暗灰粘)	口径20.8 頸径17.0 器高(4.8)	内:ケズリ :ハケメ	灰白色	0.5~1mm大砂		91008
313	壺B8	3	10IG SD-305 (上層)	口径17.4 頸径10.4 器高(7.0)	内:ナデ 外:ナデ	灰白色	1mm前後の砂多		91026
314	壺I2	3	10, 11IG SD-305 (上層)	口径17.2 頸径8.8 器高(8.6)	不明	暗赤褐色	2~3mm大砂多 海綿骨片		91042
315	壺H5	3	10IG SD-305 (上層)	口径14.3 頸径12.4 器高(6.8)	不明	淡赤灰色	1~3mm砂少 海綿骨片		91040

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
316	壺 C2	3	10IG SD-305 (上層)	口径12.3 頸径7.1 器高(11.1)	内:ハケメ, 指押え 外:不明	灰白色	1mm程度の砂多	0.98ℓ	91021
317	壺 C2	3	SD-305 (下層)	口径11.2 頸径8.0 器高(5.5)	内:ミガキ 外:ミガキ	淡赤褐色	1mm大の砂 海綿骨片	赤彩	91035
318	壺 (小型壺)	3	SD-305 (上層)	口径9.2 頸径5.7 体径9.9 器高11.1	内:指ナデ 外:ヘラケズリ?	淡褐色	1~2mm大の砂		91019
319	壺 (小型壺)	3	10IG SD-305	口径10.0 頸径7.8 体径10.3 器高9.0	内:ケズリ 外:ハケメ	淡灰褐色	1~2mm大の砂多		91024
320	小型丸底壺 C3	3	10IG SD-305 (上層)	口径7.8 頸径5.8 体径8.5 器高7.7	内:指押え 外:ケズリ	淡灰色	0.5mm砂少		91032
321	甕 A4	3	10IG SD-305 (上層)	口径14.5 頸径11.5 体径18.7 器高(13.7)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:淡灰色 外:淡灰褐色	1~2mm大の砂		91041
322	甕 A5	3	10, 11IG SD-305 (上層)	口径16.1 頸径13.3 体径22.8 器高(12.1)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:淡灰色 外:淡灰褐色	0.5~2mm砂多		91031
323	甕 E1	3	10IG SD-305 (下層)	口径16.1 頸径14.5 器高(4.6)	内:ケズリ 外:ナデ	淡黄灰色	1~2mm大砂多		91037
324	甕 E3	3	10IG SD-305 (下層)	口径14.0 頸径10.0 器高(4.0)	不明	内:淡黄灰色 外:淡黄灰褐色	1mm大の砂多 焼土塊		91034
325	甕 D1	3	10IG SD-305 (下層)	口径17.3 頸径14.9 器高(4.9)	内:ケズリ 外:ナデ	淡黄灰色	1~2mm砂多 焼土塊		91038
326	甕 E2	3	10, 11IG SD-305 (上層)	口径14.8 頸径12.0 体径15.0 器高(11.7)	内:ケズリ 内:ハケメ	内:灰白色 外:淡褐色	1~2mm砂, 赤色 粒多	1.70ℓ	91022
327	甕 K1	3	10IG SD-305 (下層)	口径21.2 頸径18.9 器高(9.5)	内:ケズリ 外:ハケメ	淡黄灰色	1~2mm砂多 海綿骨片		91036
328	甕 L5	3	10IG SD-305 (上層)	口径21.2 頸径18.5 器高(15.1)	内:不明 外:ハケメ	赤灰色	0.5~2mm砂多		91028
329	高杯 F2	3	10IG SD-305 (上層)	口径16.8 脚径3.7 底径12.0 器高13.2	不明	灰白色	砂多		91018
330	高杯 F2	3	10IG SD-305 (上層)	口径17.6 脚径3.5 器高(10.8)	不明	淡赤灰色	1mm大砂多 海綿骨片		91023

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
331	高杯F1	3	10IG SD-305 (上層)	口径14.6 脚径3.4 底径12.6 器高12.5	不明	浅黄橙色	1~3mm砂多 0.5~1mm砂少	2種の粘土	89321
332	器台B	3	10, 11JG SD-305 (上層)	口径20.1 脚径4.3 器高(10.5)	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	灰白色	0.5mm大砂多	透し孔	91025
333	器台B	3	10, 11JG SD-305 (下層)	口径20.0 器高(5.1)	内:ヘラミガキ 外:ヘラミガキ	内:淡赤褐色 外:淡赤灰色	雲母, 海綿骨片	赤彩	91039
334	器台 (分類不可)	3	10IG SD-305 (下層)	口径8.8 脚径3.1 器高(7.8)	不明	赤褐色	0.5~2mm砂 海綿骨片	3方透し	91027
335	鉢H	3	10IG SD-305 (上層)		内:ナデ 外:ナデ	灰白色	1mm前後の砂		91020
336	甕D2	3	SK-304	口径15.0 頸径11.1 器高(4.6)	内:ケズリ 外:ナデ	内:暗橙色 外:暗黄橙色	1mm大砂多		89615
337	甕D2	3	SK-304	口径17.1 頸径14.0 体径19.0 器高(10.8)	内:ナデ 外:ハケメ	暗橙色	0.5~1mm大砂多		89614
338	高杯D	3	SK-304	口径24.6 器高(5.9)	不明	内:赤橙色 外:灰白色	0.5~1mm大砂少		89613
339	蓋D2中	3	SK-304	鈕径3.4 口径6.0 器高5.3	内:ナデ 外:ハケメ後ミガキ	暗黄橙色	0.5~1mm大砂多 シャモット, 海綿骨片		89612
340	壺H2	3	SK-309 P1, 5	口径15.4 頸径8.2 器高(8.6)	内:ミガキ 外:ミガキ	橙色	1mm以下砂 シャモット		89402
341	壺H4	3	SK-309 P17	口径13.2 頸径10.0 器高(6.7)	不明	暗橙色	2mm以下砂多		89403
342	壺 (分類不可)	3	SK-309 P9, 10	口径14.2 頸径12.6 体径27.0 器高30.5	内:指押え, ナデ 外:ハケメ	灰白色	1mm前後砂多	煤 内面炭化物 9.12ℓ	89663
343	甕 くの字3類	3	SK309 P15	口径16.9 頸径13.4 器高(11.1)	内:指ナデ 外:ハケメ	橙色	0.5~1.5mm砂多		89393
344	高杯 (脚5類)	3	SK309 P14	底径11.8 脚径12.0 器高(8.1)	内:不明 外:ミガキ	橙色	1mm以下砂少 シャモット		89400
345	高杯 (脚5類)	3	SK309 P10		内:ナデ 外:ミガキ	淡黄色	1mm以下砂少 海綿骨片		89401

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
346	鉢D	3	SK309 P15	口径10.5 底径5.6 器高7.0	不明	橙色	2 mm以下砂少		89399
347	小型丸底壺 C3	3	SK309	口径9.2 頸径7.4 体径9.4 器高(6.1)	内：ナデ 外：ナデ	灰白色	緻密		89406
348	甕 くの字3類	3	SK310 P7	口径14.1 頸径12.3 器高(6.0)	内：ハケメ 外：ハケメ	淡黄橙色	1.5mm以下砂 海綿骨片		89404
349	甕 くの字3類	3	SK310 P5	口径20.1 頸径16.8 器高(9.3)	内：ナデ 外：不明	内：灰褐色 外：淡橙色	2 mm前後砂多		89596
350	高杯F1	3	SK310 P6	口径15.0 器高(4.8)	内：ミガキ？ 外：不明	浅黄橙色	緻密 海綿骨片		89405
351	高 杯 (脚5類)	3	SK310 P4	底径10.7 脚径3.0 器高(7.1)	不明	橙色	1.5mm砂多		89407
352	高 杯 (脚5類)	3	SK310 P9		不明	暗橙色	緻密		89408
353	壺I2	3	SK312 P9	口径18.0 器高(5.0)	内：ナデ 外：ナデ	淡黄色	0.5～2 mm砂少 海綿骨片	煤	89617
354	甕 くの字3類	3	SK312 P9	口径14.9 頸径12.4 体径20.3 器高(14.2)	内：ケズリ 外：ハケメ	灰白色	0.5mm砂少		89640
355	甕 くの字3類	3	SK312	口径15.6 頸径12.9 器高(8.0)	内：ナデ 外：不明	浅黄色	2 mm砂多		89619
356	甕 くの字3類	3	SK312 P15	口径17.6 頸径15.1 器高(7.0)	内：不明 外：ハケメ	浅黄橙色	1～3 mm大砂やや 多		89618
357	甕L5	3	SK312 P4	口径22.4 頸径18.9 体径24.3 器高(11.2)	不明	浅黄橙色	2 mm程度の砂		89620
358	高 杯 (脚5類)	3	SK312 P18	底径11.5 脚径3.5 器高(9.6)	不明	橙色	0.5～1 mm砂やや 多, シャモット		89621
359	高 杯 (分類不可)	3	SK312 P6		不明	橙色	0.5～2 mm大の砂 やや多	2種の粘土使 用	89616
360	器台J	3	SK312 P3	口径17.2 脚径3.9 器高(11.2)	不明	浅黄橙色	1 mm以下砂		89622

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
361	壺H2	3	SK313	口径20.1 器高7.1	内：ナデ 外：ナデ	灰白色	1mm前後の砂		89398
362	壺H5	3	SK313	口径15.1 頸径12.8 体径20.4 器高(13.6)	内：不明 外：ハケメ	橙色	1mm前後の砂多		89395
363	壺H4	3	SK313	口径13.4 頸径10.6 器高(13.4)	内：ハケメ 外：ミガキ	橙色	0.5mm以下の砂		89394
364	小型丸底壺 C2	3	SK313 P13	口径10.7 頸径7.0 体径8.7 器高8.9	内：指押え 外：ハケメ	暗黄褐色	1mm以下砂 海綿骨片		89396
365	甕A1	3	SK313	口径16.8 器高(3.5)	不明	灰白色	1mm前後砂		89397
366	壺E3	3	SK320	口径18.4 器高(3.7)	内：ミガキ 外：ナデ	浅黄橙色	1～1.5mm大の砂 やや多、海綿骨片		89659
367	壺H2	3	SK323	口径14.1 頸径9.6 器高(8.4)	不明	橙色	1mm前後砂		89658
368	甕 くの字1類	3	SK323	口径16.6 頸径13.2 体径19.3 器高(20.8)	内：ナデ 外：ハケメ	灰黄褐色	0.5～3mm大砂多 海綿骨片		89559
369	高杯F2	3	SK323	口径16.4 器高(6.6)	内：ミガキ 外：ミガキ	浅黄橙色	緻密		89655
370	鉢L	3	SK323	口径15.3 器高(6.5)	内：ナデ 内：ケズリ	灰白色	1mm前後砂少		89660
371	甕 くの字3類	3	SK324-3 P33	口径15.0 頸径9.4 器高(7.0)	内：ナデ 外：ハケメ後ミガキ	暗橙色	2mm前後砂多		89604
372	甕A1	3	SK324,325	口径15.8 頸径13.6 器高(8.3)	内：ケズリ 外：ハケメ	灰白色	1mm前後砂多		89645
373	壺 (分類不可)	3	SK325,326 検出面	口径15.3 器高(6.7)	不明	浅黄橙色	2mm前後砂多 シャモット		89650
374	甕 くの字3類	3	SK325,326 検出面	口径17.6 頸径13.9 器高(4.8)	内：ナデ 外：ナデ	内：暗黄褐色 外：灰褐色	1mm以下砂多		89646
375	甕 くの字3類	3	SK326	口径17.0 頸径15.2 器高(8.0)	内：ケズリ 外：不明	内：灰白色 外：暗橙色	2mm前後砂多 シャモット		89649

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
376	甕 くの字3類	3	SK325,326 検出面	口径14.5 頸径12.3 器高(9.0)	内:ケズリ 外:ハケメ	浅黄橙色	1mm以下の砂多 海綿骨片		89647
377	甕 くの字3類	3	SK325	口径18.0 頸径16.2 器高(10.2)	内:不明 外:ハケメ	内:暗黄橙色 外:橙色	1~3mm大砂やや 多, シャモット, 海綿骨片		89641
378	甕 くの字3類	3	SK326検出 面	口径21.0 頸径16.4 器高(9.3)	不明	内:灰褐色 外:暗橙色	1mm前後の砂		89648
379	高杯F2	3	SK325	口径15.8 器高(5.7)	内:ナデ, ミガキ 外:ケズリ	暗黄橙色	0.5~1mm大砂多, 海綿骨片		89642
380	高 杯 (脚5類)	3	SK325,326 検出面	底径11.5 器高(8.2)	不明	暗橙色	1~2mm大の砂少		89643
381	高 杯 (脚5類)	3	SK325,326 検出面	底径10.6 器高(6.5)	内:ナデ 外:ミガキ	灰黄色	0.5mm大の砂やや 多, 海綿骨片		89644
382	壺B6	3	SK331	口径15.9 頸径11.4 器高(4.3)	内:ハケメ 外:ハケメ	灰白色	0.5~2mm砂, 海 綿骨片		89630
383	甕K3	3	SK331	口径17.0 頸径14.4 器高(3.9)	内:ナデ 外:ハケメ	暗黄橙色	0.5mm大の砂, 海 綿骨片, シャモッ ト		89626
384	甕D2	3	SK331	口径16.2 頸径11.9 器高(5.7)	内:ケズリ 外:ハケメ	淡黄色	0.5~1mm砂		89628
385	甕E1	3	SK331	口径17.0 頸径15.0 器高(5.6)	内:ケズリ 外:ナデ	灰褐色	0.5~1mm砂, 海 綿骨片		89629
386	甕E2	3	SK331	口径13.0 頸径9.8 器高(4.5)	不明	暗橙色	0.5~2mm大砂		89631
387	甕I1	3	SK331	口径10.8 頸径7.6 体径8.5 底径1.5 器高(9.0)	内:ケズリ 外:ハケメ	淡橙色	0.5~1mm大砂		89624
388	器台C2	3	SK331	口径9.0 脚径3.2 器高(8.1)	不明	浅黄橙色	0.5~1mm砂	絞り痕 3方透し	89625
389	高杯E	3	SK331	口径21.0 器高(4.7)	内:ミガキ? 外:不明	内:暗橙色 外:浅黄橙色	緻密, 赤色粒, 海 綿骨片		89627
390	高杯E	3	SK331	口径(25.0) 脚径3.6 底径12.1 器高(13.0)	内:ミガキ(杯) 外:ミガキ	淡黄色	0.5~1mm砂やや 多		89623

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
391	壺E2	3	SK334 中央部	口径14.1 頸径10.0 器高(14.1)	内:ミガキ(口), ナ デ 外:ミガキ	明黄褐色	1~3mm大砂やや 多	赤彩	89603
392	壺A1	3	SK334 西側落込み		不明	暗橙色	0.5~2mm大砂少	赤彩?	89602
393	壺A1	3	SK334-3 P30	口径17.8 頸径6.9 器高(7.9)	不明	暗橙色	0.5~1mm砂	頸部に突帯	89416
394	壺A4	3	SK334 P2	口径23.6 器高(4.6)	内:ナデ 外:ナデ	暗黄褐色	1mm大砂少		89600
395	壺A3	3	SK334-2 P11	口径14.4 頸径7.1 器高(5.1)	内:ハケメ 外:ミガキ	内:暗黄褐色 外:暗橙色	砂少, 海綿骨片	赤彩	89417
396	壺I1	3	SK334,334 -2 P15	口径24.4 器高(3.7)	不明	橙色	1~3mm砂多		89601
397	甕K2	3	SK334-2 P24	口径14.2 頸径11.3 器高(5.9)	内:ケズリ 外:ハケメ	淡橙色	1mm以下砂		89608
398	壺H1	3	SK334-1, 2,3 アゼ中	口径14.0 頸径7.9 器高(5.9)	内:ナデ 外:不明	暗黄褐色	1mm以下砂		89605
399	壺K1	3	SK334	口径13.7 頸径9.8 器高(8.9)	内:ハケメ 外:ハケメ後ミガキ	灰白色	0.5~2mm大砂や や多		89415
400	壺N	3	SK334 P1	口径7.6 頸径7.2 体径11.4 器高10.7	内:指押え 外:ミガキ	暗橙色	0.5~1mm砂多		89414
401	壺 (小型壺)	3	SK334-2 P18	頸径7.5 体径9.5 底径2.3 器高(7.0)	内:指押え 外:不明	暗黄褐色	1~3mm大砂やや 多, 海綿骨片		89599
402	甕D3	3	SK334,334 -2 P15	口径15.6 器高(3.1)	内:ナデ 外:ナデ	暗黄褐色	1mm以下砂		89607
403	甕E3	3	SK334-3 P30	口径15.2 頸径12.2 器高(5.1)	内:ケズリ 外:不明	灰白色	2mm前後砂多		89609
404	甕E3	3	SK334 P6	口径20.0 頸径15.7 器高(4.2)	内:ケズリ? 外:ナデ?	内:淡橙色 外:暗橙色	0.5~2mm大砂多		89611
405	甕 くの字3類	3	SK334-3 P30 SK334 アゼ中	口径17.4 頸径14.7 器高(8.0)	内:ケズリ(体), ハ ケメ(口) 外:ハケメ	明黄褐色	2mm以下砂		89606

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
406	甕 くの字3類	3	SK334-3 P20	口径17.4 頸径14.5 器高(5.6)	内:ハケメ 外:ハケメ	暗黄橙色	1~2mm砂, 海綿 骨片		89610
407	器台C1	3	SK334 東部	口径9.6 底径12.9 脚径3.6 器高8.9	内:ミガキ(受), ナ デ(脚) 外:ミガキ	暗黄橙色	0.5~1mm砂多 海綿骨片	赤彩 3方透し	89420
408	器台D	3	SK334 P27	口径9.5 脚径3.8 底径10.0 器高7.8	内:ミガキ(受), ハ ケメ(脚) 外:ミガキ	浅黄橙色	海綿骨片	4方透し 赤彩	89421
409	高杯J	3	SK334 P2	口径24.8 器高(6.5)	内:ミガキ 外:ミガキ	淡橙色	1mm以下砂	赤彩	89598
410	高 杯 (脚7類)	3	SK334,334 -2 P15	底径13.6 脚径2.8 器高(8.3)		赤橙色	1mm以下砂少		89597
411	高 杯 (脚7類)	3	SK334 アゼ中	底径12.4 脚径3.0 器高(7.8)	内:ナデ 外:ミガキ	暗橙色	砂多, 海綿骨片		89419
412	高 杯 (脚7類)	3	SK334 アゼ中	底径13.2 脚径2.6 器高(8.2)	内:ナデ 外:ミガキ	赤橙色	0.5~2mm砂やや 多, 海綿骨片	2段3方透し	89418
413	高 杯 (脚8類)	3	SK334	底径18.6 脚径3.4 器高(7.2)	内:ナデ 外:ミガキ	暗黄橙色	0.5~1mmの砂, 海綿骨片	2段4方透し	89422
414	小型土器	3	SK334-2 P19	口径7.5 底径2.2 器高6.7	内:ミガキ 外:ミガキ	暗橙色	0.5~1mm砂		89423
415	壺A4	3	SK336	口径24.0 器高(4.3)	内: 外:ナデ	内:浅黄橙色 外:灰色	1~2mm砂多		89020
416	壺A3	3	SK336	口径21.3 器高(5.9)	内:ナデ 外:ナデ	橙色	1~2mm砂多		89637
417	壺A4	3	SK336周辺	口径28.0 器高(4.3)	内:ミガキ 外:ナデ	浅黄橙色	1mm以下砂少		89636
418	高 杯 (脚4類)	3	SK336	底径11.6 脚径3.5 器高(9.0)	内:ナデ 外:ミガキ	浅黄橙色	1mm以下の砂, 雲 母		89638
419	甕E1	3	SK337	口径14.7 頸径12.6 器高(6.5)	内:ハケメ 外:ハケメ	灰白色	1mm前後砂		89657
420	甕 くの字3類	3	SK337	口径16.0 頸径14.0 器高(6.0)		暗橙色	1~2mm砂多		89656

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
421	壺 (分類不可)	3	SK338	口径13.6 頸径12.5 器高(6.9)	内:ハケメ	橙色	1mm砂多		89639
422	高 杯 (脚6類)	3	SK346	底径11.1 器高(9.4)	内:ナデ? 外:ミガキ(面取り様)	浅黄色	1mm以下砂 海綿骨片		89651
423	甗A3	3	SK345	口径15.4 頸径12.7 体径19.9 器高22.2	内:ナデ, 指押え 外:ハケメ, ナデ	内:暗橙色 外:浅黄橙色	0.5~2mm大砂多	4.13ℓ	89436
424	甗A4	3	SK347	口径19.2 頸径16.0 器高(9.2)	内:指押え 外:ハケメ	灰白色	1mm砂多 シャモット		89653
425	壺A3	3	SK348	口径14.5 頸径9.5 器高(8.3)	内:ケズリ 外:ナデ	淡橙色	1~2mm程度の砂 海綿骨片		89634
426	小型丸底壺 C3	3	SK348	口径8.8 頸径6.6 器高6.4 頸径7.2	内:ナデ 外:不明	浅黄橙色	1mm以下砂		89632
427	甗A3	3	SK348	口径17.1 頸径13.2 器高(7.8)	不明	浅黄橙色	1mm以下砂少		89633
428	甗A3	3	SK348	口径16.0 頸径12.2 体径18.6 器高(10.8)	内:ナデ 外:ナデ	灰白色	1mm前後砂 シャモット		89654
429	甗 くの字1類	3	SK347	口径14.8 頸径12.1 体径17.6 器高18.9	内:ケズリ, ハケメ (上半) 外:板ナデ, ハケメ	内:暗黄橙色 外:灰黄褐色	1mm以下砂	内面炭化物 2.68ℓ	89652
430	高杯I	3	SK348	口径17.8 器高(7.3)	内:ミガキ 外:ハケメ後ミガキ	淡黄色	1~2mm以下の砂 シャモット		89635
431	甗L1	3	SD-301 (上部)	口径16.4 底径2.6 頸径13.8	内:ケズリ 外:ハケメ	黄橙色	1~2mm砂多	4.06ℓ	91013
432	甗L1	3	SD-301 (上層)	口径17.4 頸径13.9 体径16.8 器高(15.2)	内:ケズリ 外:板ナデ	暗灰褐色	1~2mm砂多	内面炭化物 2.72ℓ	91016
433	甗K1	3	SD-301	口径18.2 頸径13.9 体径20.7 器高(9.3)	内:板ナデ 外:ハケメ	灰褐色	0.5mm砂やや多		91012
434	甗P2	3	SD-301 (上層)	口径15.9 頸径13.9 体径17.4 器高(10.9)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:灰白色 外:灰褐色	0.5~1mm砂多		91011
435	高杯M	3	SD-301 (上部)	口径6.9 脚径1.7 底径7.1 器高6.4	不明	内:暗黄色 外:赤褐色	1mm大の砂多	4方透し	91014

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
436	高 杯 (脚5類)	3	SD-304 (上面)		不明	赤灰色	1mm程度の砂 赤色粒		91017
437	(底 部)	3	7IG 落ち込み上 面	底径5.4 器高(6.1)	内:ハケメ 外:ハケメ	内:灰白色 外:灰黄色	0.5mm砂少 海綿骨片		91015
438	甕 くの字3類	2	SD-208	口径12.6 頸径11.5	内:ハケメ 外:ハケメ	灰オリーブ	1mm砂少 海綿骨片多		8021
439	甕Q2	3	SD-308	口径14.9 頸径12.5	内:ケズリ 外:ナデ	内:赤褐色 外:淡黄褐色	1~2mm砂多 海綿骨片		91032
440	甕 くの字1類	3	SD-308	口径16.4 頸径13.7 体径18.4 器高(10.2)	内:ケズリ 外:ハケメ	内:赤灰色 外:暗黄灰色	1~2mm砂多		91030
441	甕 くの字2類	3	Pit 406	口径17.1 頸径13.2 体径22.4 器高(24.4)	内:ナデ 外:ハケメ	淡黄橙色	2mm以下の砂	6.34 ℓ	89522
442	壺	1	包含層	口径10.0 頸径7.4 体径16.1 底径1.7 器高23.3	内:ナデ 外:不明	灰白色	1mm前後砂多 海綿骨片	1.86 ℓ	89447
443	(底 部)	1	包含層	底径8.0 器高(5.0)	内:ナデ 外:ケズリ	内:淡黄色 外:浅黄色	1~2mm砂多		89019
444	小型壺			口径8.8 頸径6.1 体径8.6 底径2.9 器高8.6	内:ナデ 外:ナデ	灰黄色	1mm前後砂		89436

畝田遺跡 出土土器観察表 奈良時代以降

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
1	須恵器盤	3	5-I SB01 Pit 393	口径14.6 器高2.2 底径11.6	内・外：ヨコナデ 底：ナデ，ヘラ切り痕	淡灰色	1～2mm大の小礫を少量		890697
2	土師器椀	3	5-I SB01 Pit 393	口径15.0	内：ヘラミガキ，内黒 外：ヨコナデ	内：黒色 外：明褐色	1mm以下の小礫少量		D-98
3	須恵器杯蓋	3	9-J SB02 Pit 476	口径12.5 器高2.9	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	暗灰色	2～3mm大の白色礫やや多		D-11
4	須恵器杯蓋	3	8-K SB02 Pit 345	口径13.3 器高(1.8)	内：ヨコナデ 外：ヨコナデ	暗灰色	2～5mm大の白色礫やや多		D-20
5	須恵器杯身	3	9-J SB02 Pit 380上面	口径12.9 器高3.3 底径8.8	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ ヘラ切り痕	灰白色	2～3mm大の白色礫やや多		D-16
6	須恵器杯身	3	9-K SB02 Pit 369	口径12.9 器高3.1 底径8.0	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ ヘラ切り痕	灰褐色	2～3mm大の白色礫少		D-17
7	須恵器杯身	3	9-K SB02 Pit 369	口径12.1 器高2.5 底径6.4	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ ヘラ切り痕	淡灰色	1mm大の白色礫少		D-115
8	須恵器杯身	3	9-J SB02 Pit 580	底径7.0	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ ヘラ切り痕	暗灰色	3～5mm大の白色礫やや多	底部外面に墨書「午」	D-18
9	須恵器盤	3	9-J SB02 Pit 380上面	口径13.8 器高2.5 底径10.5	内・外：ヨコナデ 底：全面ナデ ヘラ切り痕	内：灰褐色 外：淡灰色	1mm大の白色礫少		D-128
10	須恵器有台杯	3	9-J SB02 Pit 532	口径10.2 器高4.7 底径7.2	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	暗灰色	2mm大の白色礫少 1mm大の砂粒多		D-21
11	須恵器有台杯	3	9-J SB02 Pit 380	口径11.5 器高4.3 底径7.5	内・外：ヨコナデ 底：全面ナデ ヘラ切り痕	暗灰色	1mm大の砂粒少， 黒色粒少		D-15
12	須恵器有台杯	3	9-J SB02 Pit 532	口径11.6	内・外：ヨコナデ	淡灰色	1～2mm大の白色礫少		D-22
13	須恵器有台杯	3	9-J SB02 Pit 532	口径11.7	内・外：ヨコナデ	淡灰色	1～2mm大の白色礫多		890694
14	須恵器甕	3	9-J SB02 Pit 478		内：同心円文 外：平行タタキ後カキメ	淡灰色	2～3mm大の白色礫少		890693
15	土師器椀	3	9-J SB02 Pit 380上面	口径16.0	内：ヨコナデ後ミガキ 内黒 外：ヨコナデ	内：黒色 外：明褐色	1mm大の砂粒少		D-127

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
16	須恵器杯身	3	10-I SA01 Pit 423	口径12.2 器高8.0 底径4.0	内：外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ ヘラ切り痕明瞭	淡灰色	1～3mm大の白色 礫少，1mm以下砂 粒多		D-13
17	土師質土器皿	2	SE203	口径13.3 器高2.6 底径8.6	内：ヨコナデ 外：口縁部ナデ	淡橙褐色	1mm大の砂粒少		D-147
18	土師質土器皿	2	SE203	口径15.4 器高2.4 底径10.4	内：ヨコナデ 外：口縁部ヨコナデ 手づくね	暗黄褐色	1mm以下の砂粒少		D-148
19	須恵器盤	3	SK301	口径15.7 器高2.0 底径12.2	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ ヘラ切り痕	淡灰色	1mm以下の砂粒少		D-112
20	白磁碗	1	10-E SK 5	底径7.0	貫入なし	灰白色，やや緑 味おびる	灰白色，緻密		D-51
21	須恵器鉢	3	8-K SK301	口径25.4	内・外：ヨコナデ	淡灰色	1mm大の砂粒少		D-111
22	珠洲焼片口鉢	2	SK23		内：ヨコナデ 外：ヨコナデ後卸し目 12条	暗灰褐色	砂粒含まず緻密		D-149
23	須恵器杯蓋	3	9-I SK302	口径15.6	内・外：ヨコナデ	淡灰色	1mm以下の砂粒多		D-110
24									D-26
25	土師器碗	3	9-J SK316上面	底径5.2	内：ヘラミガキ，内黒 底：糸切り	内：黒色 外：淡褐色	1mm大の砂粒少		D-27
26	土師器有台椀	3	9-J SK316上面	底径11.9	内：ヘラミガキ，内黒 外：赤彩 底：ヘラ切り痕	内：黒色 外：淡褐色	1mm大の砂粒少		D-28
27	須恵器杯蓋	3	8-J SK327上面	口径11.4 器高(2.2)	内・外：ヨコナデ	淡灰色	1～3mm大の白色 礫少		D-23
28	須恵器杯蓋	3	8-G・J SK338		内・外：ヨコナデ	暗灰色	砂粒含まず緻密		D-114
29	須恵器盤	3	10-K SK333	口径15.1 器高2.0 底径11.5	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡灰色	1mm大の砂粒少		D-25
30	須恵器杯身	3	10-K SK333	口径13.3 器高3.4 底径6.9	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ ヘラ切り痕	淡灰褐色	3～5mm大の白色 粒やや多		D-24

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
31	須恵器瓶	3	8・9-J SK338	口径21.9	内・外：ヨコナデ 口縁外面に自然釉	暗灰色	砂粒含まず緻密		D-113
32	須恵器杯身	3	8・9-J SK340	口径12.5 器高3.8 底径8.3	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ へら切り痕	灰褐色	2～3mm大の白色 礫やや多		D-116
33	須恵器杯身	3	10-K SK340	口径12.2 器高3.3 底径6.2	内・外：ヨコナデ	淡黄褐色	1～3mm大の白色 礫やや多		D-47
34	須恵器甕	1	23-D SD 2	口径22.4	内：同心円文 外：平行タタキ	青灰色			
35	須恵器杯蓋	3	5-J SD 5 上面 黒褐色粘	口径15.9	内・外：ヨコナデ 外：ケズリ	灰色	1mm前後の砂粒少		D-86
36	須恵器杯身	2	SD 5 黒色粘	口径11.6 器高3.3 底径7.8	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	青灰色	1～2mm大の白色 礫少		D-44
37	須恵器杯身	2	SD 5 上面	口径11.7 器高3.8 底径8.9	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ へら切り痕	淡灰色 橙褐色	1～3mm大の白色 礫多		D-48
38	須恵器杯身	1	7-D SD 5 暗灰粘	口径12.8 器高3.7 底径8.6	内・外：ヨコナデ 底：ナデ へら切り痕	淡灰色	1～2mm大の白色 礫少		890687
39	須恵器杯身	2	SD 5 上面	口径11.6 器高(3.6) 底径8.2	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡灰色	1～2mm大の白色 礫少		D-45
40	須恵器杯身	1	7-D SD 5 暗灰粘	口径12.2 器高2.8 底径10.4	内・外：ヨコナデ 底：ナデ へら切り痕	灰白色	1～2mm大の白色 少		890688
41	須恵器杯身	1	7-C SD 5 暗灰粘	口径12.2 器高(3.7) 底径8.0	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡灰色	2～3mm, 1cm大 の白色礫		D-65
42	須恵器杯身	2	SD 5 上面	口径12.1 器高4.2 底径9.1	内・外：ヨコナデ 底：不明	淡灰白色	2mm前後の白色礫 多, 砂粒多		D-131
43	須恵器杯身	1	6-C SD 5 黄褐粘	口径14.2 器高3.6 底径10.0	内・外：ヨコナデ 底：ナデ へら切り痕	青灰色	2mm大の白色礫少, 1mm以下の砂粒多		D-64
44	須恵器杯身	2	SD 5 上面	口径11.4 器高3.0 底径8.2	内・外：ヨコナデ 底：周縁部不定方向ナ デ, へら切り痕	青灰色	1～2mm大の白色 粒少, 黒色の吹き 出し少		D-49
45	須恵器杯身	2	SD 5 上面	口径13.6 器高3.3 底径9.2	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ へら切り痕	淡灰白色	1mm前後の砂粒少, 海綿骨片少		890685

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
46	須恵器杯身	2	SD 5 上面	口径11.8 器高3.2 底径7.4	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	青灰色	1 mm前後の砂粒少		890691
47	須恵器杯身	2	SD 上面	口径11.9 器高3.1 底径7.9	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ナデ へら切り痕	青灰色	2～3 mm大の白色礫，1 mm以下の砂粒少	底部外面に墨書「午」	D-43
48	須恵器有台杯	2	SD 5 上面	口径11.7 器高3.8 底径8.9	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ヨコナデ へら切り痕	淡灰色	1～3 mm大の白色礫少	底部外面に墨書「口」	D-46
49	須恵器有台杯	2	SD 5 黒灰粘	口径11.9 器高4.4 底径8.5	内・外：ヨコナデ 底：周縁部ヨコナデ へら切り痕	青灰色	2 mm以下の白色粒多		D-74
50	須恵器有台杯	2	SD 5 上面	底径11.6	内：不定方向ナデ 底：不定方向ナデ	灰橙褐色	2～3 mm大の白色礫多		890686
51	須恵器杯蓋	1	8-D SD 6 暗灰粘	口径12.6 器高(2.0)	内・外：ヨコナデ 天井：不定方向ナデ へら切り痕	青灰色	1～2 mm大の白色礫少		D-67
52	須恵器杯身	1	9-E SD 6 黄褐色粘	口径12.4 器高3.4 底径9.4	内・外：ヨコナデ 底：ナデ へら切り痕	灰白色	1 mm以下の砂粒少		D-63
53	須恵器杯蓋	1	9-D SD 7 検出面	口径16.0 器高(1.8)	内・外：ヨコナデ	淡灰色	2 mm以下の白色礫多		
54	須恵器有台杯	1	9-D SD 7 検出面	底径8.6	内・外：ヨコナデ 底：ヨコナデ へら切り痕	淡灰色	精良，1 mm以下の砂粒少		
55	須恵器稜椀	1	9-D SD 7 検出面	口径16.4 器高5.9 底径10.9	内・外：ヨコナデ 稜は粘土粗貼り付け 底：ナデ？	灰白色	1～3 mm大の白色礫少		D-50
56	須恵器甕	1	9-D SD 7 検出面		内：同心円文 外：平行タタキ後粗いカキメ	灰色	1 mm以下の砂粒多		890690 890689
57	土師器甕	2	15-A・B SD206	口径20.7 器高(25.0) 底径6.0	内：ヨコナデ 外：上半カキメ，下半へらケズリ	淡黄橙色	1 mm以下の白色礫		89488
58	須恵器杯身	2	SD208 拡張部	口径13.8 器高3.5 底径10.1	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ へら切り痕	淡灰色	1～2 mmの白色礫少		D-126
59	須恵器杯身	2	SD208 ①	口径12.0 器高3.2 底径8.6	内・外：ヨコナデ 底：周縁部不定方向ナデ，へら切り痕	濃青灰色	1～2 mmの白色礫少		D-35
60	須恵器杯身	2	SD208 ③	口径12.9 器高3.5 底径7.8	内・外：ヨコナデ 底：周縁部不安定方向ナデ，へら切り痕	淡灰白色	1～2 mmの白色礫少		D-33

挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
61	須恵器有台杯	2	SD208 拡張部	口径10.4	内・外：ヨコナデ	暗灰褐色	1mm以下の砂粒少		D-42
62	須恵器有台杯	2	SD208 ②	口径11.6 器高4.1 底径8.1	内・外：ヨコナデ 底：へら切り未調整	暗青灰色	2～4mm大の白色礫多	転用硯（底部外面に墨痕）	D-34
63	須恵器有台杯	2	SD208	底径11.9 器高(5.9)	内・外：ヨコナデ	淡灰白色	1mm以下の砂粒少		D-132
64	須恵器鉢	2	SD208	口径13.8	内・外：ヨコナデ	灰色	1mm以下の砂粒少		D-41
65	須恵器稜椀	2	SD208	底径11.8 高台高1.8	内・外：ヨコナデ	暗灰色	1mm以下の砂粒多		D-38
66	土師器甕	2	SD208	底径8.0	内・外：ヨコナデ 底部：回転糸切り	内：橙褐色 外：暗褐色	1mm大の白色礫少	外面に炭化物付着	D-36
67	須恵器甕	2	SD208	口径28.4	内：同心円文 外：平行タタキ後カキメ	青灰色	2mm大の白色礫少		D-39
68	土師器有台椀	2	SD208 ⑤	口径16.0 器高5.4 底径5.7	調整不明瞭 内黒	淡黄褐色	1mm以下の砂粒少、 海綿骨片		D-32
69	土師器甕	2		口径25.2	内・外：カキメ	淡黄褐色	1～2mmの白色礫多		D-135
70	土師器甕	2	SD208	口径14.7	内・外：ヨコナデ	淡黄褐色	1～2mmの白色礫多	口縁部内・外面黒変	D-134
71	土師器甕	2	SD208	口径13.6	内・外：ヨコナデ	暗褐色	1mm大の白色礫少	66と同一個体か	D-133
72	須恵器小形壺	2	SD210	底径5.2 器高(5.1)	内：ヨコナデ 外：上半部ヨコナデ 下半部へらケズリ 底：へら切り未調整	淡黄白色	1～2mmの白色礫少		D-37
73	須恵器杯蓋	3	8-J SD301 上部 (5)	口径12.3 器高2.4	内・外：ヨコナデ 天井部：不定方向ナデ へら切り痕	淡灰色	2～3mmの白色礫中		D-59
74	須恵器杯身	3	8-J SD301 上部 (5)	口径13.4 器高3.5 底径8.4	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	淡灰色	2～4mm大の白色礫多		D-58
75	須恵器有台杯	3	8-I SD302 SD302-2 検出面	口径11.1 器高4.2 底径7.9	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ へら切り痕、へら 記号「×」	青灰色	1～3mm大の白色礫多	体部外面に墨書「上」	D-61

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
76	須 恵 器 甕	3	8-J SD302	把手部径 (25.0)	内・外：ヨコナデ	青灰色	1mm以下の砂粒少		D-62
77	須 恵 器 鉢	3	8-I SD302-2	口径22.5	内・外：カキメ	青灰色	1mm以下の砂粒多		D-60
78	須恵器杯身	3	10-J SD305 SK359上面	口径12.1 器高3.1 底径9.3	内・名：ヨコナデ 底：不定方向ナデ ヘラ切り痕	淡灰色	2mm大の砂粒少	同一個体	D-56
79	須恵器杯身	3	10-H, J SD305上面						D-53
80	須恵器杯身	3	11-J SD305南	口径12.8 器高3.8 底径9.1	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ ヘラ切り痕	灰白色	1~3mmの白色礫 やや多		D-52
81	灰 釉 椀	3	10・11-J SD305	底径6.8	内・外：ヨコナデ	灰白色	精良		D-54
82	須恵器杯蓋	3	10-I SD307	口径13.8 器高(1.3)	内・外：ヨコナデ 天井部：ヘラ切り痕	青灰色	2mm以下の白色礫 少		890692
83	須恵器杯身	3	10-J SD311東	口径12.4 器高3.9 底径9.0	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ ヘラ切り痕	淡灰色	1~2mmの白色礫 少		D-55
84	須恵器杯身	3	10-I SD307 北側上層	口径11.5 器高2.9 底径8.3	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	淡灰色	1mm以下の砂粒少		D-115
85	須恵器有台杯	3	10-J SD311東	口径11.3 器高4.3 底径7.1	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	青灰色	1~2mmの白色礫 少		D-57
86	須恵器杯蓋	3	9-J Pit 461	口径12.1 器高2.9	内・外：ヨコナデ	暗灰色	1mm以下の砂粒少		D-12
87	須恵器杯蓋	3	8-J Pit 397	口径12.2 器高2.7	内・外：ヨコナデ 天井部：ヨコナデ ヘラ切り痕	暗青灰色	1mm以下の砂粒少		D-14
88	須恵器杯蓋	3	8-1 Pit 392	口径18.6 器高(2.1)	内・外：ヨコナデ 天井部：ヨコナデ ヘラ切り痕	淡灰色	1mm以下の砂粒極 少		D-97
89	須恵器杯身	3	10-I Pit 446	口径14.1 器高3.6 底径8.8	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ ヘラ切り痕	淡灰白色	1~2mmの白色礫 少		D-109
90	須恵器杯身	3	8-J Pit 316	口径13.6	内・外：ヨコナデ	淡灰色	2mm大の白色礫少		D-19

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
91	須 恵 器 盤	3	Pit 344	口径15.4 器高2.0 底径13.0	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	暗灰色	1 mm以下の砂粒少		D-124
92	須 恵 器 盤	3	8-J Pit 550	口径14.7 器高1.7 底径11.3	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	青灰色	1 mm以下の砂粒少		D-99
93	須 恵 器 盤	3	8-I Pit 392	底径12.2	底：不定方向ナデ ヘラ切り痕	淡灰色	1～2 mmの白色礫 少	底部外面に墨 書「口」	D-95
94	須恵器長頸壺	3	8-I Pit 392	口径12.4	内・外：ヨコナデ	灰色	1～2 mmの白色礫 少		D-96
95	土師器有台碗	3	10-J Pit 474	底径7.3	内：ヘラミガキ 内黒 外：ナデ	淡褐色	精良		D-100
96	土 師 器 碗	2	16-A 柱穴 2	口径15.1 器高4.4 底径5.4	内：不明 外：ヨコナデ 底部：糸切り	灰白色	海綿骨片		D-29
97	土師質土器皿	2	11-B 柱穴66	口径14.2 器高(2.8) 底径5.7	内・外：ナデ	黄橙色	砂粒少, 海綿骨片		D-31
98	土師質土器皿	2	15-A 柱穴15	口径9.0 器高2.1 底径4.0	内・外：不明 底：回転糸切り	橙色	砂粒少		D-146
99	土師質土器皿	2	柱穴65	口径9.3 器高2.2 底径4.4	内・外：不明 底：回転糸切り	淡黄色	1 mm以下の砂粒多		D-30
100	加 賀 焼 甕	2	14-A 柱穴45	口径22.7	内・外：ヨコナデ 外面～口縁内面に厚く 自然釉	灰黄褐色	2～3 mmの砂粒多		D-150
101	須恵器杯蓋	3	7-I	口径12.2 器高(2.6)	内・外：ヨコナデ 天井：不定方向ナデ	淡灰色	1 mm以下の砂粒少		D-84
102	須恵器杯蓋	1	9-D	口径11.4 器高2.5	内・外：ヨコナデ 天井：ヨコナデ	暗灰色	2～4 mm大の白色 礫少		D-75
103	須恵器杯蓋	3	9・10-J	口径12.8 器高3.1	内・外：ヨコナデ 天井：ヨコナデ	淡灰色	2～3 mmの白色礫 中		D-92
104	須恵器杯蓋	1	分布調査 1トレンチ	口径11.8	内・外：ヨコナデ 天井：不定方向ナデ	淡灰色	1～2 mmの白色礫 やや多		D-79
105	須恵器杯蓋	1	9-D	口径11.9 器高2.8	内・外：ヨコナデ 天井：周縁部に弱いナ デヘラ切り痕	青灰色	1～3 mmの白色礫 多		D-76

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
106	須恵器杯蓋	3	8-J	口径13.1 器高2.7	内・外：ヨコナデ 天井：ヨコナデ	淡灰色	1mm大の白色礫少		D-9
107	須恵器杯蓋	1	5-D	口径12.3 器高2.7	内・外：ヨコナデ 天井：弱いナデ へら切り痕	淡灰色	2～3mmの白色礫 多		D-130
108	須恵器杯蓋	3	8-I	口径15.2 器高(2.3)	内・外：ヨコナデ 天井：不定方向ナデ へら切り痕	淡灰色	1～2mmの白色礫 少		D-118
109	須恵器杯蓋	3	9-J	口径16.3 器高2.6	内・外：ヨコナデ 天井：ヨコナデ	淡灰褐色	1mm以下の砂粒少		D-91
110	須恵器杯蓋	3	9-J	口径18.8 器高(2.8)	内・外：ヨコナデ 天井：ヨコナデ	灰色	1mm以下の砂粒少		D-94
111	須恵器杯蓋	3	8-J		内・外：ヨコナデ 天井：不定方向ナデ へら切り痕	暗青灰色	1mm以下の砂粒少		D-119
112	須恵器杯蓋	3	10・11-H		内・外：ヨコナデ 天井：弱いナデ へら切り痕	灰白色	1mm以下の砂粒少		D-88
113	須恵器杯身	1	9-E	口径12.9 器高3.9 底径9.3	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	淡灰色	1～2mmの白色礫 少		D-71
114	須恵器杯身	3	8-J	口径12.6 器高4.0 底径8.0	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ へら切り痕	淡黄灰色	1～3mmの白色礫 やや多		D-40
115	須恵器杯身	3		口径12.4 器高3.2 底径8.0	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ へら切り痕	暗灰色	2～3mmの白色礫 少		D-1
116	須恵器杯身	3	7-J	底径8.0	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ へら切り痕 へら記号「X」	淡灰色	1～2mmの白色礫 少	底部外面に墨 書「平」	D-2
117	須恵器杯身	1	7-E	口径14.0 器高3.6 底径10.3	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ へら切り痕	淡緑灰色	2mm大の白色礫少		D-70
118	須恵器杯身	3	7-I	口径12.8 器高3.2 底径8.0	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ へら切り痕	淡灰色	1～2mmの白色礫 やや多		D-122
119	須恵器杯身	3	8-J	口径12.8 器高3.6 底径8.0	内・外：ヨコナデ 底：弱いナデ へら切り痕	灰白色	2mm大の白色礫少	底部外面に墨 書「口」	D-10
120	須恵器杯身	3	7-I	口径13.6 器高3.0 底径8.9	内・外：ミコナデ 底：弱い不定方向ナデ へら切り痕	淡灰色	1～2mmの白色礫 少		D-85

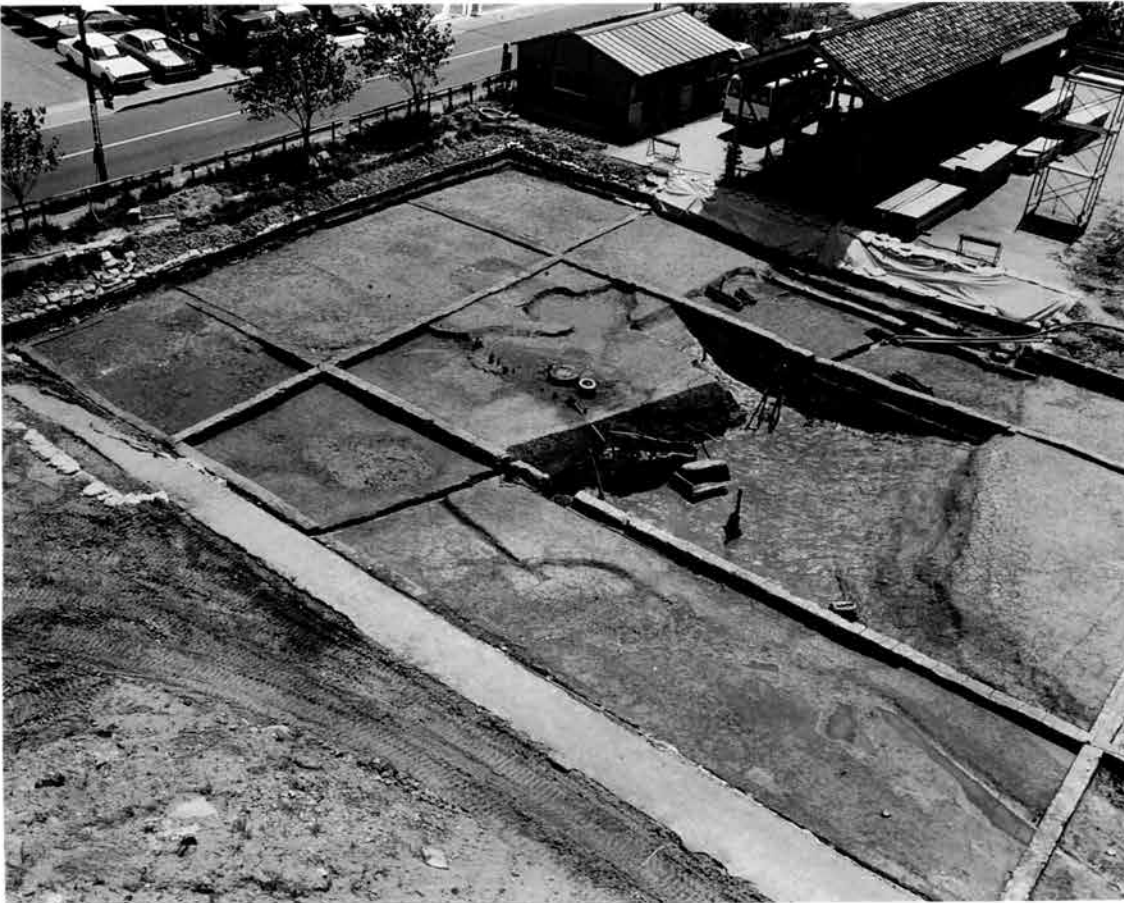
插图番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
121	須恵器杯身	3	9・10-J	口径13.0 器高3.1 底径7.7	内・外：ヨコナデ 底：ヨコナデ	灰色	1mm以下の砂粒少, 海綿骨片多		D-90
122	須恵器有台杯	3	9・10-J	口径11.6 器高4.4 底径8.5	内・外：ヨコナデ 底：ヨコナデ	暗黒灰色	1～2mmの白色礫 やや多		D-93
123	須恵器有台杯	3	7-I	口径11.7 器高4.0 底径8.6	内・外：ヨコナデ 底：ヨコナデ	灰色	1～2mmの砂粒少		D-6
124	須恵器有台杯	3	8-J	口径11.7 器高4.4 底径7.5	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	暗灰色	1mm大の砂粒少	底部内面に摩 滅痕	D-8
125	須恵器有台杯	1	7-D	口径12.2 器高3.5 底径8.6	内・外：ヨコナデ 底：ヨコナデ	暗灰褐色	1～2mmの白色礫 多	底部内面に摩 滅痕	D-72
126	須恵器有台杯	1	6-D	口径12.8 器高4.2 底径7.9	内・外：ヨコナデ 底：ナデ、ヘラ切り痕	淡灰色	1～2mmの白色礫 多		D-129
127	須恵器有台杯	2		口径13.3 器高4.4 底径7.2	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	灰色	2mm大の白色礫少 1～3mm大の黒色 斑多		D-73
128	須恵器盤	3	7-J	口径15.7 器高2.2 底径13.9	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ ヘラ切り痕	青灰色	1～2mmの白色礫 少		D-3
129	須恵器盤	3	7-J	口径17.2 器高2.0 底径13.1	内・外：ヨコナデ 底：不定方向ナデ	暗青灰色	1～2mmの砂粒少		D-125
130	須恵器盤	3	7-J	口径17.0 器高2.0 底径13.9	内・外：ヨコナデ 底：ヨコナデ、ヘラ切 り痕	淡灰色	1～3mmの白色礫 やや多	底部内面に摩 滅痕	D-123
131	須恵器高杯	3	7-J	脚部最小 径(4.2)	内・外：ヨコナデ	灰色	1mm大の砂粒少		D-107
132	須恵器鉢	3	7-I	口径27.8	内・外：ヨコナデ後カ キメ	暗灰色	1～3mmの白色礫 多		D-5
133	須恵器鉢	3	8-K	口径29.3	内・外：ヨコナデ	灰白色	海綿骨片少		D-102
134	須恵器鉢	3	7-J	口径29.2	内・外：ヨコナデ	淡灰色	1～2mmの白色礫 少		D-108
135	須恵器長頸壺	3	7-I	口径10.8	内・外：ヨコナデ	灰色	1～3mmの白色礫 少		D-120

挿図 番号	器 種	調査 年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色 調	胎 土	備 考	実測 番号
136	須恵器台付 長頸壺	1	7-C 7-E 8-D	胴部最大 径17.4 底径11.4	内・外：ヨコナデ 外面及び底部内面に緑 色自然釉	淡灰色	1mm以下の黒色斑 多		D-66
137	須恵器壺	3	10-I	口径10.0	内・外：ヨコナデ	灰色	砂粒含まず		D-83
138	須恵器壺	1	8-E	底径9.4	内・外：ヨコナデ 底：ヨコナデ	灰色	砂粒含まず		D-68
139	須恵器壺	3	8-J	底径12.8	内：指押え 外：上半ナデ, 下半ケ ズリ	黒灰色	1～2mmの砂粒少 キメ粗い		D-101
140	須恵器壺	3	10-J	底径12.0	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡灰色	1～2mmの砂粒少		D-87
141	須恵器双耳瓶	3	7-J		内・外：ヨコナデ	淡灰色	1～2mmの白色礫 やや多		D-106
142	須恵器双耳瓶	3	10-I	胴部最大 径17.6	内・外：ヨコナデ 肩部に自然釉	灰色	砂粒含まず		D-82
143	須恵器底口壺	3	9-I	口径17.4	内・外：ヨコナデ	灰色	2～3mmの白色礫 やや多		D-104
144	須恵器底口壺	3		底径18.6	内・外：ヨコナデ	淡灰色	2～3mmの白色礫 少		D-89
145	土師器有台椀	3	10-I	底径7.2	調整不明 内黒	黄橙褐色	1mm以下の砂粒や や多		D-80
146	土師器椀	3	9-I	底径7.4	調整不明	暗橙褐色	1mm以下の砂粒や や多		D-105
147	土師器甕	2	C棟区	口径20.7	内・外：カキメ	淡灰褐色	1～2mmの礫多		D-136
148	土師器甕	3	7-I	口径23.3	内・外：カキメ	淡灰黄色	1～3mmの白色礫 多	須恵質	D-121
149	灰 釉	3	11-J	底径7.1	内・外：ヨコナデ	淡灰白色	1～2mmの礫少	内面に重ね焼 痕	D-81
150	須恵器 (注口)	3		注口先端 径1.2	外：ヨコナデ	淡灰白色	砂粒含まず	外面に自然釉	D-103

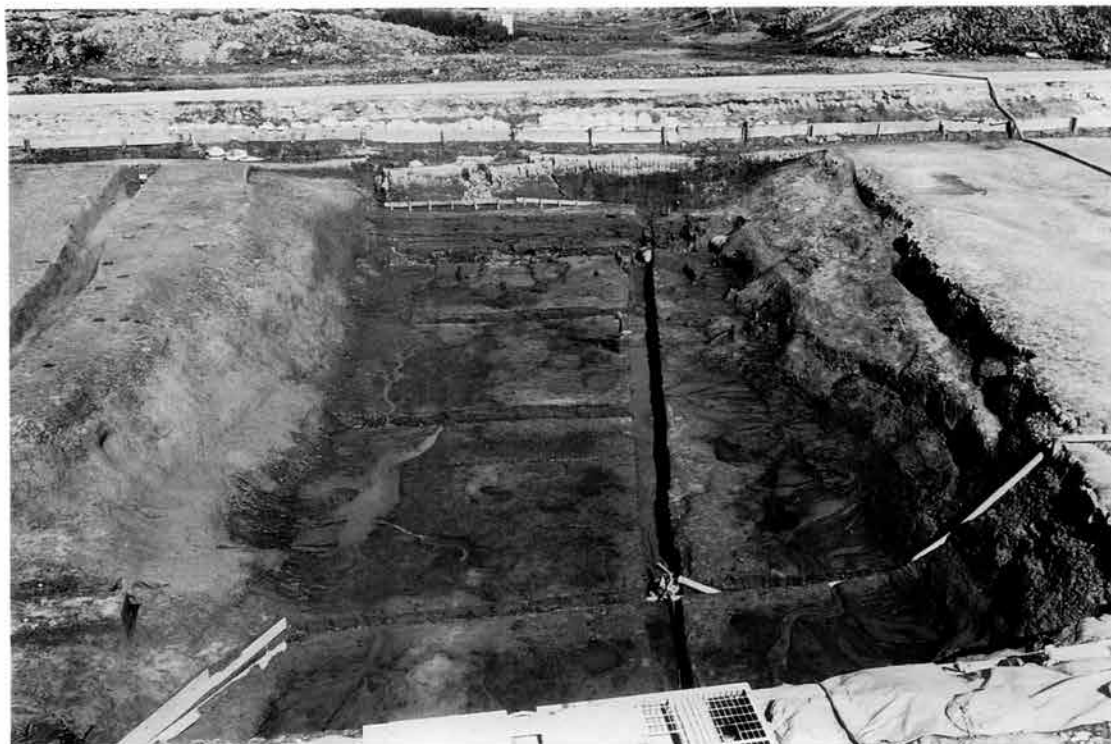
挿図番号	器種	調査年次	出土位置	法量 (cm)	技法の特徴	色調	胎土	備考	実測番号
151	青白磁合子蓋	3		口径5.8	貫入なし	緑灰白			D-7
152	青磁椀	3	7-K	口径17.2	内面に花卉文	灰オリーブ色			D-4
153	白磁椀	1	7-C	口径18.0	貫入なし	白色			D-69
154	加賀焼甕	3	8-K	口径17.3	内・外：ヨコナデ	淡褐色	3mm大の礫少		D-117
155	越前焼甕	1	8-D	底径9.1	内・外：ヨコナデ 底：糸切り痕	外：暗褐色 内：暗灰色	1mm以下の砂粒多		D-77
156	珠洲焼片口鉢	2	C棟区	口径32.5	内・外：ヨコナデ	暗灰色	2mm大の礫少		D-137
157	珠洲焼鉢	2	C棟区	底径18.0	外：不定方向ナデ 底：不定方向ナデ	灰白色	1mm大の砂粒少	内面に摩滅痕	D-138
158	土師質土器小皿	2	12-E	口径7.7 器高1.4	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡黄褐色	褐色粒，微砂粒少		D-144
159	土師質土器小皿	2	12-E	口径10.3 器高2.5 底径5.0	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	灰黄褐色	褐色粒多		D-139
160	土師質土器小皿	2	12-E	口径10.8 器高(2.7)	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡褐色	褐色粒少		D-143
161	土師質土器小皿	2	12-E	口径10.6 器高2.5 底径5.0	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡黄褐色	褐色粒，微砂粒少		D-141
162	土師質土器皿	2	12-E	口径12.2 器高1.8 底径9.0	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	灰白褐色	褐色粒少		D-142
163	土師質土器皿	2	12-E	口径13.0 器高1.5 底径8.5	内・外：ナデ 底：ナデ	灰黄褐色	微砂粒少		D-145
164	土師質土器皿	2	12-E	口径14.4 器高2.1 底径8.7	内・外：ヨコナデ 底：ナデ	淡黄褐色	1mm以下の褐色粒多		D-140



調査区全景



調査区全景



SD05 全景



遺物出土状況

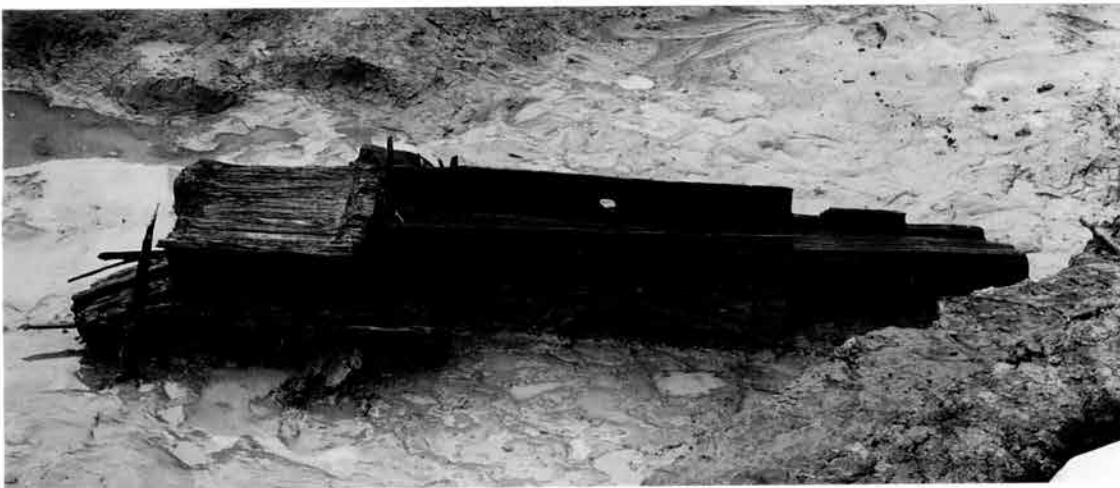




SD05・06



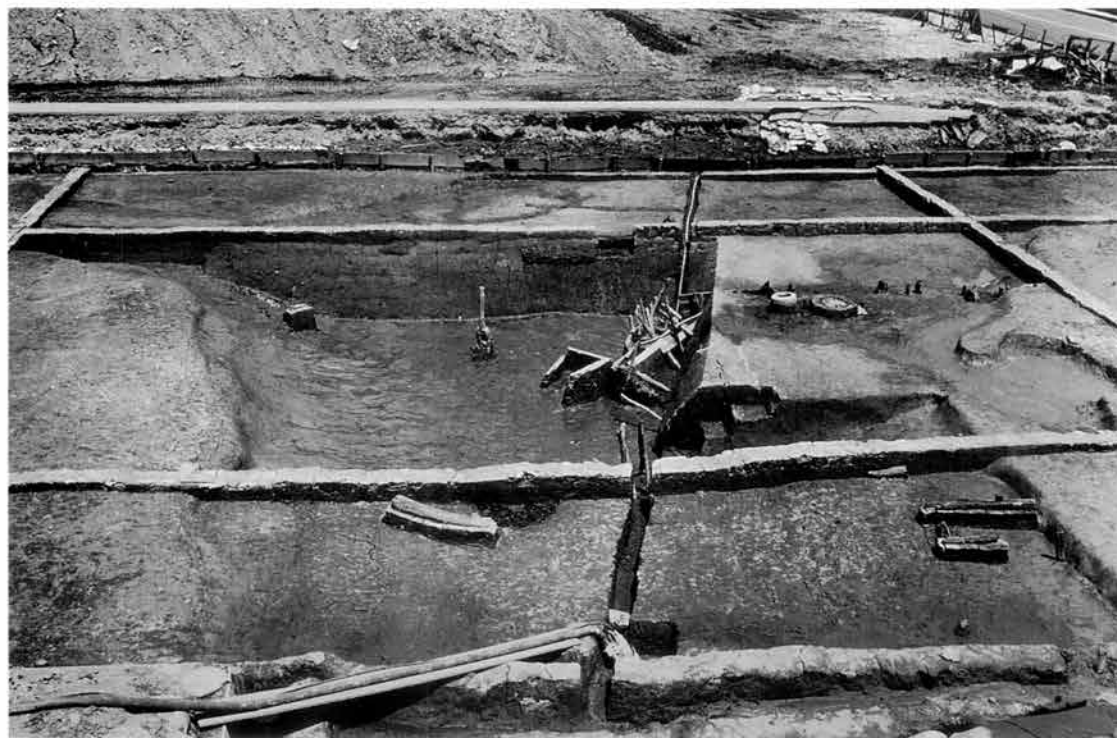
SD06



水利施設



SD02



SD02



SK05



SK02



調査区全景



調査区全景









SD305・307周辺



SD05 周辺



遺構集中地区



調査区全景



調査区全景



調査区全景
・作業風景



SB301



SB302



SB303

PL 12
第3次調査



SB301
(ピット
390)



SB302
(ピット
502)



SB302
(ピット
476)



SB302
(ピット
582)



SB302
(ピット
498)



SB302
(ピット
368)



SB302
(ピット
369)



SB304



SB305



SB306



SD308 周辺



SD301
・05 周辺

SK303
・304



SK309
・310



SK311
・312



SK310



SK312



SK314



SK318



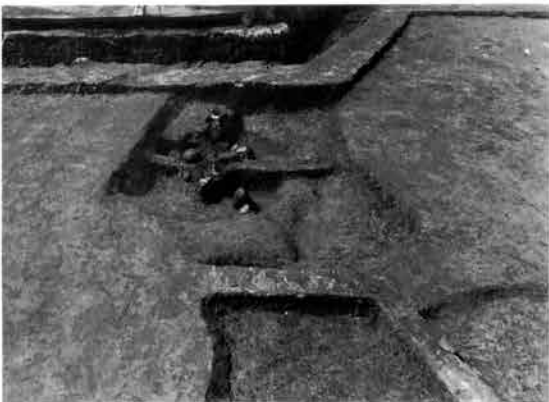
SK321



SK325
・326



SK331



PL
16

第3次調査

SK333



SK334

SK336



SK337

SK340



SK345

SK346



SK347

SK355



SK356



SD05



SD05



SD05 断面



SD301



SD301 断面



SD302



SD305
・307

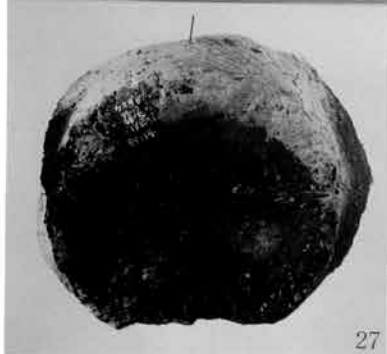
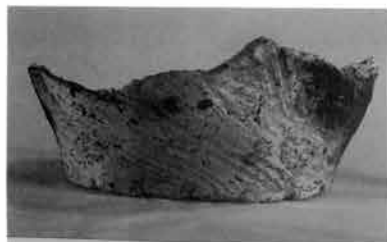
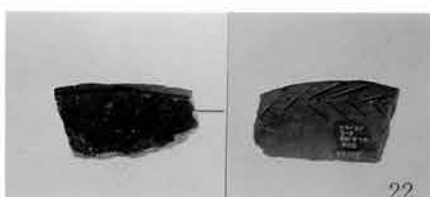
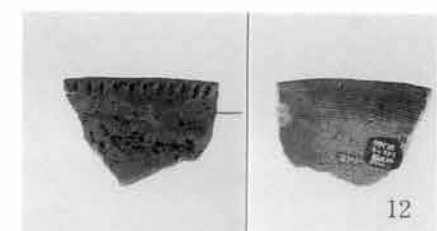
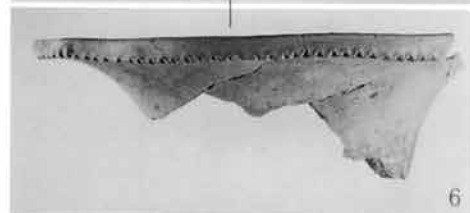
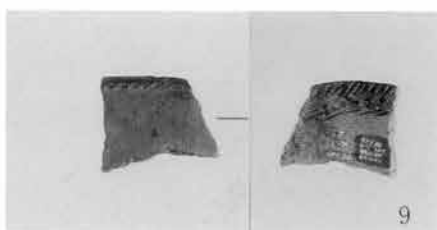
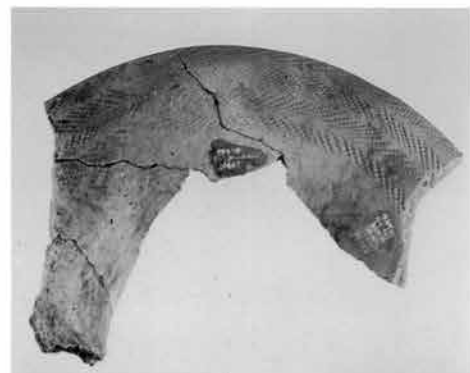
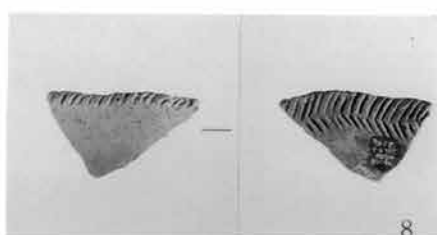
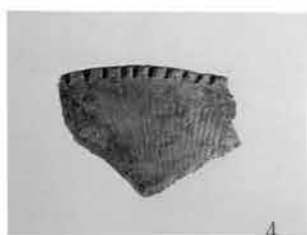


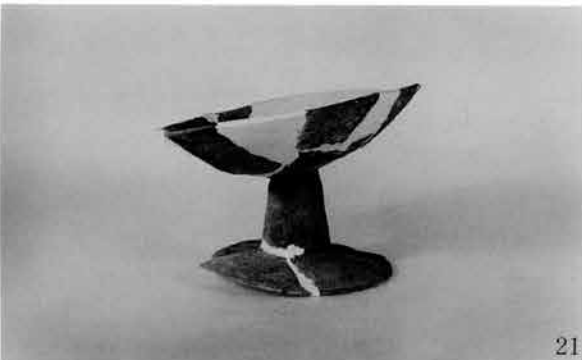
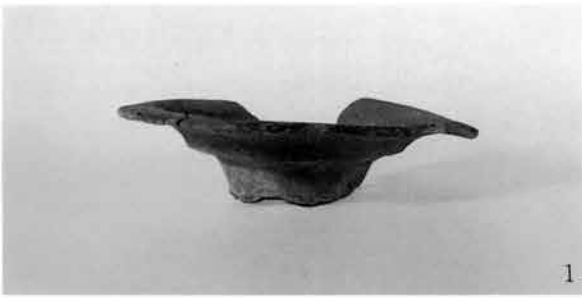
SD305
遺物出土状況



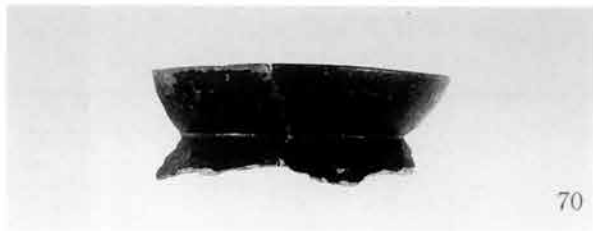
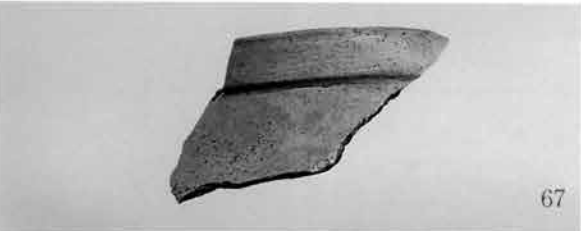
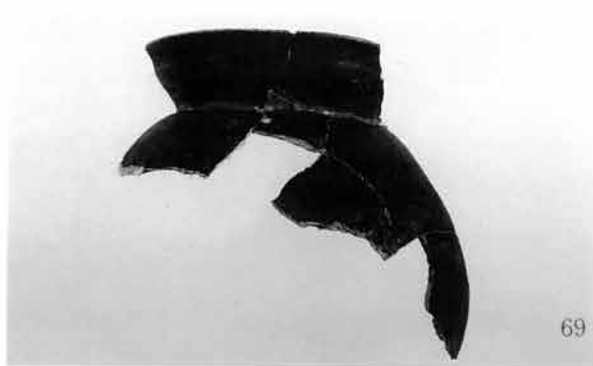
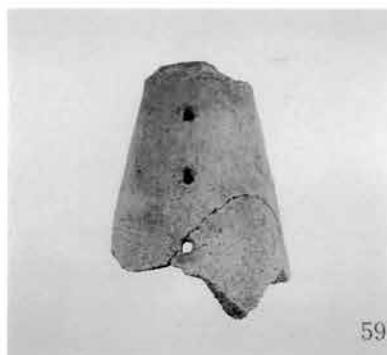
SD305・307
土層断面

PL 20 出土土器(弥生中期以前)











75



78



93



77



90



92



85



86



87



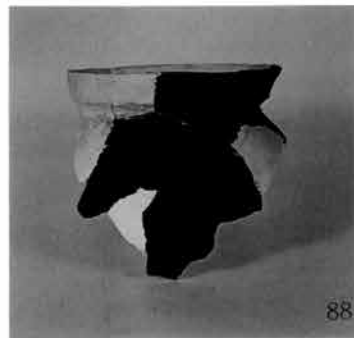
84



89



91



88



81



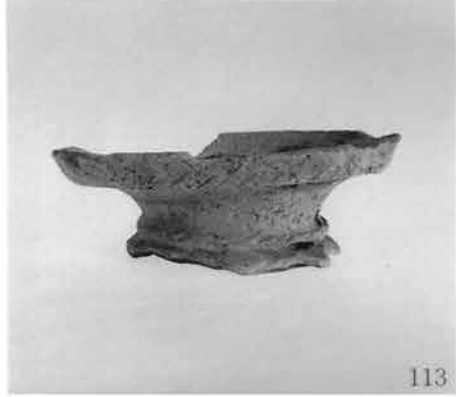
97



96



99





120



125



122



123



124



126



127



128



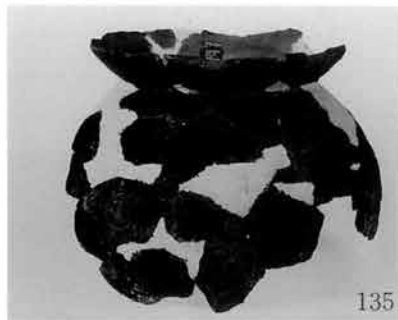
134



131



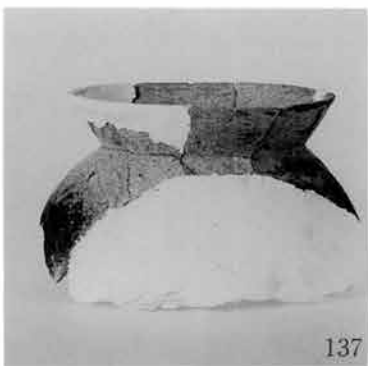
131



135



136



137



138

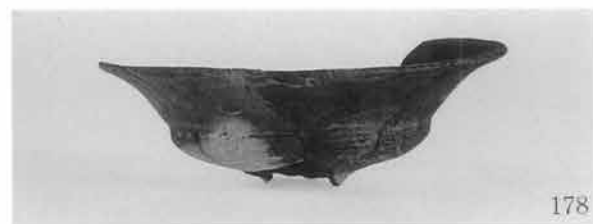


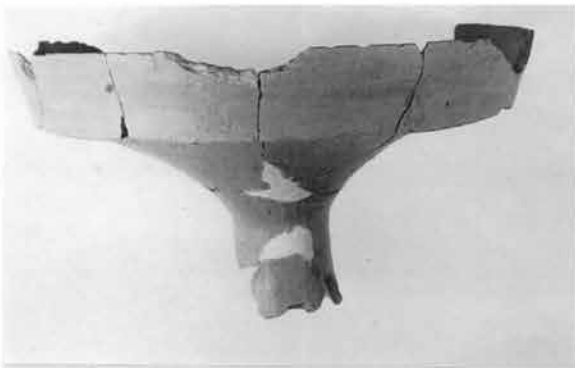
139



141







190



191



192



194



195



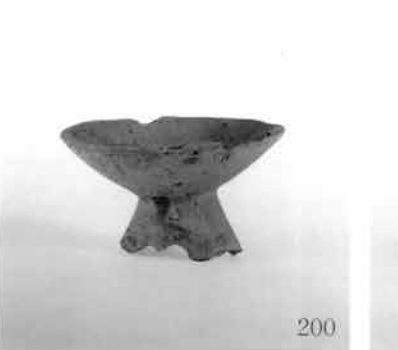
196



197



199



200



202



203



204



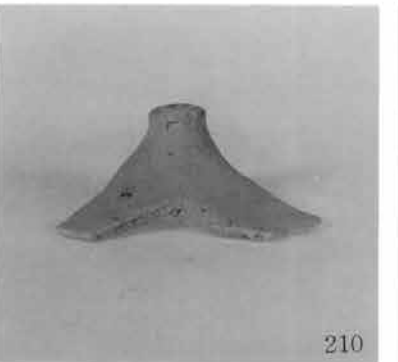
205



206



208



210



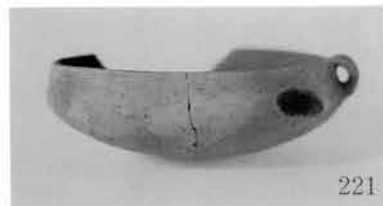
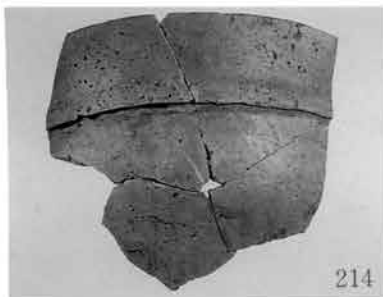
211



212



213





252



253



256



258



259



255



261



263



264



265



266



269



268



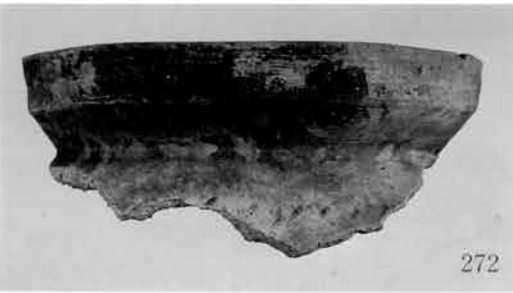
271



275



276



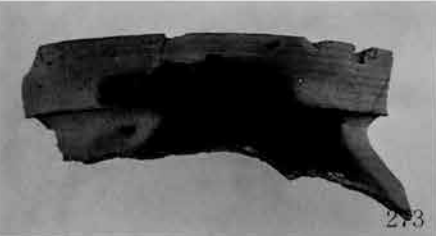
272



277



278



283



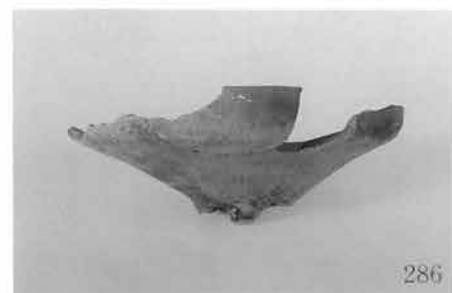
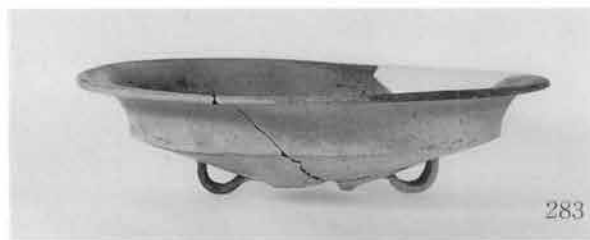
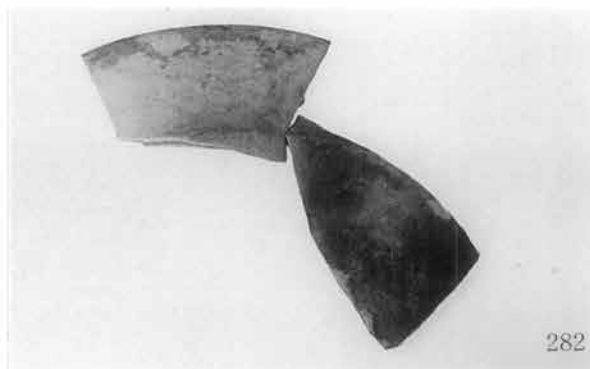
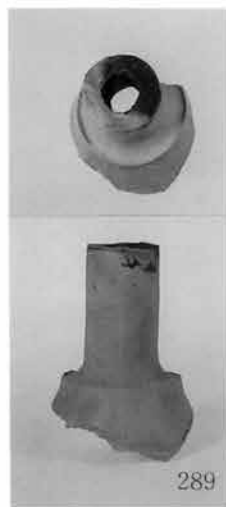
297



298



299





301



302



303



304



305



306



309



307



308



310



311



313



318



319



326



328



331



329



330



335



332



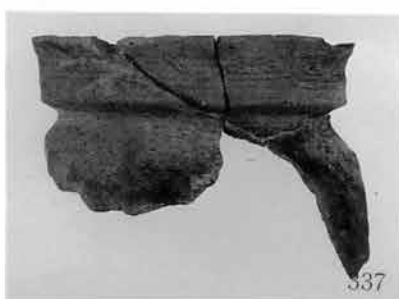
334

PL
33
S
D
06
•
305

PL 34
第3次調査
各土抔



336



337



338



339



342



344



346



354



357



349



353



358



350



366



351



362



368



367



363



370



369



364



371



372



374



377



379



384



385



388



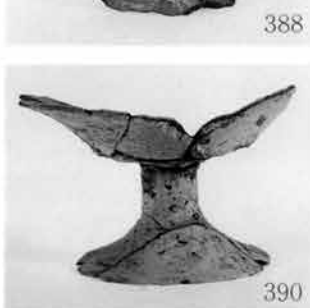
380



383



387



390



381



391



393



395



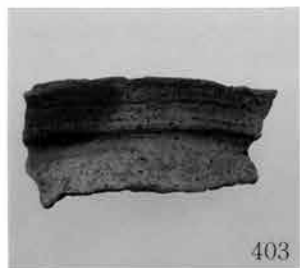
397



399



400



403



405



406



407



411



412



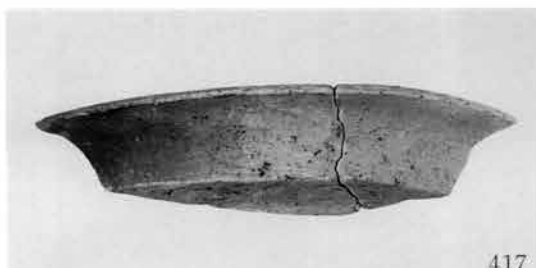
413



414



415

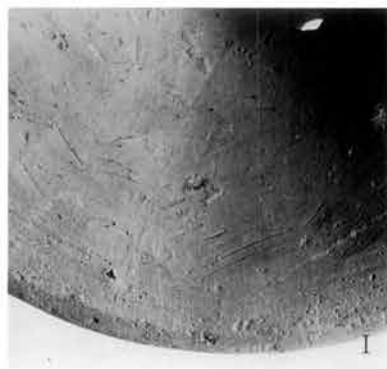
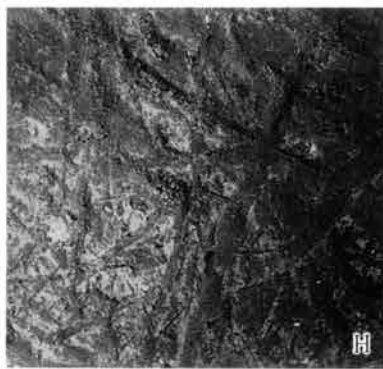
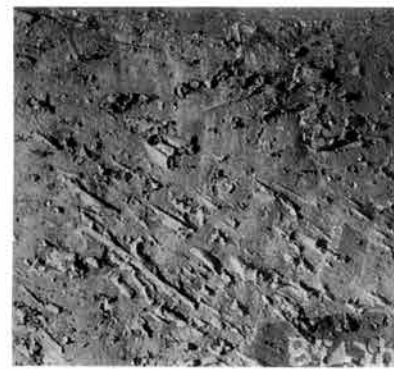
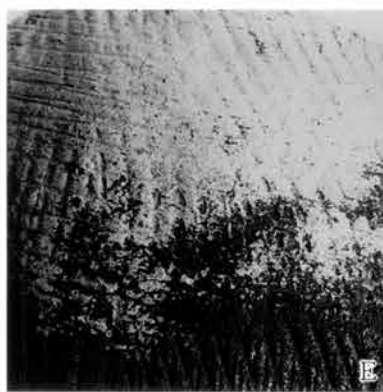
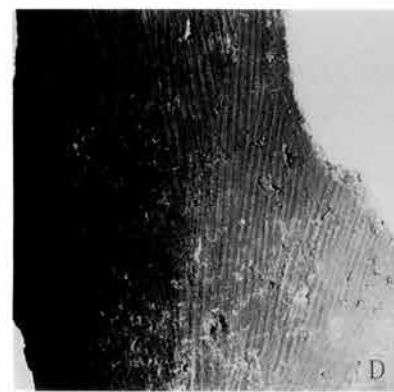
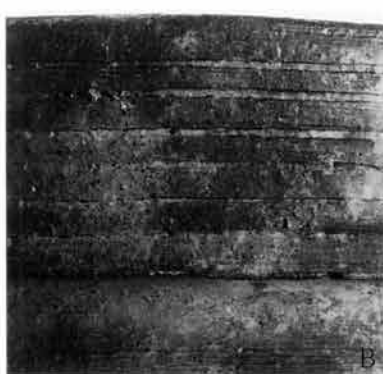


417

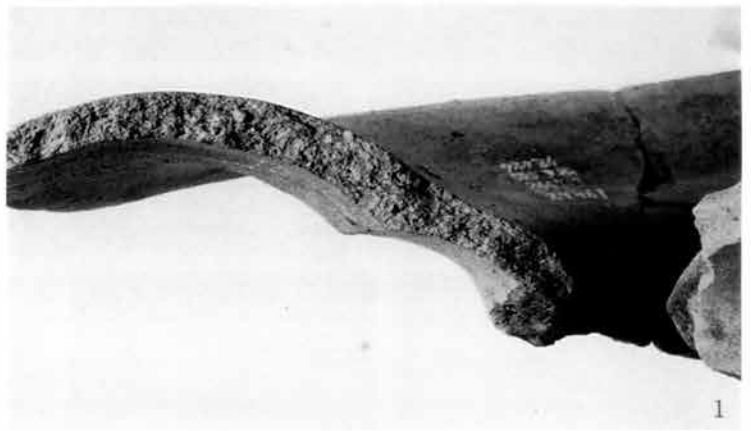
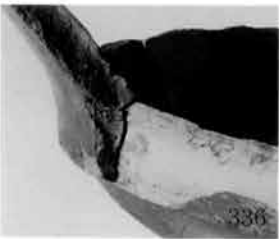
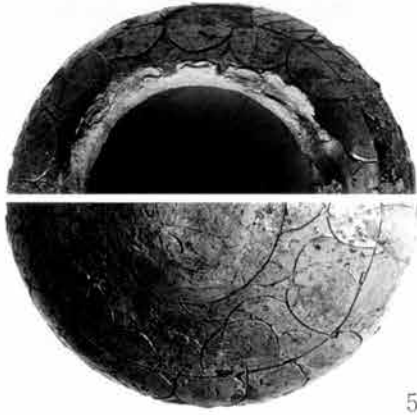


418

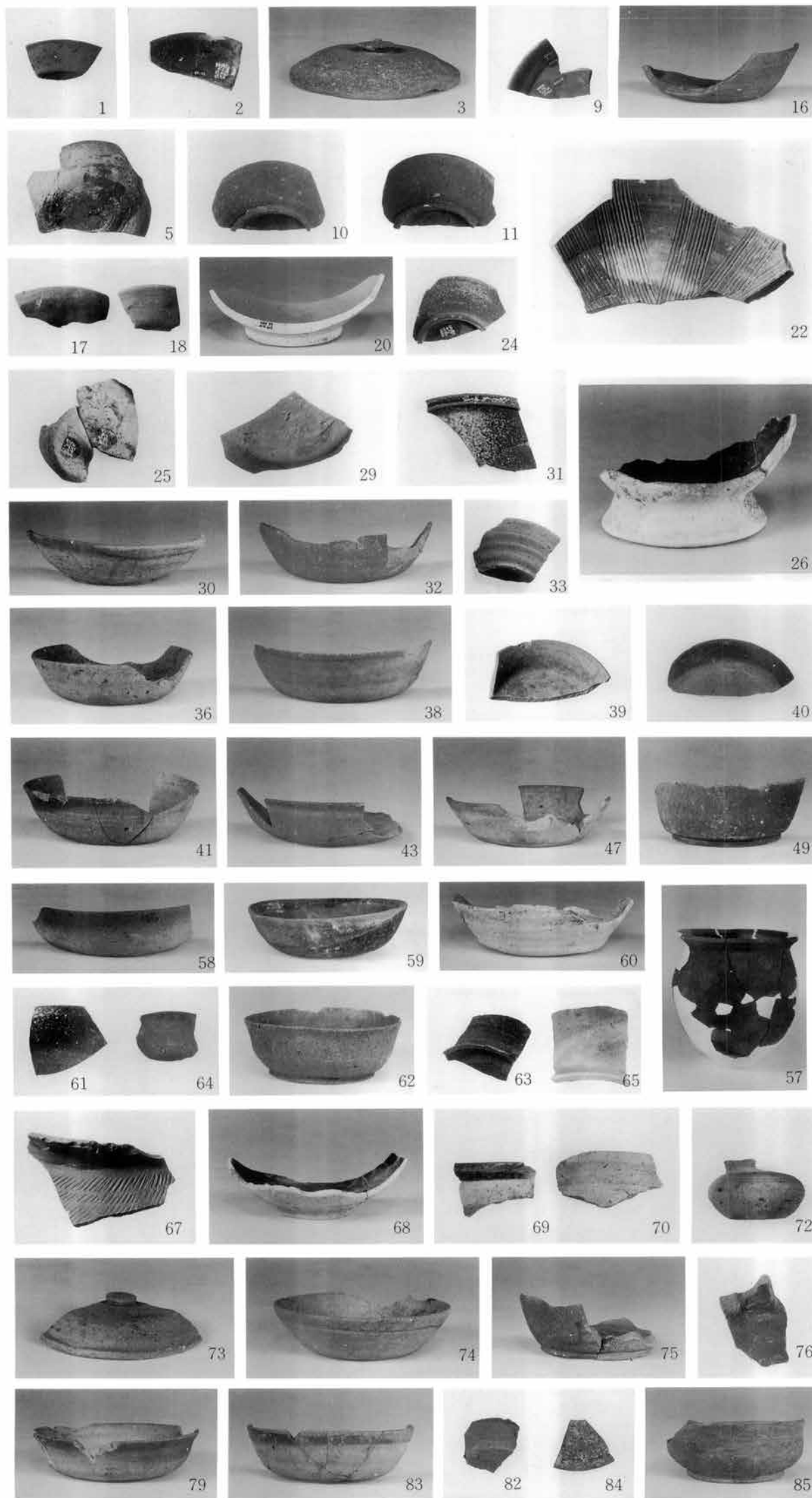
PL 36 各遺構、調整技法細部

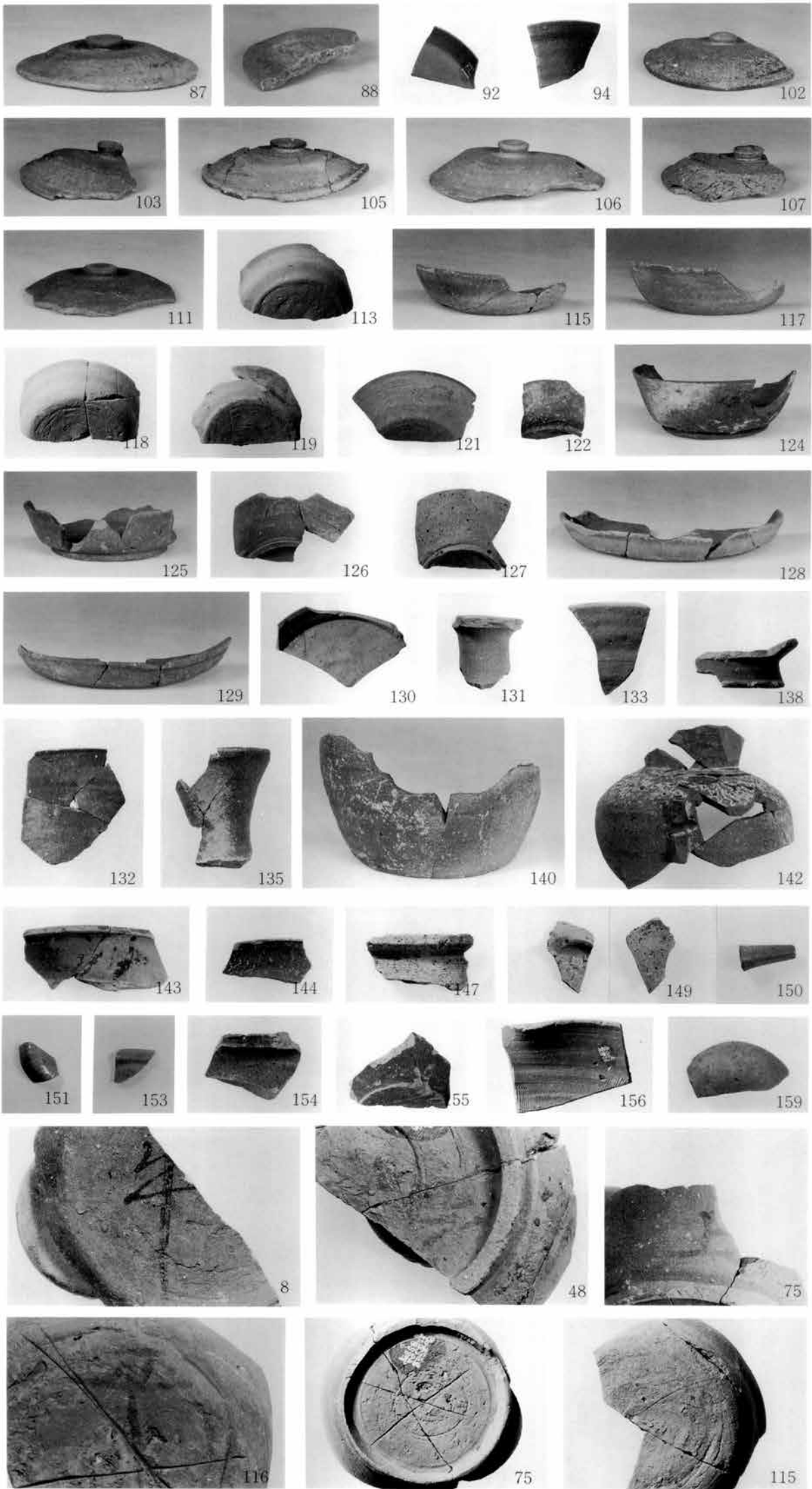


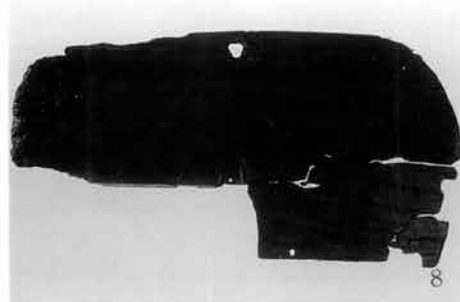
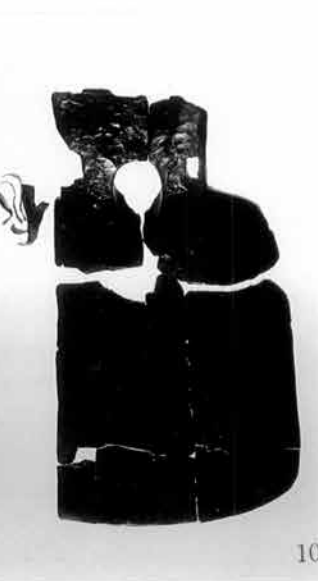
A 口縁部ナデ(板によるナデ)
 B 擬凹線
 C 内面指押え痕
 D ハケ
 E ハケ(粗)
 F ハケ(板ナデ)
 G ケズリ
 H ケズリ
 I ケズリ(軽い)



PL 38
奈良時代以降の土器
(1)









13



14



19



17



16



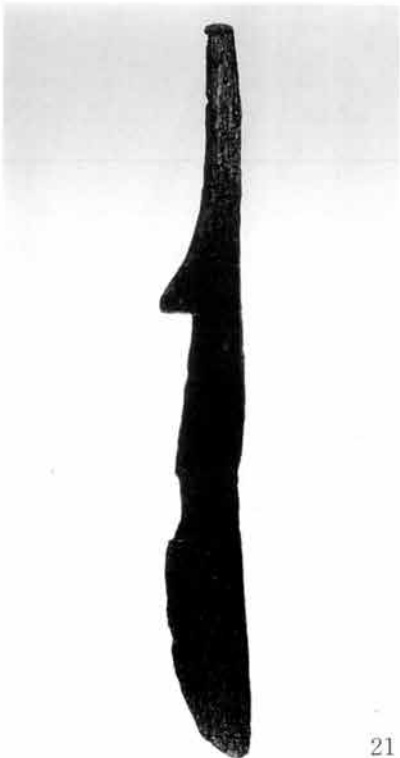
27



18



24



21



23



20



22



25



28



35



36



29



30



33



37



40



31



41



44



45



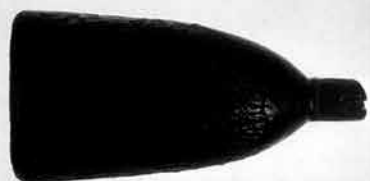
55



46



56



49



48



58



52



60



59



62



63



64



65



67



66



70



69



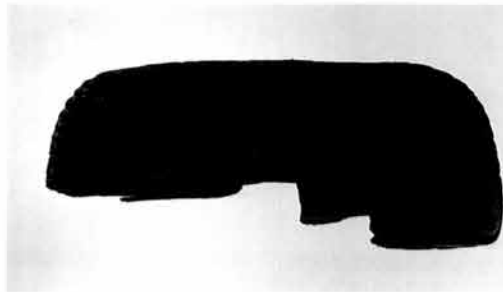
71



72



74



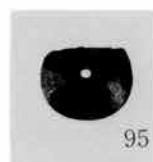
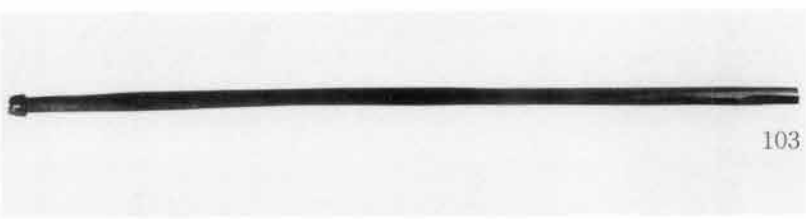
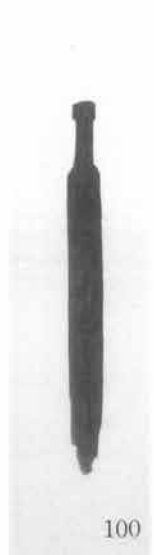
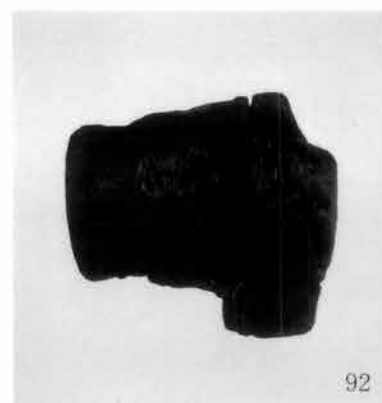
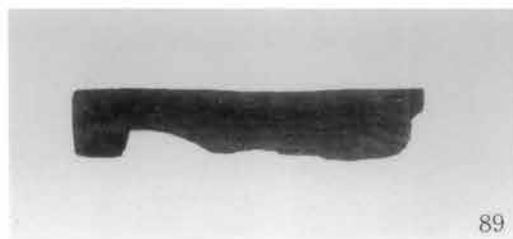
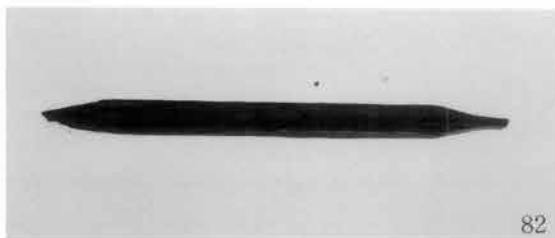
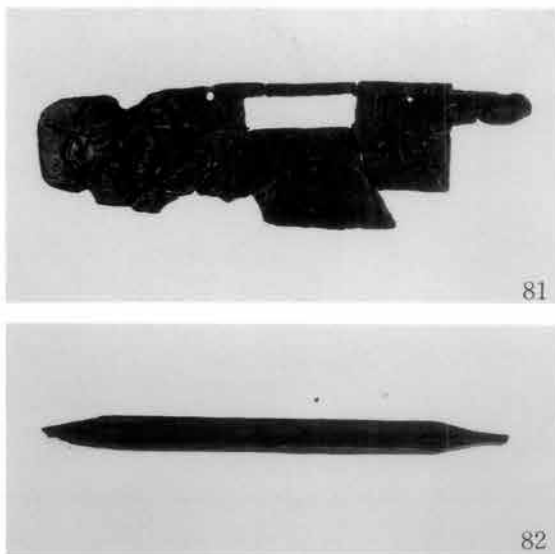
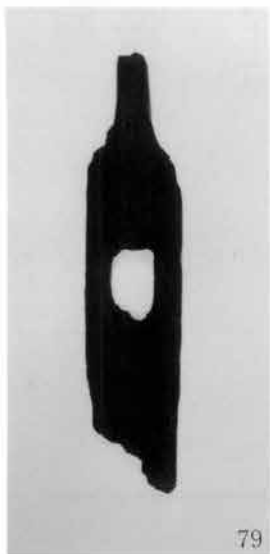
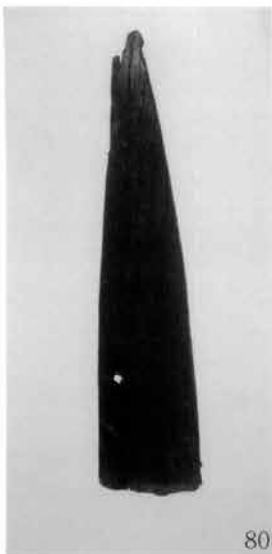
75



76



78





114



123



121



137



138



139



132



129



145



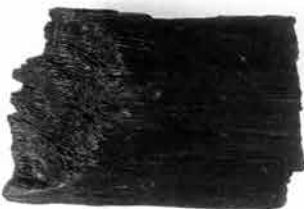
146



147



149



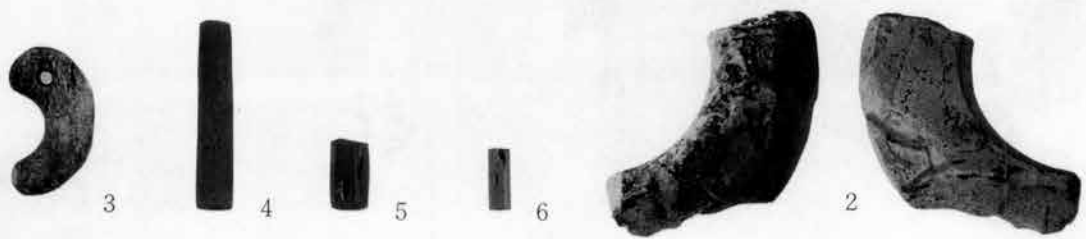
148



151



152





201



201



202



203



204



207



206



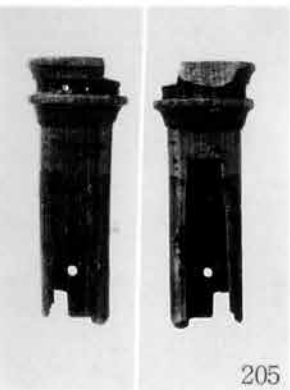
208



ヒョウタン



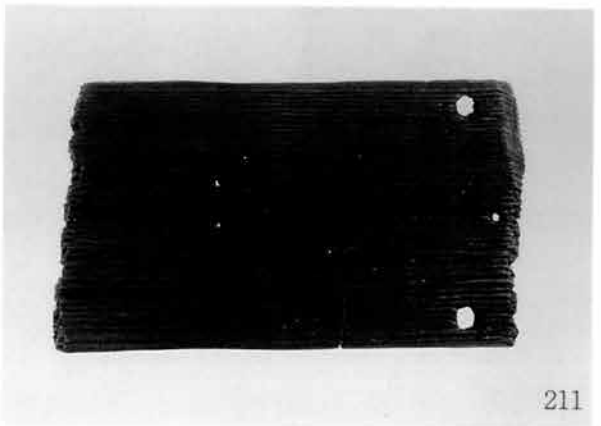
209



205



210



211

畝田遺跡

発行日 平成3(1991)年3月31日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

〒921 金沢市米泉4-133
TEL.0762(43)7692

印刷 ヨシダ印刷株式会社

